

志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書 (12)

# 志布志城跡

志布志城(内城)跡 1～9次調査

志布志城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島県志布志市教育委員会

2018年3月

## 序 文

わがまち志布志は古くより港町として栄え、交易の拠点、交通の要衝として繁栄し、その様子は「志布志千軒町」と呼ばれるほどでした。そのような経緯から、中世・近世の文化財に恵まれ、現在も寺院跡や武家屋敷のたたずまいが往時を偲ばせます。これらの文化財は、私たちが過去から受け継いだ貴重な遺産であり、また、未来へと伝えていかねばならない歴史の足跡であると確信しております。

それら貴重な文化財の中でも、中世の山城である志布志城は特に貴重な史跡といえます。4つの山城から構成される大規模な中世城郭であり、中世の志布志を象徴する重要な史跡であります。

志布志城跡の保存整備事業は合併以前に志布志町で着手され、市町村合併を経て志布志市に引き継がれております。その歴史的価値が認められ、平成17年には国指定史跡に列せられ、保存活用に大いに励みとなりました。国指定史跡となった志布志城跡は埋蔵文化財の調査、史跡の整備をすすめて参りましたが、平成29年4月6日には日本城郭協会によって「続日本100名城」のひとつに認定され、広く全国に知られるところとなりました。まさに志布志のシンボルと呼ぶにふさわしい史跡であります。

平成の大合併以前の志布志町では国と県の補助を受け、志布志城跡を史跡として保存するとともに史跡公園として整備活用する事業を行いました。平成14年度の確認調査を皮切りに、平成15・16年度に補助事業を導入した確認調査を実施し、前述のとおり17年度には国史跡の指定をいただきました。合併により志布志市となった18年度からは本格的な発掘調査に着手し、平成26年度まで9か年にわたり志布志城の中心的な役割を担った内城跡について調査を実施しました。

この度、9か年の調査成果を報告すべく本書を発刊するはこびとなりました。われらのふるさとの歴史を解明する一助となることを願うとともに、文化財の保護、学術研究、学校教育と様々な場で広く活用されることを願います。

保存整備事業の推進及び本書の発刊にあたり、各分野の専門家の方々をはじめ、各方面の皆様から御指導と御協力をいただきました。心からの感謝を申し上げます。

平成30年3月

志布志市教育委員会  
教育長 和田 幸一郎

## 例 言

- 1 本報告書は、国県の補助を得て実施した志布志城跡保存整備事業に伴う内城跡の発掘調査報告書である。1・2次調査の概要報告書『志布志城跡Ⅱ』、3～5次調査の概要報告書『志布志城跡Ⅲ』の内容を包括し6～9次調査を併せて、1～9次調査の報告書として刊行する。
- 2 調査地は、鹿児島県志布志市志布志町帖字内城地内である。
- 3 発掘調査は、志布志市教育委員会が調査主体となり実施した。
- 4 発掘調査の期間は次のとおり  
1次調査：2006年11月9日～2007年3月28日  
2次調査：2007年8月30日～2008年2月8日  
3次調査：2008年7月14日～10月21日  
4次調査：2009年9月30日～2010年3月9日  
5次調査：2010年8月3日～12月16日  
6次調査：2011年9月6日～12月26日  
7次調査：2012年9月10日～2013年1月7日  
8次調査：2013年9月3日～2014年2月28日  
9次調査：2014年6月23日～2015年2月28日
- 5 本報告書の執筆は、大窪が行った。
- 6 調査費用は国県の補助を受け、志布志市が負担した。
- 7 出土遺物及び実測図等は、志布志市教育委員会が管理し、志布志市埋蔵文化財センターに保管した。
- 8 調査における実測及び測量、写真撮影は作業員の補助のもと、おもに大窪が行った。遺物の写真撮影については鹿児島県立埋蔵文化財センターにて行った。
- 9 調査の実施にあたっては、文化庁記念物課及び鹿児島県教育庁文化財課の指導・教示を受けた。また、調査の進捗を志布志城史跡公園整備検討委員会及び、同委員会の専門部会である埋蔵文化財専門部会に報告し、指導を仰いだ。
- 10 調査及び報告書作成にあたり、以下の方々に御教示を賜った。御芳名を記して感謝申し上げます。(五十音順・敬称略)柴田圭子(愛媛県埋蔵文化財センター)、坪根伸也(大分市教育委員会)、橋口亘(南さつま市教育委員会)、吉岡康弘(鹿児島県埋蔵文化財調査センター)。
- 11 航空写真撮影は、ふじた航空写真に委託した。
- 12 遺構測量の一部は、株式会社ジパングサーベイ(2010年)、株式会社埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店(2011年)に委託した。
- 13 内城跡の測量図は、過去に志布志町教育委員会が株式会社ありあけ測量に委託して作成したものを利用した。
- 14 青花等の遺物実測に、ビジョンドラフティングシステムVD-IIを使用した。
- 15 トレース作業に、3次元描画システム「トレース3Dくん」を使用した。

## 凡 例

- 1 遺物の注記記号は、西暦下2桁に内城跡を示す「UTI」を組み合わせて表記した。08UTIは2008年度(H20年度)3次調査出土遺物、14UTIは2016年度(H26年度)9次調査出土遺物である。  
ただし、1次調査以前の確認調査では志布志城跡を示す「SBJ」にトレンチ番号を組み合わせて表記している。
- 2 遺物番号は通し番号とし、挿図、写真図版とも一致している。
- 3 本書に用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
- 4 調査区の表記については、2004・2005年度の確認調査に際して内城跡の全域に設定された10mグリッドを利用した。西から東にアルファベット、南から北にアラビア数字で表し、表記は「アルファベットーアラビア数字」とした。
- 5 土層の色調は、『新版 標準土色帖』の表記に従った。ただし、1～3次調査においてはこの限りではない。

序文  
例言

## 目次

第1章 経過	1	第4章 自然科学分析	102
第1節 調査に至る経緯	1	第1節 目的	102
第2節 調査の組織	1	第2節 寄生虫卵分析の概要	102
第3節 検討委員会	2	第3節 花粉分析の概要	102
第4節 発掘調査の経過	5	第4節 種実同定の概要	102
第2章 遺跡の位置と環境	8	第5節 曲輪1及び2下段の分析結果	103
第1節 地理的環境	8	第6節 曲輪3下段の分析結果	107
第2節 歴史的環境	8	第7節 考察	107
第3節 『志布志記』の記載	9	第5章 総括	112
第3章 調査の方法と成果	12	第1節 各曲輪の概要	112
第1節 調査の方法	12	第2節 虎口	112
第2節 層序	12	第3節 土塁	112
第3節 曲輪1の調査	12	第4節 方形土坑	113
第4節 曲輪2上段の調査	21	第5節 縦穴状遺構	113
第5節 曲輪2下段の調査	34	第6節 特徴的な遺物の出土状況	113
第6節 曲輪3上段・下段の調査	43	第7節 手づくね成形の土師器皿	114
第7節 曲輪4上段の調査	58	第8節 銭貨	114
第8節 曲輪6上段の調査	63	第9節 基石	115
第9節 曲輪15上段の調査	77	第10節 瓦の出土と近世期の利用	115
第10節 曲輪15下段の調査	97	第11節 大野久尾の曲輪構成	115
第11節 曲輪6上下段間の空堀の調査	98	第12節 大野久尾の配石遺構	116
第12節 空堀8の調査	99	第13節 大野久尾の改変時期と石塁	116
第13節 添曲輪の調査	101		

## 挿図目次

第1図 内城跡 縄張図 …………… 10	第35図 曲輪3下段 青花・陶器・土師器 …… 54
第2図 内城跡 調査区域 …………… 13	第36図 曲輪3下段 土師器・石製品・錢貨… 55
第3図 曲輪1・2下段 調査位置 …………… 14	第37図 曲輪4上段 調査位置 …………… 58
第4図 曲輪1 遺構検出状況 …………… 15	第38図 曲輪4上段 土層断面 …………… 59
第5図 曲輪1 掘立柱建物跡2 …………… 16	第39図 曲輪4上段 磁器・陶器 …………… 60
第6図 曲輪1 方形土坑2 …………… 16	第40図 曲輪4上段 土師器・錢貨 …………… 61
第7図 曲輪1 磁器・陶器 …………… 18	第41図 大野久尾 調査位置 …………… 64
第8図 曲輪1 土師器・土製品・金属製品… 19	第42図 曲輪6上段 遺構検出状況 …………… 65
第9図 曲輪2上段・3下段 調査位置 …… 22	第43図 曲輪6上段 虎口 …………… 66
第10図 曲輪2上段 遺構検出状況 …………… 23	第44図 曲輪6上段 配石遺構 …………… 67
第11図 曲輪2上段 掘立柱建物跡2 …………… 24	第45図 曲輪6上段 遺構出土遺物(1)…… 68
第12図 曲輪2上段 方形土坑1～4 …… 24	第46図 曲輪6上段 遺構出土遺物(2)…… 69
第13図 曲輪2上段 方形土坑5・6 …… 25	第47図 曲輪6上段 遺構出土遺物(3)…… 70
第14図 曲輪2上段 青磁 …………… 27	第48図 曲輪6上段 青磁・白磁 …………… 72
第15図 曲輪2上段 白磁・青花 …………… 28	第49図 曲輪6上段 青花・陶器 …………… 73
第16図 曲輪2上段 陶器・土師器 …………… 29	第50図 曲輪6上段 土師器・石製品 …… 74
第17図 曲輪2上段 瓦質土器・石製品 …… 30	第51図 曲輪15上段 遺構検出状況 …… 78
第18図 曲輪2上段 金属製品・ガラス …… 31	第52図 曲輪15上段 溝状遺構 …………… 79
第19図 曲輪2下段 遺構検出状況 …………… 34	第53図 曲輪15上段 虎口 …………… 80
第20図 曲輪2下段 掘立柱建物跡 …………… 35	第54図 曲輪15上段 配石遺構(虎口)…… 80
第21図 曲輪2下段 方形土坑1 …………… 35	第55図 曲輪15上段 配石遺構(道跡)…… 81
第22図 曲輪2下段 方形土坑出土遺物 …… 36	第56図 曲輪15上段 遺構出土遺物 …… 82
第23図 曲輪2下段 青磁・白磁・青花 …… 38	第57図 曲輪15上段 青磁 …………… 85
第24図 曲輪2下段 青花・磁器・陶器 …… 39	第58図 曲輪15上段 青磁・白磁 …… 86
第25図 曲輪2下段 土師器・土製品・石製品 40	第59図 曲輪15上段 白磁・青花 …… 87
第26図 曲輪2下段 錢貨 …………… 41	第60図 曲輪15上段 青花・磁器 …… 88
第27図 曲輪3上段 出土遺物 …………… 43	第61図 曲輪15上段 須恵器・陶器 …… 90
第28図 曲輪3下段 遺構検出状況 …………… 44	第62図 曲輪15上段 陶器・土師器 …… 92
第29図 曲輪3下段 空堀 …………… 45	第63図 曲輪15上段 瓦質土器・錢貨 …… 93
第30図 曲輪3下段 虎口 …………… 46	第64図 曲輪15下段 出土遺物 …… 97
第31図 曲輪3下段 階段遺構 …………… 48	第65図 曲輪6上下間空堀 出土遺物 …… 98
第32図 曲輪3下段 遺構出土遺物(1) …… 49	第66図 空堀8 …………… 99
第33図 曲輪3下段 遺構出土遺物(2) …… 50	第67図 空堀8 出土遺物 …… 100
第34図 曲輪3下段 青磁・白磁・青花 …… 52	第68図 添曲輪 道跡 …………… 101

## 表目次

志布志城跡関連年表	11	表1-2 曲輪1及び2下段における 種実同定結果	105
曲輪1 出土遺物観察表	20	曲輪1及び2下段の種実	105
曲輪2上段 出土遺物観察表	32	曲輪1及び2下段の花粉・孢子	106
曲輪2下段 出土遺物観察表	41	表2 曲輪3下段における 花粉分析・寄生虫卵分析結果	108
曲輪3上段 出土遺物観察表	56	図2 曲輪3下段方形土坑1における 花粉ダイアグラム	109
曲輪3下段 出土遺物観察表	56	曲輪3下段の種実	109
曲輪4上段 出土遺物観察表	62	曲輪3下段の花粉・孢子	110
曲輪6上段 出土遺物観察表	75	曲輪別出土遺物表	114
曲輪15上段 出土遺物観察表	94	出土銭貨集計表	115
曲輪15上段 出土遺物観察表	97	曲輪別基石計測表	117
曲輪6上下間空堀 出土遺物観察表	98	種類別遺物観察表	118
空堀8 出土遺物観察表	100		
表1-1 曲輪1及び2下段における 花粉分析・寄生虫卵分析結果	103		
図1 曲輪1及び2下段における 花粉分析・寄生虫卵分析結果	104		

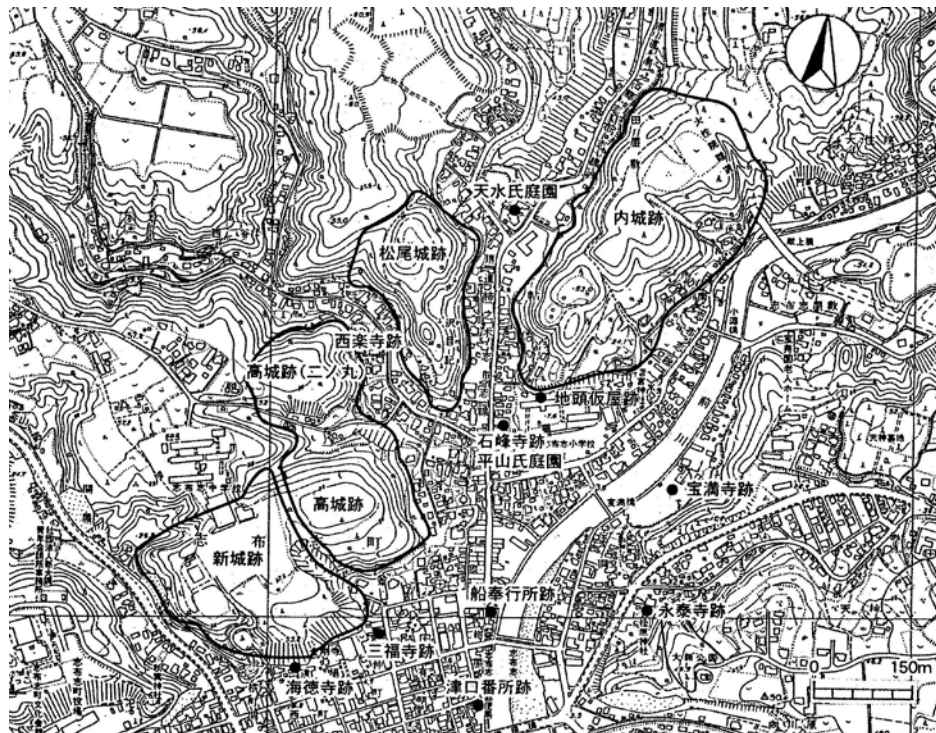
## 写真図版目次

図版1 出土遺物 曲輪1(1)	図版21 出土遺物 曲輪15上(5)
図版2 出土遺物 曲輪1(2)2上段(1)	図版22 出土遺物 曲輪15上(6)
図版3 出土遺物 曲輪2上段(2)	図版23 出土遺物 曲輪15上(7)
図版4 出土遺物 曲輪2上段(3)	図版24 出土遺物 15下段・6上下空堀・空堀8
図版5 出土遺物 曲輪2上段(4)2下段(1)	図版25 曲輪1 空撮
図版6 出土遺物 曲輪2下段(2)	図版26 曲輪2上段 空撮
図版7 出土遺物 曲輪2下段(3)3下段(1)	図版27 曲輪2下段 空撮
図版8 出土遺物 曲輪3上段・3下段(2)	図版28 曲輪3下段 空撮
図版9 出土遺物 曲輪3下段(3)	図版29 曲輪1
図版10 出土遺物 曲輪3下段(4)	図版30 曲輪2上段(1)
図版11 出土遺物 曲輪3下段(5)	図版31 曲輪2上段(2)・2下段
図版12 出土遺物 曲輪4上段	図版32 曲輪3下段(1)
図版13 出土遺物 曲輪6上段(1)	図版33 曲輪3下段(2)
図版14 出土遺物 曲輪6上段(2)	図版34 曲輪3下段(3)
図版15 出土遺物 曲輪6上段(3)	図版35 曲輪4上段・6上段(1)
図版16 出土遺物 曲輪6上段(4)	図版36 曲輪6上段(2)
図版17 出土遺物 曲輪15上(1)	図版37 曲輪6上段(3)
図版18 出土遺物 曲輪15上(2)	図版38 曲輪15上段(1)
図版19 出土遺物 曲輪15上(3)	図版39 曲輪15上段(2)・6上下間空堀
図版20 出土遺物 曲輪15上(4)	図版40 曲輪15下段・空堀8・添曲輪



志布志湾

1/50,000



# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成の大合併以前、志布志町は志布志城跡の保存整備を目的として史跡公園保存整備事業に着手した。2002年度(平成14年度)に新城跡の確認調査を実施し、2003・2004年度に国県の補助事業を導入して4城の確認調査を実施し、報告書を刊行した。2006年1月1日、志布志町は松山町および有明町と合併し、志布志市となった。志布志城跡は確認調査を経て歴史的価値が確認され、2006年7月14日に国指定史跡となった。

合併後の新市では志布志町より引き継ぐ形で、国指定史跡「志布志城跡」を史跡公園として保存整備し、活用を図ることを計画した。2006年度より新たに国県の補助を受けて整備のための発掘調査を開始し、2006年度の1次調査以降、2014年度の9次調査まで年次的に調査を実施した。

調査は志布志市教育委員会が主体となり、文化庁文化財部記念物課、鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導並びに助言を得て実施した。

## 第2節 調査の組織

志布志城跡整備検討委員会は文化庁記念物課及び鹿児島県教育庁文化財課の指導を受けた。また、史跡公園整備検討委員会の下部組織である埋蔵文化財専門部会において鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導を受けた。

### 2006年度(平成18年度)1次調査

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	教 育 長	坪田勝秀	
	教 育 次 長	山裾幸良	
調査事務局	文化 振 興 課 長	米元史郎	
	補佐兼文化振興係長	森重晃一	
	文 化 財 係 長	小村美義	
	主 事	松元友美	
調査担当者	主 査	大窪祥晃	

### 2007年度(平成19年度)2次調査

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	教 育 長	坪田勝秀	
	次長兼教育総務課長	上村和憲	
調査事務局	文化 振 興 課 長	米元史郎	
	課 長 補 佐	森重晃一	
	文 化 財 係 長	小村美義	
	主 査	出口順一郎	
	主 事	松元友美	

技 師 補	上集一樹
調査担当者	主 査 大窪祥晃

### 2008年度(平成20年度)3次調査

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	教 育 長	坪田勝秀	
調査事務局	生涯学習課長	小辻一海	
	文化財管理監	米元史郎	
	文化財管理室長	竹田孝志	
	埋蔵文化財係長	小村美義	
	主 任 主 査	出口順一郎	
	主 事 補	相美伊久雄	
調査担当者	主 査	大窪祥晃	
	調 査 補 助 員	坂元裕樹	

### 2009年度(平成21年度)4次調査

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	教 育 長	坪田勝秀	
調査事務局	生涯学習課長	小辻一海	
	文化財管理監	米元史郎	
	文化財管理室長	竹田孝志	
	埋蔵文化財係長	上田義明	
	主 任 主 査	出口順一郎	
	主 事	相美伊久雄	
調査担当	主 査	大窪祥晃	
	調 査 補 助 員	坂元裕樹	

### 2010年度(平成22年度)5次調査

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	教 育 長	坪田勝秀	
調査事務局	生涯学習課長	樺山弘昭	
	文化財管理室長	竹田孝志	
	埋蔵文化財係長	上田義明	
	主 任 主 査	相美伊久雄	
調査担当	主 任 主 査	大窪祥晃	
	調 査 員	坂元裕樹	

### 2011年度(平成23年度)6次調査

調査主体	志布志市教育委員会		
調査責任者	教 育 長	坪田勝秀	
調査事務局	生涯学習課長	米元史郎	
	文化財管理室長	竹田孝志	
	埋蔵文化財係長	上田義明	
	主 任 主 査	出口順一郎	



調査担当 主任主査 相美伊久雄  
 調査員 大窪祥晃  
 調査員 坂元裕樹

#### 2012年度(平成24年度)7次調査

調査主体 志布志市教育委員会  
 調査責任者 教育長 坪田勝秀  
 調査事務局 生涯学習課長 米元史郎  
 文化財管理室長 竹田孝志  
 埋蔵文化財係長 上田義明  
 主任主査 出口順一朗  
 主査 相美伊久雄  
 調査担当 主任主査 大窪祥晃  
 調査員 坂元裕樹

#### 2013年度(平成25年度)8次調査

調査主体 志布志市教育委員会  
 調査責任者 教育長 坪田勝秀 (～2/23)  
 和田幸一郎 (2/24～)  
 調査事務局 生涯学習課長 樺山弘昭  
 文化財管理室長 竹田孝志  
 埋蔵文化財係長 上田義明  
 主任主査 相美伊久雄  
 調査担当 主任主査 大窪祥晃  
 調査員 坂元裕樹

#### 2014年度(平成26年度)9次調査

調査主体 志布志市教育委員会  
 調査責任者 教育長 和田幸一郎  
 調査事務局 生涯学習課長 樺山弘昭  
 補佐兼文化財管理室長 若松利広  
 埋蔵文化財係長 上田義明  
 主任主査 相美伊久雄  
 調査担当 主任主査 大窪祥晃  
 主事補 坂元裕樹

#### 2016年度(平成28年度)整理作業

調査主体 志布志市教育委員会  
 調査責任者 教育長 和田幸一郎  
 調査事務局 生涯学習課長 樺山弘昭  
 補佐兼文化財管理室長 若松利広  
 埋蔵文化財係長 上田義明  
 主任主査 相美伊久雄  
 主事 坂元裕樹  
 整理担当 主任主査 大窪祥晃

#### 2017年度(平成29年度)整理作業

調査主体 志布志市教育委員会  
 調査責任者 教育長 和田幸一郎  
 調査事務局 生涯学習課長 若松利広  
 補佐兼文化財管理室長 岩下祥二  
 埋蔵文化財係長 上田義明  
 主任主査 相美伊久雄  
 整理担当 主任主査 大窪祥晃

### 第3節 検討委員会

2003年度(平成15年度)より史跡整備の基本計画を策定するために志布志城史跡公園保存整備事業基本計画策定検討委員会(以下、委員会)が組織され、専門部会として埋蔵文化財発掘調査専門部会をおいた。確認調査に対する指導を受けるとともに史跡整備の基本計画を策定し、2005年2月に基本計画書を刊行。2006年1月1日、3町合併による新市誕生。すでに基本計画書の刊行を経たため、委員会の名称を志布志城史跡公園整備検討委員会に変更し、史跡整備に関する協議・検討を行う組織となった。併せて、埋蔵文化財発掘調査専門部会も埋蔵文化財専門部会と改称した。2006年度1次調査より埋蔵文化財専門部会に調査の指導を受け、委員会には調査の経過及び成果の報告を行った。また、2010年度より、山城の斜面崩壊への対策を協議するため法面保護専門部会を組織した。

2014年度9次調査が完了し整備の基本方針が定まったことを受け、2015年度より委員会の規模を縮小、専門部会を組織せず必要に応じて専門家の指導を受けることとなった。

#### 2003年度(平成15年度)～2005年度(平成17年度)

史跡公園保存整備事業基本計画策定検討委員会  
 三木靖(鹿児島国際大学短期大学部長)  
 服部英雄(九州大学大学院助教授)  
 千田嘉博(国立歴史民俗博物館助教授)  
 上村俊雄(鹿児島国際大学教授)  
 原口泉(鹿児島大学教授)  
 北村良介(鹿児島大学教授)  
 揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
 永山又男(志布志町文化財保護審議会会長)  
 長井實治(東区公民館長)  
 末永雅雄(志布志町観光協会会長)  
 埋蔵文化財発掘調査専門部会  
 三木靖(鹿児島国際大学短期大学部長)  
 本田道輝(鹿児島大学助教授)  
 永山又男(志布志町文化財保護審議会会長)

2006年度(平成18年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学生涯学習センター長)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学助教授)  
上村俊雄(鹿児島国際大学教授)  
原口泉(鹿児島大学生涯学習教育研究センター長)  
北村良介(鹿児島大学教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
永山又男(志布志市地方文化財保護審議会会長)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)  
酒匂景一(東区公民館長)  
末永雅雄(志布志市観光協会会長)  
埋蔵文化財専門部会  
三木靖(鹿児島国際大学生涯学習センター長)  
本田道輝(鹿児島大学助教授)  
永山又男(志布志市地方文化財保護審議会会長)

2007年度(平成19年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島県文化財保護審議会会長)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学准教授)  
上村俊雄(鹿児島国際大学教授)  
原口泉(鹿児島大学生涯学習教育研究センター長)  
北村良介(鹿児島大学教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
永山又男(志布志市地方文化財保護審議会会長)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)  
酒匂景一(東区公民館長)  
末永雅雄(志布志市観光協会会長)  
埋蔵文化財専門部会  
三木靖(鹿児島県文化財保護審議会会長)  
本田道輝(鹿児島大学准教授)  
永山又男(志布志市地方文化財保護審議会会長)

2008年度(平成20年度)

整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学准教授)  
上村俊雄(鹿児島国際大学教授)  
原口泉(鹿児島大学生涯学習教育研究センター長)  
北村良介(鹿児島大学教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
丸目南兵衛(志布志市地方文化財保護審議会会長)

寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)

酒匂景一(東区公民館長)

堤賢一(志布志市観光協会会長)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)

本田道輝(鹿児島大学准教授)

丸目南兵衛(志布志市地方文化財保護審議会会長)

2009年度(平成21年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)

服部英雄(九州大学大学院教授)

千田嘉博(奈良大学准教授)

上村俊雄(鹿児島国際大学教授)

原口泉(鹿児島大学教授)

北村良介(鹿児島大学教授)

揚村固(鹿児島県立短期大学教授)

丸目南兵衛(志布志市地方文化財保護審議会会長)

寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)

酒匂景一(東区公民館長)

堤賢一(志布志市観光協会会長)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)

本田道輝(鹿児島大学准教授)

丸目南兵衛(志布志市地方文化財保護審議会会長)

2010年度(平成22年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)

服部英雄(九州大学大学院教授)

千田嘉博(奈良大学教授)

上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)

原口泉(志学館大学教授)

北村良介(鹿児島大学教授)

揚村固(鹿児島県立短期大学教授)

山畑敏寛(志布志市地方文化財保護審議会会長)

寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)

酒匂景一(東区公民館長)

堤賢一(志布志市観光特産品協会会長)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)

本田道輝(鹿児島大学准教授)

新東晃一(南九州城郭談話会副会長)

法面保護専門部会

北村良介(鹿児島大学教授)

寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)

山田守(日本緑化工学会理事)  
大神邦昭(NPO法人樹木治療研究会理事長)  
馬場興市(鹿児島県文化財保護指導委員)

2011年度(平成23年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学教授)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(志學館大学教授)  
北村良介(鹿児島大学教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
山畑敏寛(志布志市地方文化財保護審議会会長)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)  
酒匂景一(東区公民館長)  
堤賢一(志布志市観光特産品協会会長)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
本田道輝(鹿児島大学准教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)

法面保護専門部会

北村良介(鹿児島大学教授)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館主任学芸主事)  
山田守(日本緑化工学会理事)  
大神邦昭(NPO法人樹木治療研究会理事長)  
馬場興市(鹿児島県文化財保護指導委員)

2012年度(平成24年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学教授)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(志學館大学教授)  
北村良介(鹿児島大学教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)  
那加野久廣(志布志市地方文化財保護審議会会長)  
寺田仁志(鹿児島県立埋蔵文化財センター所長)  
酒匂景一(東区公民館長)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
本田道輝(鹿児島大学准教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)

法面保護専門部会

北村良介(鹿児島大学教授)  
寺田仁志(鹿児島県立埋蔵文化財センター所長)  
山田守(日本緑化工学会理事)  
大神邦昭(NPO法人樹木治療研究会理事長)  
馬場興市(志布志市文化財保護指導委員)

2013年度(平成25年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学教授)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(志學館大学教授)  
北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館学芸主事)  
酒匂景一(東区公民館長)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
本田道輝(鹿児島大学教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)

法面保護専門部会

北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館学芸主事)  
山田守(日本緑化工学会理事)  
大神邦昭(NPO法人樹木治療研究会理事長)  
馬場興市(志布志市文化財保護指導委員)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

2014年度(平成26年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
服部英雄(九州大学大学院教授)  
千田嘉博(奈良大学学長)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(志學館大学教授)  
北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館学芸主事)  
酒匂景一(東区公民館長)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

埋蔵文化財専門部会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
本田道輝(鹿児島大学教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)

法面保護専門部会

北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
寺田仁志(鹿児島県立博物館学芸主事)  
山田守(日本緑化工学会理事)  
大神邦昭(NPO法人樹木治療研究会理事長)  
馬場興市(志布志市文化財保護指導委員)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

2015年度(平成27年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(鹿児島県立図書館長)  
北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
揚村固(鹿児島県立短期大学教授)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

2016年度(平成28年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(鹿児島県立図書館長)  
北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
揚村固(鹿児島県文化財保護審議会委員)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

2017年度(平成29年度)

史跡公園整備検討委員会

三木靖(鹿児島国際大学短期大学部名誉教授)  
上村俊雄(鹿児島大学名誉教授)  
原口泉(鹿児島県立図書館長)  
北村良介(鹿児島大学名誉教授)  
揚村固(鹿児島県文化財保護審議会委員)  
新東晃一(南九州城郭談話会副会長)  
米元史郎(鹿児島県文化財保護指導委員)

第4節 調査の経過

各年度の調査の経過について月毎の概略を記す。

2006年度(平成18年度)1次調査

11月9日から3月28日 実働84日。  
<11月>

プレハブ用地の草払いを行った後、プレハブを設置。13日より発掘調査開始。曲輪3下段H-14区の調査に着手。  
<12月>

曲輪3下段、山城に関する生活面と考えられる層を調査。調査区をI-14区、H-13区に拡張。

<1月>

曲輪3下段、築城面と考えられる面で遺構精査。柱穴・土坑等を確認。G-14区の調査に着手。曲輪2上段、K-12区の調査に着手。山城に関する生活面と考えられる層を調査。

<2月>

曲輪3下段、遺構精査。遺構実測委託。曲輪2上段、築城面と考えられる面で遺構精査。柱穴・土坑等を確認。K-11区及びL-14区の調査に着手。

<3月>

曲輪2上段、遺構精査。遺構実測委託。航空写真撮影委託。調査区埋め戻し完了。

2007年度(平成19年度)2次調査

8月30日から2月8日 実働68日。

<8月><9月>

8月30日プレハブ設置用地の草払いを行った後、プレハブを設置。9月4日より発掘調査開始。曲輪2上段K-14区の調査に着手。

<10月>

曲輪2上段L-14区の調査に着手。曲輪3下段H-15区の調査に着手。

<11月>

曲輪2上段K-15区、I-15区の調査着手。曲輪面H-16区、I-16区、

<12月>

曲輪2上段及び3下段、遺構実測委託。航空写真撮影委託。埋め戻し完了。

<1月><2月>

1月中旬及び2月上旬に埋め戻し後の状況確認を行い、2月8日をもって調査終了。

2008年度(平成20年度)3次調査

7月14日から10月21日 実働48日。

<7月>

曲輪3下段にて、2007年度調査(2次調査)にて空堀状の遺構の存在が確認されたH・I-16区に3-1Tを設定し調査に着手。

<8月>

H・I-16区にて空堀及び方形土坑を検出。虎口の調査のため、J-15区に2次調査の調査区を延長する3-2Tを設

定。調査の状況に合わせて拡張。G-15区に3-3Tを設定して調査開始。柱穴を検出。曲輪3上段への通路となっているI-16区に3-5Tを設定。配石による階段遺構を検出。

<9月>

H-13区に2006年度調査(1次調査)を南に延長する3-4Tを設定。各トレンチにて遺構精査を実施。遺構平面図、土層断面図作成。

<10月>

10月3日、埋蔵文化財専門部会を開催。現地にて指導を受ける。3-3Tで検出された柱穴と2次調査で検出された遺構との関係を見るため、2次調査時の調査区を一部、再発掘。実測図を作成した。遺構精査及び平面図作成の後、埋め戻しに着手し、10月21日に調査終了。

#### 2009年度(平成21年度)4次調査

9月30日から3月9日 実働60日。

<9月><10月>

曲輪1の中央部分、H-4区にトレンチを設定し調査開始。覆土の遺物一括取り上げ、遺構検出。

<11月>

曲輪1の調査区を西に拡張、覆土の遺物一括取り上げ、遺構検出。

<12月>

曲輪1の調査区を北(H-5区)及び南(H-3区)に拡張、遺構検出。曲輪2上段J-9区にトレンチを設定、遺構検出。

<1月>

曲輪1の調査区をさらに西に拡張、曲輪の造成部と見られる部分を調査。曲輪1・2上段、平面測量等委託。曲輪1・2上段、航空写真撮影委託。12日、整備検討委員会開催。21日、埋蔵文化財専門部会開催。

<2月><3月>

2月4日、文化庁記念物課佐藤主任調査官及び県文化財課指導。曲輪1・2上段の遺構精査、遺構実測。埋め戻しに着手するも、降雨により中断。3月9日、調査終了。

#### 2010年度(平成22年度)5次調査

8月3日から12月26日 実働58日。

<8月><9月>

曲輪4上段にトレンチを設定し、調査開始。崩壊が危惧される曲輪4上段の現状、調査地点の選定については、7月28日に開催された整備検討委員会法面保護専門部会の指導を受けた。遺構が検出された5T、6Tでは、必要に応じてトレンチを拡張した。8月24日、埋蔵文化財専門部会を開催し、現地にて指導を受けた。

<10月>

曲輪4上段の調査と並行して、J-10区にトレンチを設定し、曲輪2下段の調査に着手。4次調査の成果に基づき、遺構検出を実施した。曲輪の狭隘な部分については、安全面を考慮し、トレンチで確認調査を実施した。曲輪2下段の調査と並行し、1-1Tを設定し曲輪1と曲輪2下段の間に存在する平坦面の調査に着手。1-2Tを設定し、空堀の調査に着手。I-4区にトレンチを設定し、曲輪1の調査に着手。進捗に併せて北(I-5区)と南(I-3区)へトレンチを拡張。曲輪2下段から曲輪1へと調査を移行。10月6日、整備検討委員会を開催し、現地にて指導を受けた。

<11月>

曲輪1・2下段を中心に遺構精査。曲輪1及び2下段の航空写真撮影。遺構実測。

<12月>

すべての調査区について、写真撮影及び測量を完了。順次埋め戻し、12月16日に調査終了。

#### 2011年度(平成23年度)6次調査

9月6日から12月26日 実働33日。

<9月>

6日、大野久尾地区の曲輪6上段に1Tを設定し、調査開始。以降、10Tまでを設定し調査。

<10月>

曲輪6上段の調査に並行して曲輪15上段に11Tを設定し、調査着手。以降17Tまで設定。6上段に17T、15上段に18~20Tを設定。

10月27日、埋蔵文化財専門部会開催。現地指導により一部トレンチの拡張及び追加調査に着手。

<11月>

11月1日、新東晃一氏による現場指導、空堀2の調査着手。空堀断面測量、埋め戻し。7日、6上段と15上段の間の空堀部分を重機を用いて調査。8・9日、整備検討委員会開催。15・16日、佐藤正知主任文化財調査官による現場指導及び協議。26日、橋口互氏による遺物指導。

<12月>

すべてのトレンチについて、写真撮影及び測量を経て、順次埋め戻し。埋め戻し完了後、数日の期間において現地を確認し、26日に調査完了。

#### 2012年度(平成24年度)7次調査

9月10日から1月7日 実働39日。

<9月>

6次調査の結果を元に曲輪6上段に5×11mの調査区を設定し、調査開始。12日には調査区の東に5×5mで新たな調査区を設定。21日、6上下段の間にトレンチを設定し調査開始。調査区1と2の間に5×10mの調査区を設定。

曲輪の南側5m幅で調査することとなる。

<10月>

曲輪6と曲輪15の間、通路部分に2×2mでトレンチを設定。6上下段間のトレンチにて堀底を検出。6上段と下段の間に空堀(空堀8)が存在することを確認した。6上段土層断面測量。9日、新東晃一氏、現場指導。6上段、虎口検出。6上下間空堀、写真撮影。

<11月>

6日、新東氏指導。曲輪6と曲輪15間の空堀(空堀8)、重機にて掘り下げを実施。8日、埋蔵文化財専門部会開催。空堀8、完掘。測量作業に移行。27日、検討委員会開催。

<12月><1月>

埋め戻し作業開始。空堀8、重機による埋め戻し。12月26日、埋め戻し完了。1月7日、埋め戻し後の現地確認を行い調査終了。

2013年度(平成25年度)8次調査

9月3日から2月28日 実働73日。

<9月>

7次調査の結果を元に曲輪15上段に12×2mのトレンチ(1T)を設定し、調査開始。8次調査時の空堀8調査区より東方向に2×10mのトレンチ(2T)を設定。2Tを延長するように2×10mのトレンチ(3T)を設定。3基のトレンチでT字状に調査を行う。

<10月>

7次調査時のトレンチと1Tをつなぎ北側に延長するトレンチ(4T)を2×7mで設定。3Tで溝状遺構を検出、トレンチを拡張。4Tをさらに北側に延長する2×10mのトレンチ(5T)を設定。18日、検討委員会開催。

<11月>

南北トレンチにて曲輪上下段の境界を確認。境界部から西に10×2mのトレンチ(6T)を設定。6Tにて曲輪端部を確認。8日、新東氏指導。14日、埋蔵文化財専門部会開催。3T拡張、溝状遺構確認。26日、法面保護専門部会開催。断面測量等実施。15上段、写真撮影。

<12月>

4日、新東氏指導。5日、文化庁記念物課佐藤主任調査官指導。10日、重機による排土繰り及び表土剥ぎ実施。12日、整備検討委員会開催。

<1月>

14日、曲輪3下段の登山道部分にトレンチを設定し現状確認を実施。現況より2mは崩土であることを確認。21日、新東氏指導。22日、15上段の虎口実測。27日、完掘写真撮影。

<2月>

3日、人力による埋め戻し開始。12日、重機による埋め

戻し開始。虎口部分を人力で保全。25日、埋め戻し終了。28日、埋め戻し後の現地確認を行い調査終了。

2014年度(平成26年度)9次調査

6月23日から2月28日 実働77日

<6月>

9次調査のトレンチを拡張するかたちで曲輪15上段の南側に4×20mの調査区を設定し、調査開始。

<7月>

17日、埋蔵文化財専門部会開催。内城跡北側の法面保護工事予定か所について確認調査を実施。道跡を確認。内城の一部(添曲輪)と判断される。AF-30区ほかで焼土域検出。

<8月>

調査区全域を東西に延びる溝跡を把握。ミニトレンチを設定して調査。12日、新東氏指導。添曲輪の遺構精査を実施し、21日埋め戻し。調査区の遺構保全を行い、25日を以って一時休止。

<11月>

4日、調査再開。AE-39区ほか8次調査トレンチを再掘。曲輪15上段の西側に拡張。26日、整備検討委員会開催。

<12月>

曲輪15上段の端部、下段との境界にトレンチを設定し調査着手。曲輪6上段の虎口を検出する目的で6上下段の境界にトレンチを設定。曲輪15上段の西側端部にトレンチを設定し、曲輪の範囲を確認。25日、新東氏指導。6上段の虎口を確定。

<1月>

写真撮影実施。曲輪15上下段境界、15上段西端の埋め戻し着手。調査区測量。

<2月>

20日、重機による埋め戻し開始。6上段の虎口、人力による埋め戻し開始。24日、埋め戻し作業終了。28日、埋め戻し後の現地確認を行い調査終了。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

志布志は鹿児島県の東部、宮崎県との県境に位置する。志布志湾に面した前川河口付近のシラス台地の先端部に、内城、松尾城、高城、新城の4つの中世山城が存在し、この4城の総称として「志布志城」の名称が用いられている。

内城と松尾城の間に存在する沢目記馬場と称された通りをはじめとし、中近世には山城の周辺に武家屋敷が立ち並び、麓を形成していた。内城の山裾、現在の志布志小学校の場所に領主の居館が存在し、近世には地頭仮屋が設置された。

麓地区を中心として、数多く存在した寺院のほとんどは明治の廃仏毀釈によって廃寺となったが、県指定史跡である宝満寺跡には庭園や住職墓が残っており、石峰寺の庭園も平山氏庭園として国指定庭園の一部となり、往時の姿を伝えている。

内城の東には、北から南へと流れ志布志湾にそそぐ前川が存在する。藩政時代には前川の西岸に蔵奉行所や津口番所が置かれていた。津口番所が存在したとされる場所は市指定史跡として残されているが、現在は河川改修等がなされ、往時の痕跡を見ることはできない。

### 第2節 歴史的環境

#### 中世以前

内城跡の城域内のうち、大野久尾には縄文時代の遺跡が存在することが知られている。また、各曲輪の調査においても縄文土器の出土が確認されている。

#### 中世

志布志は、万寿3年(1026)平季基によって開かれた大荘園島津荘の港であり、物流の要衝として繁栄した。

現在の志布志市のうち志布志町と松山町及び有明町の西側は救仁院と称され、平安末期の文治5年(1189)より救仁院氏によって治められた。

志布志城の正確な築城年は不明だが、南北朝期に松尾城と内城が築かれたと考えられ、その後、高城と新城が築かれたとされている。また、長い戦乱の年月を経過するうちに、規模の拡張が行われたとされ、特に内城では中野久尾、大野久尾が造成され、大規模な拡張が行われたと推測される。

南北朝期の建武3年(1336)に「救仁院志布志城」の肝付兼重が重久氏に敗れている。この時点で「志布志城」の存在が確認されるが、この志布志城は築城時期が最も早いとされる松尾城を指すと考えられる。その後、正平

3年(1348)に楡井頼仲が松尾城に入っている。

延文2年(1357)、楡井頼仲は志布志城と掘城である大崎胡麻崎城を北朝方に攻略され大慈寺宝池庵にて自刃した。その後をうけ、南朝方に転じた島津氏久の養子分である新納実久が志布志に入った。対して北朝方は日向守護畠山直顕が志布志内城に入り、松尾城の新納実久を攻めたとき、この時点で内城と松尾城が存在している。

戦いの結果、島津氏久の救援を受けた新納実久が内城を占拠した。これにより、志布志は島津氏の領有するところとなった。異説もあるが、氏久が内城に入ったのは貞治4年(1365)頃と推定されている。

長祿2年(1458)以降、日向南部で伊東氏等の合戦が相次ぎ、志布志城は前線の拠点として利用された。天文5年(1536)、島津氏内の勢力争いを受け、志布志城の新納氏は櫛間城(宮崎県串間市)にいた豊州家島津氏の島津忠朝に攻められ、同7年(1538)には、島津忠朝・北郷忠相・肝付兼統に三方より攻められて降伏し、志布志城には豊州家の島津忠朝が入った。

永祿元年(1558)以降、肝付氏が毎年の様に志布志を攻め、同5年(1562)、肝付兼統が攻め落として志布志に入った。その肝付氏も天正4年(1576)には伊東氏に敗れて勢力を失うと、同5年(1577)より志布志城は島津氏が領有するところとなり、志布志地頭が置かれた。日向地方を島津氏が平定したことにより、軍事拠点としての意義が低下し、この時期より山城としての利用がなされなくなったと推測されている。

#### 近世

藩政期に入ると志布志城の麓、かつて領主の居館が存在したと考えられる場所に地頭仮屋が置かれ、志布志郷の中心を担った。

志布志城は山城として軍事的に利用されることはなかったが、志布志麓のランドマーク的存在として、祭礼等に使用されたと考えられる。寛永通寶、鉄砲玉と見られる鉛玉や瓦片等が出土することから、近世期においても曲輪には建物が存在し、何らかの活用が行われたことをうかがわせる。

#### 近代以降

地頭仮屋の場所には小学校が建設されている。第二次世界大戦時には、山城のシラス壁面を利用して防空壕が造られた。複数の曲輪には直径数mの穴が残されており、地元では砲台の痕跡と言われている。近代以降、一部の曲輪は宅地として造成された可能性がある。

### 第3節 「志布志記」の記載と縄張図

「志布志記」は、志布志郷の歴史・地誌・伝承等がまとめられた資料である。原本は遺されていないものの、近年まで少なくとも4冊の写本が存在し、江戸時代末期の天明3年(1783年)に書かれたと推測されている。

写本のひとつは「志布志旧記」として知られる資料である。「志布志旧記」は上下巻2冊の資料とされているが、上巻は「志布志記」の内容に明治期の資料を併せたものとなっている。「志布志記」の写本に明治期の資料や神社関係の資料を併せたものを「志布志旧記」と改題したものと考えられる。そのため、写本による細かな差異はあるものの「志布志旧記」上巻は「志布志記」と同じ内容を含んでいる。また、「志布志記」より早く書かれた「古今花筐」は「志布志記」と同じ内容を含んでおり「志布志記」は「古今花筐」を下敷きにして記されたとされている。

「志布志記」には、志布志城の概略や歴史等が記されている。その多くは城主一族の来歴、島津氏の歴史に関する部分であるが、山城の構造、名称に触れている部分もある。該当部分を以下に抜粋する。なお、読み下しは志布志町郷土資料(4)『志布志記』に拠り、一部を常用漢字に改めた。

古城三ツ 惣廻り拾四丁二十四間

内内城 高サ 四十間

中野久尾 高サ 右同

大野久尾 高サ 右同

一 此三丸の外圍一ツにして大堀段々内に有りて丸々分れたり

一 太守公御仮屋 内城の鼻崎、矢倉の場の下其初る所の年間不詳 御座之間、大広間、御番所、祇候所、兵具蔵、焔焔蔵、役々詰所有

以上のように、「志布志記」では「古城三ツ」として内城・中野久尾・大野久尾の名称を記している。「三丸の外圍一ツ」とあることから、これらの名称がひとつの城の中の主要な曲輪それぞれを指すことがわかる。また、御仮屋に関する記載から内城に「矢倉の場」と呼ばれる場所があったことがわかる。

「志布志記」の内容を踏まえて『志布志町誌 上巻』では、内城を志布志城として曲輪に矢倉場、本丸、中野久尾、大野久尾の名称を与えている。

旧志布志町において新たに内城跡の縄張図を作成する際、以上の経緯から「志布志記」記載の名称を曲輪の名称とした。縄張図は鹿児島女子短期大学学長(当時)三木靖によって作成され、志布志町教育委員会で随時、修正が加えられた。合併後の志布志市においても、この縄

張図に調査の成果を反映した修正を加え、使用している。

現在の縄張図で「志布志記」記載の名称に合致する曲輪は、矢倉場が曲輪1、内城が曲輪3上段、中野久尾が曲輪4及び5、大野久尾が曲輪6及び15である。

また、「志布志記」には志布志城の大手口等についても記載があり、志布志城を構成する内城以外の残りの3城についても記載がある。

一 小瀧口城戸 小瀧の上通路口をいふ

凡志布志城中に五口あり、所謂大手口、西谷口、沢目記口、向川原口、小瀧口也、此五口城中外曲輪の関門とす

一 沢目記口城戸 水車の前土橋際也、是より下一流を沢目記馬場と云なり

一 松尾城 惣廻り九町十四間高サ二十七間

一 高城 松尾城の南大手の上、高さ二十七間四尺五寸

一 新城 高城の西、海徳寺の上、高さ右同右二城惣廻り九町二十六間

一 西谷口城戸 西谷出廻れ、是より下一流を西谷馬場と云

一 舛形 大手口

一 追手口城戸 虎口あり

これらの記載から、三木靖は「日向国志布志城の変遷と縄張」において、「志布志記」に記された志布志城の五口は内城のみのものではなく、松尾城を含んだ範囲の城戸としている。

現在、「志布志城」の用語は内城、松尾城、高城、新城の4城の総称として用いられている。しかし、志布志城の範囲及び構成を考える場合、あるいは単に「志布志城」という呼称を用いる場合に、内城のみ、内城と松尾城、4城すべて、のいずれを意味するかを検討していく必要がある。

#### 参考資料

志布志町教育委員会 志布志町郷土資料集(4)『志布志記』2000

志布志町教育委員会 志布志町郷土資料集(2)『掟・古今花筐』1997

難波経健 鹿児島県資料拾遺20『志布志旧記(上巻)』1990

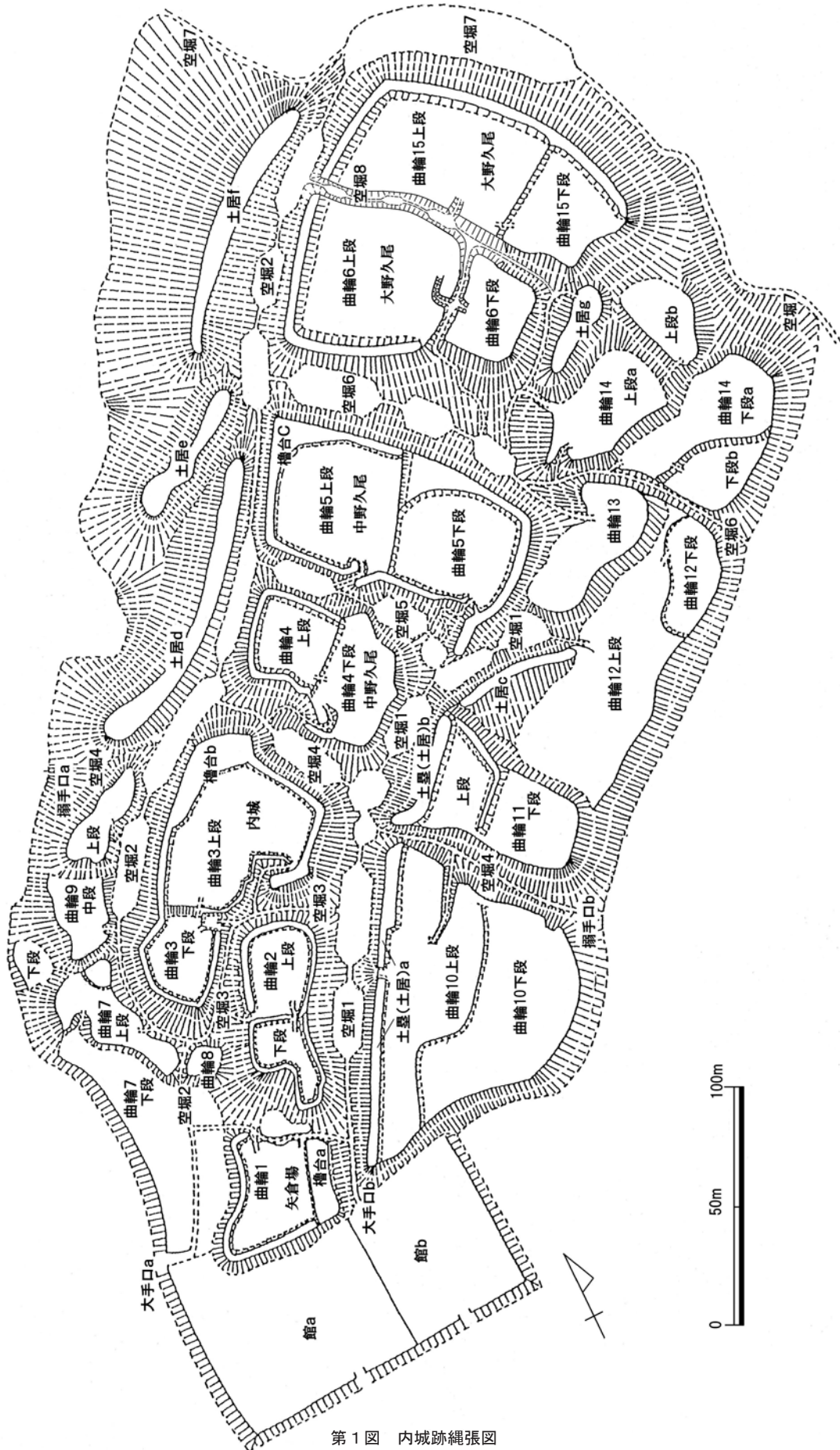
志布志町『志布志町誌 上巻』1972

新人物往来社『日本城郭体系 第18巻 福岡・熊本・鹿児島』1979

三木靖「日向国志布志城の変遷と縄張」志布志町教育委員会『志布志城跡関係資料集I』2005



# 日向国志布内城縄張図



内城跡縄張図(1/2,500)

第1図 内城跡縄張図

年 代	内 容
文治 5 年 (1189)	安楽平九郎為成に代わり、救仁院平八成直が救仁院地頭弁済使となる
建久 2 年 (1191)	救仁院平八成直、地頭弁済使職を解任される
建久 8 年 (1197)	建久凶田帳に 島津荘寄郡救仁院90町 地頭右兵衛忠久 とある
文永 8 年 (1271)	この頃、救仁院地頭方沙 汰人は凶師馬入道道西
正和 5 年 (1316)	救仁院地頭沙弥蓮正、宝満寺に志布志の地を寄進
元弘元年 (1331)	日向方惣地頭北条守時、救仁院・救仁郷の地頭代官救仁郷資清、宝満寺に土地屋敷を寄進
建武元年 (1334)	この頃、救仁郷・救仁院地方は千種忠顕の所領か
建武 3 年 (1336)	重久篤兼、志布志城の肝付兼重を攻め落とす
興国元年 (1340)	楡井頼仲、大慈寺を創建
正平 3 年 (1348)	楡井頼仲、松尾城で挙兵
正平 6 年 (1351)	畠山直顕、楡井頼仲の松尾城を攻め落とす 直顕、田浦条と岩広名を大慈寺に寄進
正平12年 (1357)	楡井頼仲、挙兵するも松尾城陥落し、頼仲は自刃する 新納実久、松尾城に入る 内城の畠山直顕、実久を攻めるが、島津氏久が実久を助け、直顕は櫓間に退く
正平13年 (1358)	菊池武光、志布志に進行し大慈寺に禁札を出す
正平16年 (1361)	島津氏久、大慈寺に岩広名半分を寄進。氏久、志布志に帰る
正平20年 (1365)	この頃、氏久は志布志に居を定める
天授 3 年 (1377)	氏久、内城より出陣し、都城に今川了俊を破る
応永 8 年 (1401)	櫓間の本田忠親、志布志城を攻め、熊田原兄弟討死(犬之馬場合戦)
応永11年 (1404)	島津元久、日向、大隅の守護職となる
応永16年 (1409)	島津元久、薩摩の守護職となる(以降、島津氏が三州の守護職を歴任)
文明 6 年 (1474)	この頃、志布志に新納是久及び忠明、肝付に肝付兼忠、救仁郷に肝主税助、櫓間に伊作久逸及び又四郎
天文 4 年 (1535)	新納氏は志布志に居城し、梅北・財部・市成・垂水・牛根等を領有
天文 5 年 (1536)	豊州島津氏忠朝、志布志城を攻める
天文 7 年 (1538)	新納氏敗れ、新納忠茂は佐土原へ去る。島津忠朝が志布志城に入る
永禄元年 (1558)	肝付兼統、肝付竹友に志布志を攻めさせ、島津方伊藤源四郎と向川原にて戦う
永禄 3 年 (1560)	豊州島津氏、志布志城を去り、肝付良兼が入城
永禄 7 年 (1564)	肝付兼統、重臣とともに志布志城に入る 肝付竹友、地頭として志布志に入る
天正元年 (1573)	末吉の北郷時久と肝付氏が国合原にて戦い、肝付竹友戦死
天正 4 年 (1576)	志布志地頭肝付兼石、南郷で戦死 肝付兼護の所領は高山のみとなり志布志などは島津所領になる
天正 5 年 (1577)	志布志に島津氏の初代地頭鎌田政近が入る
天正15年 (1587)	豊臣秀吉の日向国城割により松尾城は廃城の対象となる(破壊されず)
元和元年 (1615)	一国一城令発布 この頃には廃城か

志布志城関連年表

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査は内城跡の曲輪面を対象としたもの、空堀を対象としたもの、土塁を対象としたものに大別される。

曲輪面の調査においては、築城面と想定される部分までを調査し、遺構の検出と遺物の取り上げを行った。遺構の調査に当たっては、完堀を行わず半裁やクォーターカット、ミニトレンチによる調査を行った。調査区及びトレンチの埋め戻しは、半裁した遺構やミニトレンチに土嚢袋やビニール袋等を利用して丁寧に土を詰め、遺構面に寒冷紗を敷いた上で遺構を土嚢等で保護した。埋め戻しには各曲輪の排土を用いた。

空堀の調査においては、必要に応じて重機を使用し、堀底の確認を主目的とした調査を実施した。調査後は各空堀の排土を用いて埋め戻しを行い、現況復旧に努めた。

土塁の調査においては、土塁の築造方法を確認することを主目的として調査を実施した。特に土塁及び曲輪の崩壊、流出の危険に留意して調査を実施した。調査後は土嚢袋を用いて土塁斜面の復元復旧に努め、復旧後の崩壊・流出が発生しないよう留意した。

### 第2節 層序

志布志城は山城であるため、築城時には大規模な造成が行われたと考えられる。曲輪部分では傾斜する自然地形を削平して平坦面を得ているため、築城面より上層の自然堆積層は見られない。また、削平によって生じた排土を用いて造成を行った部分や土塁等では、自然堆積とは異なった人為的な盛土による層が確認される。

自然地形としての基本層序を想定し、この基本層序に該当する層についてはローマ数字で示し、築城及び山城の使用に関連する土層についてはアラビア数字を用いて特徴を示した。

#### 基本層序

I層：表土。旧耕作土と考えられる茶色軟質土を主体とし、大正火山灰を包含する。場所によっては、大正火山灰に伴う軽石が薄い層状の堆積を示し、色調・土質により細分される。

II層：暗茶褐色土。場所によっては明度が下がり黒色を呈する。また、堆積状況が良好な地点では、ゴマシオ状と表現される細粒火山灰を包含する場合がある。これは霧島を起源とする火山灰に比定され、「御池」と通称される。

III層：暗黄色火山灰土。「アカホヤ」と通称される鬼界カルデラを起源とする火山灰の二次堆積層。上方

には「池田」と通称される池田カルデラの爆発に起源する降下軽石が浮遊して点在している。

IV層：黄橙色火山灰土。アカホヤ火山灰。堆積状況が良好な場所では、やや硬質である。堆積状況が良くない場所では、硬化したブロック状に確認される場合がある。志布志城跡では築城時の排土と見られるIV層土が、土塁の盛土等に利用されている状況が確認されている。

V層：黒色土。縄文時代早期の遺物包含層に相当する。場所によっては上方が青みがかかるほか、淡色を呈する場合もある。また、最下部では下層の影響を受け、やや明度が増す。

VI層：乳白色火山灰土。薩摩火山灰土。「サツマ」と通称される層である。

VII層：茶褐色粘質土。「チョコ層」と通称される層である。粘質を持ち、やや硬質。下方では明度が下がり暗茶色を呈し、場所によっては厚く堆積し数層に細分される。

VIII層：黄褐色火山灰土。IX層と同起源であり、「ヌレシラス」と通称される層である。志布志城跡では、曲輪3下段等で築城面として確認される。

IX層：白色火山灰土。白色を呈し砂質。一般に「シラス」と呼ばれている層である。志布志城跡では築城面として確認されるほか、土塁等の盛土等に利用されている状況が確認されている。

### 第3節 曲輪1の調査

#### (1) 調査の概要

曲輪1は矢倉場と称され、内城跡の南端部に位置する曲輪である。2004・2005年度に実施した確認調査によって、本来は曲輪の東西が上下段に分かれていたことが確認されている。4次調査(H-3～5区)及び5次調査(I-3～5区)として、上段部分である曲輪東側の調査を実施した。

曲輪面は少なくとも太平洋戦争後、現在より数十年前まで宅地として利用され家屋が存在していた。このため、白色火山灰土(IX層2.5Y7/2)面で遺構を検出したものの、近現代の造成によるものか中世の遺物包含層は失われていた。曲輪面からは、多数の柱穴、方形土坑4基、溝跡2条を検出した。柱穴からは2棟の堀立柱建物跡が想定された。また、曲輪の築造に関する造成、築造以前の流水の痕跡が確認された。

5次調査においては曲輪面とは別に、曲輪1の北側に東西に走る空堀をはさみ曲輪1の東側に存在する平坦



第2図 内城跡 調査区域

面の確認を目的としたトレンチ(1-1 T)、空堀の確認を目的としたトレンチ(1-2 T)を設定し、調査を実施した。

## (2) 遺構

### 柱穴・掘立柱建物跡

柱穴には、礎石を有するものが確認されたが、そのみで構成される建物は想定できなかった。後述の方形土坑2に接する大型の柱穴は上下2面に礎石を有し、2時期に渡り同一の柱穴を利用した可能性がある。

掘立柱建物跡1は、2間×3間の規模で、溝跡と方形土坑1の上に想定され、建物を構成する複数の柱穴が溝跡内で確認されている。これらは溝跡の平面検出時には確認されず、ミニトレンチによる調査で判明した柱穴である。掘立柱建物跡2は4・5次調査の調査区を跨ぐように、3間×3間の規模が想定された。

### 溝跡

曲輪面の南東から北西方向に約120cmの幅で2条の溝跡を確認した。複数か所にミニトレンチを設定し調査を行った結果、溝跡の検出時には確認できなかった多数の柱穴を確認した。曲輪を区画するための溝と想定されるが、想定された建物跡とは方向が異なることから、想定された建物や多くの柱穴より後の時期のものと推測される。

### 方形土坑

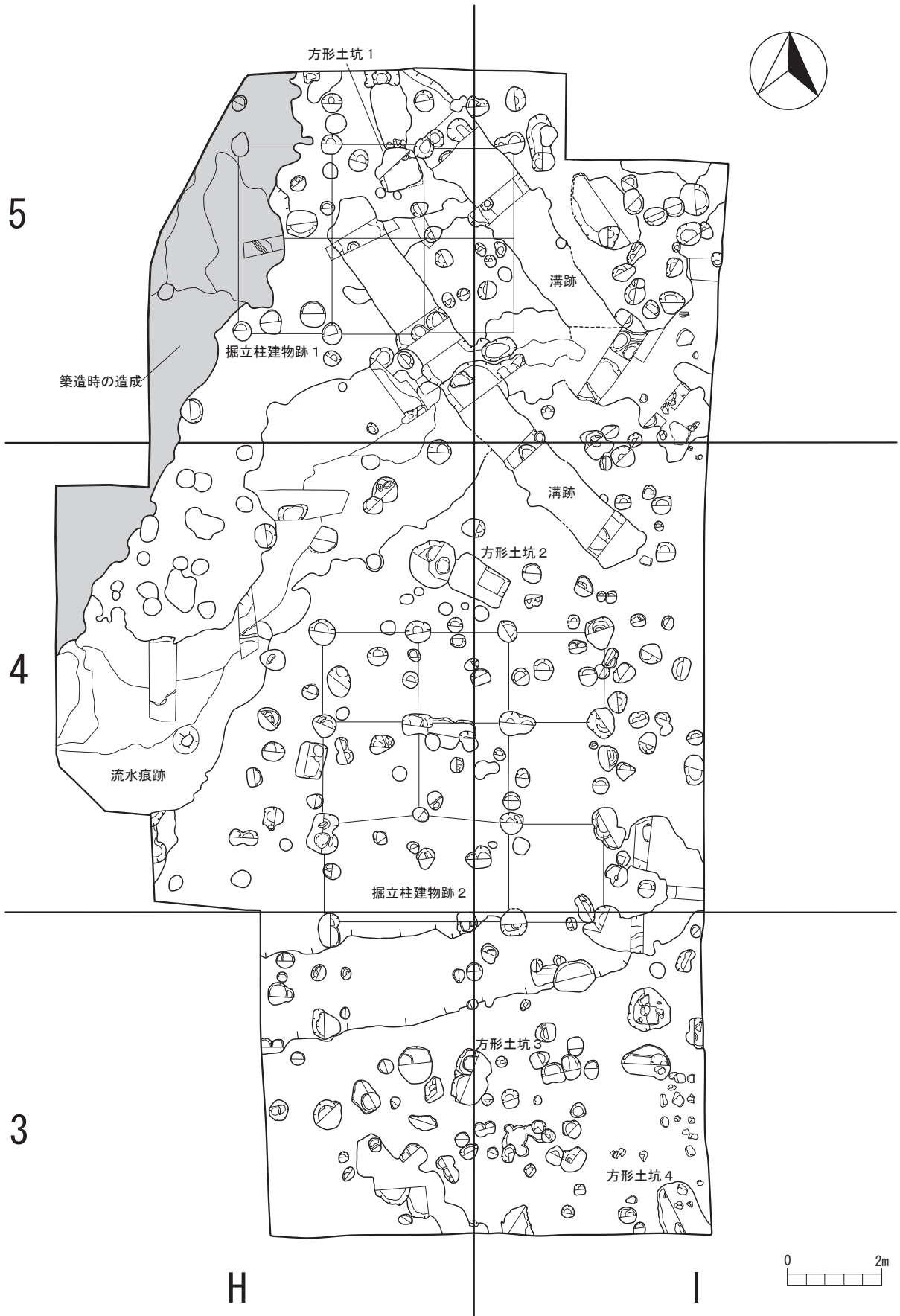
方形土坑とは、平面プランが長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれた土坑である。過去の調査により内城跡の複数の曲輪で検出され、トイレ遺構の可能性が推測されている。

曲輪1では、短径60～80cm程度、長径70～120cm程度、深さ80～160cm程度の4基が確認された。方形土坑1は正方形に近い形状で西側上面を別の土坑に切り取られている。近世の遺物と見られる丸瓦の破片が出土したほか、拳大から人頭大の礫が多数検出された。方形土坑3は平面プランが不整形だが、ほぼ垂直の掘り込みと底面の形状から方形土坑とした。方形土坑4は平面プランと底面が不整形だが、ほぼ垂直の立ち上がりを持つもので、調査区が曲輪の端部に近く崩壊の危険があるため、それ以上の拡張を行わなかった。

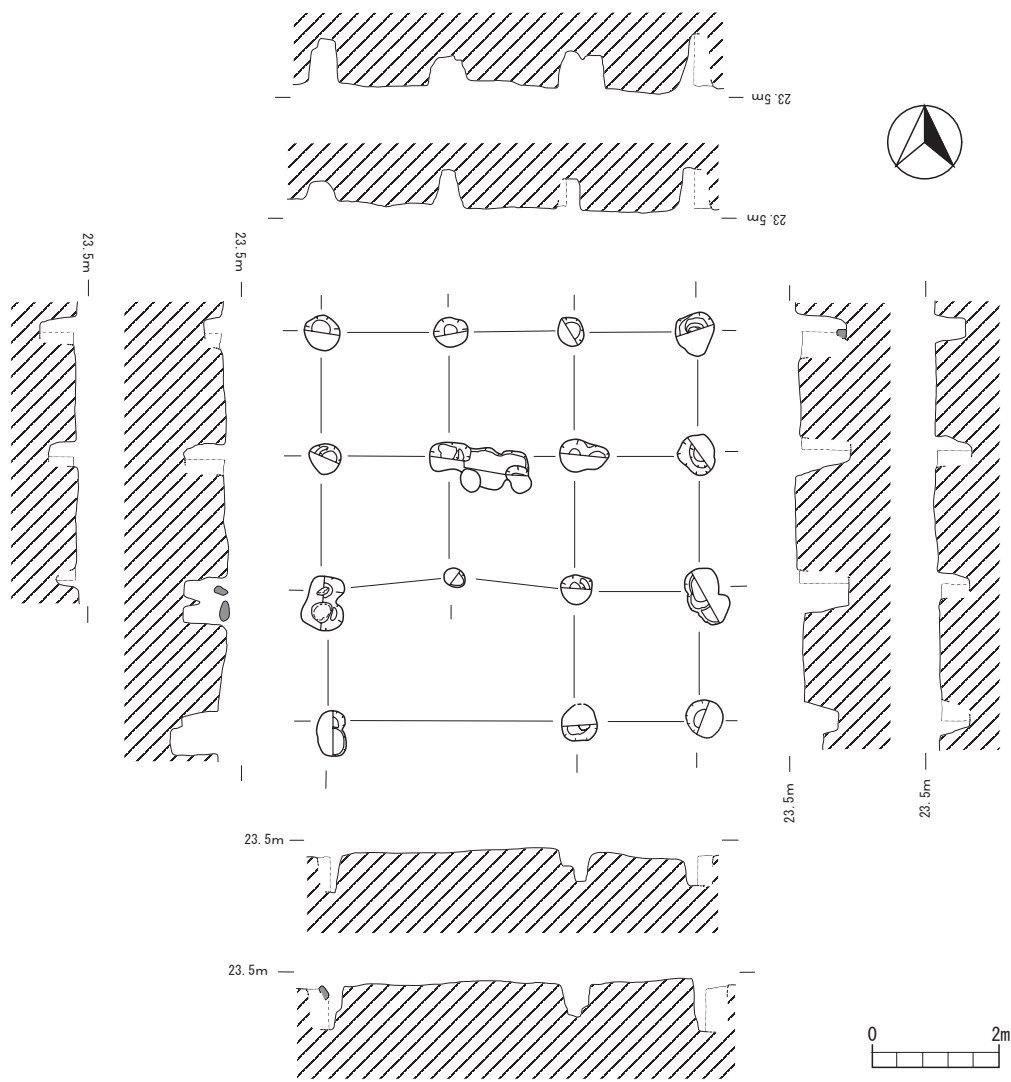
方形土坑1・2・3について底面の埋土を採取し、寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定の科学分析を実施した。分析の結果は「寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。花粉分析では、花粉があまり検出されなかったが、食用になるイネ属型、ソバ属、アブラナ科、薬用になりトイレ遺構からの検出例が多いアカザ・ヒユ科が部分的に少量認められた。種実同定では方形土坑1からスギが検出された。」となっており、寄生虫卵及び消化残渣が検出されず、トイレ遺構の可能性については確定できなかった。



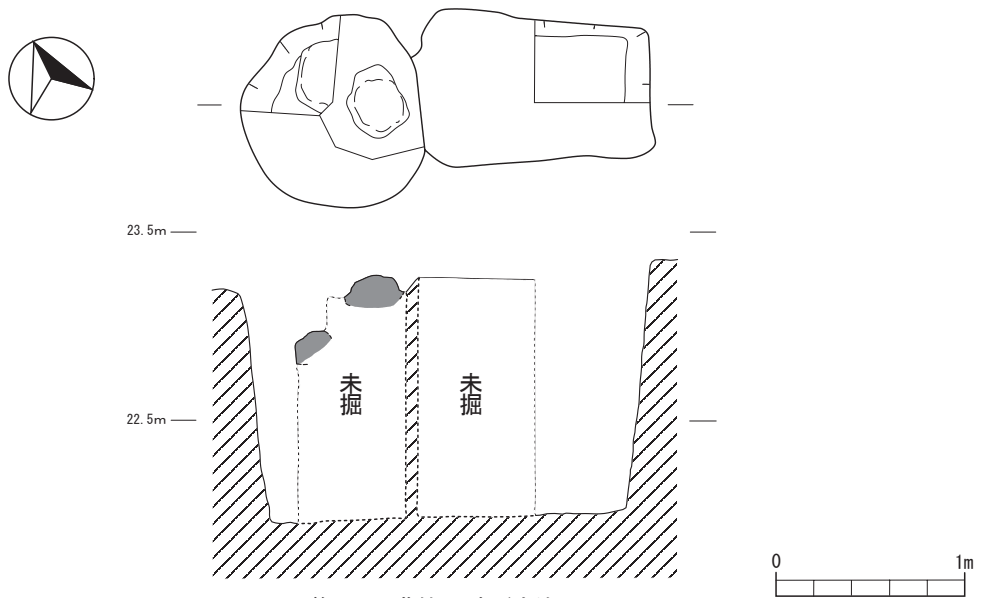
第3図 曲輪1・2下段 調査位置



第4図 曲輪1 遺構検出状況



第5図 曲輪1 堀建柱建物跡2



第6図 曲輪1 方形土坑2

### (3) 曲輪の造成

調査区の北西部では遺構検出面である白色火山灰土(IX層)が見られず、北東から南西方向に造成土と見られる茶色土が確認された。ミニトレンチによる調査で、北西方向に傾斜する白色火山灰土(IX層)が確認された。

H-5区の北西部、調査区外には曲輪1の本来の虎口と推定されている部分が存在し、その先に本来は上下段に分かれていた曲輪1の下段部分が存在する。

今回確認した造成が、上下段に分かれた曲輪1を築造した時点のものか、上下段を解消した時点のものかは明確ではない。2004・2005年度の確認調査において、本来の虎口部分にトレンチを設定して調査を行っているが、造成土が厚く堆積しトレンチの調査では、白色火山灰土(IX層)や虎口の形状等の確認はできなかった。

### (4) 流水痕跡

I-5区からH-4区にかけて調査区のほぼ中央を横断するように、北東から南西方向に自然の流水痕跡と思われる堆積が見られた。ミニトレンチによる調査を行い、白色火山灰土(IX層)が深さ約140cmに渡り削り取られた部分が確認された。また、砂質の茶褐色土を主として、IX層に由来する白色土や砂礫を含む土が層状に薄く堆積していることが確認された。この地形は、曲輪の築造以前に流水によって造られた、ごく小さな谷状の地形が曲輪の築造時に削平され、谷底部分と堆積した水性層が残されているものと推測される。

### (5) 1-1 T及び1-2 Tの調査

空堀を隔て曲輪1の反対側、曲輪2下段の下に位置する平坦面に1-1 Tを設定し約4×4mの範囲を調査した。地表面から約40～50cm程度を調査したが、白色火山灰土(IX層)に由来すると見られる崩土を検出するのみで、遺構面は確認できなかった。

平坦面から曲輪1の方向へ空堀を横断するように幅1mで1-2 Tを設定し、後に拡張した。トレンチの南端部分で白色火山灰土(IX層)をほぼ垂直に掘り込んだ空堀の斜面と見られる遺構を確認した。地表面より190cmまでを調査したが、堀底を確認することはできず、空堀の北側斜面に相当する部分も確認できなかった。

### (6) 遺物

1は方形土坑1より出土した瓦である。大きな湾曲は見られず板状を呈すると思われる。両面とも丁寧に仕上げられている。

2～17は青磁である。2・3は蓮弁文を有する上田分類B類の碗である。2は内面に文様を持つ。3は青白色

を呈する。4～6は口縁部が外反する碗である。4は龍泉窯系で無文。5はやや白色がかり大きな貫入が見られる。6も細かな貫入が見られ口縁部の外反は玉縁状に丸まる。7・8は直口の碗である。7は青白色を呈し無文、口縁部外面に沈線状の装飾が見られる。8は内湾気味の口縁を持ち無文、焼成不良。9は碗の底部とみられ見込にスタンプ文様を持つ。畳付を超え高台内部まで施釉されるが高台の中心部分は釉剥ぎがなされている。

10～13は青磁の皿である。10は青白色を呈し口縁がわずかに外反する。腰部から高台にかけての施釉に粗さがみられる。11は腰折の稜花皿で貫入が見られ無文。12は青白色の菊皿。内面は型造り。高台内部を釉剥ぎ。13は碁笥底の底部とみられ、底部全体が施釉されている。溶着があり別資料が付着し、一部を欠損している。

14は青磁の小壺である。口縁は外反し、ふくらんだ胴部には3条の沈線による装飾がある。15は貫入のみられる青白色を呈し筒状の形態を持つ。ここでは鉢とした。16は口縁部と見られる小片である。口縁は大きく開き鏝状を呈するとみられ、器台の可能性もある。

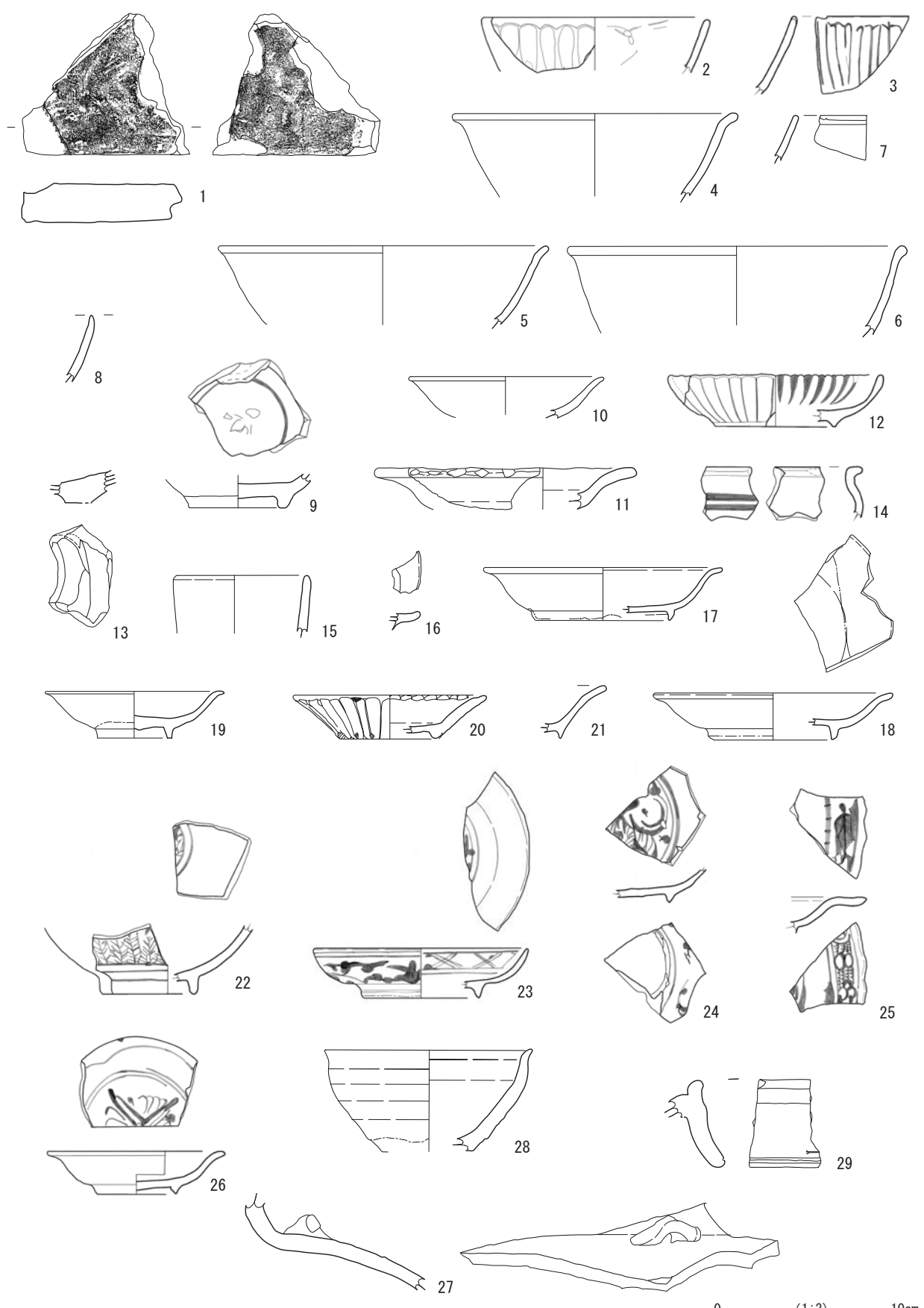
17～21は白磁の皿である。17は口縁が外反し見込に降りものがある。焼成は良好だが畳付の釉剥ぎが粗い。18も同様に口縁が外反するが発色が鈍く、口唇部にも釉剥ぎを施す。内面に釉葉の掛け残しがみられる。19は口縁が外反し貫入を持つ。腰部下半、高台外面から高台内部まで無釉。20は碁笥底で畳付は無釉、貫入がみられ外面及び口縁部内面に装飾が施される。形状的には森田E-2類の坏に似るが器壁は厚い。21は森田分類の坏E-2類と見られ、やや焼成不良。

22～26は青花である。22は蕉葉文の碗で畳付に溶着が見られ粗製。23は直口の皿で内面に四方禪文を持ち粗製。24は見込に文様を持つ底部。25は鏝状の口縁を持つ稜花皿。小野分類の皿F群とみられる。26は口縁が外反する端反皿である。

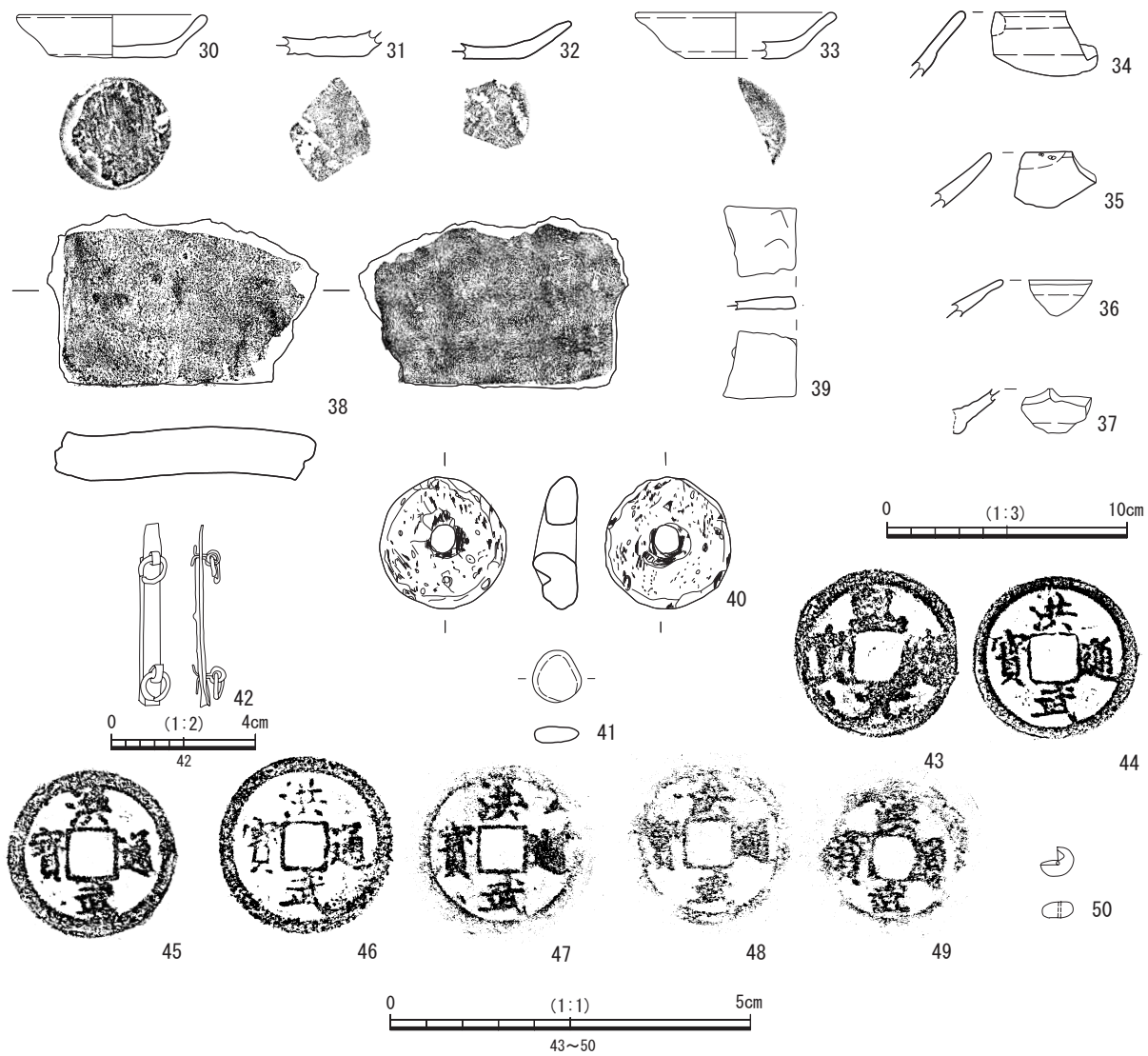
27～29は陶器。27は耳付壺の頸部。重ね焼きの溶着がみられる。28は天目碗。底部付近は無釉で釉葉の厚さが見て取れる。29は常滑の壺の口縁部である。胎土に白色の小石を含む。

30～37は土師器である。30～36は皿とした。30・31の底面はヘラ切り離しと見られ、切り離し後に調整を施している。32・33も同様に底面を切り離し後に調整している。小片のためヘラ切り離しと断定はできない。34は灰色を呈し、手づくね整形と見られる。外面の腰部には調整による段差が帯状に巡る。35は白色を呈し、内面の口縁部付近に工具による調整痕がある。36は外面が黒色を呈し、内外面とも丁寧に調整である。37は高台が作り出されており碗とした。





第7図 曲輪1 磁器・陶器



第8図 曲輪1 土師器・土製品・金属製品

38は瓦である。緩やかに湾曲し両面とも丁寧な調整が施されている。焼成は良く堅緻。近世瓦と見られる。

39～41は石製品である。39は砥石である。薄い棒状で表面は滑らかで先端から中央に向かって摩耗している。側面には棒状のものを研磨した痕跡が見られる。40はドーナツ状の軽石製品である。片面は平坦だが、もう片面は曲面に仕上げられている。紡錘車の可能性があるが側面に明確な使用痕は見られない。41は基石と呼ばれる黒色で円形の遺物である。大小様々であるが41は扁平な楕円形である。曲輪1では46個が出土し、最大径は4.5cm、最小径は1.1cmである。最大厚は1.8cm、最小厚は0.4cm

である。平均径は1.91cm、平均厚は0.71cmである。

42は銅製金具である。細い板状の部品で挟み込むもので2か所に輪状の金具が付く。2枚の板状部と輪は分割金具状の部品で留められている。

43～49は銭貨である。43は前蜀の軋徳通寶である。44～49は洪武通寶である。49は一回り小さく銭文が不鮮明なことから模鑄銭と見られる。

50はガラスの小玉である。出土時に破砕したが3片を接合している。透明度の低い水色を呈し、中央は穿孔されている。

曲輪1 出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	既報告番号	出土区	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考	
第7図	1	3-58	H-5 方形土坑1	土製品	瓦	破片	長8.4、短径7.5、厚さ2.0			重さ123.0g		近世瓦 板瓦	
	2		G-5	青磁	碗	口縁部	12.0			龍泉窯系	16c前半	蓮弁文	
	3	3-47	H-4 柱穴	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系		剣先蓮弁	
	4		H-3	青磁	碗	口縁部	15.2			龍泉窯系	15c前～後半	外反	
	5		H-3	青磁	碗	口縁部	17.6				15c前～後半	外反	
	6		H-3	青磁	碗	口縁部	18.0			龍泉窯系		玉縁口縁	
	7		H-8	青磁	碗?	口縁部						直口	
	8		H-3	青磁	碗?	口縁部						直口	
	9		H-3	青磁	碗	底部		5.2		龍泉窯系		見込文様	
	10		I-3	青磁	皿	口縁部	10.4			龍泉窯系		外反	
	11	3-48	I-3	青磁	皿	口縁部	13.4			龍泉窯系		綾花皿	
	12		H-3	青磁	皿	口縁～底部				龍泉窯系		菊皿	
	13		H-3	青磁	皿	底部						基筒底	
	14		H-3	青磁	壺	口縁部							
	15		H-4	青磁	鉢?	口縁部				龍泉窯系		筒状?	
	16		I-6(1-1T)	青磁	器台?	口縁部							
	17	3-49	I-5 柱穴	白磁	皿	口縁～底部	12.8	7.2	2.8	景德鎮窯系			端反 内底付着物
	18	3-51	H-4 一括	白磁	皿	口縁～底部	12.7	6.3	2.5	景德鎮窯系			内底部分的に露胎
	19	3-52	I-3 一括	白磁	皿	口縁～底部	10.6	4.0	2.5	景德鎮窯系			腰部以下露胎
	20	3-50	I-3 一括	白磁	皿	口縁～底部	10.4	5.3	2.3	景德鎮窯系			発色悪し
	21		H-4	白磁	皿	口縁～底部				景德鎮窯系	16c		
	22		H-5	青花	碗	底部		5.0		景德鎮窯系			蕉葉文
	23	3-53	I-3 柱穴	青花	皿	口縁～底部	11.2	6.1	2.6	景德鎮窯系			
	24		H-3	青花	皿	底部				景德鎮窯系			
	25	3-54	H-4 柱穴	青花	皿	口縁～胴部				景德鎮窯系	16c末～17		
	26		H-3	青花	皿	口縁～底部	9.4	4.2	2.2	景德鎮窯系			端反皿
	27	3-55	H-5 柱穴	陶器	甕	頸部				中国			耳付
	28	3-56	H-4 造成	陶器	碗	口縁～底部	11.2			瀬戸美濃			天目茶碗
	29		H-3	陶器	甕	口縁部				常滑	14c後半		
第8図	30	3-57	H-4 柱穴	土師器	皿	口縁～底部	8.0	5.4	1.8			ヘラ切り後調整	
	31		H-5	土師器	皿	底部						ヘラ切り後調整	
	32		I-6(1-1T)	土師器	皿	口縁～底部						切り離し痕調整	
	33		H-5	土師器	皿	口縁～底部	8.4	4.2	1.9			切り離し痕調整	
	34		I-5	土師器	皿	口縁部						手づくね?	
	35		H-5	土師器	皿	口縁部						白色 ヘラ状工具調整	
	36		I-4	土師器	皿	口縁部						黒色 丁寧な調整	
	37		H-5	土師器	碗?	底部						高台付底部	
	38	3-59	H-4	土製品	瓦	破片	長径11.4、短径7.1、厚さ1.9			重さ197.2g		近世瓦 平瓦?	
	39		H-4	石製品	砥石	破片							
	40		H-5	石製品	不明	完形						軽石製品	
	41		H-5	石製品	基石		長径2.2、短径2.0、厚さ0.7						
	42	3-60	I-7(1-1T)	金属器	金具		長さ5.2	幅0.4					
	43		I-5	金属器	銭貨	完品	長径2.3			前蜀	920年初鑄	軋徳元寶	
	44	3-61	H-4 一括	金属器	銭貨	完品	長径2.2			明	1368年初鑄	洪武通寶	
	45	3-62	H-5 一括	金属器	銭貨	完品	長径2.3			明	1368年初鑄	洪武通寶	
	46	3-63	I-4 柱穴	金属器	銭貨	完品	長径2.4			明	1368年初鑄	洪武通寶	
	47	3-64	I-6(1-2T)	金属器	銭貨	完品	長径2.3			明	1368年初鑄	洪武通寶	
	48	3-65	I-5	金属器	銭貨	完品	長径2.3			明	1368年初鑄	洪武通寶	
	49	3-66	I-4 柱穴	金属器	銭貨	完品	長径2.1			明	1368年初鑄	洪武通寶 模鑄銭?	
	50	3-67	一括	ガラス	小玉	接合	直径0.4	孔径0.5				3片を接合	

## 第4節 曲輪2上段の調査

### (1) 調査の概要

曲輪2は内城の中心となる本丸(曲輪3)に付随する曲輪である。上下段に分かれるが上段と下段を行き来できる構造にはなっておらず、上段と下段のそれぞれに虎口が設けられている。

2004・2005年度のの確認調査に基づき、築城面と推定される白色火山灰土(Ⅸ層)までを掘り下げた。曲輪の南東部K・L-12区には黄褐色火山灰土(Ⅷ層)が残存し、築城以前の自然地形が北西から南東に傾斜していたことが確認された。また、さらに南西部には造成による茶色土が確認され、曲輪の面積を確保するために南東方向に盛土造成を行った曲輪の築造状況が確認された。

### (1) 遺構

#### 柱穴

柱穴は曲輪の北西側及び南東側に集中しており、建物の存在を推測させるが明確な建物跡として確認されたのはK-13・14区で確認された1棟のみである。また、K・L-12区では柱穴の中に礎石を有するものも4基が確認されたが、これらも明確な建物跡を想定するにはいたらなかった。柱穴内より出土した遺物は少量で摩耗した土師器片等が主であるが、青磁や染付、陶器の破片が数点確認されている。

#### 建物跡

曲輪北西部K-13・14区で検出された掘建柱建物跡は、北側に半間の張り出しを有する南北2間半×東西3間の規模と考えられるが、建物を構成するすべての柱穴を確認することはできなかった。建物の向きは北に対して約30度東にずれている。

#### 土坑

L-13区においては特に土坑の集中が見られた。埋土は淡黒色土等にシラスと思われる灰白色火山灰土が混在した単一の埋土が多く、一度に埋められた可能性が高い。

土坑1は細長い溝状を呈し、深い部分で約40cm、浅い部分では約20cmを測る。土坑2は楕円形を呈し深さ約20cm、北側の焦土域の上から掘られている。土坑5は不規則な円形を示し、複数の土坑が切り合っている可能性が高い。深い部分で約65cm、浅い部分で約25cmを測る。土坑1・2及び5は東西に列をなすように位置し、後世の層から掘り込まれた溝の底部である可能性がある。土坑4からは青磁の香炉の破片が出土した。

#### 方形土坑

土坑のなかで平面プランが長方形を呈し、壁面がほぼ垂直に掘り込まれているものを方形土坑とした。方形土坑はK-13・14区に渡り、6基が確認された。方形土坑1は南北約120cm、東西約72cm、深さ約76cmを測る。長軸は南北方向から約30度東にずれる。方形土坑2～4は複数の柱穴とともに切り合い関係にある。長軸方向は3基とも方形土坑1とほぼ一致する。方形土坑5は東西方向を長軸とし、南北方向から約30度北にずれる。南北約70cm、東西約120cm、深さ約70cmを測る。方形土坑6は南北約46cm、東西約104cm、深さ約50cmを測る。方形土坑1～5と異なり、長軸が東西方向とほぼ一致する。

方形土坑1からは陶器片が出土したが、その他の遺物は土師器の細片等であり、遺構の用途や性格を限定するにはいたらなかった。

#### 溝状遺構

調査区の北端部に浅い溝状の遺構が確認された。深さは約15cmと浅く、築城時の遺構ではなく、後世の層から掘り込まれた可能性が高い。遺構内からは少量の土師器片が確認されたが、詳細な時期を特定するには至らなかった。

#### 焼土域

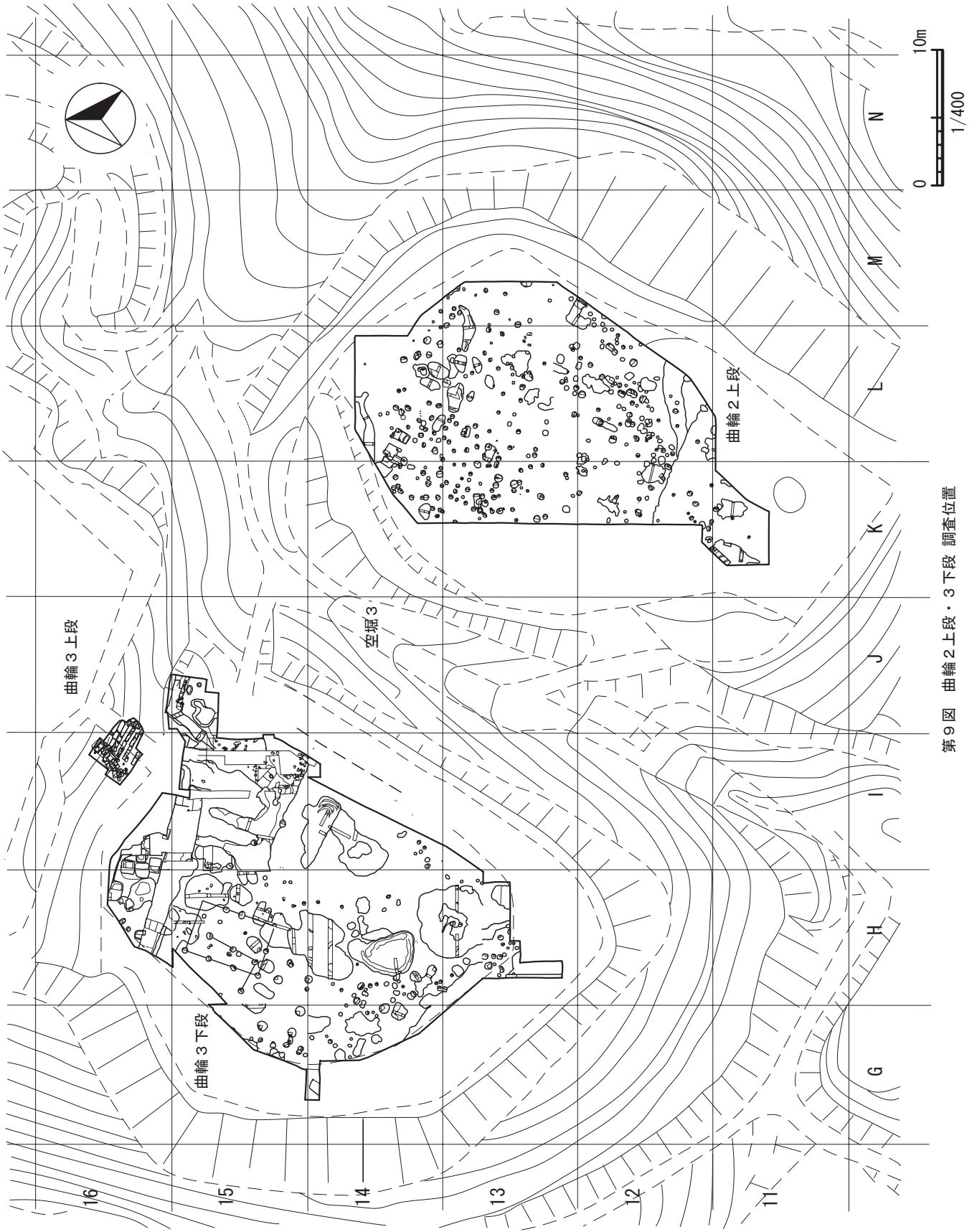
曲輪の北東を中心に、白色のシラス火山灰土が熱を受けている地点が複数か所確認された。柱穴等に囲まれたものは確認できず、建物外で日常的に火を焚いた痕跡と考えられる。

### (2) 遺物

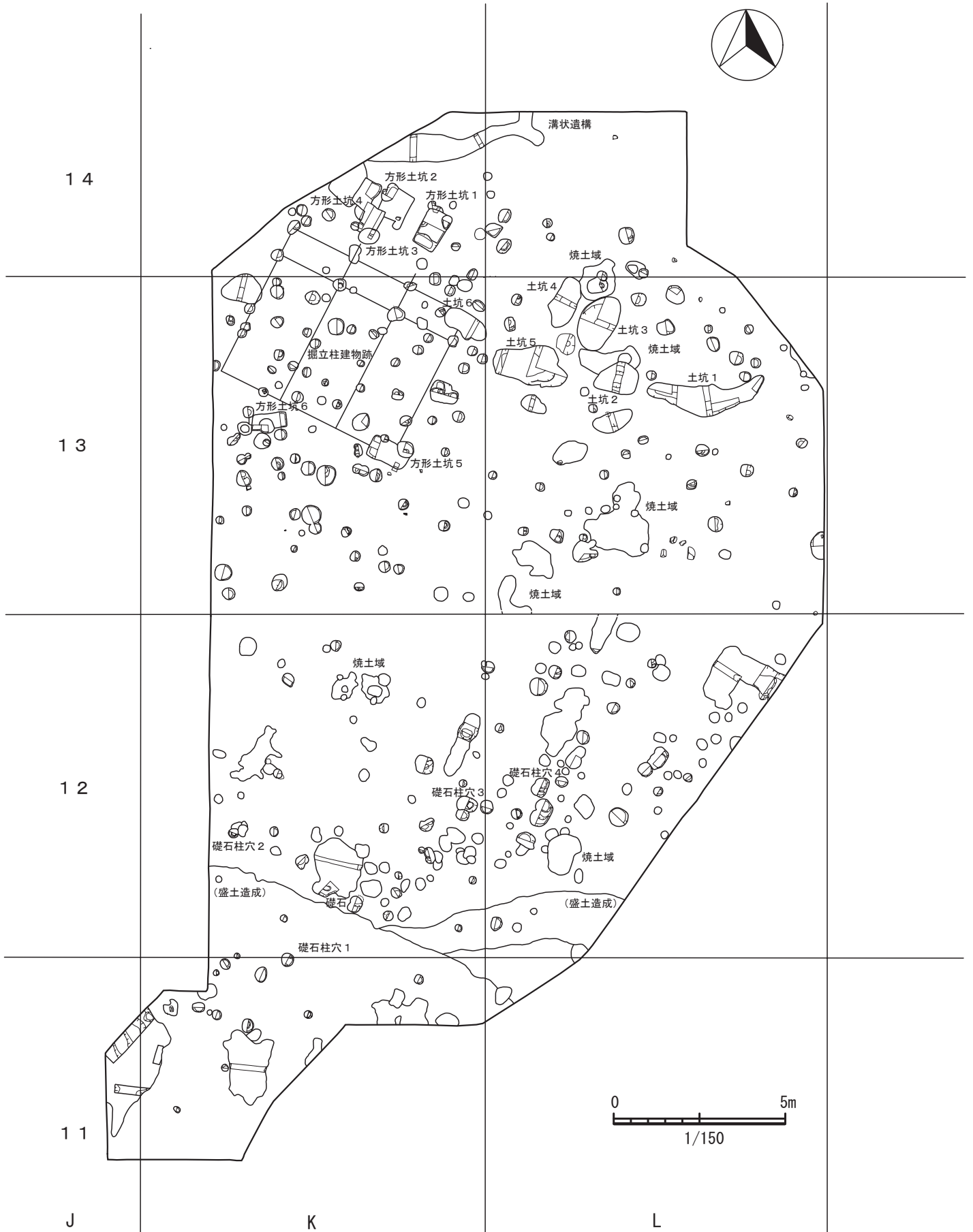
#### 青磁

51～69は碗である。51～60は上田分類のB類である。51は青白色がかり鑄蓮弁文が施される。B-II類である。52・53は無鑄蓮弁文である。54はへら書きの蓮弁文と見られるが二次被熱により判然としない。56は大振りな碗で玉縁状の口縁を有する。56は細蓮弁文。暈付を超えて高台内面まで施釉され外底は無釉。57は剣頭が蓮弁の単位をなさずB-IV'類である。58・59も同様に蓮弁が正確に描かれない。60は剣頭がほぼ省略されている。

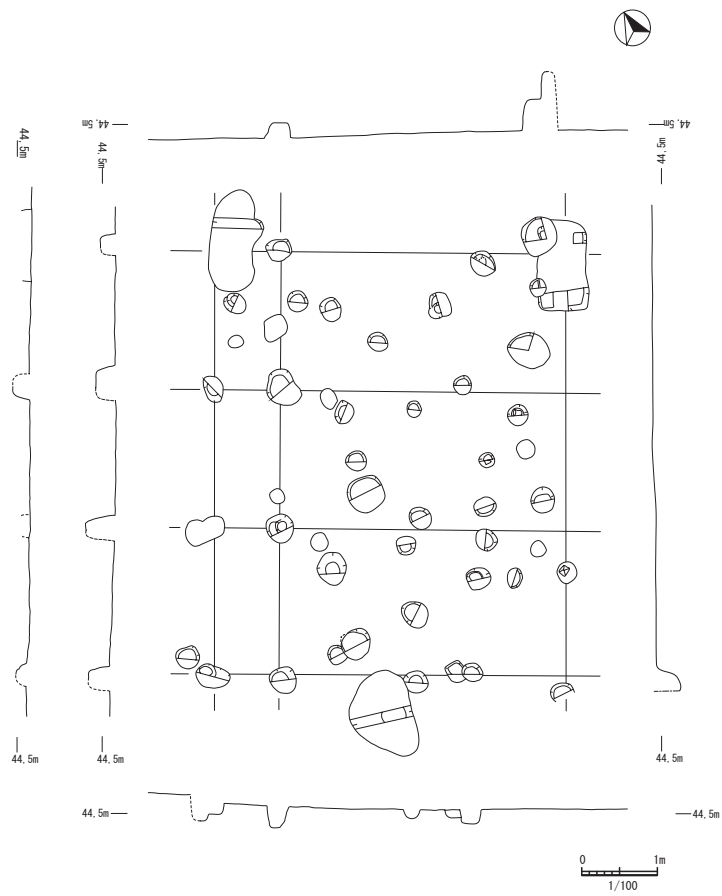
61は雷文を有し、上田分類のC類。内面に不鮮明な草花文を有する。62は腰部片で外面に草花文を有する。C類の破片とした。63は黄褐色を呈し玉縁状の口縁を有する。焼成は良くない。64も口縁が大きく玉縁状となる。無文。65・66は口縁が外反し上田分類のD類と見られる。66は口縁が肥厚し全体的に釉が厚い。67は緑色というより白色に近く、青白色を呈する。圏線がめぐり、胴部下



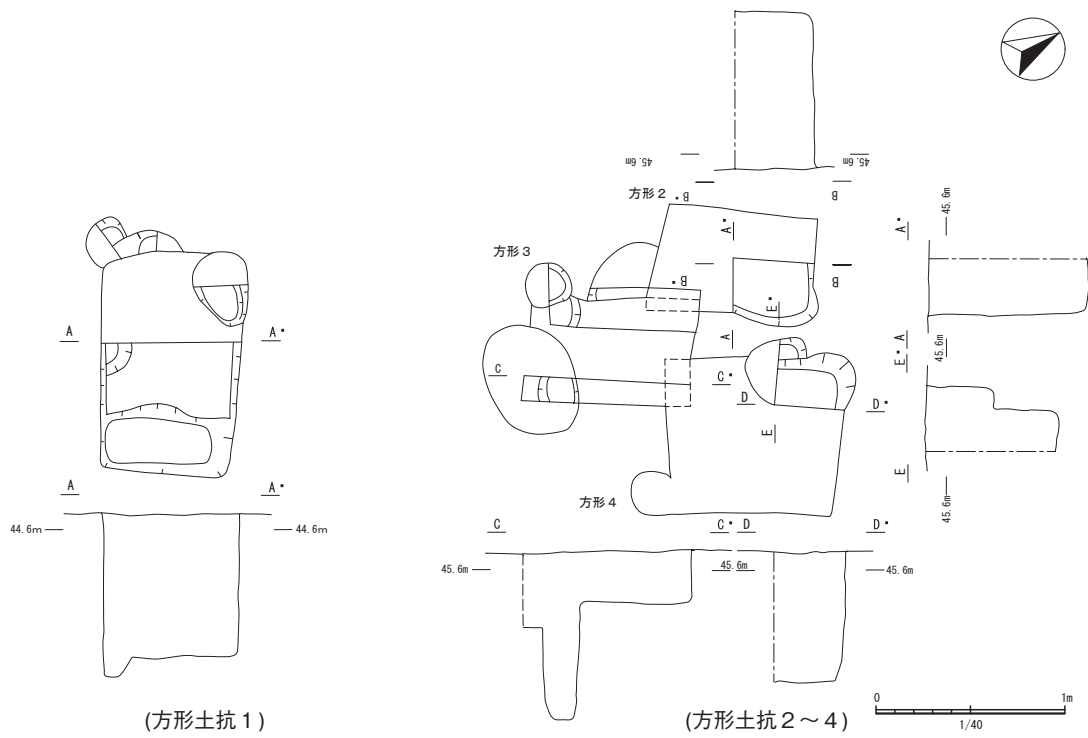
第9図 曲輪2上段・3下段 調査位置



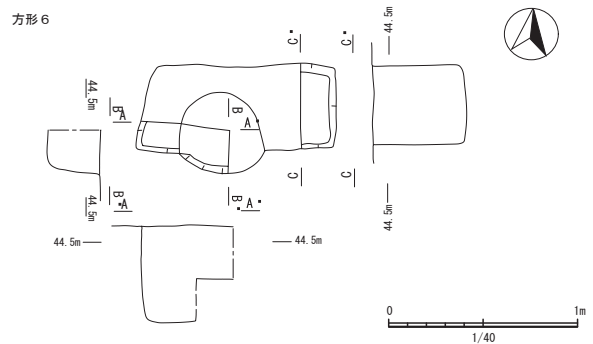
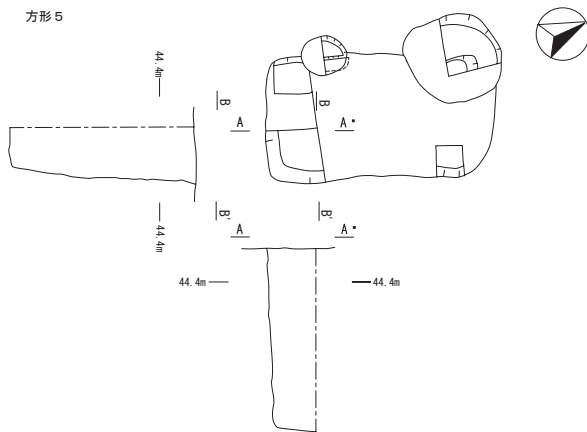
第10図 曲輪2上段 遺構検出状況



第11図 曲輪2上段 堀立柱建物跡



第12図 曲輪2上段 方形土坑1～4



第13図 曲輪2上段 方形土坑5・6

半には文様が施されると思われる。68は碗の底部。畳付から外底まで釉剥ぎ。見込には文様が施される。69は大振りの碗の腰部とした。無文。

70～75は皿である。70は無文の小皿で畳付から高台内まで施釉される。71～73は腰折の稜花皿。71は無文だが72はへら書文様、73は草花文を有する。73は稜花の表現が細かく貫入が著しい。74は菊皿とみられる底部。外底は一部無釉、畳付は施釉され溶着がみられる。75はやや反する口縁を持つ。

76・77は瓶。76は胴部に施文されるが二次被熱により不鮮明。畳付まで施釉され、高台内部及び外底は粗い釉剥ぎ。内部中央にはへソ状の突起を持つ。77は高台部分のみの資料で高台内部は明確な稜線を持って仕上げられている。全体が施釉されるが、畳付の外側に砂状の溶着が著しい。

78・79は香炉。78は内側に張り出した平坦な口縁を有し内部は露胎、胴部はややふくらみ、沈線がめぐる。79は青白色を呈し、突起状の脚部を持つ。内面も施釉されている。

80は蓋とした。山状の形態で大型の壺等の蓋と思われ、身と合わさる部分は釉剥ぎが施される。

81は口縁が外反する青磁の播鉢。外面には沈線の装飾が見られ、内面は口縁部以下は不規則な露胎と思われる。

#### 白磁

82～84は皿。口縁が外反する端反皿。森田分類のE-

2類である。外底まで施釉され畳付は釉剥ぎ。

85は鉢と思われる小片。器壁は薄く、口径はあまり開かない。外面に段差状の装飾があり、施釉されて突帯のように見える。

86は合子の蓋。天井部の器壁に対して側面は薄い。頂部には段差で円が表現される。内面は無釉。

#### 青花

87～91は碗。87は畳付の内側にモミガラが付着。腰が張り、どっしりしている。88は器壁が薄く細線で絵付けが施される。口縁部はとがり、施釉により外面が肥厚している。89は黄色みがかかり貫入が著しい。90は88に似て施釉により口縁外部が肥厚する。口縁部の器壁は厚い。91は口縁部が外反する端反碗、小野分類のB群である。

92は鉢とした。直線的に外反する撥形の口縁を持ち、口縁の外部は施釉により肥厚する。

93～99は皿。93は器壁の薄い端反皿、小野分類のB群。94は波頭文と蕉葉文を持つ碁笥底の皿とみられ、小野分類C-I群であろう。焼成不良。95は文様から碗の可能性も残る。97は発色が悪く貫入がみられる。98は底部。外底に宣徳年製銘ある。99は焼成の良い小皿。

100は蓋物の胴部。口縁部に蓋受けがある。外底に「口徳年造」銘があり、発色は黄色がかかり絵付けは灰色。

#### その他の磁器

101は外面が青磁、内面は青花である。青花の外面に



青磁釉をかけたものか。碗または皿。

102は外面が瑠璃釉、内面は青花である。内面の口縁には圈線がめぐり外面の口縁は白色を呈する。口縁が外反する碗または皿。

#### 陶器

103は天目碗。褐色。やや焼成不良。104・105は鉢。口縁を玉縁状に丸める。104は内面のみ施釉。鉄釉。105は内面無釉。外面に棒状工具による圧痕がみられる。106は壺。口縁部に鐔状の突起がめぐる。近世遺物の可能性あり。107は播鉢。型造りを思わせる精緻な造り。褐釉。内面は口縁部のみ施釉。近世遺物の可能性あり。

#### 三彩・彩色陶器

108は鳥の嘴を模したと思われる小片。穿孔されていないが、片側にくぼみがあり器内部の水が嘴を伝って流れるような構造の可能性がある。水滴か。

109は鳥型水滴と思われる。側面は緑色を呈し、底面付近は一部白色。110は鳥型水滴の尾部分か。

111は彩色陶器の皿の底部。見込及び外面は青釉、外底は黄釉が施される。

#### 国産陶器

112は常滑焼の甕の口縁。113は備前焼の壺の口縁から頸部。114は瀬戸焼の鉢。捏ね鉢とみられる。腰部に突帯状の装飾があり底部付近は露胎。115は瀬戸美濃の碗。灰釉。口縁部の先端がとがる。116は瀬戸美濃の天目碗。116は備前焼の可能性のある鉢の口縁部外面から内部に貫通する穿孔がみられる。穴の直径は約1cmで用途不明。118は肥前陶器とみられる碗。唐津焼の可能性あり。口鏝。

#### 土師器

手づくね成型ではなく器高が大きいものを坏、それ以外を皿とした。119～121が坏である。119は底部がへら切り離しで切り離し後の調整が施される。120は黄白色を呈し底面は糸切り離し。製作時に敷いたとみられる短冊状の痕跡がみられる。121は外面の調整が粗い。

122～126が皿。122は橙色を呈し底面へら切り離し。124は底面へら切り離しで底面がふくらむ小皿。125は器高の小さい小皿。126は底面へら切り離しで切り離し後に調整を施す。立ち上がりは外反。

#### 瓦器・瓦質土器

127～130が瓦器である。すべて手づくね成型とみられる皿である。127は皿で胎土は白色。口縁は内湾気味に

立ち上がる。128は内面にハケ目状の調整痕がみられる。口縁端部は黒色化。129は127に似る資料で器壁が薄く口縁端部が黒色化。130は内面まで灰色を呈し、やや器壁が厚い。

131～133が瓦質土器である。131は大振りな鉢の口縁から胴部。内側に張り出した平坦な口縁を持ち、スタンプによる文様が施される。132は鉢の胴部。貼り付けによる宝珠状の装飾が並ぶ。133は円形の鉢の胴部及び脚部。外面は丁寧な研磨されるが底部外面は研磨されない。脚部の残存から4脚とみられる。

#### 石製品

134は硯。本来の装飾ではないへら書きが施される。135は板状の石に4つの円形の加工が施された資料。側面が整形されていることから、現状が本来の形状と考えられる。円形の加工は先端が細くなるスリバチ状を呈し、直径0.8cmの大きいものが1、0.5～0.6cmの小さいものが3、配置されている。遊戯用の遺物である骨牌に類似するものとして、ここでは石牌とした。136は基石。一般的な基石は黒色で凸レンズ状の形状だが、この資料は黄褐色の砂岩で扁平な板状である。外周は研磨調整されている。曲輪2上段では基石が37個出土し、最大径は2.7cm、最小径は0.4cmである。最大厚は1.4cm、最小厚は0.2cmである。平均径は1.62cm、平均厚は0.59cmである。

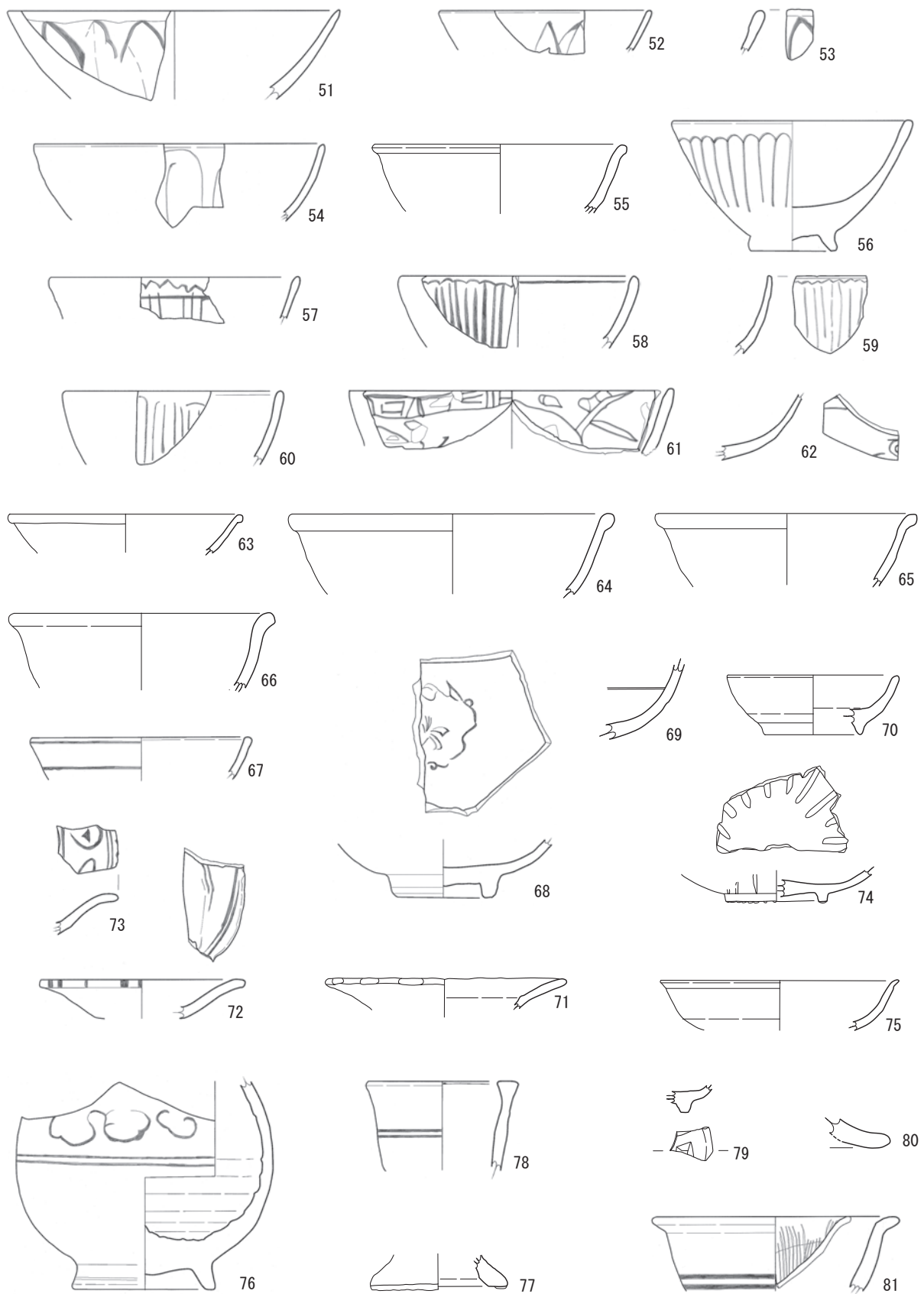
#### 銭貨

北宋銭12種13点、元銭1種1点、明銭2種15点、琉球銭1種1点、寛永通寶1点が確認された。その他に小片又は銭文不明が13点、円盤状の薄い金属片として鏹銭としたものが1点銭ある。

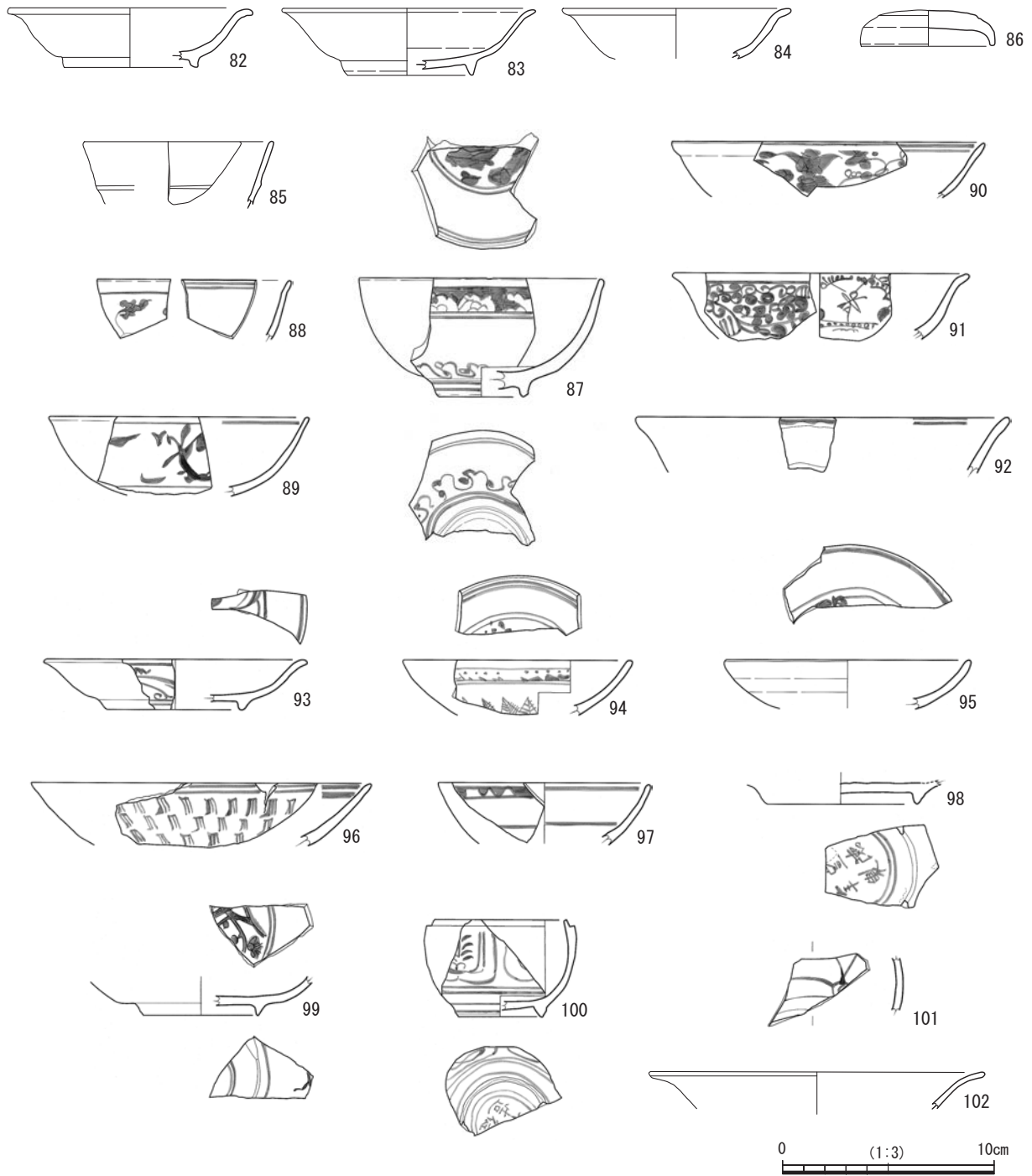
145は北宋の大銭である崇寧重寶、147が元の至大通寶、149が琉球の大世通寶である。

#### 金属器

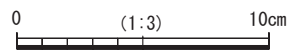
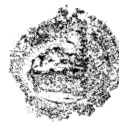
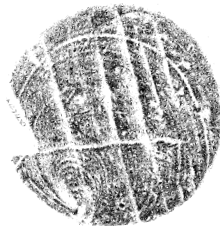
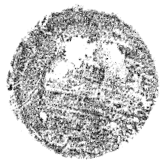
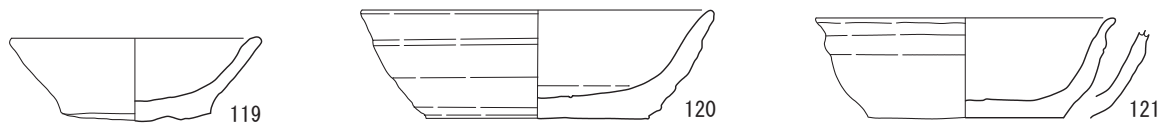
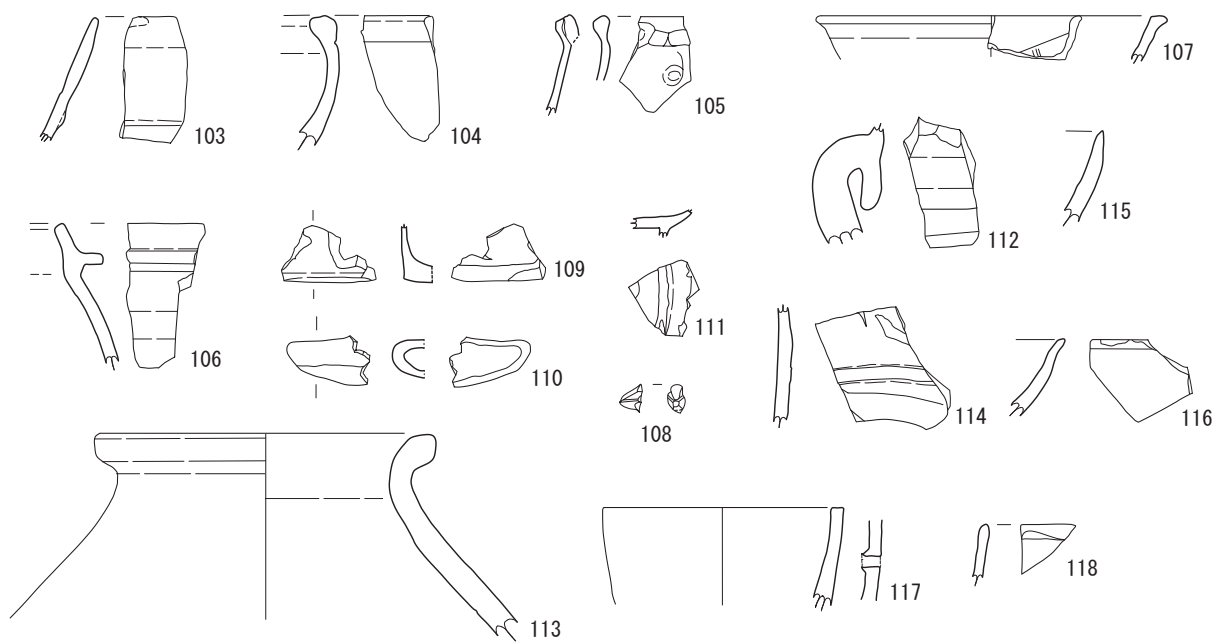
150～155に特徴的な青銅製品を示した。150は簪である。折れ曲がり先端を欠いているが、残存部の長さは11cm以上を測る。基部の断面は八角形、尖端では断面円形。基部には耳かき部を備える。151は鎧や手甲、脚半等に付随する「こはぜ」金具で、鱗状の小片を引っ掛けて手足に巻き着けた布地を止める。甲馳または小鉤などと書く。152も同様に「こはぜ」と称される金具で鎧等の部品である。2つの穴が並び紐を通して鎧の胴等を固定する金具で「鞆」と書く。鞆は笠鞆と責鞆の2種がセットで用いられ、これは責鞆である。153は鍵。鍵の基部、手に持つ部分であり、端部に鍵を差し込む窪みがあ



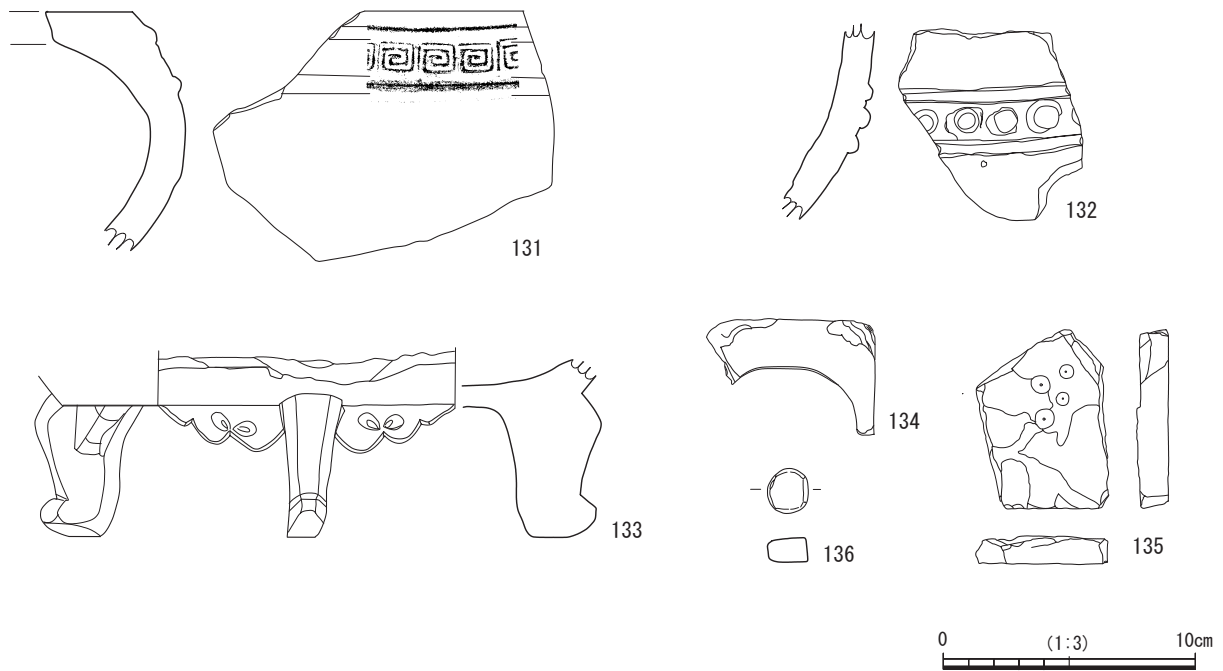
第14図 曲輪2上段 青磁



第15図 曲輪2上段 白磁・青花



第16図 曲輪2上段 陶器・土師器

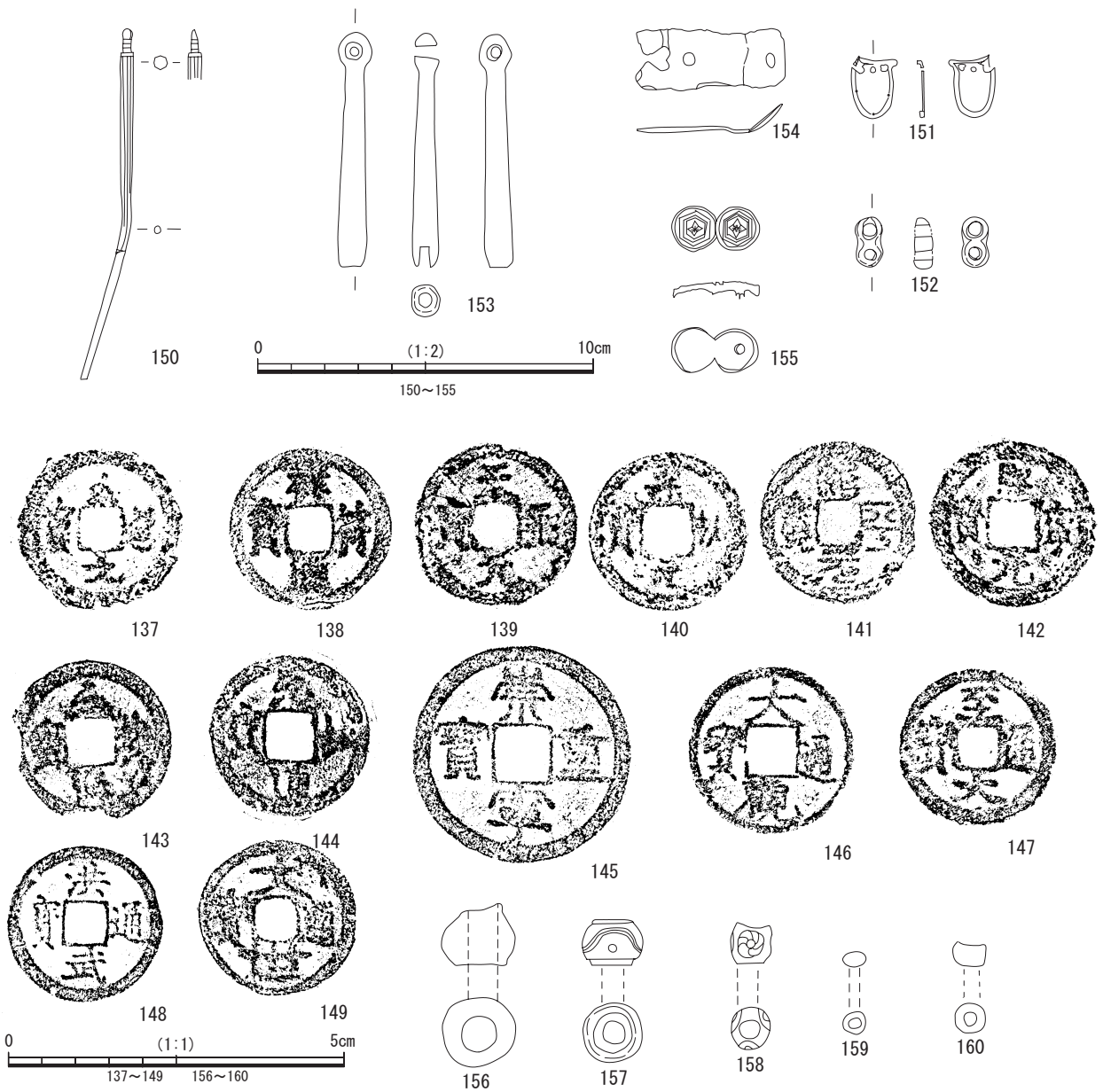


第17図 曲輪2上段 瓦質土器・石製品

る。もう片方の端部は球状になり穿孔されている。154は木製品の装飾や補強を目的とした板状の金具とみられる。155は2連の円状を呈する金具で、表面に家紋のような装飾がある。裏面には突起が折れた痕跡があり、鋳を連ねたような形状である。中世大友府内町跡では3連円状の目貫金具が出土し、刀装具として報告されている。本資料はこれに類するものと見られる。この他、釘類の鉄製品、鋳類の銅製品が確認されている。

#### ガラス製品

156～160はガラス製の小玉である。いずれも有孔の球状を呈す装飾品である。156は半透明の褐色を呈し不整な球状を呈す。157は透明度の低い緑色で外面に刻線の装飾が施される。158は不透明な紺色を呈し外周3面に白色のガラスが渦上に嵌め込まれるトンボ球である。159は半透明の緑色を呈し、小さいビーズ状である。160は不透明な水色を呈するビーズ状で、同一個体とみられる4点が確認された。



第18図 曲輪2上段 金属製品・ガラス



挿図番号	掲載番号	既報告番号	出土区	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考	
挿図番号	掲載番号	既報告番号	出土区	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考	
第16図	124	2-48	K-13	土師器	皿	口縁～底部	6.0	4.2	2.3			ヘラ切り底 底面凸	
	125	2-49	K-13	土師器	皿	完形	7.4	5.2	1.9			ヘラ切り底	
	126	2-50	K-13	土師器	皿	口縁～底部	7.6	4.4	2.2			ヘラ切り底	
	127	2-52	L-12	瓦器	皿	口縁～胴部	10.0	2.6	1.9		16c後半か	手づくね 京都系に似る	
	128	2-51	一括	瓦器	皿	口縁～胴部	11.0	1.6	2.7			手づくね 内面ハケ目	
	129		L-12	瓦器	皿	口縁部	8.8					口縁黒色	
	130		K-12	瓦器	皿	口縁部						口縁黒色	
第17図	131	2-p41	K-13	瓦質土器	鉢	胴部						スタンプ渦文	
	132	2-p41	K-11	瓦質土器	鉢	胴部						鉢	
	133	2-p41	K-14	瓦質土器	鉢	胴部～脚部						脚付き	
	134	2-p41	L-14	石製品	硯								
	135	2-p41	L-12 柱穴	石製品	石碑								4目
	136		K-12	石製品	基石		長径1.8	短径1.6	厚さ1.0				
第18図	137	2-p20	L-12	金属器	銭貨					北宋	995初鑄	至道元寶	
	138	2-p20	L-12	金属器	銭貨					北宋	1009初鑄	祥符通寶	
	139	2-p20	L-14	金属器	銭貨					北宋	1023初鑄	天聖元寶	
	140	2-p20	L-12	金属器	銭貨					北宋	1034初鑄	景祐元寶	
	141	2-p20	K-11	金属器	銭貨					北宋	1064初鑄	治平元寶	
	142	2-p20	K-14	金属器	銭貨					北宋	1068初鑄	熙寧元寶	
	143	2-p20	K-14	金属器	銭貨					北宋	1078初鑄	元豊通寶	
	144	2-p20	K-13	金属器	銭貨					北宋	1086初鑄	元祐通寶	
	145	2-p20	K-13	金属器	銭貨					北宋	1102初鑄	崇寧重寶	
	146	2-p20	K-12	金属器	銭貨					北宋	1107初鑄	大觀通寶	
	147		L-14 柱穴	金属器	銭貨					元	1308初鑄	至大通寶	
	148	2-p20	I-14	金属器	銭貨					明	1368初鑄	洪武通寶	
	149	2-p20	K-14	金属器	銭貨					琉球	1454頃初鑄	大世通寶	
	150	2-p41	L-12	金属器	簪								断面八角形
	151	2-p41	K-12	金属器	こはぜ								魚鱗状小片
	152	2-p41	K-12	金属器	責鞆								8字状
	153	2-p41	L-12	金属器	鍵								基部
	154	2-p41	K-12	金属器	金具								裝飾金具
	155	2-p41	K-12	金属器	目貫金具								2連円状 文様あり
156	2-p41	K-12	ガラス	小玉		直径1.2	孔径0.6					琥珀色	
157	2-p41	L-12	ガラス	小玉		直径0.9	孔径0.4					緑色 線刻	
158	2-p41	L-12	ガラス	小玉		直径0.6	孔径0.4					紺色 トンボ玉	
159	2-p41	K-12	ガラス	小玉		直径0.4	孔径0.18					緑色	
160	2-p41	L-13	ガラス	小玉		直径0.5	孔径0.18					水色 計4点出土	



## 第5節 曲輪2下段の調査

### (1) 調査の概要

曲輪2下段については、志布志城跡が国指定史跡となる以前の2004年度に実施した確認調査においてJ-9区にトレンチを設定し、柱穴等が検出されている。

4次・5次調査では過去のトレンチを拡張する形で曲輪面の調査を実施するとともに、曲輪が細長く張り出した南側部分について、K-8・9区に2-1 T及び2-2 Tを設定して確認を行った。

曲輪面では築城面と見られる、にぶい黄橙色の火山灰土層(IX層10YR7/3)面において、多数の柱穴、方形土坑6基を検出した。柱穴からは1棟の掘立柱建物跡が想定された。また、調査区の中央部分と南側において、IX層面が大きく窪んだ不整面の存在を確認した。

調査区の西端では部分的にIX層が見られず、造成土と見られる褐色土(10YR4/4)、IX層土や炭化物が混在するにぶい黄橙色土(10YR6/3)が確認された。ミニトレンチによる調査を行ったが、IX層面を追いかけることはできなかった。

### (2) 遺構

#### 柱穴・建物跡

柱穴には大小様々なものが確認された。他の曲輪で確

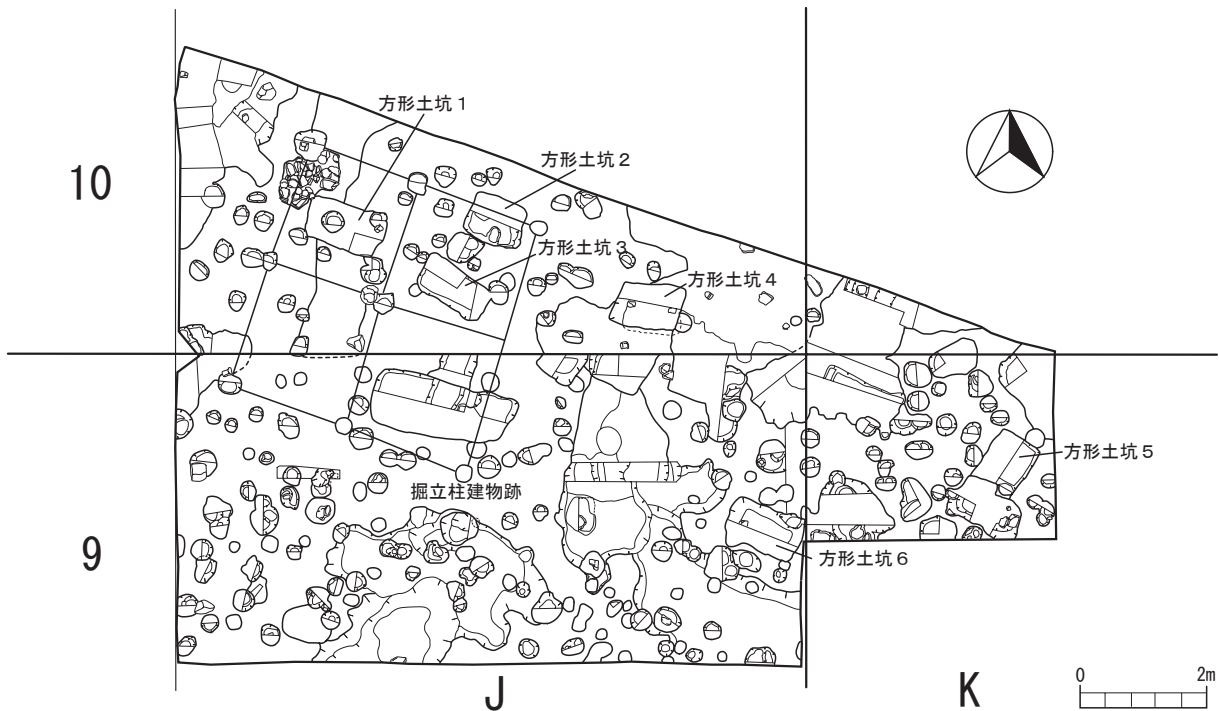
認されているような、柱穴の中に礎石を持つものは少なく、それらの柱穴で構成される建物は想定することができなかった。掘立柱建物跡は2間×2間の規模で想定され、そのなかに3基の方形土坑を含む。特に方形土坑1は建物跡と軸方向が一致しており、建物の1間四方の中央に位置することから、建物に付随する遺構の可能性はある。

#### 方形土坑

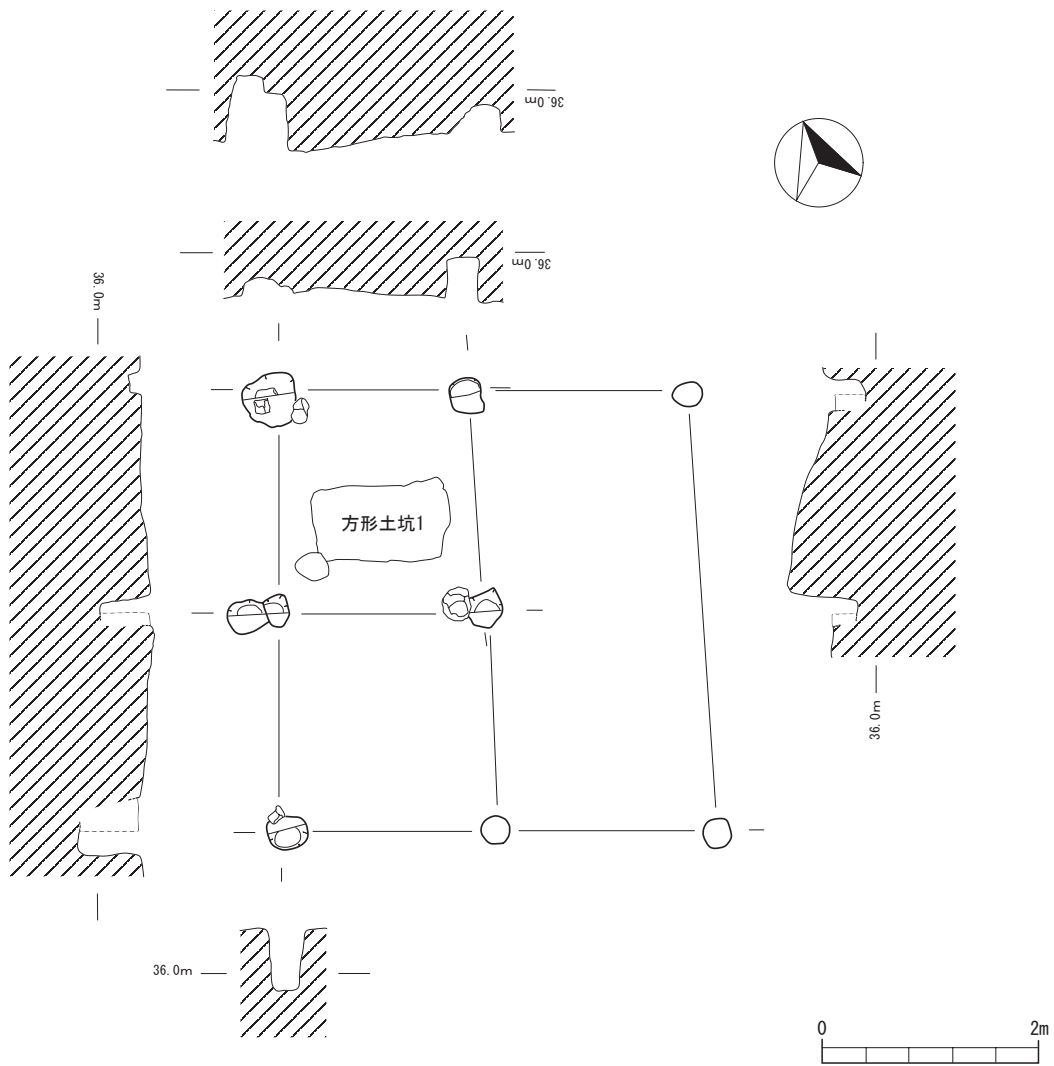
方形土坑とは、平面プランが長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれた土坑である。過去の調査により内城跡の複数の曲輪で検出され、トイレ遺構の可能性が推測されている。

曲輪2下段では6基が確認され、その規模は短径60～90cm程度、長径80～120cm程度である。方形土坑4の深さは約200cmと例外的だが、残る5基の深さは50～100cm程度にまとまる。6基のうち4基の長軸は、おおよそ南東から北西方向に揃っている。

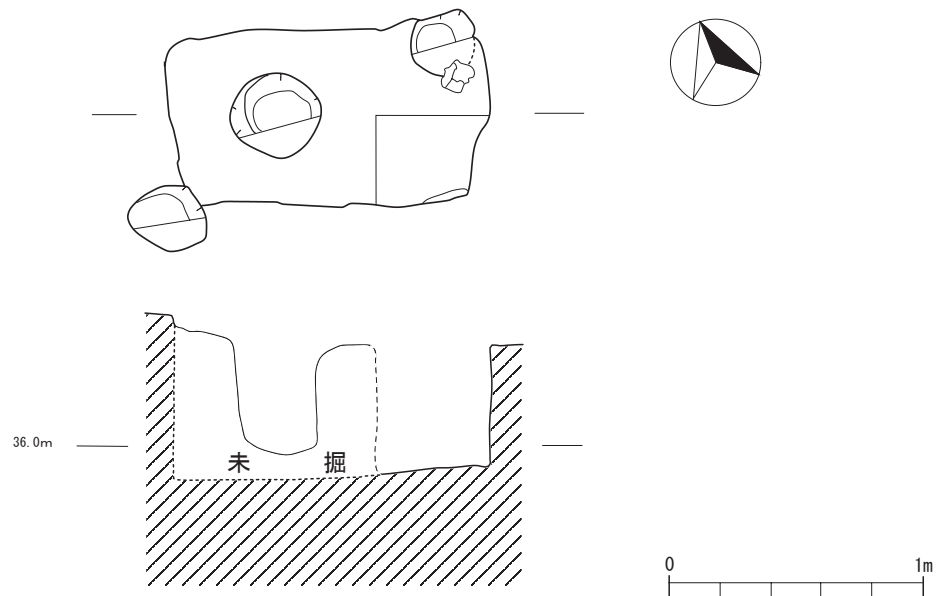
方形土坑3・4・6について底面の埋土を採取し、寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定の科学分析を実施した。分析の結果は「寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。花粉分析では、花粉があまり検出されなかったが、食用になるイネ属型、



第19図 曲輪2下段 遺構検出状況



第20图 曲輪2下段 堀建柱建物跡



第21图 曲輪2下段 方形土坑1

ソバ属、アブラナ科、薬用になりといれ遺構からの検出例が多いアカザーヒユ科が部分的に少量認められた」となっており、寄生虫卵及び消化残渣が検出されず、トイレ遺構の可能性については確定できなかった。

### (3) 2-1 Tの調査

2-1 Tは、K-8区に1.5×2 mで設定し、地表面から約50cmで浅黄色の火山灰土(IX層 2.5Y7/3)を検出した。調査の結果、柱穴5基と溝状遺構と見られる遺構の一部が確認された。

溝状遺構の埋土は褐色土(10YR4/4)、ミニトレンチによる調査の結果、IX層面からの深さが約40cmであることが確認された。しかしながら、溝状遺構の幅は確認できず、溝ではなく築造時の造成土の可能性も残る。

溝状遺構の全体像は確認されなかったが、柱穴を検出したことから、L字状を呈する曲輪の屈折部分にあたり、幅の狭い場所である2-1 T周辺にも、建物等が存在していたことが推察された。

### (4) 2-2 Tの調査

2-2 Tは曲輪の南端部K-7区に1.5×3 mで設定し、地表面から約50cmでにぶい黄橙色の火山灰土(IX層

10YR7/2)を検出したが、トレンチの大半で造成土と見られる褐色土(10YR4/4)が確認された。

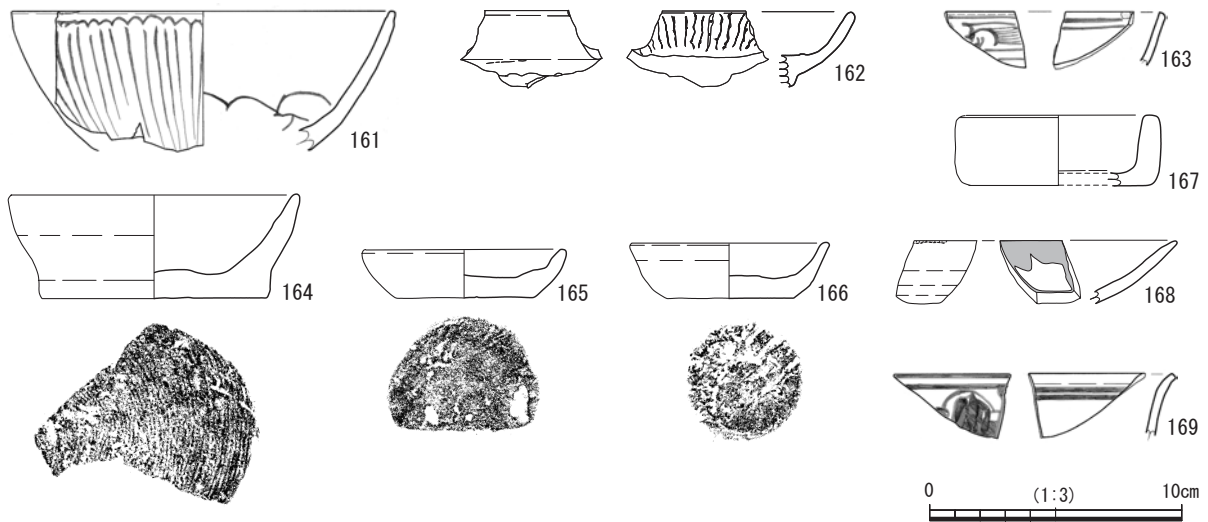
造成土に対してミニトレンチによる調査を行い、地表面より約1.5mでIX層面を確認し、トレンチの南側に向かってIX層が大きく傾斜し、その上に張り出すように造成を行っていることが推察された。これにより、2-2 Tより南側の部分、曲輪の南端部は造成によって得られた平坦面であることが推測された。

断面観察により、地表面より約60cmの深さで、部分的にIX層に由来すると思われるにぶい黄橙色の火山灰土(10YR7/2)が確認された。この火山灰土は硬化しており、水平方向に層状に存在することから、この面が人為的に突き固められた築城面であると推測される。

### (5) 遺物

#### 方形土坑出土遺物

161～168は方形土坑4より出土。161は青磁の碗。外面に細蓮弁文、内面に草花文を持つ。上田分類のB-IV類。162は焼成不良の磁器皿。内面に装飾を有するが焼成不良により不鮮明。畳付まで施釉。163は青花の碗。164は土師器の坏。底面は摩滅するが糸切り離しとみられる。外面の一部に赤色顔料。165から168は土師器の皿。165から168は土師器の皿。



第22図 曲輪2下段 方形土坑出土遺物

165・166は底面を丁寧に調整し切り離し痕跡を消している。167は垂直に立ち上がる器形で、底部より胴部及び口縁部の器壁が厚い。底面は調整を施したとみられる。168は口縁が大きく開き器壁が薄い。白色を呈す手づくね成型。京都系土師器とした。内面は黒色化。

169は方形土坑5より出土。青花の碗。口縁は外反し口唇部は口鏝。

#### 一般遺物

##### 青磁

170・171は盤とした。口縁が大きく開き、口縁端部が垂直に立ち上がる。内面にはへら状工具による陰刻文様が施される。172～183は碗。172・173は無鎔蓮弁文を有し、上田分類のB-II類。173は焼成不量。174～177は細蓮弁文。上田B-IV'類。178～180は口縁が外反する。上田D類。180は青白色を呈し外面に凹線による圏線がある。180・181は無文の直口碗。180はやや内湾気味で上田D類の可能性もある。181は直線的に開き器壁が厚い。183は口縁を外に折り曲げ、施釉により玉縁状になる。二次被熱。

184～188は皿。184は口縁が外反し無文。185は無文の腰折皿。やや焼成不良。186は口縁が大きく開き肥厚する口縁。無文。187は碗皿の底部。見込みに草花文を有し、畳付を粗く釉剥ぎ。高台内面は露胎。188は見込みに文様が描かれ、外面に圏線がみられる。外底まで施釉され、畳付にはモミガラが付着する。

189は蓋の可能性もあるが内面まで施釉されることから鉢とした。190は壺の胴部とみられ、波状の文様が施される。191は瓶の口縁部片。稜花状の形を呈す。

##### 白磁

192は坏。外反状に立ち上がり乳白色で釉薬は薄い。森田分類のE群。大友府内町跡の坏E-1類。高台外面ないし腰部下半まで施釉。畳付から外底まで無釉。193は内湾気味に立ち上がる碗の口縁部片。

194～198は皿。194は外反する口縁部片。坏の可能性もある。195～197は端反皿。198は菊皿。森田分類及び大友府内町跡のE-4類。199は平底の底部。釉薬が底部付近でムラになり段をなす。底部より立ち上がりの器壁が薄く、大きく開いて立ち上がる。鉢とした。

##### 青花

200～203は碗。201は端反碗。小野分類のB群。202は直口の碗。器壁が薄く堅緻。203は焼成不良で文様が不鮮明。口縁部に突帯状の装飾がめぐるようにみえる。

204～209は皿。204は小野分類B群の端反皿。灰色を

呈し文様も黒色がかかる。205は、やや焼成不良の小皿。206は焼成不良。碁笥底の可能性もある。207・208は碁笥底。小野分類のC群。208は黄色味がかり畳付は釉剥ぎされない。底部径が大きい。209は直線的に立ち上がり極めて器壁が薄い口縁部片。鉢とした。

#### その他の磁器

210・211は瑠璃釉の碗。210は直線的に開く口縁部片。外面は藍色で口縁は白色。内面は白色で無文。211は胴部片とみられ外面が藍色、内面は白色無文。

212・213は赤絵の碗。212は直線的に立ち上がり端反。赤色で文様を描き隙間に緑色の彩色。内面は口縁部に圏線。213も同じく端反。器壁が薄く内外面に赤色文様、緑色と薄い青色の彩色。

#### 海外陶器・三彩・緑釉陶器

214は福建広東の鉢。口縁は内側に張り出し胴部の器壁は薄い。215～217は華南三彩。215は鳥形水注の胴部、鳥の羽部分。緑色と黄色の彩色。216・217は鶴形水注の胴部。鶴の脚部を白色、背景の植物を黄色、全体が緑色で彩色される。218は緑釉陶器の胴部。器形不明。内外面に緑色釉薬がかかり、外面の一部は露胎。

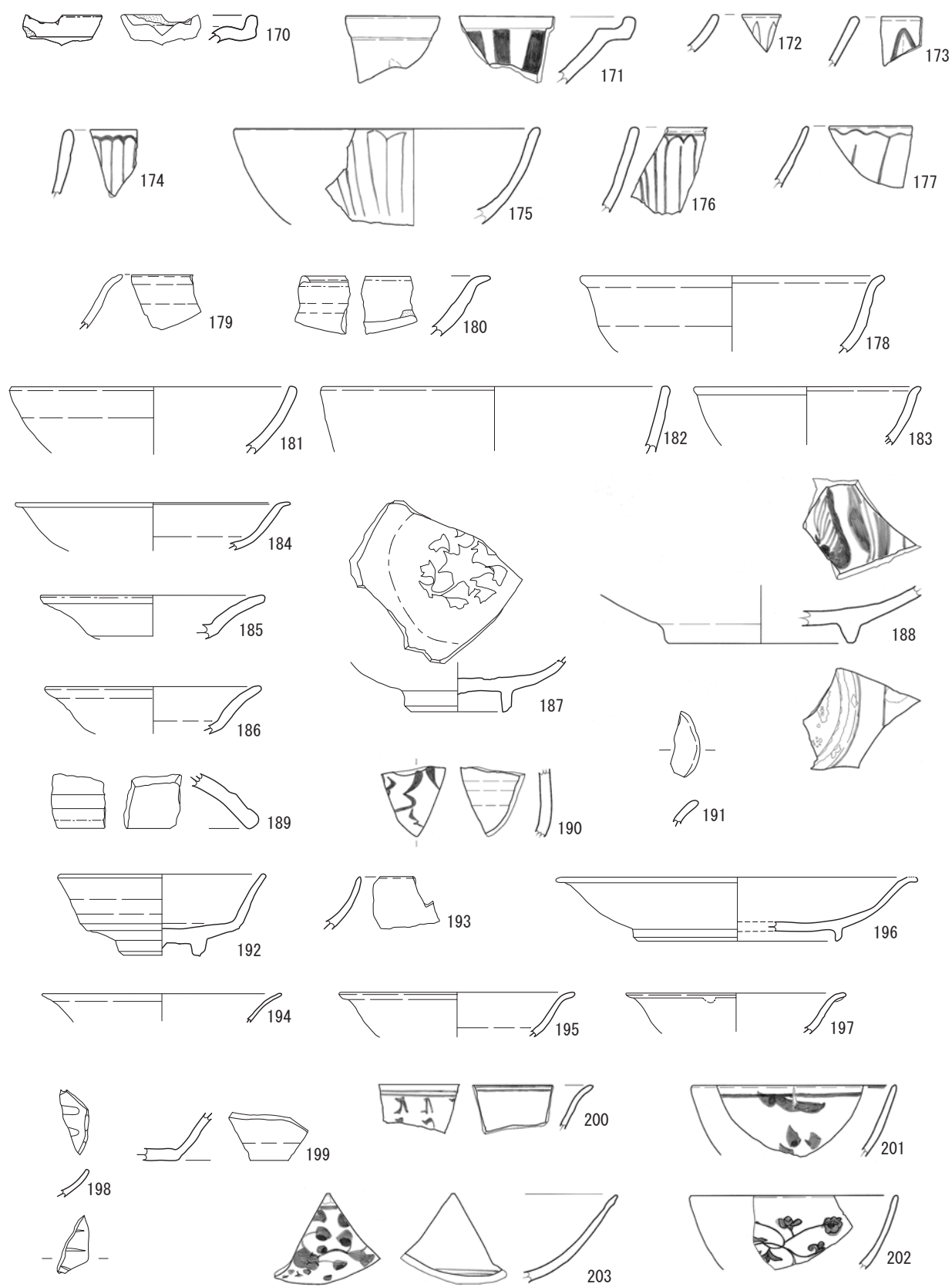
#### 国産陶器

219～221は備前焼。219・220は播鉢の口縁。221は甕の口縁部。大きく開き口縁を丸く造る。

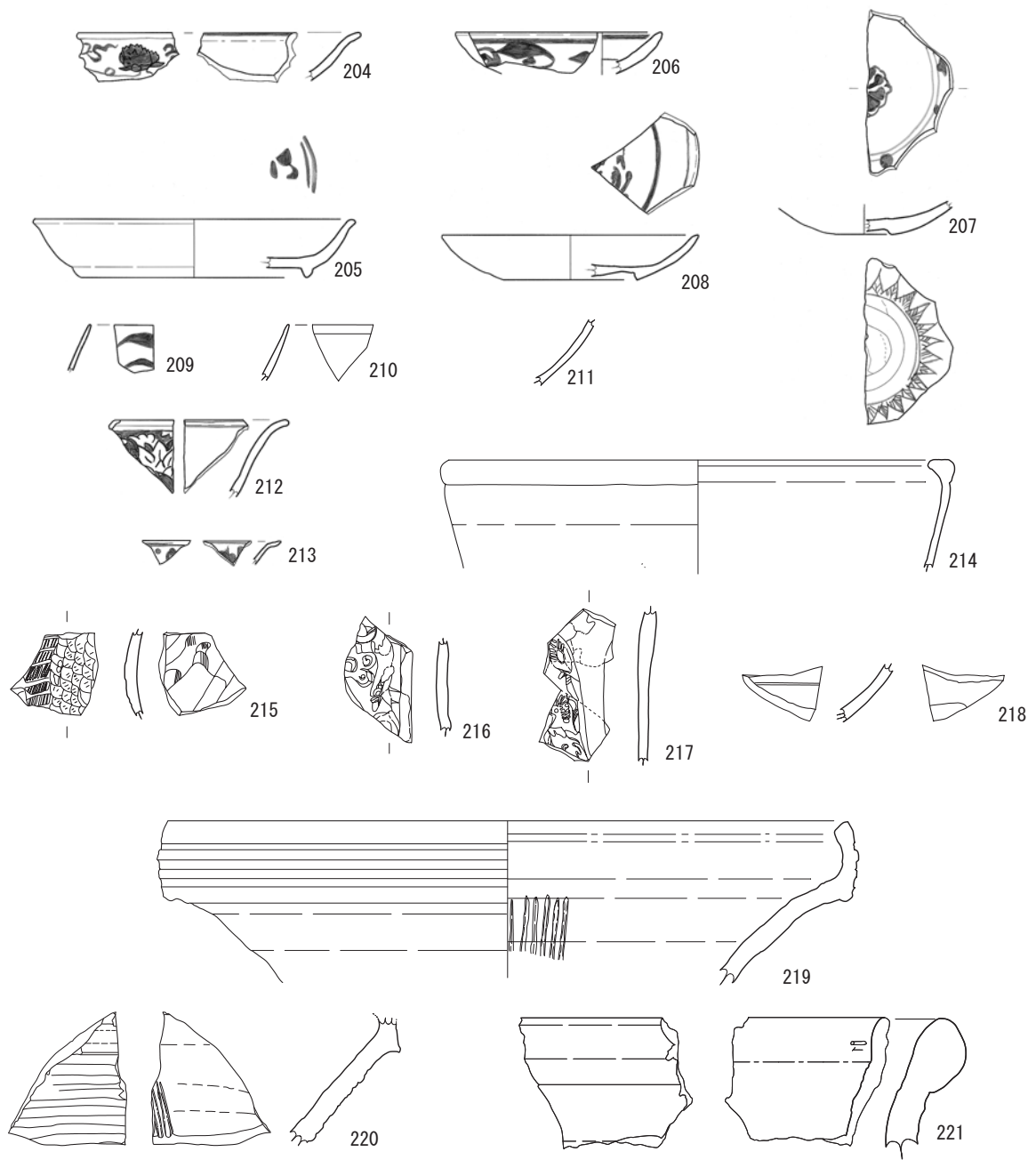
#### 土師器

222・223は坏。222は底面糸切り離し。223は底面へら切り離し。切り離し後に底面を調整している。外面に2条の稜線。

224～234は皿。224～226は底面へら切り離し。切り離し後に底面調整を施す。226は底面がふくらむ。227は底面糸切り離し。228・229は小皿。底面へら切り離し後に底面調整。230は底面へら切り離し後に調整。231は器壁が薄く、切り離し後底面調整。口縁が黒色化、外底に煤付着。灯明皿か。232は手づくね成型とみられ器壁が薄い。内外面、黒色。233は底部とみられる屈曲した破片。底面から滑らかに立ち上がり底面の切り離しはみられない。手づくね成型か。234は手づくね成型とみられ、大きく開く。京都系土師器に類似するものか。

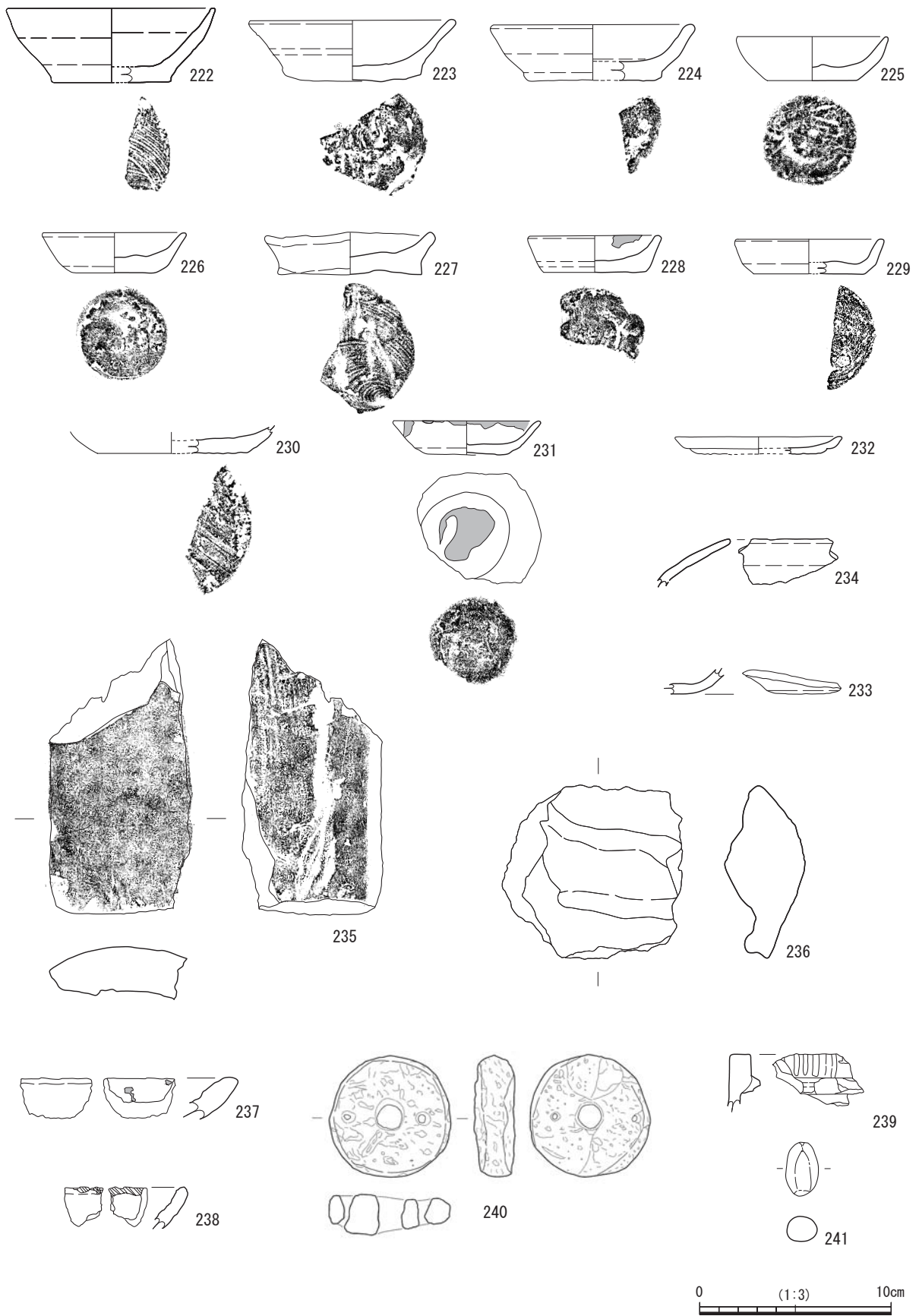


第23図 曲輪2下段 青磁・白磁・青花

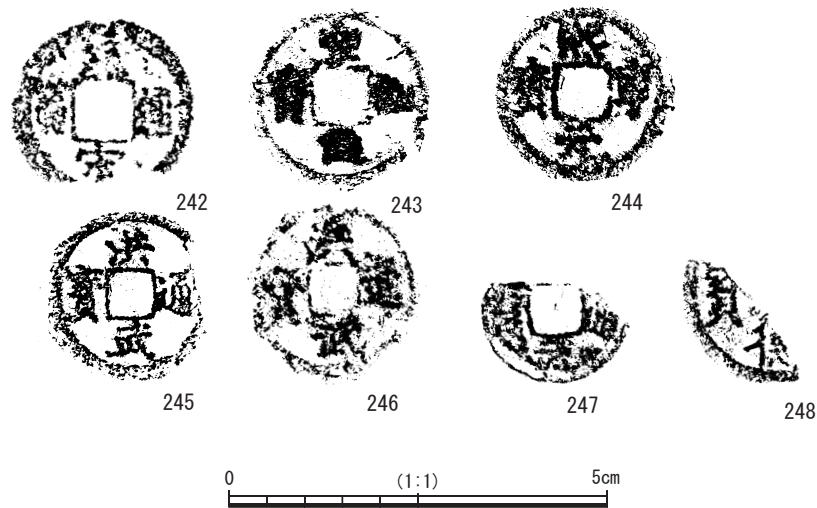


0 (1:3) 10cm

第24図 曲輪2下段 青花・磁器・陶器



第25図 曲輪2下段 土師器・土製品・石製品



第26図 曲輪2下段 銭貨

土製品

235は瓦。焼成が良く堅緻、内面に布目痕。近世瓦。  
236は外面が灰色、内面は赤色化。断面ドーナツ状ではないものの轡の羽口と思われる。

237・238は埴塙の口縁。237は内面が赤色化し金属が溶着。238は内面口唇部に溶着がみられる。

石製品

239は滑石製石鍋の口縁部。鏝状の突帯がめぐるが一部は窪められている。本来の形状か欠損した部分を研磨したものかは不明。

240は軽石製品。円盤状で中心を穿孔したドーナツ状。穿孔の両側に小型の穴を開ける。中央の穿孔から放射状に延びる使用痕がみられる。

241は基石。断面が歪な円形ないし三角形を呈し扁平ではない。曲輪2下段では基石が12個出土し、最大径は2.8cm、最小径は1.1cmである。最大厚は1.3cm、最小厚は0.5cmである。平均径は1.76cm、平均厚は0.56cmである。

銭貨

北宋銭3種3点、明銭2種4点、銭文不明3点が確認された。245～247の洪武通寶のうち、247は完璧ではないが外径が小さく模鑄銭の可能性はある。

曲輪2下段 出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	既報告番号	出土区	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
第22図	161	3-74	J-10 方形土坑4	青磁	碗	口縁～体部	15.2			龍泉窯系		蓮弁文
	162	3-91	J-10 方形土坑4	白磁?	皿	口縁～底部				景德鎮窯系		疊付まで施釉 焼成不良
	163	3-96	J-10 方形土坑4	青花	碗	口縁～体部				景德鎮窯系		
	164	3-111	J-10 方形土坑4	土師器	坏	口縁～底部	11.6	9.0	4.1			糸切り底 外面着色(赤)
	165	3-118	J-10 方形土坑4	土師器	皿	口縁～底部	8.2	5.4	1.9			底面調整
	166	3-119	J-10 方形土坑4	土師器	皿	口縁～底部	8.0	5.1	2.2			ヘラ切り後調整
	167	3-124	J-10 方形土坑4	土師器	皿	口縁～底部	8.2	7.1	2.8			垂直に立ち上がる浅い器形
	168	3-125	J-10 方形土坑4	土師器	皿	口縁～底部						手づくね 京都系 白色胎土 内黒
	169	3-98	K-9 方形土坑5	青花	碗	口縁～体部				景德鎮窯系		
第23図	170	3-84	J-10	青磁	盤?	口縁部				龍泉窯系		
	171		J-9	青磁	盤	口縁部				龍泉窯系		口折盤
	172		J-9	青磁	碗	口縁部					14C後半	無銘蓮弁文
	173		J-9	青磁	碗	口縁部					14C後半	無銘蓮弁文 焼成不良
	174	3-73	J-9	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系		細蓮弁文
	175	3-75	J-11 柱穴	青磁	碗	口縁～体部	15.6			龍泉窯系		細蓮弁文
	176	3-76	J-10 柱穴	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系		細蓮弁文
	177	3-77	J-10 柱穴	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系		細蓮弁文

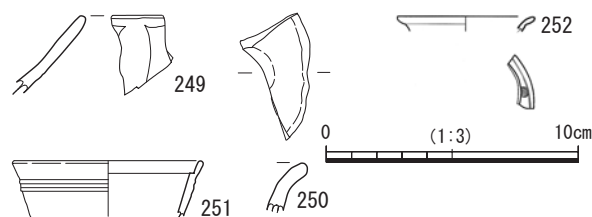




## 第6節 曲輪3上段・下段の調査

### (1) 3上段の調査

曲輪3は本丸と呼ばれ、内城の中心的な曲輪に位置づけられる。曲輪は上下段に分れ、上段は国指定以前に確認調査が実施され、下段は1～3次調査で調査が実施された。1～9次調査では3上段の曲輪面の調査は実施されなかったが、確認調査時の出土遺物に未報告のものがあったため、3下段と併せて本節で報告する。



第27図 曲輪3上段 出土遺物

### (2) 3上段の遺物

249は青磁の碗。陰刻による文様がみられる。250は青磁の瓶の口縁部片。稜花状の形を呈す。曲輪2下段で類似品が出土。251は白磁の鉢とした。外反気味に開き、外面に2条の突帯がめぐる。口縁内部に蓋受けの段差がある。252は青花の碗とした。外反する口縁部で器壁が薄く口径も小さい。杯などの可能性もある。

### (3) 3下段の調査の概要

3下段は本丸下段と称される。国指定以前の確認調査の成果に基づき、1次・2次調査にて築城面と推定される黄褐色火山灰土(VIII層)までを掘り下げた。本来の虎口を検出したほか、曲輪北部に空堀が存在することなどを確認した。遺構面において曲輪の中心から南東側、H・I-14区にかけての一部に「チョコ層」と通称される茶褐色粘質土(VII層)が残存し、曲輪の南西端では造成土が確認された。このことから曲輪の南側で盛土造成を行い、曲輪を造成したことが判明した。

3次調査においては3-1 Tにより空堀、3-2 Tにより虎口の調査を実施し、未調査部分を調査するため3-3 T及び3-4 Tを設定した。また、3-5 Tにより階段遺構を調査した。

### (4) 方形土坑・土坑

方形土坑とは、平面プランが長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれた土坑である。過去の調査により内城跡の複数の曲輪で検出され、トイレ遺構の可能性が推測されている。

5次調査において、後述する空堀の北側の区域で、土坑が5基確認され、そのうち3基が方形土坑と判断された。3基の方形土坑は、短径60～100cm程度、長径100～130cm程度、深さ120～180cm程度で空堀の北側に密集している。

その他に大小の土坑が検出されたが、特に曲輪の中央部H-12～14区にかけて大型の土坑が確認された。土坑1は東西長軸が約5.6mを測る。平面プランでは輪状を呈していたが、ミニトレンチを設定して調査した結果、

大型の土坑内に埋土として乳白色火山灰土がブロック状に存在していることが確認された。ミニトレンチ内で最も深い部分で約1.05mを測る。

土坑2は南北長軸約4m、深さ約1.10mを測り、埋土には灰と思われる粘質灰色土が混ざり、炭化物や鉄残滓が多数確認された。

土坑3は複数の土坑が切りあっており、土坑2と同様に灰が混在している。また、土坑3よりは備前の播鉢とともにガラス薄片が出土している。

土坑4は東端部に向かい、焼土や灰が層をなしていることが平面で確認された。また、灰が混在する土坑内および周辺からは多量の鉄滓が検出された。

### 方形土坑・土坑出土遺物

253・254は方形土坑1出土遺物。253は手づくね成形の土師器の皿。白色を呈す京都系土師器。254は器壁が薄く手づくね整形とみられるが外面は丁寧に調整されている。坏とした。

255は方形土坑2出土の瓦である。焼成はよく、内外面を研磨して仕上げている。近世瓦と思われる。

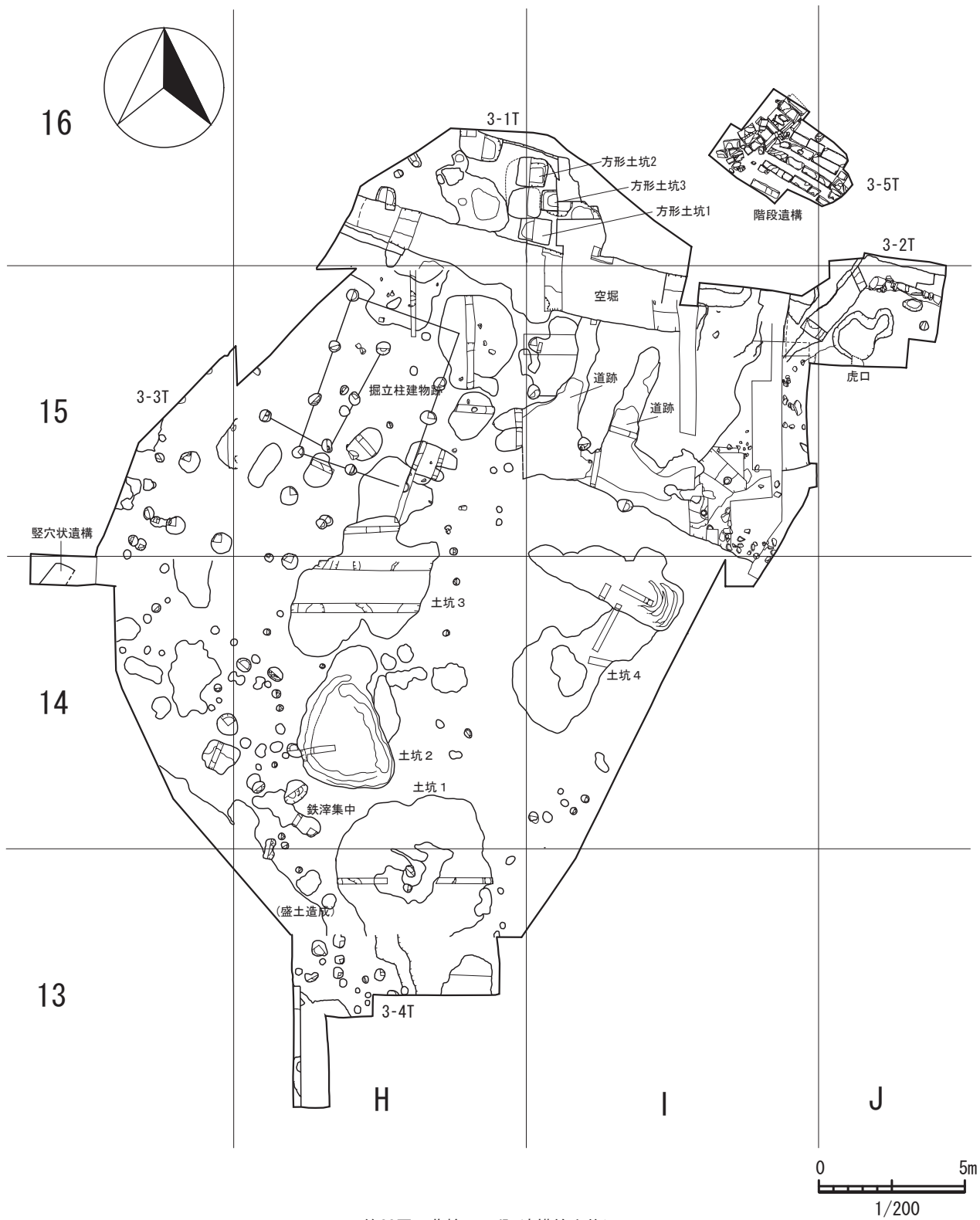
256は土坑3出土の土師器皿である。253と同様の白色を呈す手づくね成形。京都系土師器。

257・258は土坑3の出土遺物。257は青磁碗の底部。畳付から外底部分は露体。258は播鉢の口縁部。片口とみられる。口縁外面に縦に2条、棒状のもので線を引いている。

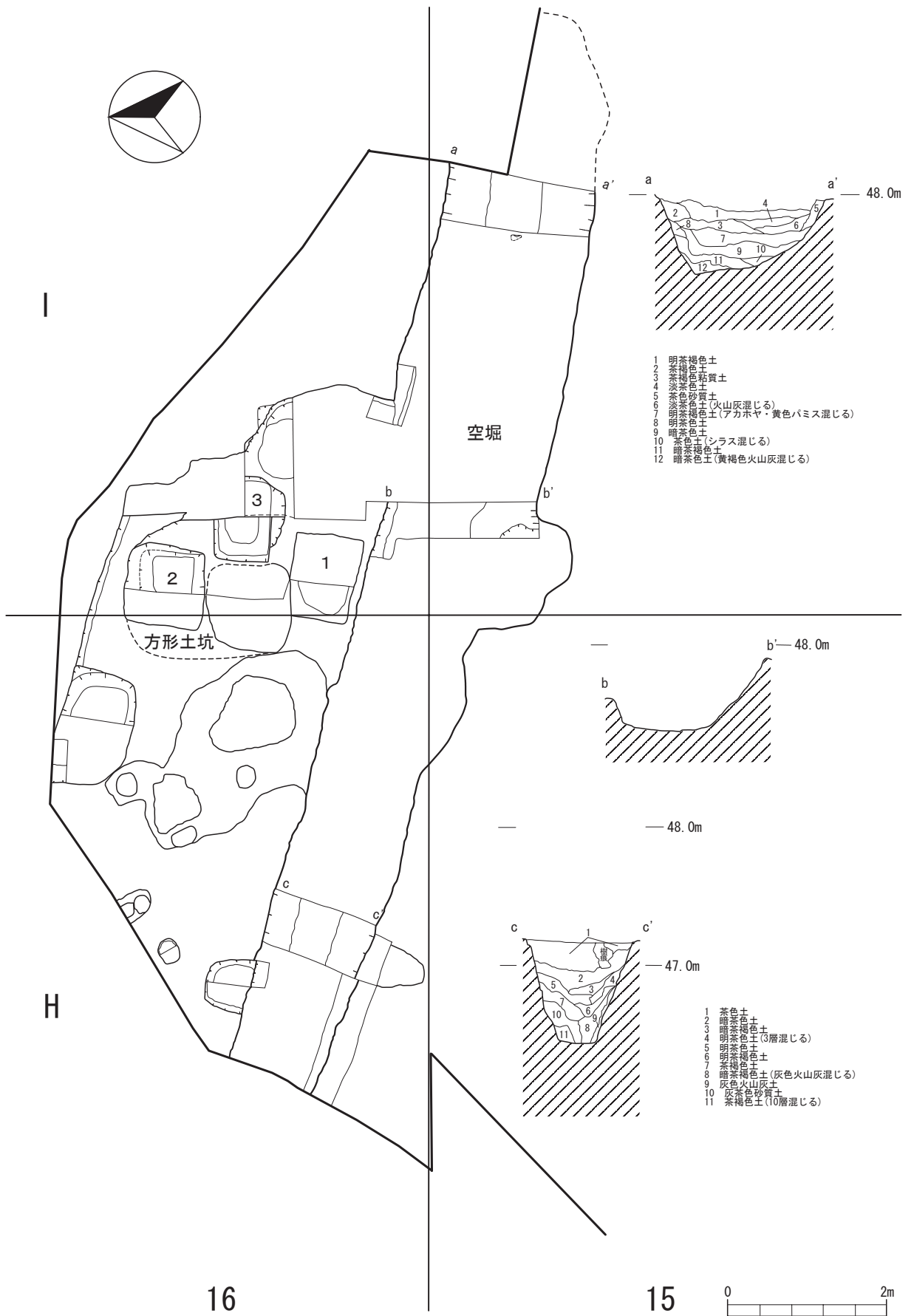
### (5) 空堀

空堀は約2mの幅で約14mが検出され、現在利用されている曲輪3上段への通路を遮るように東西に延びている。ミニトレンチを用いて形状や堀底を確認した際、埋土から複数の土師器が出土した。その中には、京都系土師器に類似する薄手で手づくね成形の土師器皿の破片も含まれている。

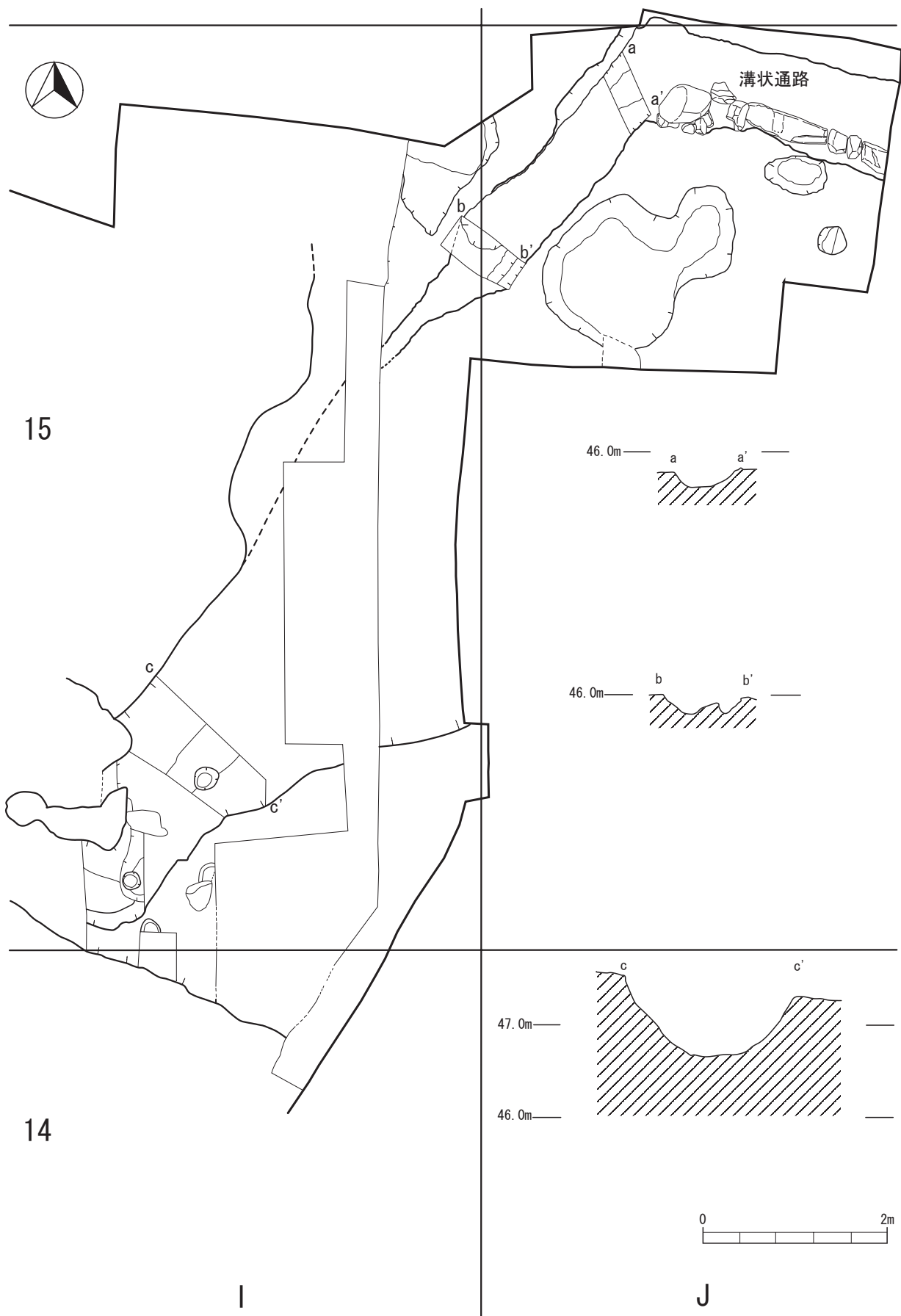
空堀の東端は、曲輪の東を走る空堀まで貫通せず、後



第28図 曲輪3下段 遺構検出状況



第29図 曲輪3下段 空堀



第30図 曲輪3下段 虎口

述する虎口の手前で途切れている。西端は調査区をこえて延び、曲輪の西側を走る空堀に接続するものと推察される。空堀を西に延長した際に接する曲輪の辺縁部は、他の場所に比べて抉れたように崩壊が進んでおり、曲輪の端部をこえて空堀が連結することをうかがわせる。

この空堀により、曲輪の辺縁を駆け上がって曲輪3上段に登ることを阻止し、空堀のない部分(後述する階段遺構部分)に誘導するものと思われる。

#### 空堀の遺物

259は青磁の碗。外反する口縁。無文。上田分類のD類と考える。260は青花の皿。見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。畳付を釉剥ぎし外底は露胎。261～264は陶器。261は壺または甕。262は素焼きの土師質に鈍い赤色で文様が描かれた薄手の資料。皿の見込み部分か。263は播鉢の口縁部か。素焼き。264は壺甕の底部。底部に窯道具の痕跡。

265～275は土師器。265～267は底面糸切り離しの坏。268～275を皿とした。269は糸切り離し後に底面調整が施され、切り離し痕跡が不鮮明。270はヘラ切り離しの後に調整。内面にハケ目の調整痕。271・272は手づくね成形の京都系土師器。白色。273も手づくね成形とみられるが黄褐色を呈し、京都系土師器とは異なる。瓦質土器に似る。274は大きく開き口縁がわずかに立ち上がる。手づくね成形とみられ堅緻。京都系土師器とは異なる。275は274に似るが外面に指押え状の調整がめぐる。276は瓦質土器の風炉とみられる。渦状雷文の文様帯。内面は丁寧に調整が施される。277は炉壁の破片とみられる。赤褐色の粘土で内面は灰色。溶着がみられる。278はガラス片。半透明の緑色を呈し屈曲部を持つ。碗に類する器形とみられる。

#### (6) 土塁・縦穴状遺構

G-14区において残存する土塁を断ち割り、築造方法を確認した。遺構の検出面である黄褐色火山灰土(VIII層)は曲輪の外側、空堀に向かって傾斜し、その上に盛土塁が造られていることが確認された。

土塁の内部、築造面から短辺約70cm、長辺約1mの遺構が検出された。曲輪面より深さ約3mを掘り下げたが遺構の底面は確認されなかった。

全容は不明だが、中尾田遺跡で検出された中世山城の隧道を参考例とし、曲輪面から空堀に抜ける縦穴状の遺構が想定される。この場合、隧道を廃止した後に土塁を築いたことになる。一方で曲輪面の水を空堀に逃がす水抜き穴の可能性が推測される。この場合、縦穴を埋め戻した後に土塁を築いた場合でも、曲輪面の排水機能を有すると考えられる。

#### 土塁の遺物

279は青磁の皿。外反する口縁部で無文。280は土師器の坏。ヘラ切離し後に底面を調整。調整の際に粘土が底部外周になでつけられる。281は底面が完全に調整され滑らかになっている。切り離し痕跡はまったく見えない。

#### (7) 虎口

現在利用されている曲輪3下段への通路より北側の位置に、曲輪面への通路となる溝状の遺構が確認された。

通路はシラス火山灰と見られる白色火山灰土(IX層)を削り込んだ浅い溝状で、東から西へ延び約110度に折れて南へ延び、曲輪面上の道跡に接続する。通路の一部には、側面に石が配されている。

溝状の通路の周囲は、シラス火山灰土層が削り取られた平坦面として確認され、前述した空堀の検出面とは約120cmの高低差がある。虎口の機能上から通路の周辺が平坦面とは考えにくく、本来の形状は、通路の北に曲輪3上段の斜面が迫り、西と南は3下段の曲輪面に囲まれた細く狭い通路であったことが想定される。

#### 虎口の遺物

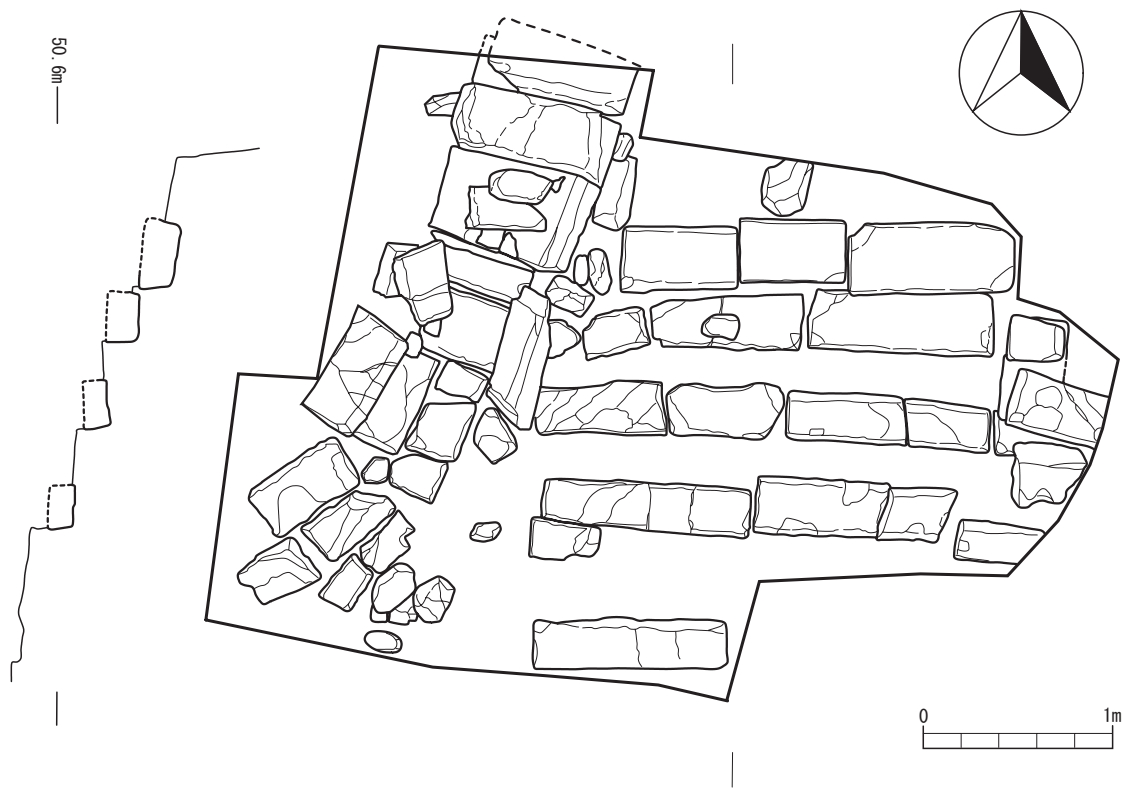
282は白磁の端反皿。外底まで施釉し畳付を釉剥ぎ。外底の一部は露胎。283は青花の碗。口縁部が外反し小野分類のB群。284は青花の碗。発色は黄色がかり景德鎮窯ではない。高台外面から無釉薬。畳付にアルミナ付着。285は青花の皿。286は海外陶器の鉢。素焼き。本来は鉢だが水指の蓋に転用するなどのために求められたという。287は土師器の小坏。糸切り底。

#### (8) 階段遺構

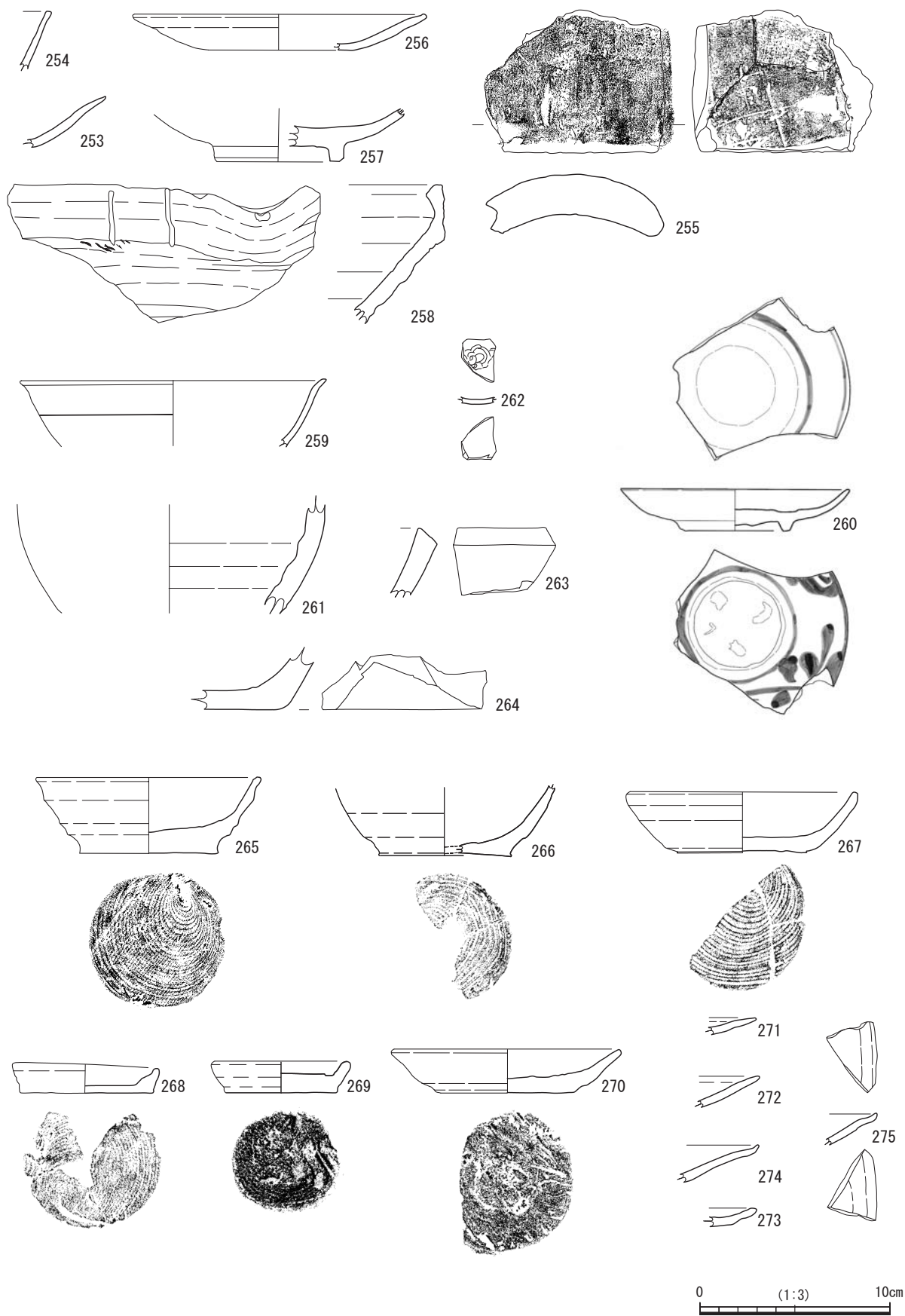
3次調査に際し、3-5 Tにおいて長方形の板状の石を用いた5段の階段が検出された。現在、曲輪3下段から上段への通路として、I・J-16区に斜面に防腐剤注入木を用いた簡易な階段が設置されている。この階段部分でピンポールを土中に刺して確認を行ったところ、長方形の石のようなものが存在することが判明した。トレンチを設定し調査を実施したところ、板石を用いた階段遺構と配石遺構を確認した。

階段遺構を構成する板石は凝灰岩で、長さには大小の差異があるものの、幅はおおむね30cm前後である。板石を検出するために周辺の土壌を階段状に掘り下げたが、本来は斜面に板石が設置されていた可能性もある。

検出した階段の西側では、階段を構成する板石に類似する石材を用いた配石遺構が検出された。曲輪3上段から3下段の方向に、石の上面が傾斜するように配され、

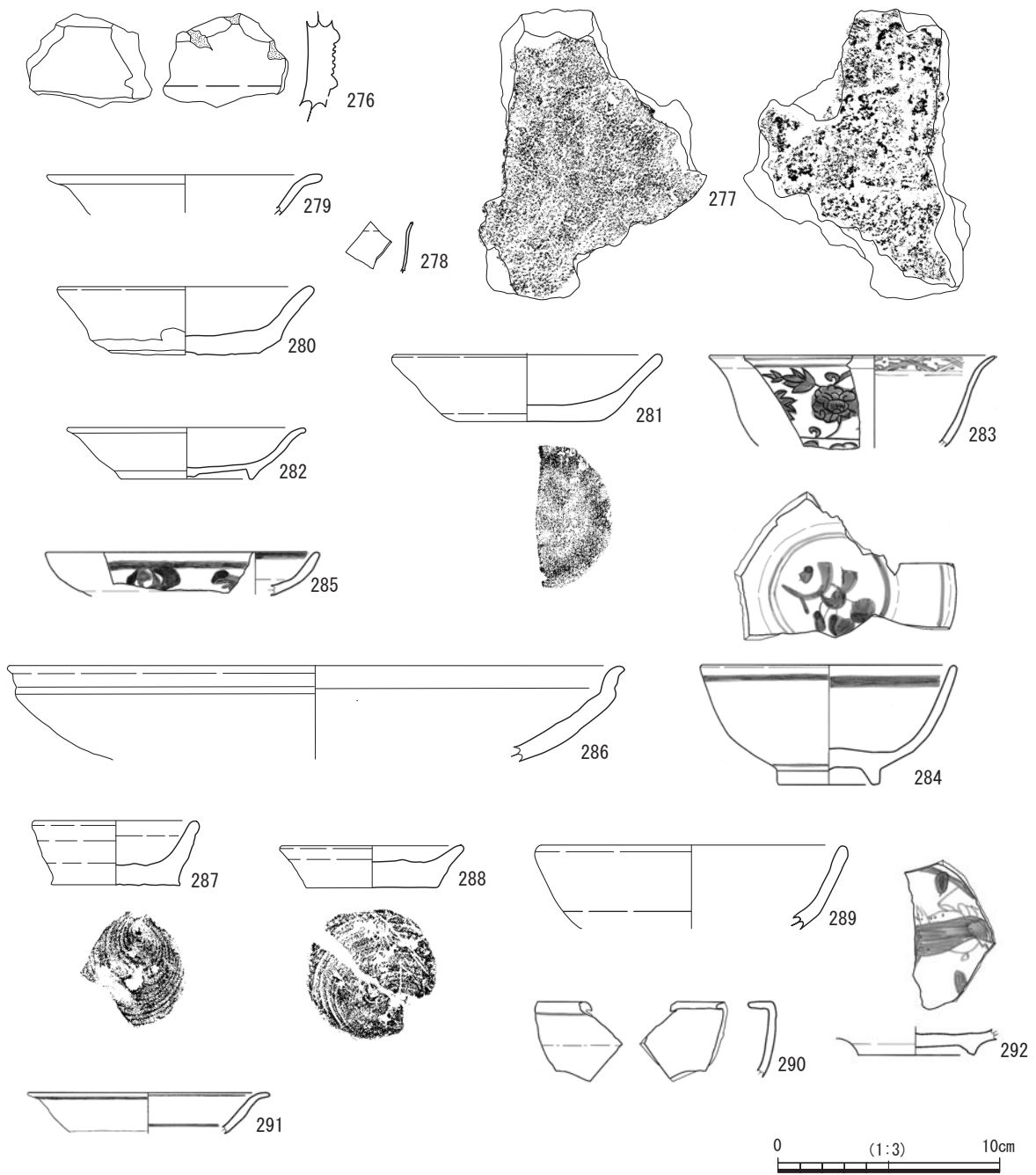


第31圖 曲輪3下段 階段遺構



第32図 曲輪3下段 遺構遺物(1)





第33図 曲輪3下段 遺構遺物(2)

U字形を呈するように板石が立てられた部分も存在する。配石遺構の方向は階段とは並行せず、階段との間隔は、斜面を下るに従い開いていく。

この配石遺構は、一部U字形を呈する形状から側溝的な性格を持つ水利施設であり、曲輪3上段の排水を担うものと推測される。

ピンポールによる調査を実施した結果、階段及び配石遺構の範囲は曲輪3下段側には広がらない。曲輪3上段側には、階段を構成する板石が存在するかのような感触があった。今後、曲輪3上段の調査を実施する際に確認する必要がある。尚、階段を検出した部分の東側斜面は、傾斜が大きく、やや切り立った形状となっており崩壊の危険から配石遺構の有無を確認するための調査は実施できなかったが、その地形から見て、配石遺構が存在する可能性は低いと考えられる。

#### 階段遺構の遺物

289は青磁の碗。やや内湾し無文。290は青磁で口縁が内側に張り出す。内外面とも施釉、貫入がみられる。香炉とした。291は青花の端反皿。口縁部に対して腰の屈曲部は器壁が薄い。文様は灰色。292は青花の皿の底部。見込文様。畳付のみ釉剥ぎ。

#### (9) 柱穴・建物跡

柱穴は曲輪の南西と北とで少数が確認された。柱穴より出土した遺物は少量で、摩耗した土師器片等が主であるが、国産陶器の破片が数点確認されている。

曲輪北側H-14区で確認された掘立柱建物跡は南北3間×東西2間の規模と考えられるが、建物を構成するすべての柱穴を確認することはできなかった。建物内部の建物の向きは北に対して約30度東にずれている。

この掘立柱建物跡と切り合うように南北に3基、東西に2基の柱穴が並び、もう1棟の掘立柱建物跡が存在する可能性があるが、構成する柱穴を検出することができなかった。

3次調査に際し、未調査部分のG-15区に3-3 Tを設定して調査を行ったところ、柱穴が確認された。1・2次調査で検出した柱穴とともに建物跡を構成する可能性が生じ、過去の調査区を再調査して遺構精査を行ったが、明確な建物跡を想定するには至らなかった。

#### (10) 道跡

I-15区で3条の道跡が検出された。北西及び南東に延びる黒色土の硬化面が検出され、硬化面の幅は約1.5～0.7m、厚さ約1cmを測る。

南東に延びた硬化面は虎口に接続し、北西に延びた硬

化面からは北東へ延びる2条が分岐する。そのうち、東側の1条は現在曲輪3下段から上段への登山道へ向かう。これは後述の階段遺構に接続すると考えられる。西側の1条は先述した空堀に切られている。

#### (11) 遺物

##### 青磁

293～295は盤。293・295は口縁が立ち上がり、294は平坦だが肥厚する。293は内面に文様が施される。

296～304は碗。296は胴部だがへら書き蓮弁文とみられる。上田分類B-IV類か。297は剣先蓮弁文。やや焼成不良。298は腰部で内外面に草花文がみられる。外面口縁部に雷文がみえ上田分類C類か。299・300は口縁が外反し上田分類D類。299は内面に草花文が施される。301は深い緑色を呈し口縁に草花文。302は外面口縁に櫛書の圏線が施されるが釉薬で埋もれる。304は碗または皿の底部。腰部から外反して立ち上がる。無文。

305～310は皿。305は青白色を呈し無文。306は大振りな稜花皿。内面は釉薬の発色が悪い。307は口縁部が外反し焼成不良。308は菊皿。内面は工具による陰刻か。309・310の底部は畳付も施釉し外底を釉剥ぎ。見込も釉剥ぎを施す。

311は壺の胴部。波濤文を有す。312は壺の口縁部。内面は口縁部のみ施釉とみられる。外面には貫入。313は播鉢。外面は貫入がみられ内面は露体で格子状に目がみられる。

##### 白磁

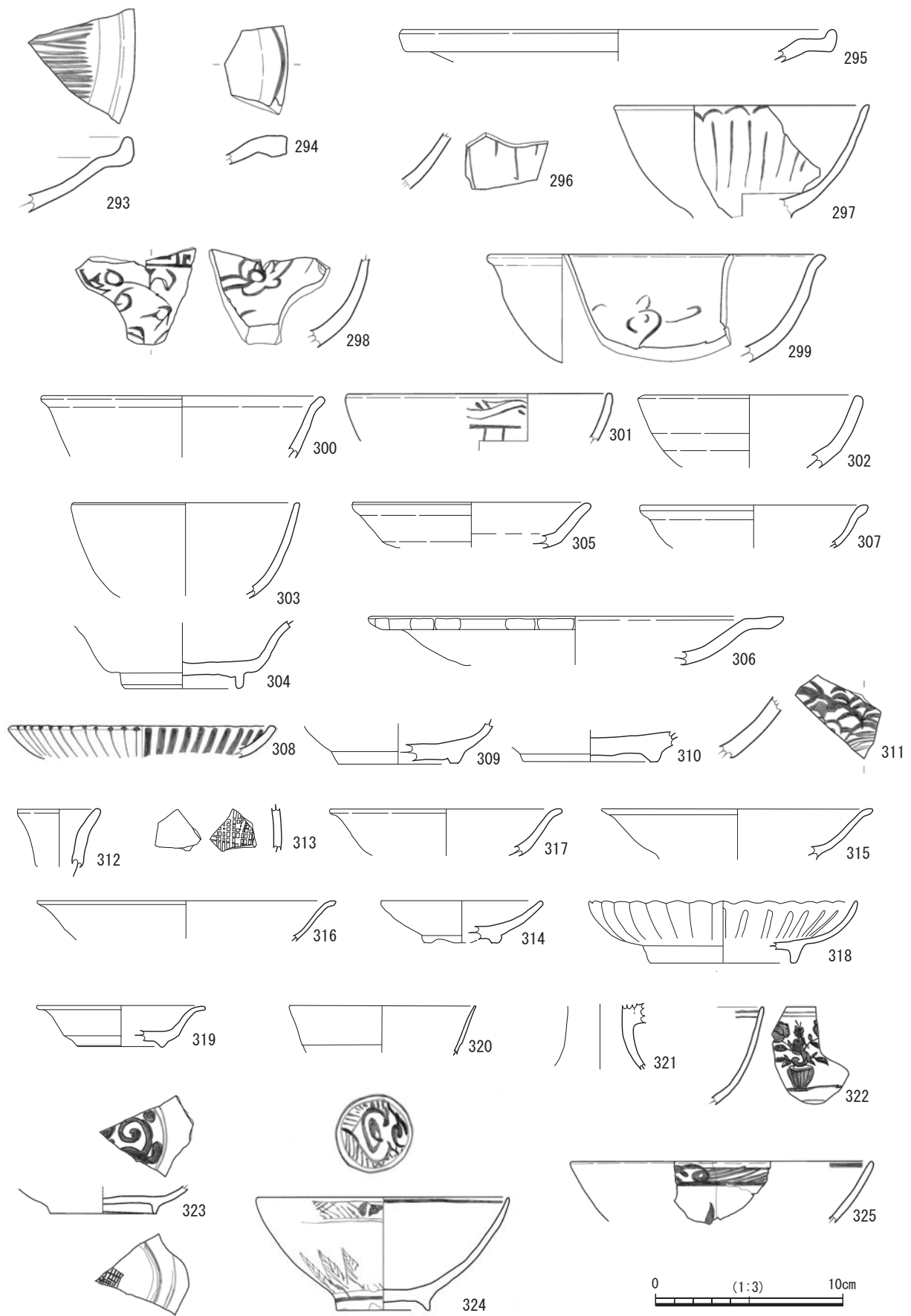
314～319は皿。314は切高台で畳付にアルミナが付着。見込にも目跡がみられる。森田分類D群。315・316は端反皿。森田分類E-2類。317は発色が悪く黄色を呈す。318は菊皿。森田D-4類。319は腰部に稜線を持ち、内底からの立ち上がりにも明確な屈曲がみられる。瀬戸美濃に類する国産磁器。

320は鉢。器壁は薄く、口径はあまり開かない。外面に段差状の装飾があり、施釉されて突帯のようにみえる。

321は瓶の頸部。取っ手の基部が残る。内面まで施釉。

##### 青花・その他の磁器。

322～325は碗。323は皿の可能性もある底部。内底がやや盛り上がる。外底に富貴佳器とみられる銘。324～326は中国南部、福建広東周辺の製品。324は見込に巻貝文、外面に蕉葉文を持つが粗雑。高台内部は露体で赤色の素地がみえる。畳付は粗く釉剥ぎ。モミガラ状の溶着あり。326は碗皿の底部。見込に蛇ノ目釉剥ぎを施し、高台内部は無釉。畳付を粗く釉剥ぎ。腰部は部分的に無



第34図 曲輪3下段 青磁・白磁・青花

釉であり、施釉が粗い。327は皿の底部。

328は磁器皿の底部。見込及び外面に赤色と緑色で文様を描く。緑色の上から赤色で彩色している。

#### 海外陶器

329は皿。内面は黒色、外面は露胎。外面は屈曲して立ち上がるが内面は滑らかなカーブを描く。高台を持たず底部の器壁は薄い。二次被熱。近世遺物の可能性がある。

330・331は鉢。330は外面に粗く鉄釉がかかり、直立する口縁部は内部が肥厚する。331は口縁部が内外に張り出す。内面に鉄釉、外面は露胎。

332は壺の胴部とみられ、外面に釉薬の流れがみえる。胎土に白色の小石が多くみられ、焼成も良くない。

333は素焼きの鉢。胎土は焼成不良によりサンドイッチ状の部分がみられ、小石が多い。水指の蓋に転用するなどのために求められたという。曲輪3下段の虎口で出土した286の類例。

334は彩色陶器の小杯。内外面とも青系に彩色される。

#### 国産陶器

335・336は備前の播鉢。どちらも8条の目が施される。336は焼成不良か、外面が素焼き状を呈す。337は備前の壺とみられるが、東南アジアを産地とする可能性がある。

338は瀬戸の鉢。捏ね鉢とみられる。曲輪2上段で出土した114の同類。

339は器形不明の小片。羽あるいは葉を模した装飾とみられる。緑色の釉薬がかかる。

#### 土師器・土師質土器

340～343を坏とした。340は底面糸切り離し。内面から見込にかけて渦巻状の調整がみられる。341は口縁部片。黄褐色を呈し、やや堅緻な印象を受ける。342は内外面に顔料が付着していたとみられるが、ほとんどが剥げ落ちている。底面糸切り離し。343は底面糸切り離し。切り離し痕跡が不鮮明であり、切り離し後に底面調整を施したか磨滅したとみられる。

344～364を皿とした。344は底面糸切り離し。内底が盛り上がる。345は底面ヘラ切り離し後に底面調整。

346は高台を作り出し腰部が屈曲する。磁器碗等を模したものか。347は底面ヘラ切り離し後に底面調整。底面は滑らかで短冊状の工具痕がみられる。348～353は底面糸切り離し。349は糸切り離しの上から直線的な工具痕がみられる。351・352は器高に対して底部が厚く皿としての容量は小さい。351は糸切り離し後に底部周辺に雑な調整を施す。352は底面調整が施され切り離し痕が

不鮮明。353は大振りの皿とみられる

354～357は手づくね成形の京都系土師器。白色を呈し外反気味に開く口縁を持つ。方形土坑から出土の253及び256と同類。

358～361は手づくね成形で肥厚する口縁を持ち、黄褐色を呈す。京都系土師器とは異なるものの、在地系土師器とは明確に異なる特徴を持つ、京都系類似の資料である。362は同様に手づくね成形で黄褐色を呈すが器壁が薄い。363は手づくね成形とみられるが口縁部が肥厚しない。364は口縁部の外面に稜を持ち、口縁断面が三角形状を呈す。

365・366は土師質土器の播鉢である。365の内面には5条を1セットとした目が、底面から放射状に八方向に刻まれる。366は4条とみられる目が刻まれるが短く途切れる。

#### 石製品

367は滑石製石鍋の口縁部。外面には突帯がめぐり煤が付着。368は用途不明の軽石製品。板状に加工され、片面にドーナツ状の刻印がみられる。形状から筒状のものを押える目的か、輪状製品の鋳型が想定されるが金属の付着や使用痕跡はみられない。369は基石。やや緑がかり細長い形状。曲輪3下段では基石が52個出土し、最大径は3.1cm、最小径は0.9cmである。最大厚は1.3cm、最小厚は0.2cmである。平均径は1.57cm、平均厚は0.5cmである。

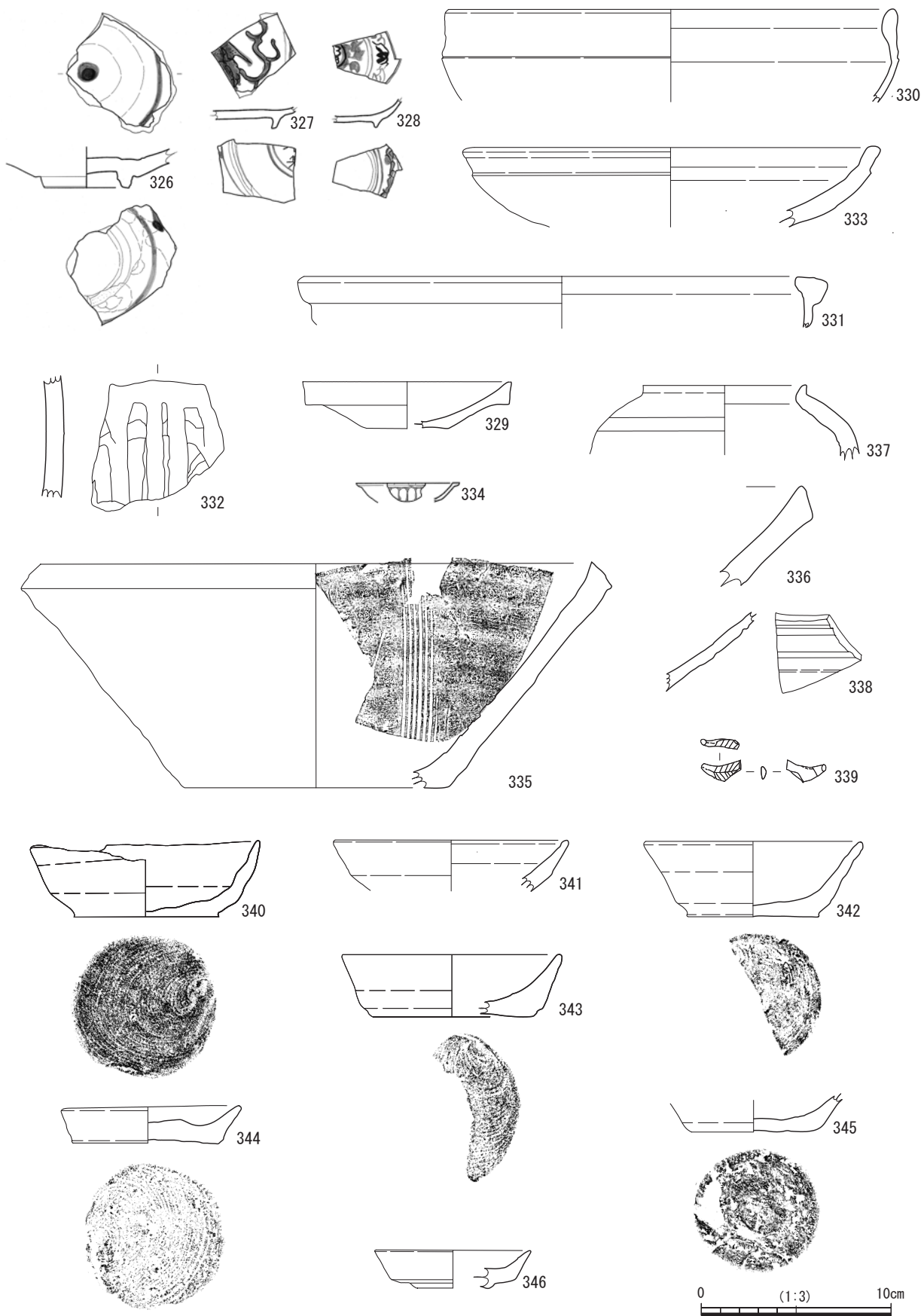
#### 銭貨・金属製品・ガラス製品

370～374は銭貨。370は唐銭の軋元重寶。これまで志布志城跡から出土した銭貨では最も古い。372は篆書の熙寧元寶。373の大観通寶は中央の穴が大きく楕円状に広がる転用痕跡がみられる。374にも転用痕跡がみられる。銭文不明だが篆書の「元」字がみえる。

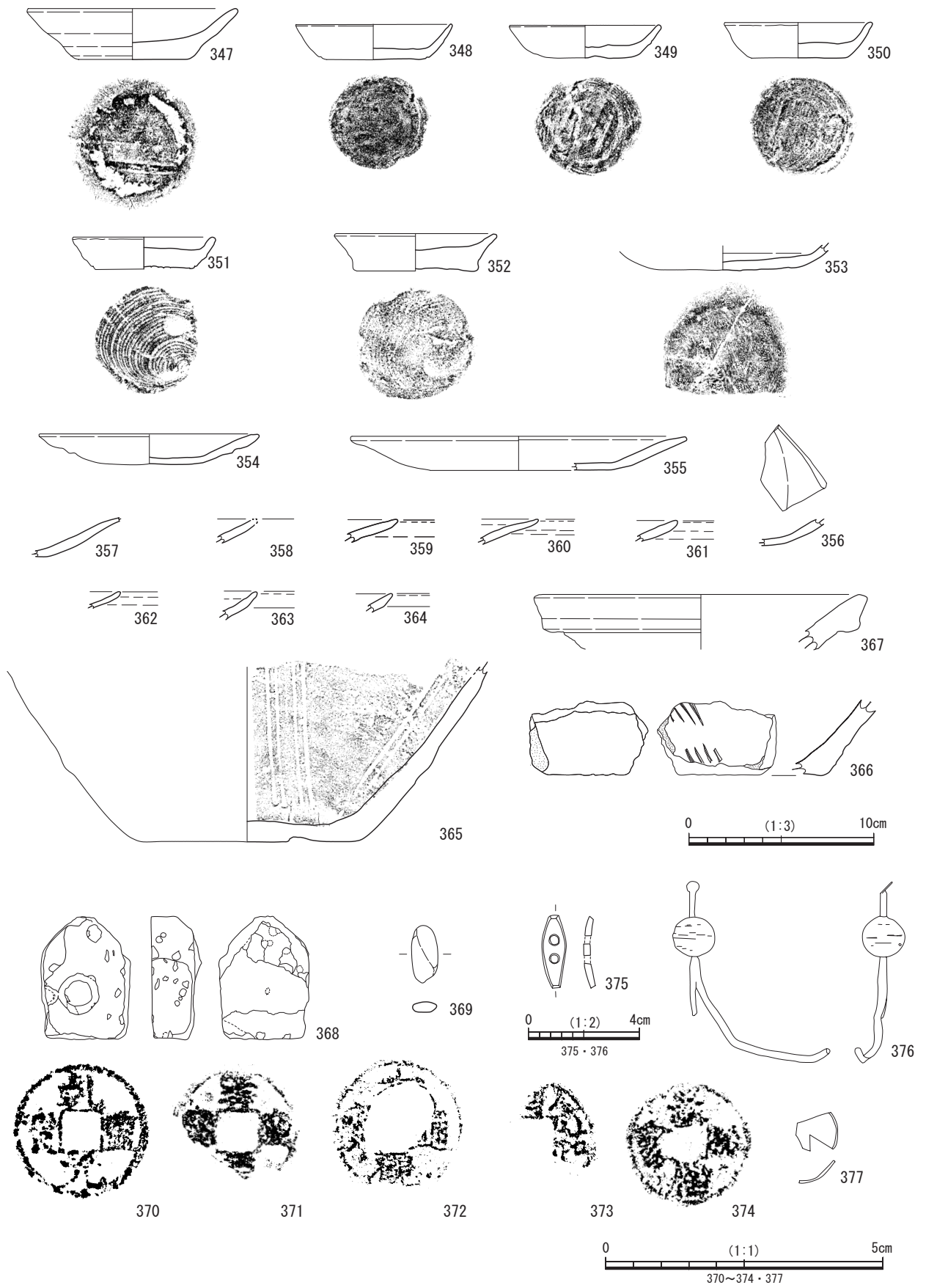
375は「こはぜ」と称される金具で鎧等の部品である。2つの穴が並び紐を通して鎧の胴等を固定する金具で「鞆」と書く。鞆は笠鞆と責鞆の2種がセットで用いられ、これは笠鞆とみられる。

376は簪。二股に分かれた金属棒に木製の玉が取り付けられる。金属棒部分は開き、曲がって折れている。先端部には耳かきを備える。近世遺物の可能性がある。

377はガラス片。半透明の水色を呈し、極めて薄い。湾曲した形状を持つことから器の破片と思われるが器形は想定できない。



第35図 曲輪3下段 青花・陶器・土師器



第36圖 曲輪3下段 土師器・陶器・石製品・錢貨







## 第7節 曲輪4上段の調査

### (1) 調査の概要

曲輪4は内城の中野久尾と呼ばれる区域に該当する。当初、内城跡の調査及び整備は本丸、中野久尾、大野久尾と順次着手する計画となっていた。しかし、空堀に面した曲輪4上段の北側斜面の崩壊が著しく、崩壊防止を含む曲輪4上段の整備を早急に考える必要が生じた。

曲輪4上段については、過去に確認調査等を実施していないため、曲輪の状況を確認することを目的に5次調査の中でトレンチによる確認調査を実施した。

曲輪の現況は杉林であり、杉の合間を縫う様に、曲輪面に1～7Tトレンチを設定して調査を行い、必要に応じて拡張した。また、土塁の調査を目的として、曲輪北西部の土塁に8T、南西部の土塁に9Tを設定した。

### (2) 曲輪面の調査(1～7T)

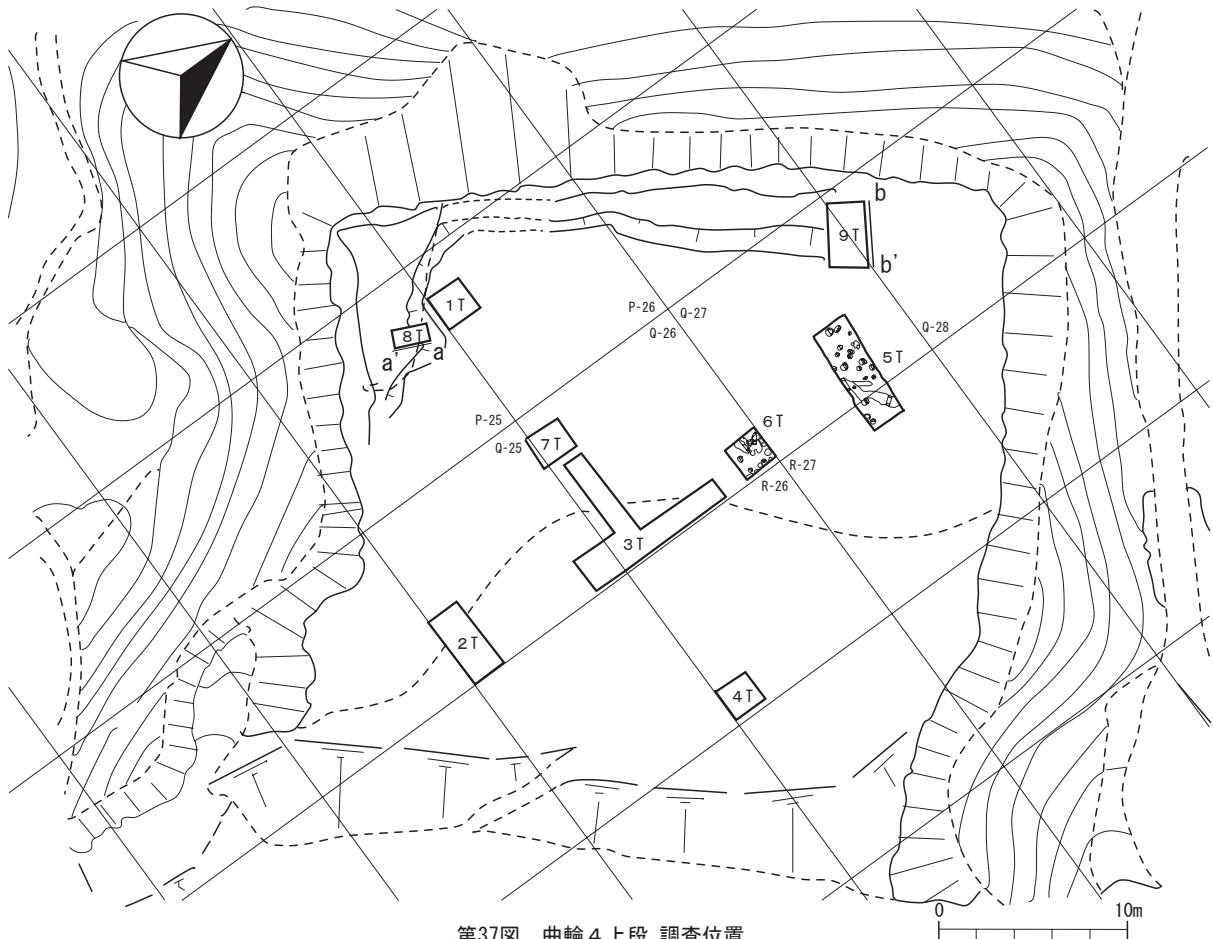
1Tは、曲輪の南西部P-26区に存在する土塁の裾に2×2mで設定し、地表面から約90cmを調査した。地表面より約60cmで、サツマ火山灰と見られる黄色パミスが混在する黄褐色土(VI層 10YR5/6)を確認した。その上面で遺構精査を行ったが、遺構は検出できなかった。トレンチの南西角では、VI層相当層の上にV層に相当する暗褐色土(10YR3/3)が確認される部分がある。V層はトレンチ南壁では西から東に、西壁では南から北に傾斜して

いることが確認され、切り土塁の端部の可能性がある。

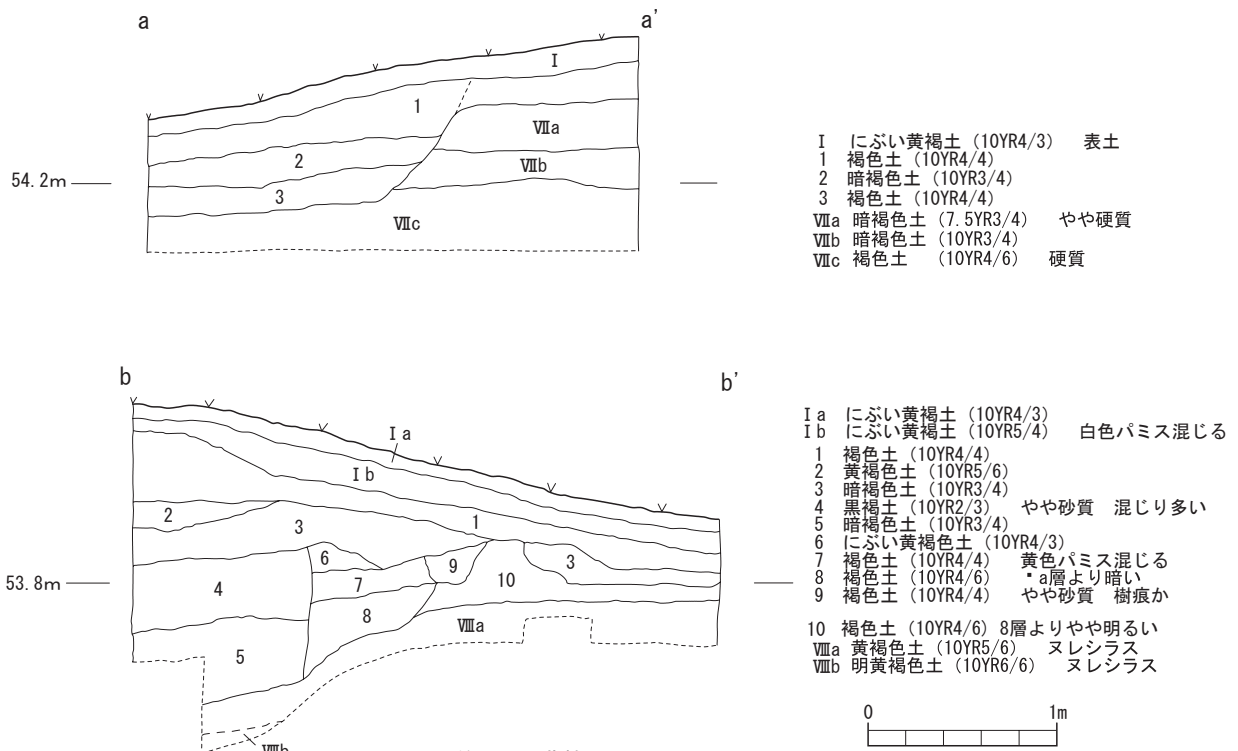
2Tは、曲輪の南側Q-25区に2×2mで設定した後、西に2m拡張した。地表面より約70cmを調査したが、原地形を判断する土層を確認できなかったため、下層確認を行った。その結果、地表面から約80cmで黒色土(II層 10YR2/1)、約140cmでアカホヤ火山灰である黄褐色火山灰土(III層 10YR5/8)が確認された。

3Tは、曲輪の中央Q-26区に2×2mで設定し、地表面より約90cmを調査したが、明確な遺構及び原地形を判断する土層を確認できなかったため、南に2m、北と西に幅1m長さ4.5mで拡張した。拡張した北端では地表面より約70cmで黄褐色火山灰土(VIII層 10YR5/6)を確認した。しかし、それ以外の部分では確認できなかったため、当初のトレンチで下層確認を行った。地表面より約140cmでチョコ層と呼ばれる褐色粘質土(VII層 7.5YR4/4)を確認した。地表面より約220cmまで確認したが、黄褐色火山灰土(VIII層)には到達しなかった。

4Tは、曲輪の東側、R-26区に2×2mで設定し、地表面から約70cmを調査したが、原地形を判断する土層は確認できなかった。地表面より約50cmの部分で部分的に硬化し、炭化物とにぶい黄橙色土(10YR7/3)を含む暗褐色土(10YR3/3)が確認された。他トレンチの状況から、この面を築城面と想定して遺構精査を行ったが、遺構等は検出できなかった。



第37図 曲輪4上段 調査位置



5 Tは、曲輪の中心部Q-26区に2×2mで設定し、地表面より約70cmを調査した。地表面より約50cmでシラスと見られる黄褐色火山灰土(VIII層 10YR6/8)を確認し、その上面で溝状の遺構を検出した。遺構の状況を確認するため、トレンチを東と西にそれぞれ2m拡張し、VIII層上面に柱穴等の遺構が存在することを確認した。

6 Tは、曲輪の北部Q-27区に2×2mで設定し、地表面より約60cmを調査した。地表面より約50~60cmでシラスと見られる黄褐色火山灰土(VII層 10YR6/8)を確認し、その上面で遺構を検出した。

7 Tは、曲輪の中心部Q-26区に2×2mで設定し、地表面より約60cmを調査した。原地形を判断できる土層が確認できなかったため、地表面より約50cmで確認した黒褐色土(10YR2/3)上面を、他トレンチの状況から築城面と想定して遺構精査を行ったが、遺構等は検出できなかった。

### (3) 土塁の調査

8 Tは、曲輪の南西部に存在する土塁を断ち割るようにP-25区に2×1mで設定し、曲輪面の地表から約70cmを調査した。曲輪面より約50cmで硬質な褐色土(VIIc層 10YR4/6)を検出した。断面の観察により、基本土層のVII層に否定される暗褐色土(VIIa層 10YR3/4)以下が削り残されている状況を確認し、この土塁が切り土塁であ

ることが判明した。

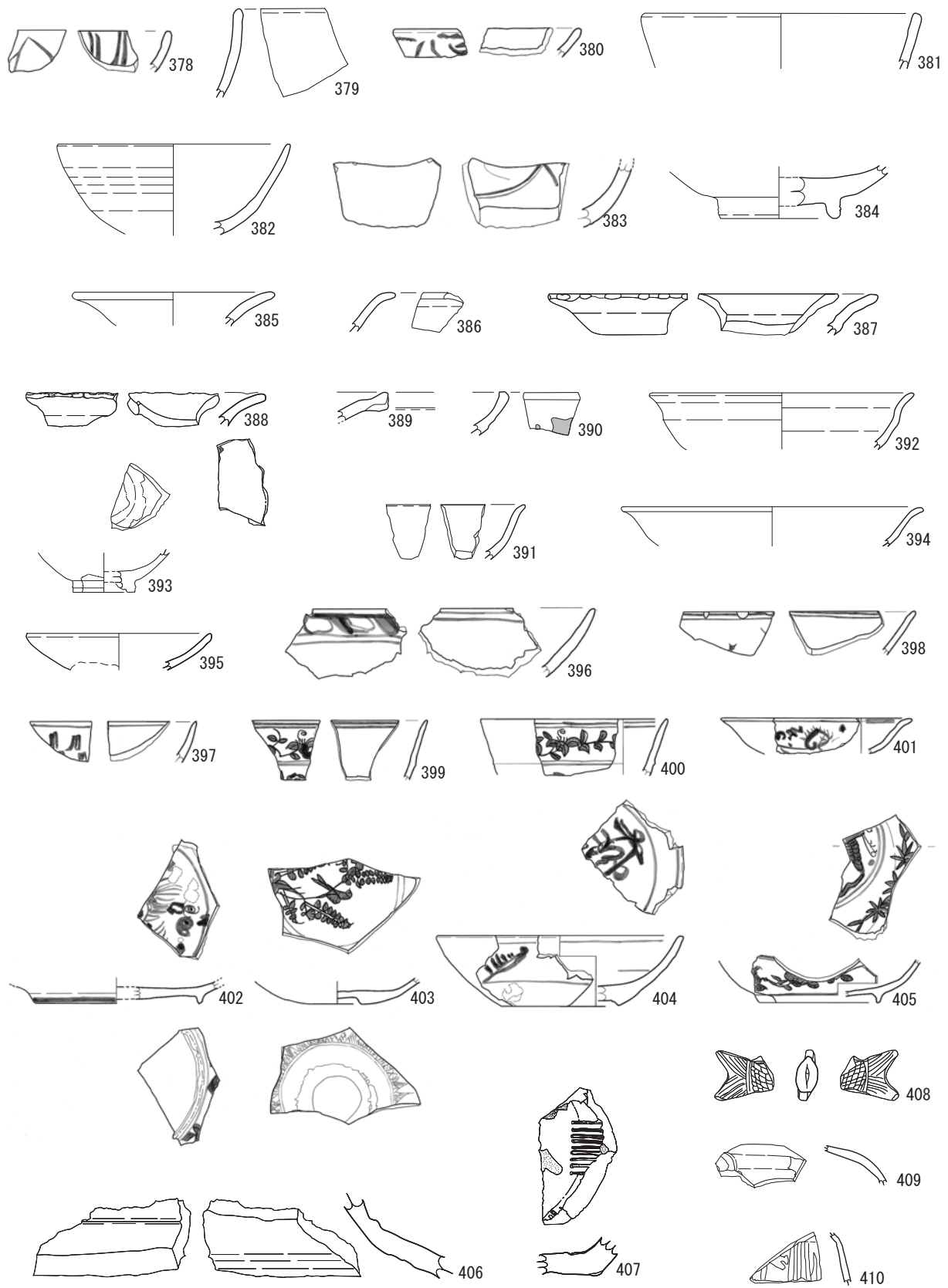
9 Tは、曲輪の北西部に存在する土塁を断ち割るようにQ-27・28区に2×3.5mで設定し、曲輪面の地表から約70cmを調査した。5 T及び6 Tで遺構を検出した黄褐色火山灰土(VIII層 10YR5/6)までを調査した結果、曲輪面から空堀方向に大きく傾斜していることを確認し、この土塁が盛り土塁であることが判明した。

### (4) 遺物

#### 青磁

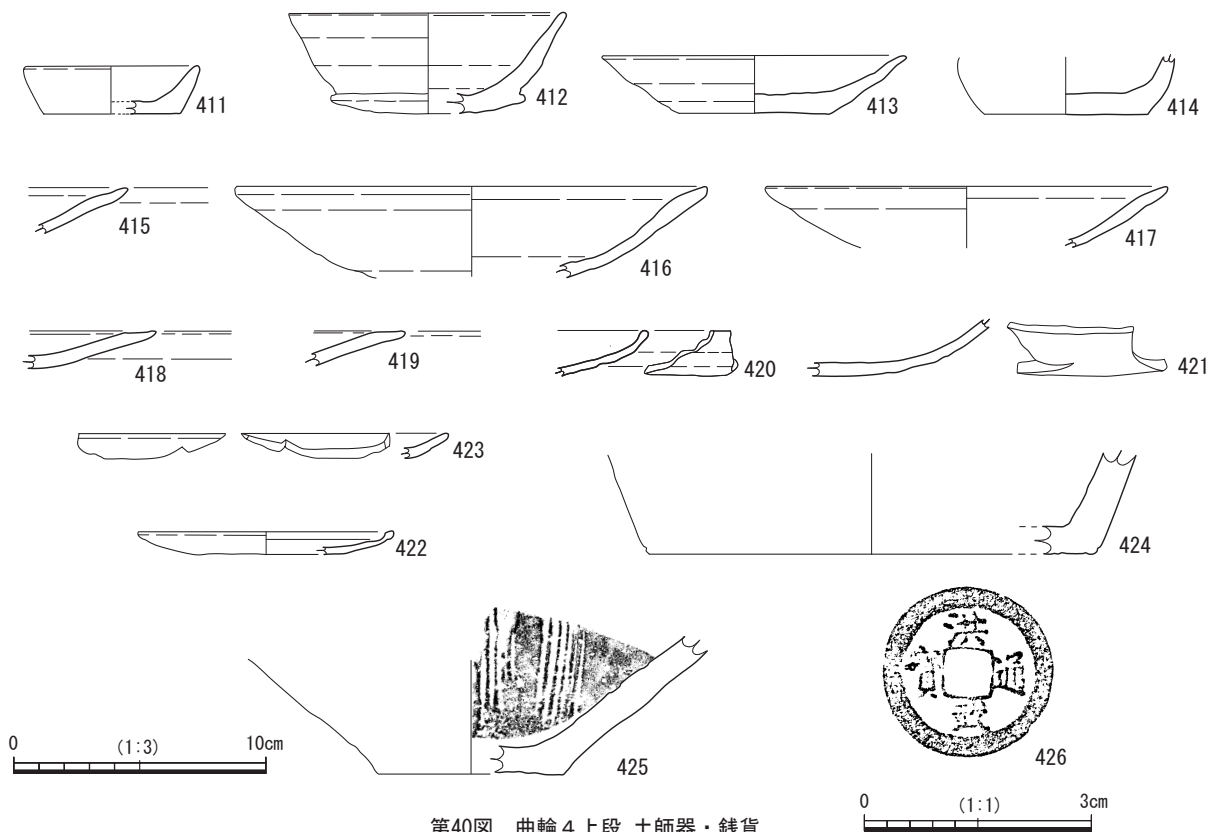
378~384は碗。378はかすかに鎬を持つ蓮弁文。内面にも蓮弁とみられる文様が施される。上田分類B-II類か。379は外面に蓮弁とみられる文様があるが判別できない程に粗製。内面の施釉も粗い。380は口縁に雷文が施される。上田分類C類。381・382は直口する無文の口縁。382は青白色を呈し外面に稜がみえる。383は腰部。内面に曲線による文様がみられる。384は底部。高台内部から外底は無釉。暈付は施釉される。高台内面で釉剥ぎか。

385~390は皿。385・386は外反する口縁。385は口縁が肥厚し腰折皿の可能性もある。二次被熱か。焼成不良。386は器壁に対して釉薬が厚い。ある程度の器高があるとみられ、碗や鉢の可能性もある。387・388は腰折皿。稜花形。387は二次被熱。388は焼成不良か暗褐色を呈す。



0 (1:3) 10cm

第39图 曲輪4上段 磁器・陶器



第40図 曲輪4上段 土師器・銭貨

口縁内面に櫛書文を持つ。389は大きく開いた後に直立する口縁とみられ盤の可能性もある。焼成不良。390は器高の小さい皿とみられ、口縁の内外に口鏝のような装飾がある。外面腰部に溶着がみられる。

#### 白磁

391～393を碗とした。391は灰白色を呈し内外面ともに灰色の斑点がみられる。393は底部。畳付まで施釉。高台内を段状に削る。施釉は粗く、高台外面は部分的に露胎。394・395は皿。394は焼成の良い端反皿。395は黄白色を呈し碁笥底の可能性ある。外面胴部下半は露胎。

#### 青花

396～400は碗。396は焼成不良で発色が悪い。397・398は直口する口縁。399・400は円筒状の器形で外面に小さな突帯状の装飾がめぐり、その上下に植物が描かれる。399はわずかに器壁が厚く、400はわずかに黄色がかかる。

401～405は皿。401は口縁が外反し小野分類B群の端反皿。403は碁笥底の底部。底面に溶着がみられる。畳付部分のみ釉剥ぎ。小野分類C群。404も碁笥底だが福建広東の製品とみられ、黄褐色を呈し文様も灰色。畳付の釉剥ぎは粗く溶着がみられる。外底部は露胎。405は器壁が薄く焼成が良い。見込が下がり小野分類E群とみられる。

#### 陶器

406は海外陶器の壺の肩部。外面は黒褐釉、内面は露胎。407は挿鉢の底部。内面は赤褐色を呈し丁寧に調整されている。9条を単位とする目が刻まれる。

408は明三彩、魚形水滴の尾部分。尾が直立する形状となる可能性がある。鱗部分は緑色、尾鱗部分は黄色で彩色される。409・410は緑釉陶器。409は球状の破片で外面に稜がみられる。内面は露胎。外面に張り出した欠損部があり、取っ手を持つ水差等の肩部と考えられる。あるいは上下が逆で脚状部を持つ底部の可能性ある。張り出し部は内面から直径2mm弱の穿孔がなされている。この他に器形不明の破片が2点出土しており、1点は409に類似する。410は屈曲部を持つ小片で器形不明。内面の一部に緑釉がみられる。

#### 土師器

器高が3cm以上のものを坏とし、3cm未満を皿に分類した。411・412が坏である。411は底面ヘラ切り離し後に調整を施す。外面も丁寧に調整される。412もヘラ切り離し後に調整を施すが、切り離しは粗雑。胴部は内外面とも丁寧な調整を受ける。

413～421は皿。413は黄褐色を呈し、底面糸切り離し。414は底面ヘラ切り離し後に調整。

415～421は手づくね成形。黄褐色を呈し口縁部が肥厚する。415は口縁端部が立ち上がり気味に終わる。416・



## 第8節 曲輪6上段の調査

### (1) 調査の概要

曲輪6は大野久尾と呼ばれる区域に該当する。6次調査の直前まで茶畑として耕作が行われていた。調査に際しては、重機等による抜根を行わず地表上で樹木の伐採を行い、切り株を残した。残存した切り株を人力で除去しつつ、調査を実施した。

6次調査においては、曲輪面の状況を確認する目的でトレンチを設定し調査を実施した。調査当時までは、大野久尾は巨大な1つの曲輪(曲輪6)であり、耕作による開削あるいは未完成の曲輪としてと、曲輪の東西を分けるように通路が存在すると考えられていた。そのため、6次調査においては大野久尾東側の曲輪(現在の曲輪15)と西側の曲輪(現在の曲輪6)の2つの曲輪に対し、通し番号でトレンチを設定している。

調査の結果、曲輪の南東部では築城面が確認されたものの、北西部では築城面及び生活面が認められなかった。曲輪の北西部では耕作に伴う造成等がシラス火山灰土層(VIII・IX層)まで及び、山城としての遺構が失われていると推測された。また、本来の地形は曲輪の北西部から南東部にかけて傾斜しており、南東部では土を盛って曲輪面を形成していることが確認された。

7次調査においては、6次調査の14Tを東側に拡張する形で曲輪南西部に調査区を設定し、調査を実施した。調査によって曲輪南東部に本来の虎口が存在する可能性が生じ、9次調査において補足調査を実施し、曲輪6上下段間の空堀から曲輪面に続く虎口を確認した。

### (2) 曲輪南西部の調査

6次調査において築城面が確認された14Tの南部を、東側に拡張する形で調査区を設定した。調査区のほぼ全域に茶園による耕作が及び、畝あるいは畦畔の痕跡が存在した。大正期の噴火による桜島の軽石がみられ、その下の黒色土から中世の遺物が検出された。遺物包含層の直下には、築城面とみられる暗黄褐色火山灰土(III層)が確認された。

### (3) 虎口

曲輪中央の南東側AB-36区で検出された。曲輪6上下段間の空堀から北西に向かって坂を上るように進み、約90度右に折れて北へ向かって曲輪面に至る。折れ曲がる部分では階段状のステップが複数存在し、硬化面も確認された。

#### 虎口の遺物

427～436は青磁。427は盤の口縁。大きく開いて立ち

上がる。428～431は碗。428は鎬のない蓮弁文が施される。上田分類B-II類。429は外反する口縁。上田分類D類。430・431は底部。430は底部が厚く、高台内露胎。畳付を粗く釉剥ぎし、畳付の外側には釉薬が残る。431は畳付を釉剥ぎ。外底露胎。外底部を回転して削り取る。

432～436は皿。432・433は外反する口縁を持つ。433は外面腰部に稜がみられる。434・435は腰折皿。どちらも稜花形を呈し、434は草花文、435は櫛書文が施される。436は青白色を呈する口縁部とみられる小片。大きく開き水平になる口縁部形態から器台と考えた。

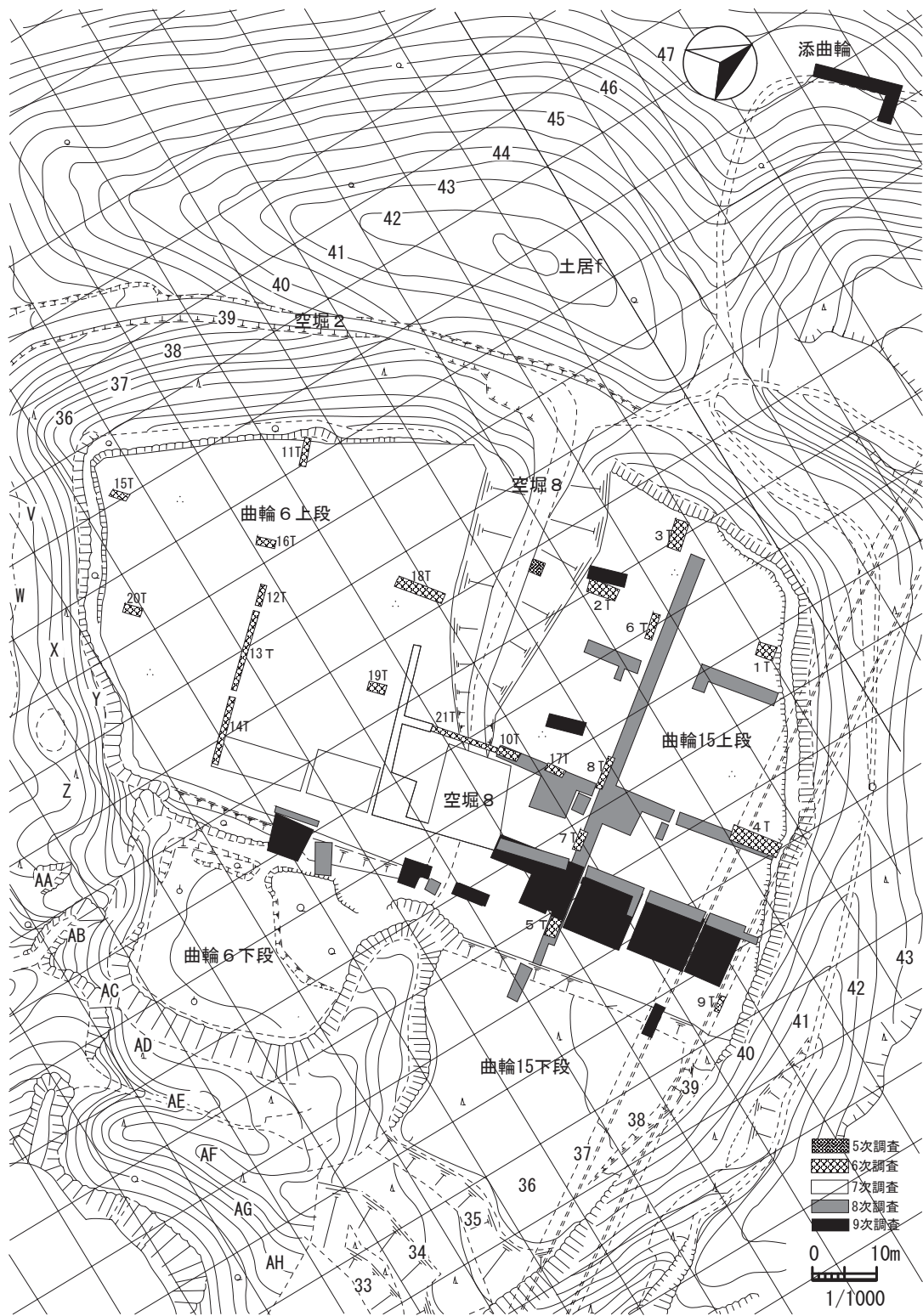
437～443は白磁。437～440は皿ないし碗。437は畳付に釉剥ぎを施す底部で碗の可能性も残る。438は端反の皿。森田分類E群。内面下半は無釉とみられる。440は稜花形で鋸状の口縁部を持つ。外面の施釉は粗い。441は瓶等の袋物の底部。内面露胎。外底まで施釉され畳付のみ釉剥ぎ。442は小杯。見込を蛇ノ目釉剥ぎ。畳付を釉剥ぎし、高台内は無釉だが外底には粗く釉がかかる。443は皿の底部。底面中央が内外に肥厚。外底全面を施釉し畳付を釉剥ぎ。外底部にモミガラ状の溶着。

444～453は青花。444～449は碗。444は直口する口縁で鷲のような鳥が描かれる。445は底部。畳付の釉剥ぎは粗雑。文様の発色は悪い。見込が盛り上がり小野分類E群。446はレンツー碗。小野分類C群。447は発色が鈍く文様も灰色を呈す。小野分類D群か。448は高台断面が三角形を呈し畳付を釉剥ぎ。高台内に釉薬が粗くかかる。貫入が目立つ。449は小さな高台を持つ。見込は蛇ノ目釉剥ぎ。全体的に粗雑な印象。口縁と見込、外面腰部に圏線が施され、他の文様はない。450・451は皿。450は小野分類B群の小皿。452は杯の腰部とした。垂直に立ち上がる屈曲部と高台とみられる底部を持つ。見込に文様が施されるようである。453は大振りの鉢。貫入が目立ち、発色は鈍い。

454～458は海外陶器。454は天目碗。胴部は直線的に伸びて口縁部が屈曲して開く。455は鉢類の底部とみられ、内面は露胎。底部付近の外周に貼付けの装飾が施される。曲輪6上段出土の528は同一個体ないし同類の口縁部とみられ、同様の貼付け装飾が施される。456は鉢の口縁部。口縁を折り曲げて成形。457は甕の肩部。大きく張り出す「く」の字状の断面形状を呈す。外面は黒釉、内面は黒褐釉。458は壺の頸部とした。内面に釉薬が垂れている。459は備前焼とみられる壺甕の底部。

460は土師器。手づくね成形の皿の口縁。口縁は肥厚し内面を丁寧に調整する。赤褐色を呈し堅緻な印象は受けない。

461～463は瓦質土器。461は風炉の口縁から肩部。外面にスタンプの九曜文が施される。462は鉢の口演。乳



第41図 大野久尾 調査位置

白色を呈す。口縁端部は肥厚し、その下に小さな突帯を貼付けて文様帯とする。スタンプによる円状の文様を連ねている。463は火入とみられる底部。黄白色を呈す。脚部を備えるが3脚か4脚かは判別できない。外面は丁寧に研磨調整される。

464～466は土製品。464は板瓦。粘土を素焼きしたもので断面はマーブル状。凸面は不整だが凹面は丁寧な調整を受ける。465は轆の羽口。466は埧塙とみられる鉢状の器。陶器の可能性もある。壁面に対して底面は薄く、外底に貝目状の痕跡がみられる。口縁から胴部の内外面には金属成分が溶着。

467～469は石製品。467は砂岩とみられる石臼の上部。上面及び外面は丁寧に成形され滑らか。468は円盤状の軽石製品。中央を穿孔。一面は平坦に成形されているが、もう一面は穿孔部に向かって窪む凹状を呈す。469は石英の破片で火打石の可能性はある。

470は洪武通寶。銭文は読めるものの薄く脆い。模鋳銭と考えられる。

### (3) 溝状遺構・道跡

曲輪南側AE-39区からAH-41区にかけて、北東から南西方向に走る2条の溝状遺構が検出された。2条とも、底面の明確な硬化は確認されなかったが、虎口に接続することから道としての利用をうかがわせる。

溝状遺構に併走するように1条の道跡とみられる硬化面が検出された。道跡は溝状遺構から離れて南に向かい、虎口付近に達する。虎口へは接続せず、虎口付近の斜面を曲輪外へ降りるとみられ、虎口を備えた時点の本来の登城路とは異なると推測される。

### 溝状遺構の遺物

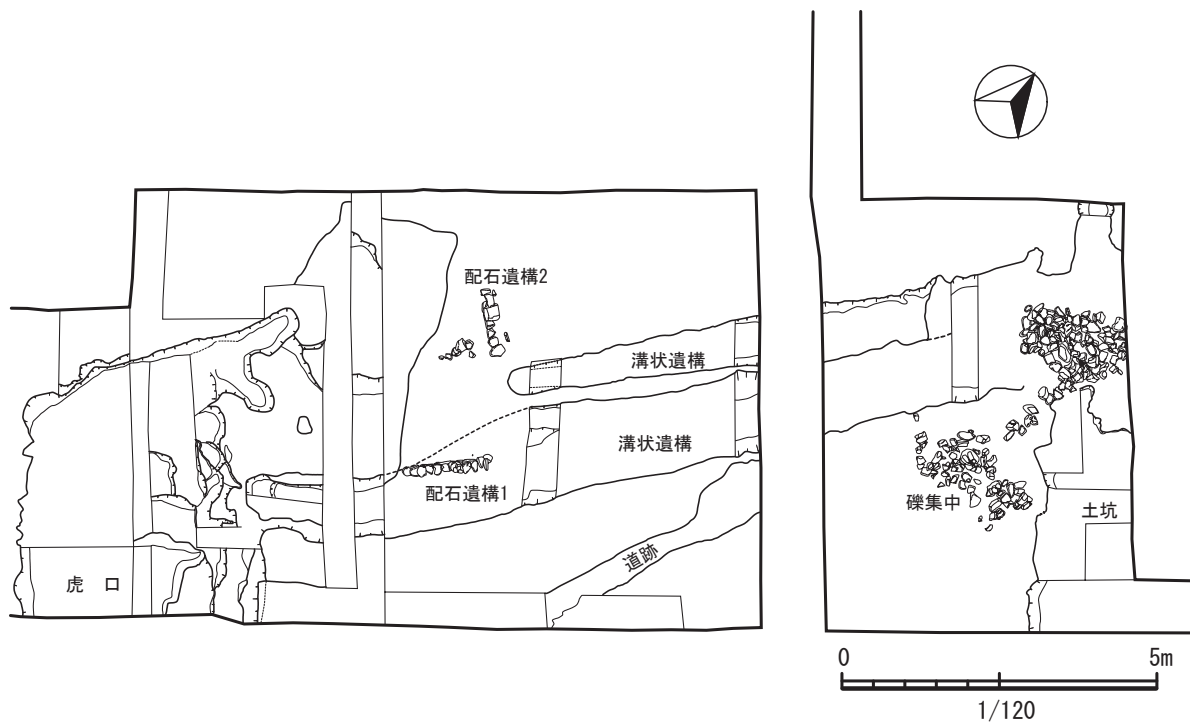
471は青磁の碗。鏝のない蓮弁文が施される。上田分類B-II類。472は白磁の杯。外面が多角的な面を持つ角杯。森田分類D群。473は青花の碗。口縁に波頭文が描かれる小野分類D群。474は東播系の須恵器の口縁部。鉢とみられる。475・476は土師器の皿。475は底面へラ切り離し。478は底面切り離し後に調整を施す。器壁に対して底部が薄い。

### (4) 配石遺構

溝状遺構の周辺で2基の配石遺構が確認された。礫を段状に積み重ねたもので、中世の遺構かは疑問が残る。

1号配石は旧耕作土の直下で検出され、22個が3段に積まれる。幅20cm前後の平たい砂岩を中心とし、石灰岩もみられる。石材は北西の面を揃えて積み、溝状遺構上に位置する。

2号配石は築城面の暗黄褐色火山灰土(Ⅲ層)上で検出された。16個が2段に積まれるが、崩れたようにもみ



第42図 曲輪6上段 遺構検出状況



える。20cm前後の平たい砂岩を中心とし、石灰岩もみられる。石材は南西側の面を揃えて積まれ、裏側まで溝状遺構が延びる。

2基とも意図的に面を揃えて積まれ、土留や石垣の可能性のあるものの、背後に盛土等は確認されなかった。1号配石は虎口に連続する溝状遺構の埋土上に存在することから、虎口を廃止した後世のものとする。

#### (5) 礫集中

調査区の東側AC-37区で大量の礫が検出された。平面検出によると約190個の礫が2つのブロック状に集中している。砂岩や頁岩が多く、一部に凝灰岩や割れた石臼もみられる。熱破碎はみられない。ほとんどが直径20cm内外とみられるが、30cmを超えるものや10cm程度のものもある。

一部の礫に金属によるものとみられる傷があることから、耕作の際に出てきた礫を一か所に集めた可能性がある。一方で検出地点が本来は空堀を見下ろす曲輪の東端であることから、防衛に用いる投擲用の礫を備えていた場所に礫を集めた可能性も残る。

#### (6) 曲輪北西部の調査

6次調査において実施したトレンチによる調査を報告する。ほとんどで茶畑の耕作土の下に地山が確認された。中世の遺物包含層や遺構面が確認されないことから、

近現代の耕作によって築城面は破壊されていると考えられる。

#### 11T

曲輪北西部の土塁の築造を確認するため、W-39区に1×3mで設定。後に土塁側に0.5m延長。茶畑の耕作土の下に橙色火山灰土(IX層 7.5YR7/3)が確認され、この層を削り残して土塁としている。しかしながら曲輪面と同様に近現代の造成を受けているため、断面観察で見られるIX層が築城当時の土塁形状ではないと思われる。

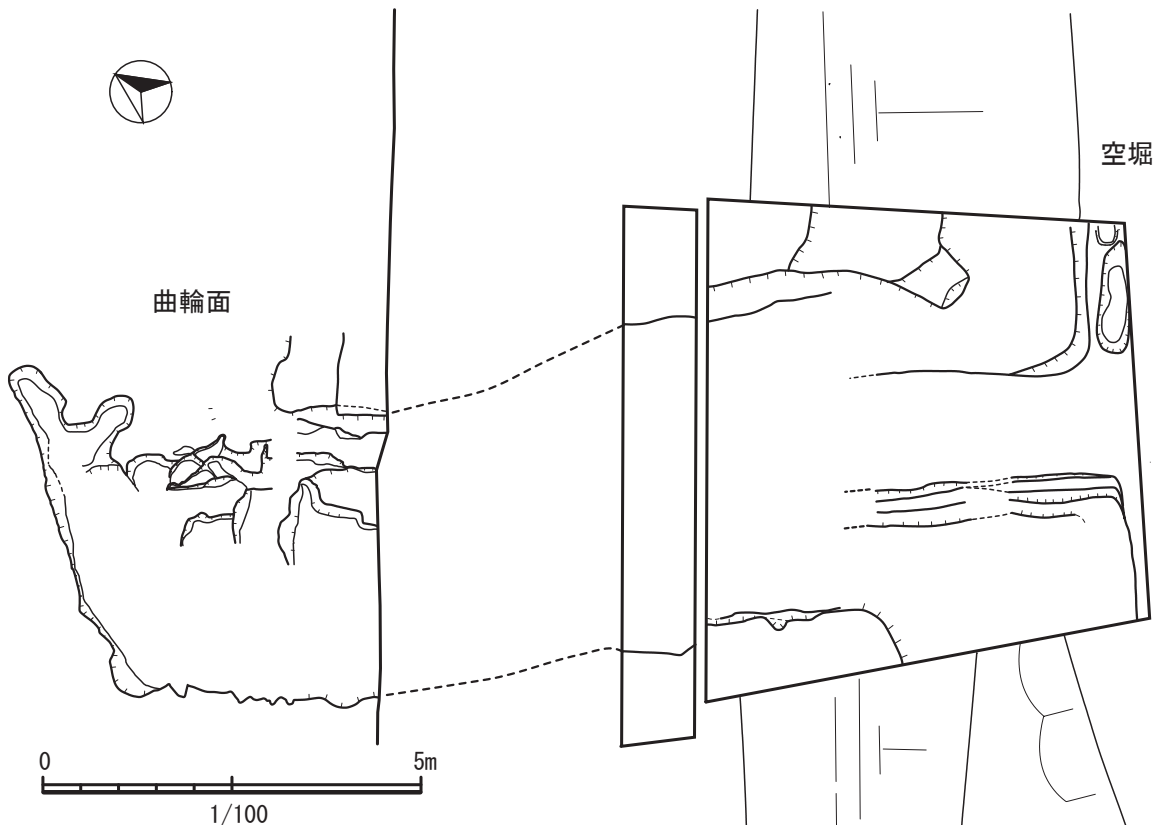
土塁の一部はIX層面を超えて掘り込まれ、白色シラス混じりの造成土が積まれる。本来の土塁の切れ目を埋めたものか、近現代に土塁を破壊したものかは不明である。

#### 12T

曲輪中央部の状況を確認するため、Y-37区に1×3mで設定。茶畑の耕作土の下に黒褐色粘質土(VIIa層 7.5YR3/2)を確認。

#### 13T

曲輪中央部から南東部にかけての状況を確認するため、Y-37区にかけて1×3mで設定。茶畑の耕作土の下に、南東部では黄褐色火山灰土(IV層 10YR5/8)、北西部では暗褐色粘質土(VIIa層 10YR3/3)を確認。トレンチを東側方向に10m延長。



第43図 曲輪6上段 虎口

14T

曲輪中央部から南東部にかけての状況を確認するため、Z-36区に1×3mで設定。中世遺物が出土。トレンチを東側方向に10m延長。7次調査の起点となった。

15T

曲輪西端部の状況を確認するため、V-36区に3×1mで設定。茶畑の耕作土の下に黄褐色火山灰土(VIIIa層 10YR5/6)を確認。

16T

曲輪中央部の状況を確認するため、X-38区に3×1mで設定。茶畑の耕作土の下に明黄褐色火山灰土(VIIIb層 10YR6/8)を確認。

18T

曲輪の東端部を確認するため、Z-39区に7×1mで設定。後に空堀8に向かい2.5×0.6mを拡張。茶畑の耕作土の下に薩摩火山灰土を含む暗褐色土(VI層 10YR3/4)が確認された。空堀8へ続くとみられる地形の傾斜を確認。

19T

曲輪北西部の状況を確認するため、AA-39区に3×1

mで設定。茶畑の耕作土の下に黒褐色粘質土(VIII層 10YR2/2)を確認。

20T

曲輪西端部の状況を確認するため、X-36区に3×1mで設定。茶畑の耕作土の下に黒褐色土(V層 10YR2/2)を確認。

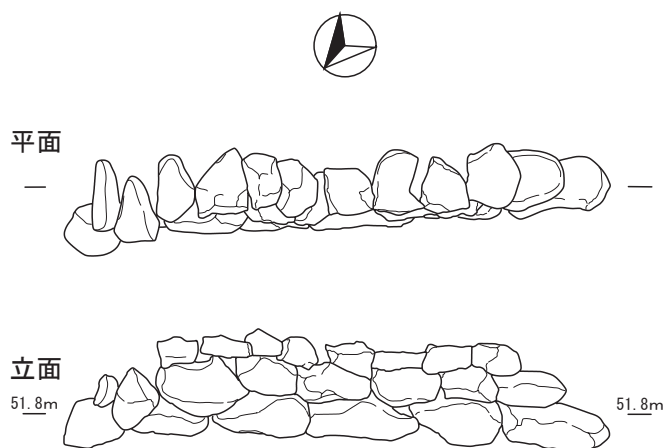
21T

曲輪の東端部を確認するため3.5×1mで設定。茶畑の耕作土の下に旧耕作土、近現代の造成土がみられ、その下に黒褐色粘質土(VIIIb層 10YR2/3)が確認された。空堀8へ続くとみられるVIII層面の傾斜を確認。

### (7) 遺物

#### 青磁

477~486は碗。477~478は蓮弁文を持つ。上田分類B類。477は剣頭を省略した細蓮弁文が施される。478は蓮弁の幅が大きくなり剣頭と整合しない。479は3条の縦線で蓮弁を描く。内面に草花文が施される。480は雷文を施される。上田分類C類。481は直口の口縁。青白色を呈し櫛書文が施される。この文様は青磁の稜花形腰折皿に施されるものに似る。482~486は底部。482は畳付から高台内部まで施釉され、高台内部で粗く釉剥ぎ。高



配石遺構 1



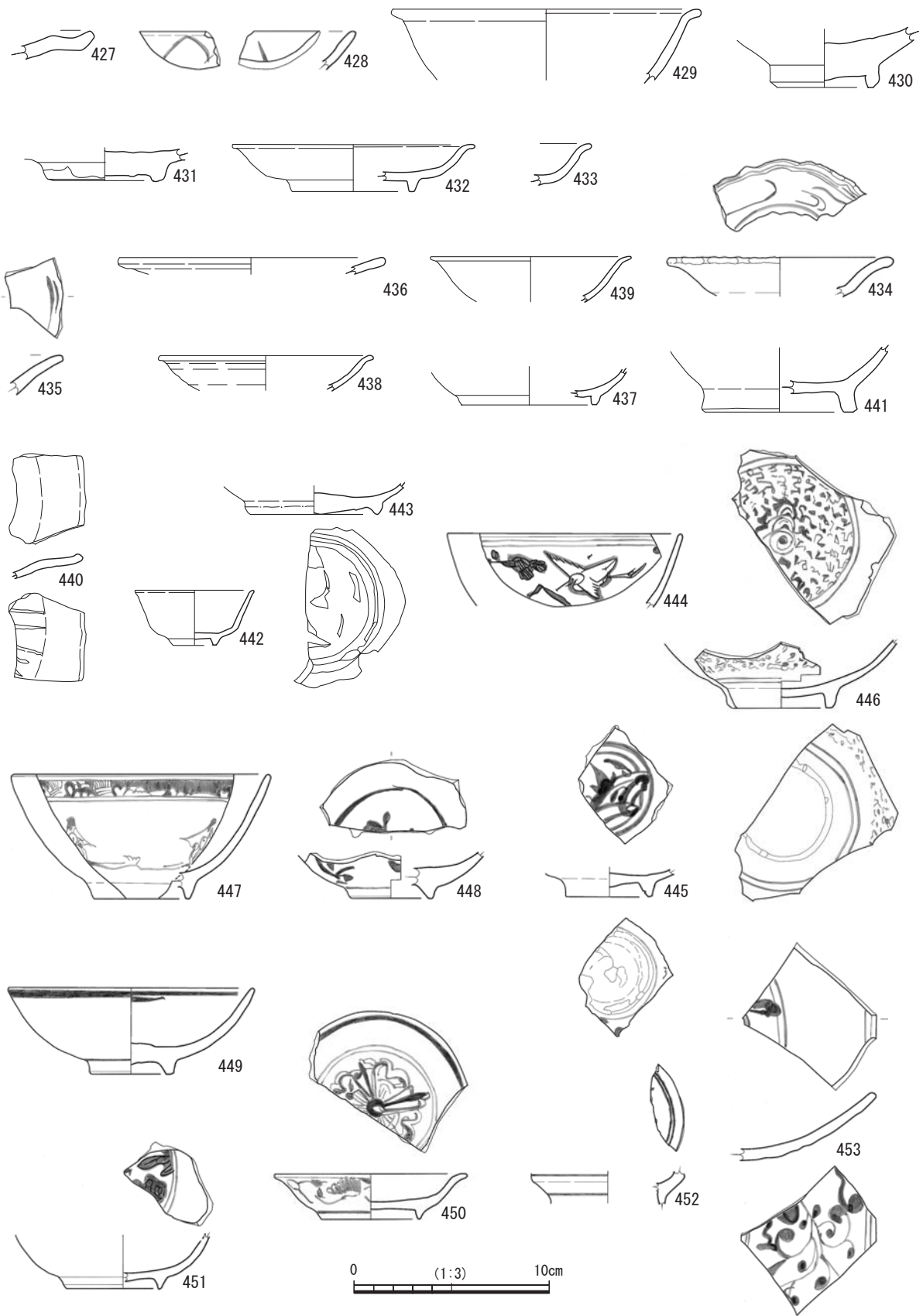
立面

52.1m

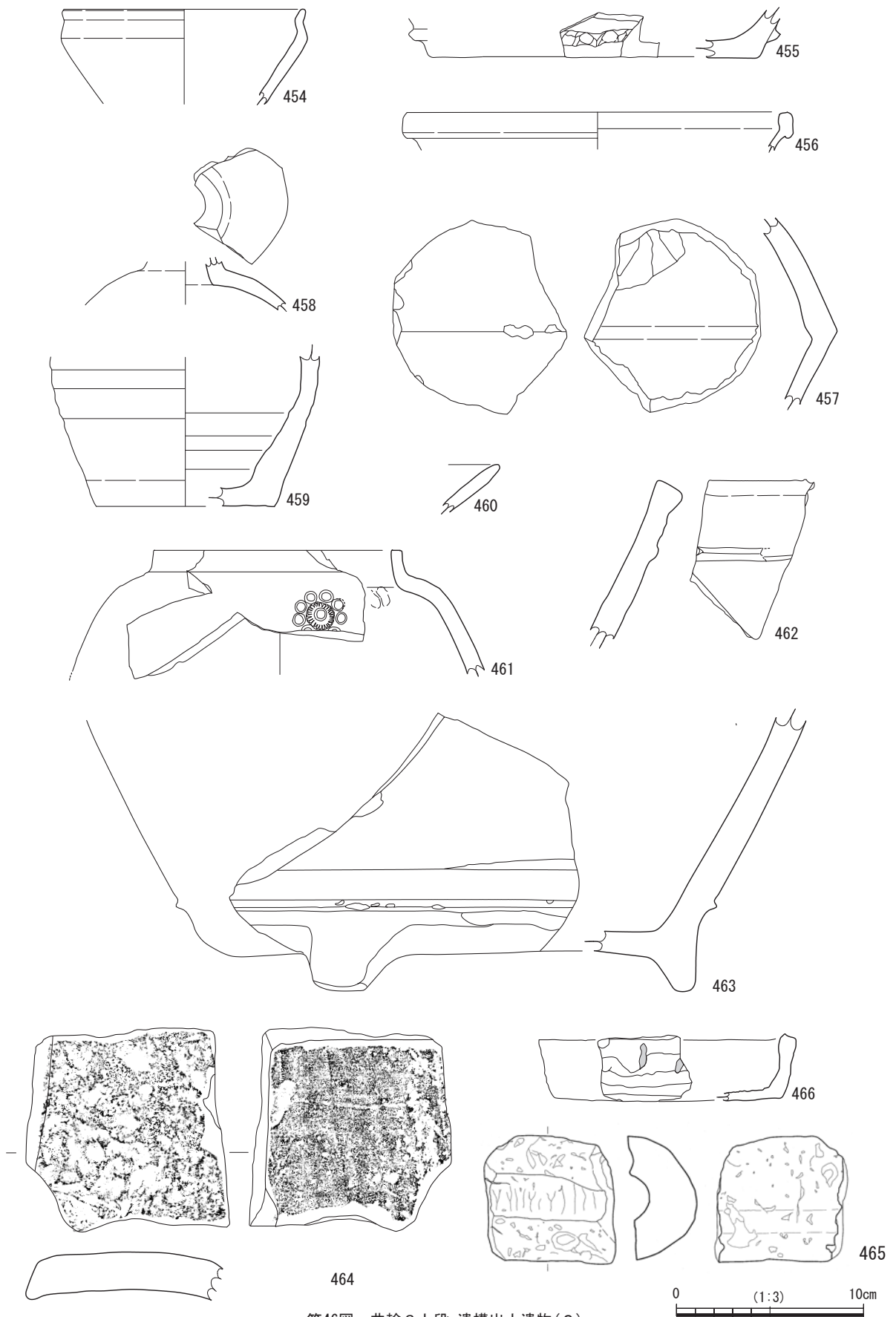
51.2m

配石遺構 2

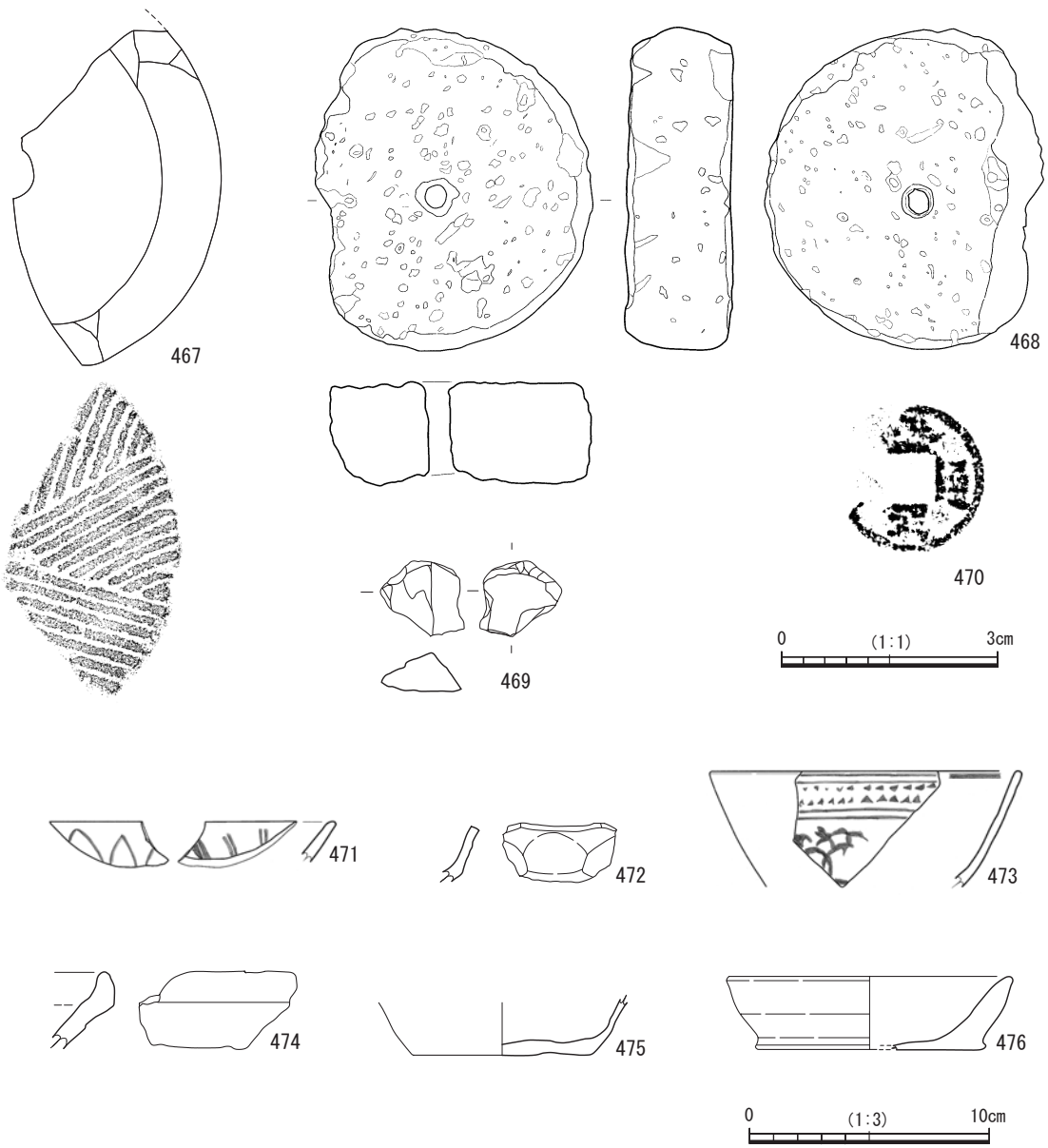
第44図 曲輪6上段 配石遺構



第45図 曲輪6上段 遺構出土遺物(1)



第46図 曲輪6上段 遺構出土遺物(2)



第47図 曲輪6上段 遺構出土遺物(3)

台内に溶着がみられる。483は低い高台を持ち外底まで粗く施釉し、畳付を粗く釉剥ぎ。外底の一部は無釉。外底に溶着がみられる。484は見込が盛り上がり、外底の中央も盛り上がる。高台外面まで粗く施釉。485・486は高台内面まで施釉され畳付を粗く釉剥ぎ。486は見込に文様が施される。

487～494は皿。487は青白色を呈し口縁が外反して肥厚。488は鎬蓮弁文が施される。489は水色を呈し貫入が目立つ。釉剥ぎが施されず畳付及び外底も施釉。490・491は腰折皿。490は小型で無文。491は鏝状の口縁を持ち稜花形。口縁部に櫛書文、内面に草花文が施される。口縁部外面に溶着がみられる。492は輪花状の口縁を持つ。菊皿。493・494は口縁が大きく外側に折れる口折の碗または皿。493は外面に蓮弁とみられる陰刻文が施される。494は外面に無鎬蓮弁文が施されるが施釉によって不鮮明。

495は壺の胴部。草花文が施される。496は壺の底部とみられ内面は露胎。外底まで施釉し畳付を釉剥ぎ。焼成不良。497は蓋。青白色を呈し内面は無釉。

#### 白磁

498は碗。施釉により口縁部外面が肥厚する。499は杯。外面が多角的な面を持つ角杯。森田分類D類。

500～505は皿。森田分類E類。500は口縁部が外反すし乳白色を呈す。畳付を釉剥ぎ。粗製。502は口縁が大きく開き基筈底状の底部を持つ。畳付を釉剥ぎ。大友府内町跡で坏E-2と分類される資料。503は基筈底の底部。大友府内町跡の皿E-3である。504は広い高台を持つ底部。外底まで施釉され畳付を釉剥ぎ。505は発色が悪い底部。高台内部及び外底は無釉、畳付を釉剥ぎ。

506は蓋の小破片。ドーム状の器形とみられるがツマミの有無は不明。胴部へ接する部分を釉剥ぎ。507・508は杯。507は狭い高台を持ち焼成は良好。畳付を釉剥ぎ。高台内面に砂状の溶着がみられる。508は粗製で発色が悪い。507より一回り広い高台を持ち、高台外面から露胎。高台周辺の胴部も露胎とみられる。

#### 青花

509～512は碗。509・510は口縁が外反し小野分類B群。510は褐色を帯び文様も鈍い。511は小野分類E群。口縁部外面が施釉により、やや肥厚。512は見込が盛り上がるマントーシン形。外底部に大明年造の銘が記される。

513～516は皿。513は内湾気味の口縁。514は鏝状に開く稜花形の口縁を持つ。小野分類F群。内外面の文様は粗雑。515は広い高台を持つ。516は基筈底の小野分類C群。畳付部分を釉剥ぎ。

514～519は杯。514は腰部が張り、直線的に立ち上がる。小野分類D群の碗の可能性もある。515は小杯の底部。高台は高く、高台内を断面アーチ状に削る。畳付及び外底は無釉。発色は悪く、見込の文様も灰色を呈す。519は高台から直線的に立ち上がる器形。外底に釉葉がかかり施釉は粗い。畳付を釉剥ぎ。

#### その他磁器

520は杯とみられる赤絵磁器。口縁は外反し、外面に赤色で文様が描かれ、緑色で彩色される。521は青花の小片。内面は白地に青色の文様がみえ、外面は青磁釉がかかる。皿または碗と思われる。522は曲面を持つ破片で蓋とした。内面は無釉。外面は紺色を呈し瑠璃釉の可能性はあるが、熱を受けている。施釉は薄く、被熱によるものか釉葉部分が剥がれる。

#### 陶器

523～525は天目碗。523は屈曲して広がる口縁を持つ。口縁端部は断面三角形を呈す。524は茶褐色を呈する。口縁の屈曲は小さい。525は屈曲後の口縁が外へ開かず直線的。526は天目碗の可能性のある腰部破片。内外面に黒褐釉を施す。釉剥ぎし胴部下半は露胎。

527は皿。灰色を呈す釉葉がかかり、胴部下半から露胎。施釉は粗雑。口縁が波状を呈す輪花形の可能性がある。見込に蔓状の溶着がみられる。

528・529は鉢。528は黒褐釉がかかる口縁。内湾する口縁部に2条の貼付け装飾が施される。虎口出土の455に同様の装飾がみられ、同一個体ないし同類とみられる。529は褐釉とみられる明茶色を呈す。

530は瓶の口縁部。飴釉がかかる。頸部は長く伸びず、すぐに広がって肩部につながるとみられる。

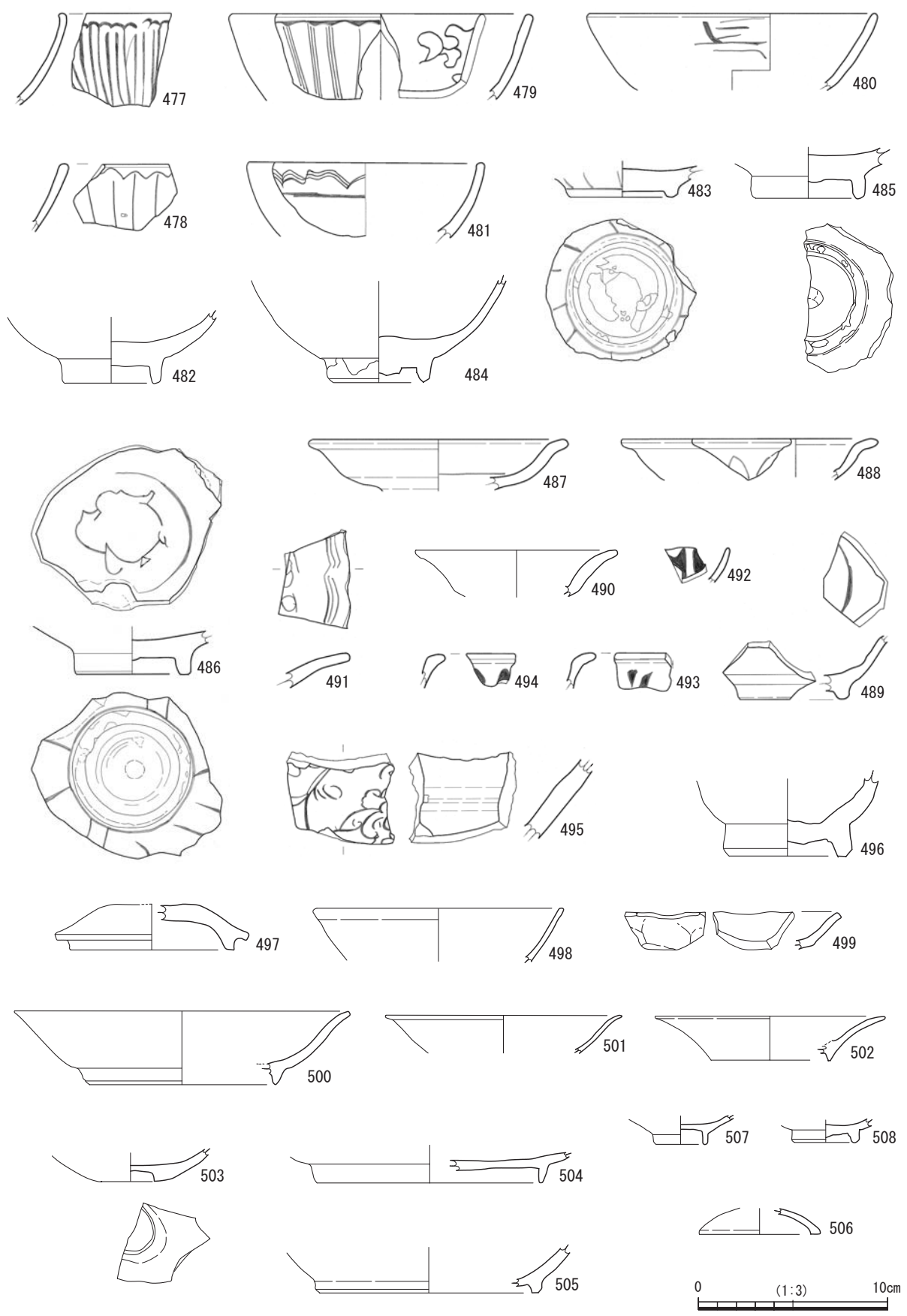
531～533は備前焼の播鉢。531は底部。532は7条、533は8条を単位とした目が刻まれるが、目は浅い。

534は瀬戸美濃の天目碗。外面胴部下半は釉剥ぎとみられ露胎。高台内はアーチ状に削られる。

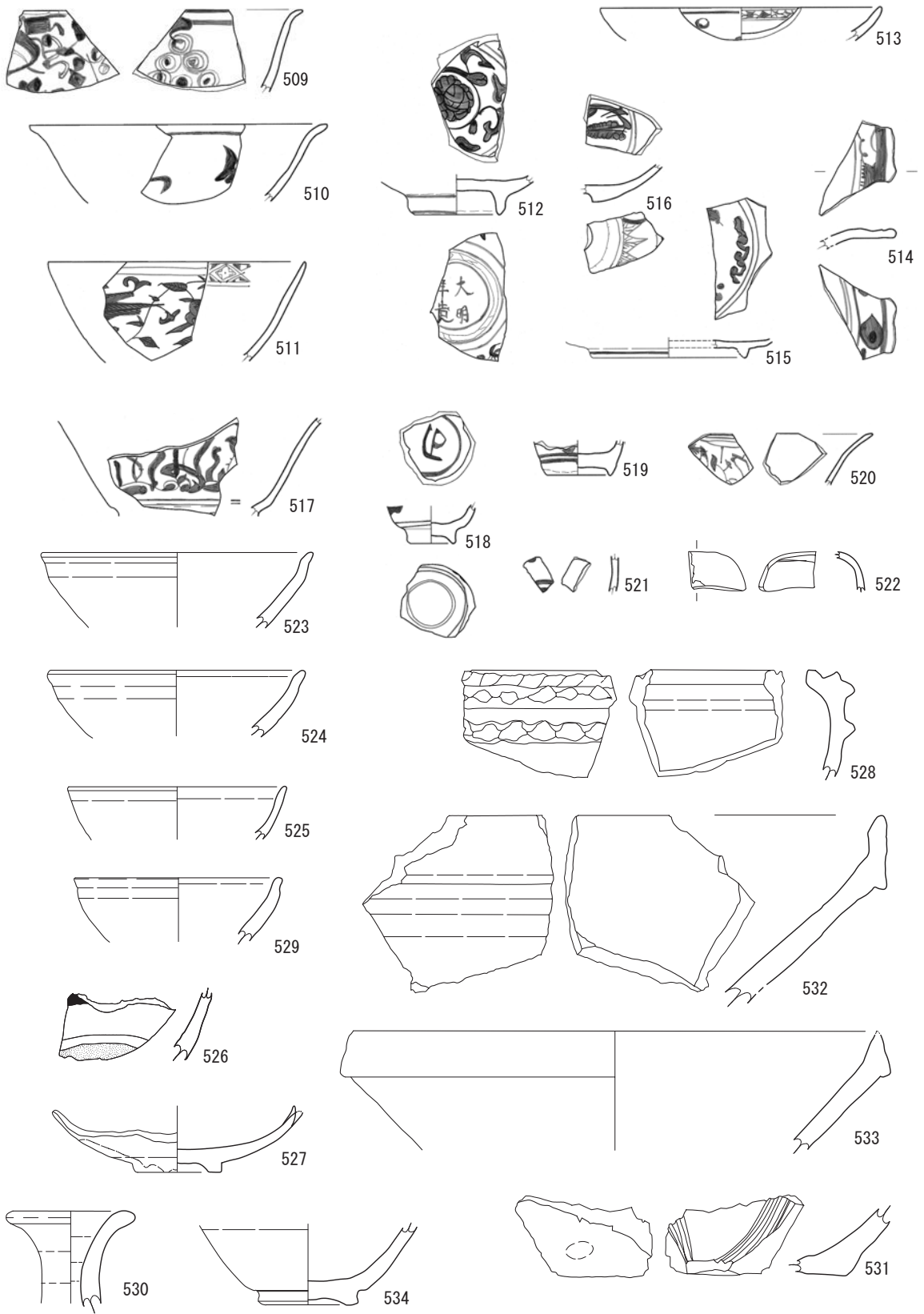
#### 土師器・瓦器・瓦質土器

535～541は土師器の皿。535は底面が凹状を呈し底面糸切り離し。棒状の工具根が残る。536は底面調整が施され切り離し痕跡が不明瞭。537・538は口径が小さく白色を呈す。537はヘラ切り離しとみられるが底面調整で痕跡は不明瞭。538は底面が剥がれ高台が付く可能性がある。539は手づくね成形とみられ、内面が丁寧に調整される。黄褐色を呈す。

540・541は瓦器の皿。540は手づくね成形。541は内外面にナゲ調整がみられる。口縁部の内外面が黒色化。



第48図 曲輪6上段 青磁・白磁



第49図 曲輪6上段 青花・陶器



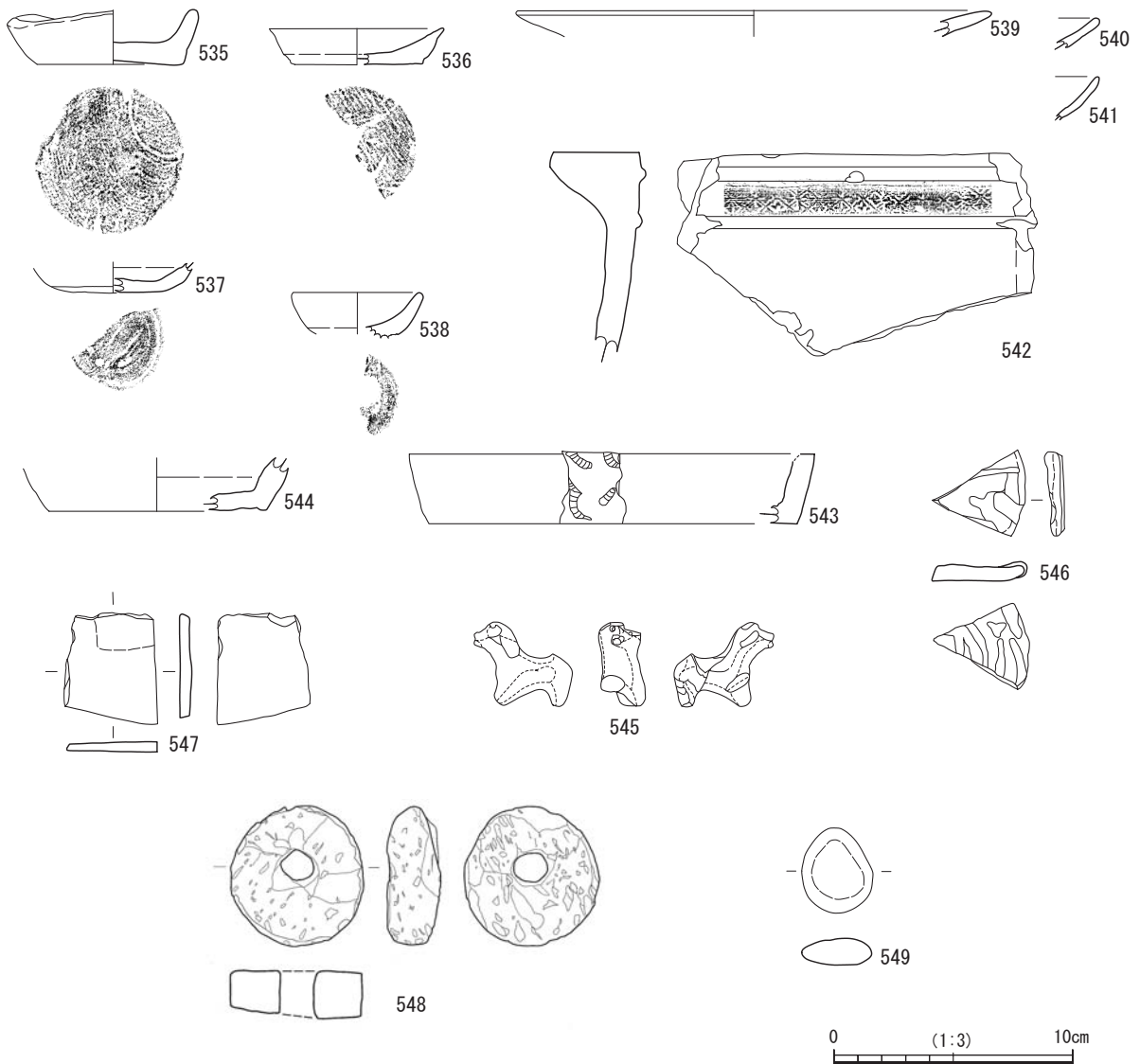
542～544は瓦質土器。542は火鉢とみられる浅鉢。方形の口縁を持ち、2条の突帯で文様体を造る。スタンプ文様が施される。543は小型の鉢。ほぼ垂直に立ち上がる器壁を持つ。外面にスタンプ文を施す。544は鉢あるいは袋物とみられる平底の底部。

土製品・石製品

545は犬をかたどった土製品。足と頭を造り出し、目や耳、尾が表現される。大友府内町跡で類例の出土がみられる。546は円盤状の土製品。ろくろ成形の底部ともみえるが立ち上がり部分に欠損はみられず、円盤状を呈

すると思われる。用途は不明。

547は砥石。薄い短冊状とみられ、平坦面の一面は滑らかに磨かれる。548はドーナツ状の軽石製品。円盤状の中央部を穿孔しているが、穿孔部は円盤の中心からやや外れる。表裏及び側面の一部に擦過痕がみられる。549は基石。扁平で不整な楕円形。一般的なものに比べて大きく、厚みもある。曲輪6上段では基石が17個出土し、最大径は1.9cm、最小径は1.0cmである。最大厚は1.9cm、最小厚は0.3cmである。平均径は1.7cm、平均厚は0.59cmである。



第50図 曲輪6上段 土師器・石製品



挿図 番号	掲載 番号	出土区	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
第 48 図	495	ACB-37	青磁	壺	腰部				龍泉窯系		外面草花文
	496	曲輪一括	青磁	壺?	底部		6.2		龍泉窯系		焼成不良
	497	AA-36(14T)	青磁	蓋		8.8			龍泉窯系		
	498	曲輪一括	白磁	碗	口縁部	13.3			景德鎮窯系		
	499	曲輪一括	白磁	角杯	口縁部				景德鎮窯系	16c	
	500	曲輪一括	白磁	皿	口縁~底部	17.8	10	3.9	景德鎮窯系	16c前半	外反
	501	AB-37	白磁	皿	口縁部	12.6			景德鎮窯系	16c前半	外反
	502	AC-37	白磁	皿	口縁~底部	12.2	6.2	2.3	景德鎮窯系	16c前半	外反 碁筒底
	503	曲輪一括	白磁	皿	底部		3.0		景德鎮窯系	16c前半	碁筒底
	504	AB-36・37	白磁	皿	底部	12.0			景德鎮窯系		
第 49 図	505	AD-37	白磁	皿	底部		11.6		中国南部		内底無釉 量付釉剥
	506	AD-37	白磁	蓋	—		6.4		景德鎮窯系		
	507	AA-36(14T)	白磁	杯	底部		2.8		景德鎮窯系		
	508	AB-37	白磁	杯	底部		3.4		中国南部	15c	高台・外底無釉
	509	AB-36	青花	碗	口縁部				景德鎮窯系	15c後半	端反
	510	曲輪一括	青花	碗	口縁部	14.8			福建広東	15c後半	端反
	511	AB-32	青花	碗	口縁部	12.8			景德鎮窯系	16c後半	四方襷文
	512	AB-37	青花	碗	底部		4.2		景德鎮窯系	16c後半	マントーシシ 大明年造
	513	AB-37	青花	皿	口縁部	14.0			景德鎮窯系	16c後半	内湾 四方襷文
	514	AA-36(14T)	青花	皿	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	盤様稜縁皿 芙蓉手
	515	AB-36	青花	皿	底部		7.6		景德鎮窯系	16c後半	
	516	Z-36(13T)	青花	皿	底部				景德鎮窯系	16c前半	碁筒底 芭蕉葉文
	517	曲輪一括	青花	杯	胴部				景德鎮窯系		
	518	AC-37	青花	杯	底部		2.3		中国		高台内を断面アーチ状に削る
	519	AB-37	青花	杯	底部		3.1		景德鎮窯系		見込無文
	520	AA-36(14T)	赤絵	坏?	口縁部				中国		赤絵 緑色彩色
	521	AA-35	磁器	皿					景德鎮窯系		内面青花 外面青磁釉
	522	表土	青釉磁器	蓋?					中国		外面紺色 二次被熱
	523	表土	陶器	碗	口縁部	13.6			中国		天目碗
	524	AC-37	陶器	碗	口縁部	12.8			中国		天目碗
	525	AB-37	陶器	碗	口縁部	10.9			中国		天目碗
	526	AD-37	陶器	碗	腰部				中国		天目碗? 下半露胎
	527	曲輪一括	陶器	皿	口縁~底部		4.3		中国		輪花? 下半露胎
	528	曲輪一括	陶器	鉢	口縁部				中国		貼付け装飾 480と同一個体
529	AA-36	陶器	鉢	口縁部	10.4			中国		明茶色	
530	AB-36	陶器	瓶	口縁部	6.0			中国		飴釉	
531	曲輪一括	陶器	播鉢	底部				備前			
532	AB-37	陶器	播鉢	口縁部				備前	14c~15c		
533	AD-37	陶器	播鉢	口縁部	26			備前	14c~15c		
534	AC-37	陶器	碗	腰~底部		4.6		瀬戸美濃		天目碗	
第 50 図	535	AB-37	土師器	皿	完形	8.0	6.0	2.2			糸切底
	536	AA-36	土師器	皿	口縁~底部	7.3	5.6	1.5			切離調整
	537	AA-35	土師器	皿	口縁~底部		3.4				ヘラ切底調整
	538	AA-36(14T)	土師器	皿?	口縁~底部?	5.6					高台の可能性あり
	539	曲輪一括	土師器	皿	口縁部						てづくね? 内面調整
	540	表土	瓦器	碗?	口縁部						てづくね 薄手
	541	AC-37	瓦器	碗?	口縁部						高台 外面横ナデ
	542	曲輪一括	瓦質土器	火鉢	口縁部					15c	浅鉢VI スタンプ文
	543	AB-37	瓦質土器	鉢	口縁~底部	17.0	15.6	3.0			スタンプ文
	544	AA-36	瓦質土器	袋物	底部		9.2				
	545	AA-36(14T)	土製品	犬	一部欠損						
	546	AA-36(14T)	土製品	円盤状							ろくろ成形か
547	曲輪一括	石製品	砥石							板状	
548	AD-37	石製品	円盤状	完形						軽石製品 中央穿孔	
549	AB-36・37	石製品	碁石		長径3.6	短径3.0	厚さ1.1				

## 第9節 曲輪15上段の調査

### (1) 調査の概要

曲輪15上段は6次調査の直前まで茶畑として耕作が行われていた。調査に際しては、重機等による抜根を行わず地表上で樹木の伐採を行い、切り株を残した。残存した切り株を人力で除去しつつ、調査を実施した。

6次調査においては、曲輪面の状況を確認する目的でトレンチを設定し調査を実施した。調査当時までは、大野久尾は巨大な1つの曲輪(曲輪6)であり、耕作による開削あるいは未完成の曲輪として、曲輪の東西を分けるように通路が存在すると考えられていた。そのため、6次調査においては、大野久尾東側の曲輪(現在の曲輪15)と西側の曲輪(現在の曲輪6)の2つの曲輪に対し、通し番号でトレンチを設定している。

6次調査の結果を受けた8次調査では、曲輪面を調査するため、十字にトレンチを設定して調査を実施した。また、遺物の出土が多くみられた曲輪の南東部にもトレンチを設定して調査を実施した。築城面とみられる暗黄色火山灰土(Ⅲ層 アカホヤ火山灰土)にて、柱穴や溝状遺構、縦穴状遺構を検出した。

9時調査においては、8次調査によって検出された溝状遺構の全容を確認する目的で、トレンチを拡張する方たちで曲輪南東部に調査区を設定し調査を実施した。

### (2) 虎口

AD-39区に存在する。6次調査において10Tで存在が確認され、8次調査で調査を実施した。

曲輪面から斜面を下るように空堀へと向かい、右に折れて空堀に至るとみられる。空堀側からみると、空堀8から分かれて曲輪15上段の西側斜面に沿うように登り、左に折れて曲輪面に至る。

虎口の幅は、床面で約2m、上面で約3.8mを測る。空堀側から虎口を隠す壁状の構造を備えるかは不明である。虎口の延長上には道とみられる硬化面が検出され、一列に配置された配石遺構も検出された。

### (3) 配石遺構(虎口)

虎口の調査中にAD-39区にて検出された。虎口から空堀へ向かう途中に、通行を妨げるように49個の石が3段に積まれる。幅20cm前後の砂岩を中心とし、被熱した石はみられない。石材は虎口の外側である西側の面を揃えて積まれる。虎口の床面には接しておらず、虎口及び空堀8の埋土中に存在する。

虎口に付随するものとは考えにくく、虎口が廃止された後に配置されたものと推察される。虎口の床面に接していないことから、虎口の廃止時に設置し背後に土砂を

充填したものとは考えにくい。虎口が埋められた後、空堀側から設置したもので、空堀への土砂流出を防ぐ目的で積まれたものとする。

### (4) 道跡

虎口の延長上にスロープ状に続く道跡が検出されている。AD-39区の虎口から北東方向に延び、曲輪の中央部に至るAE-40区では硬化面がみられる。黄褐色火山灰土(Ⅲ層 アカホヤ火山灰土)上に存在する黒色土が硬化する。虎口を含む直線の長さは約13m、空堀に接する虎口の端部から道の終端部の比高差は約2.4mに及ぶ。虎口内はスロープ状の形態だが、AE-40区付近では部分的に低いステップ状の段差を有し、北東に向かって次第に登っていく形態となる。また、AE-40区では道を遮るように配置された石積みを確認されている。

### (5) 配石遺構(道)

AE-40区において、虎口から続く道の終端部付近で検出された。約15個の石が直線状に並べられ、1段を基本とするが部分的に2段が積まれている。砂岩の細長い亜円礫を主とし、凝灰岩質のものもみられる。どちらの石材でも被熱はみられない。方形に加工された石1点が含まれ、長径約44cm、短径約23cm、厚さ約18cmを測る。亜円礫の長径は最大のもので40cmを超える。

道跡の硬化面の上に置かれ、虎口に向かう南西方向の面を揃えて並べられる。遺構の前後では変わらず硬化面がみられる。大型の亜円礫及び方形石の高さ(厚さ)は10~20cm程度であり、小型の礫は10cmを超えるように2段積みされる。

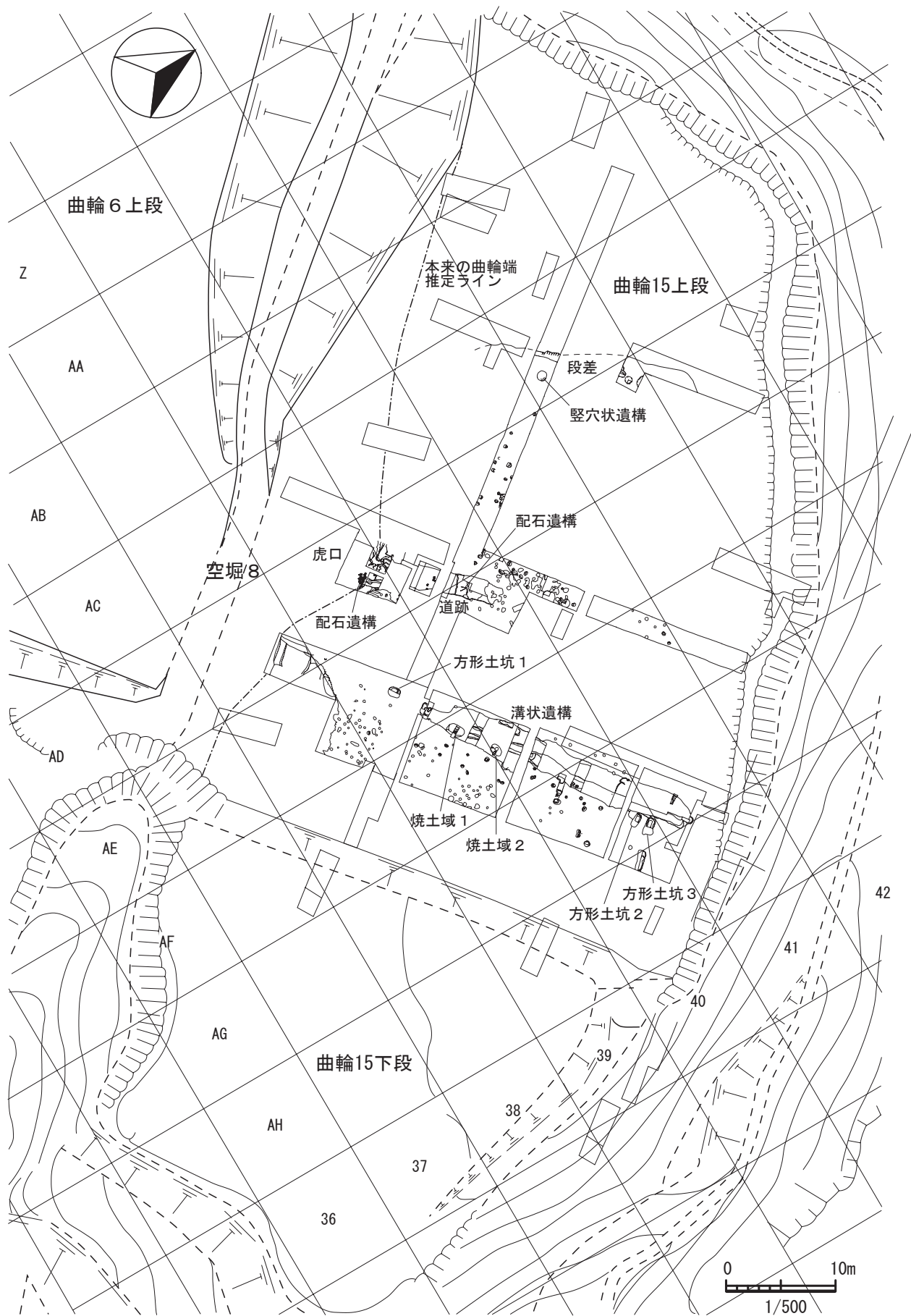
ステップ状の段差を有する道の形状から、段差やステップのための配石とも思われるが、不明である。近現代の耕作に伴う土留めの可能性もある。

### (6) 溝状遺構

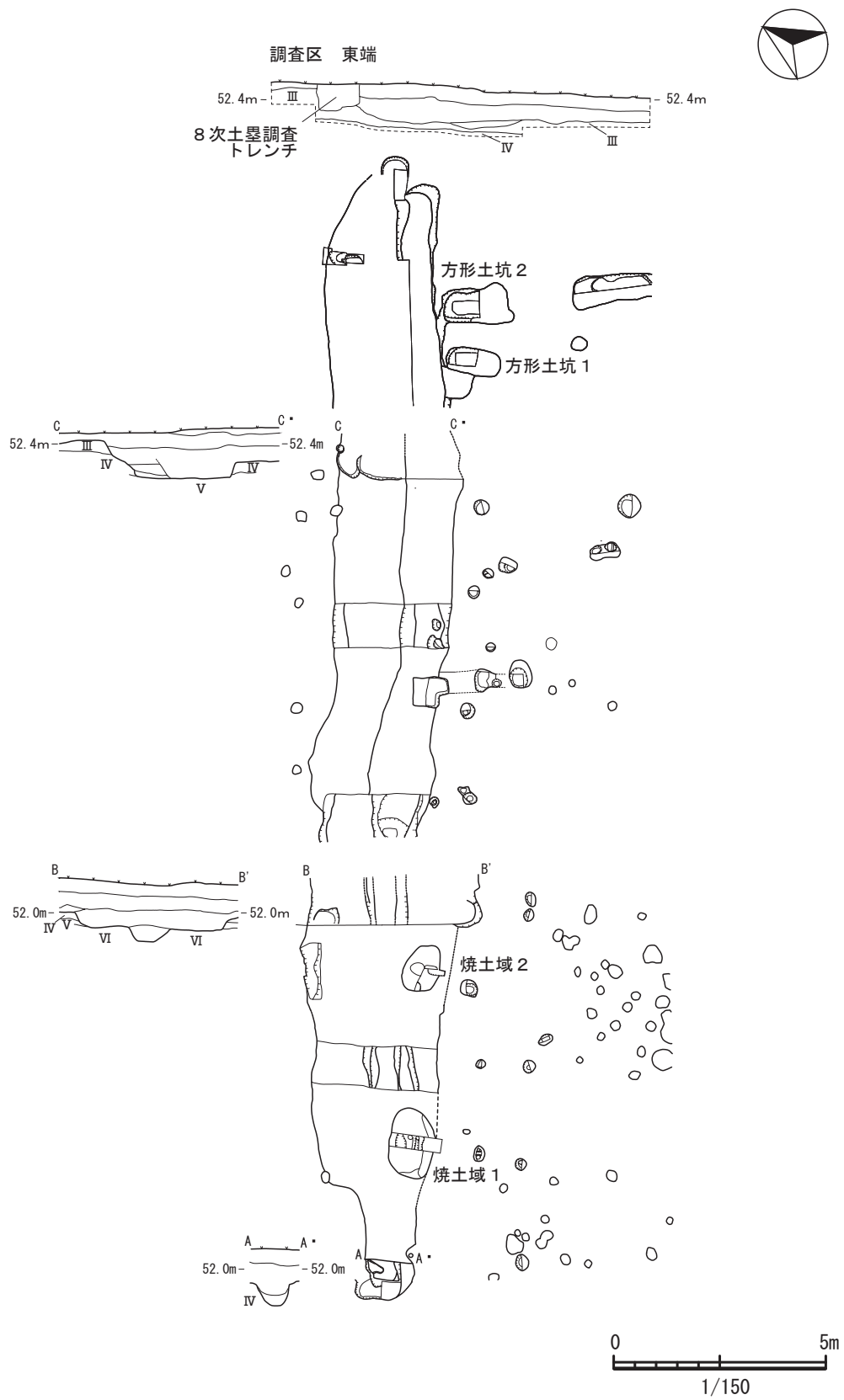
8次調査において曲輪南東部で存在が確認され、9次調査で調査を実施した。

曲輪15上段の南東部AE-39区からAH-41区まで、曲輪の南部から東部へ向かって走る。北東端は土塁に接する。長さ約26m、南西端部の幅は1.2mだが幅は広がり、中間部では約2.9mを測る。底面の幅は全体を通じて約40cmであり、溝の幅が広がっても大きな変化はみられない。中間部分では幅広で浅い遺構の中を本来の溝が走るような形状を呈する。北東部では、北側の縁が傾斜して本来の溝へ向かい、浅い片礫研堀のような形状を呈す。

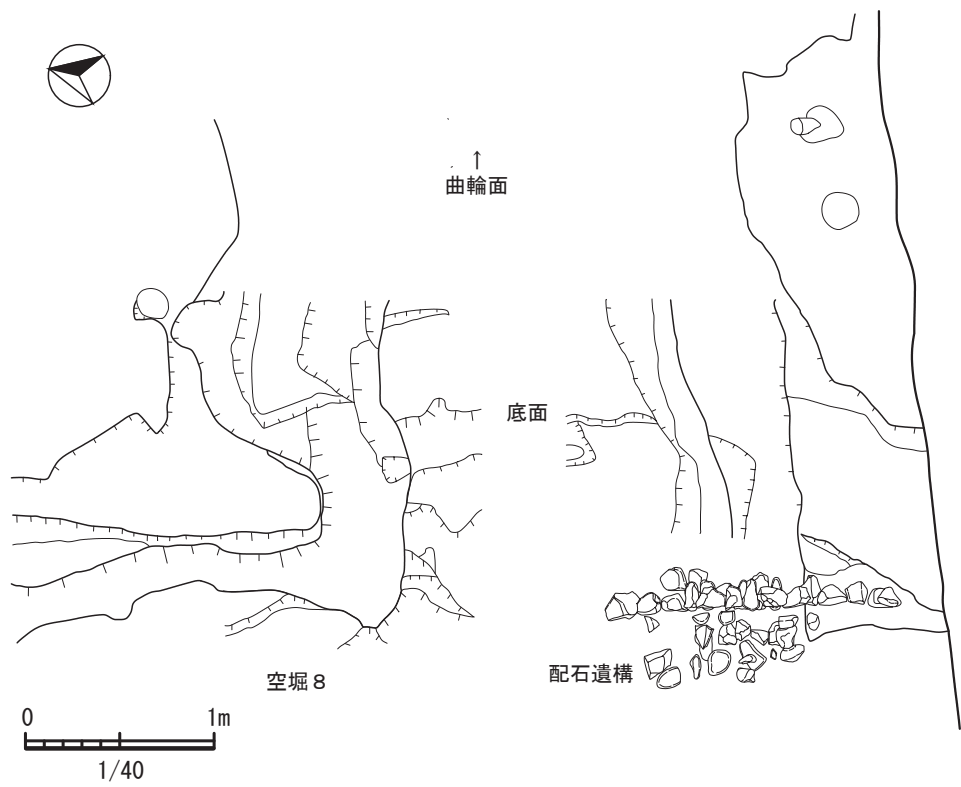
流水痕跡及び硬化面がみられないことから、排水目的の溝や道としての利用を推測することができない。溝の



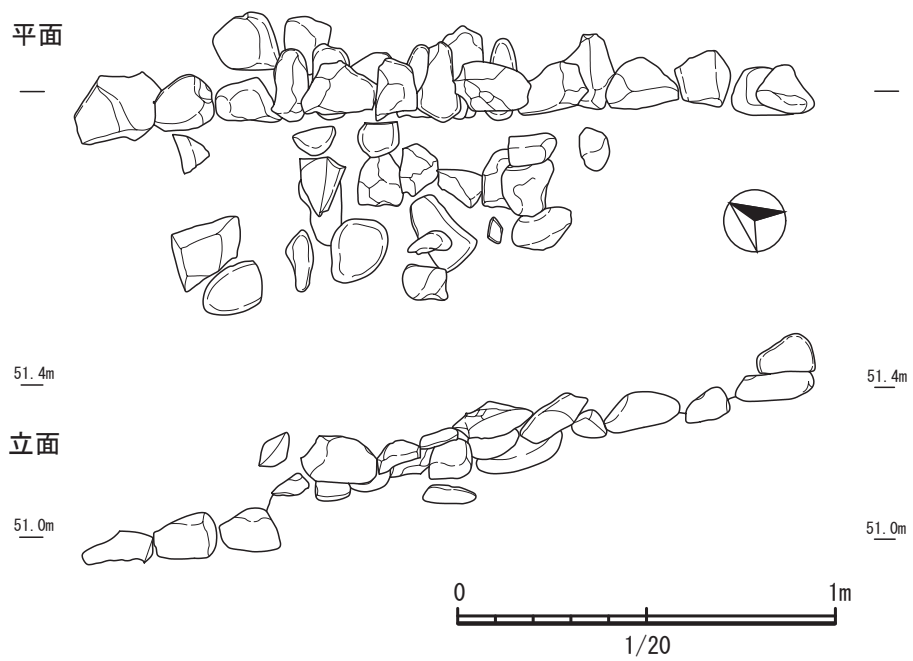
第51図 曲輪15上段 遺構検出状況



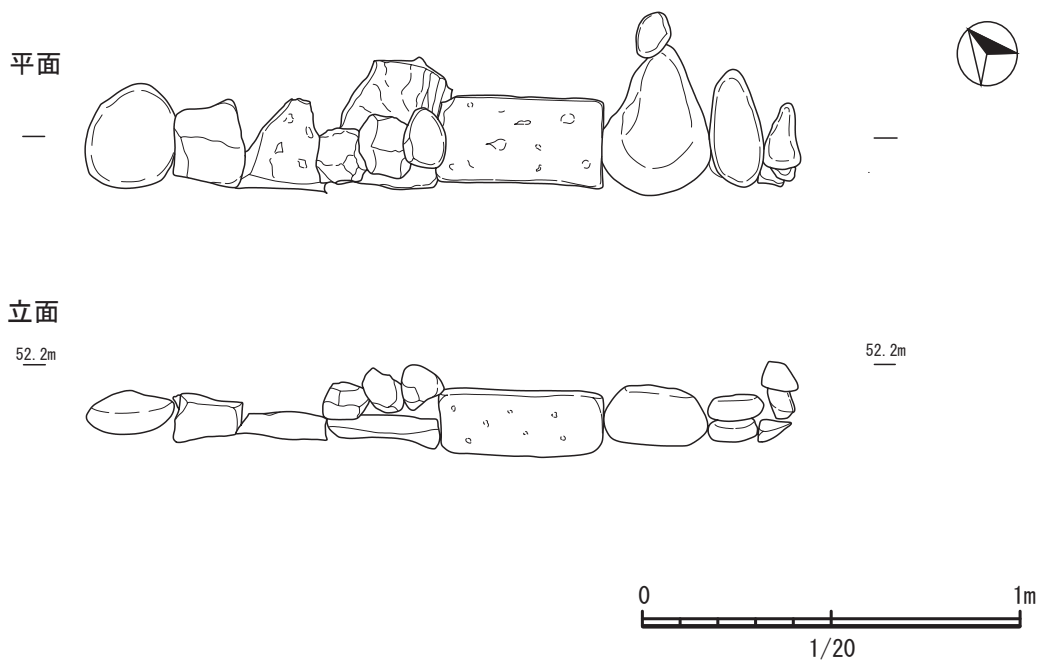
第52図 曲輪15上段 溝状遺構



第53図 曲輪15上段 虎口



第54図 曲輪15上段 配石遺構(虎口)



第55図 曲輪15上段 配石 遺構(道跡)

周囲には柵列等の痕跡はみられず、防衛目的の空堀とも考えにくい。用途や性格に応じて曲輪面を区分するためのものと推測される。

#### 溝状遺構の出土遺物

550～556は青磁。550は盤の口縁。鏝状に広がり短く立ち上がる。551は碗の底部。外底まで施釉した後に外底を粗く釉剥ぎ。畳付と外底に溶着がみられる。552～555は皿。552は稜花形の腰折皿。畳付を釉剥ぎし、高台内面は露胎。高台外面まで施釉。見込にも釉剥ぎを施す。口縁部内面に楡書文を施す。553は直口する口縁。内外面に文様が施される。554は大振りな底部。外底まで施釉した後、外底を輪状に粗く釉剥ぎ。外底及び高台外面に溶着がみられる。555も直口する口縁。内面に蓮弁とみられる文様が施される。556は香炉の腰部とみられる。内外面を施釉するが内面下半は無釉。

557～560は白磁。557は碗。直線的に大きく開いて立ち上がり、口縁部で外反する。森田分類E群、腰折の坏E-1。558～560は皿。558・559は底部で外面下半が露胎。畳付を部分的に削り取る切高台。削り残した畳付には溶着防止のアルミナを塗布する。見込に積み重ねの痕跡がある。558は発色が悪く灰色の斑点が散る。560も同様とみられ胴部の下半が露胎だが、底部を欠くため高台の形状は不明。

561は青花の皿。碁笥底。焼成不良で発色が悪い。畳付部に釉剥ぎを施す。

562～566は陶器。562は壺甕の肩部。外面及び内面上半に飴釉がかかる。外面に耳の基部がみられ、「清香」文字の印判が押されている。563は甕。大きさに比して器壁は薄い。564は甕の胴部。外面は黒釉。内面は褐釉とみられるが、横方向に掠れて下地がのぞく。565・566は備前焼の播鉢。565は片口がみられる。

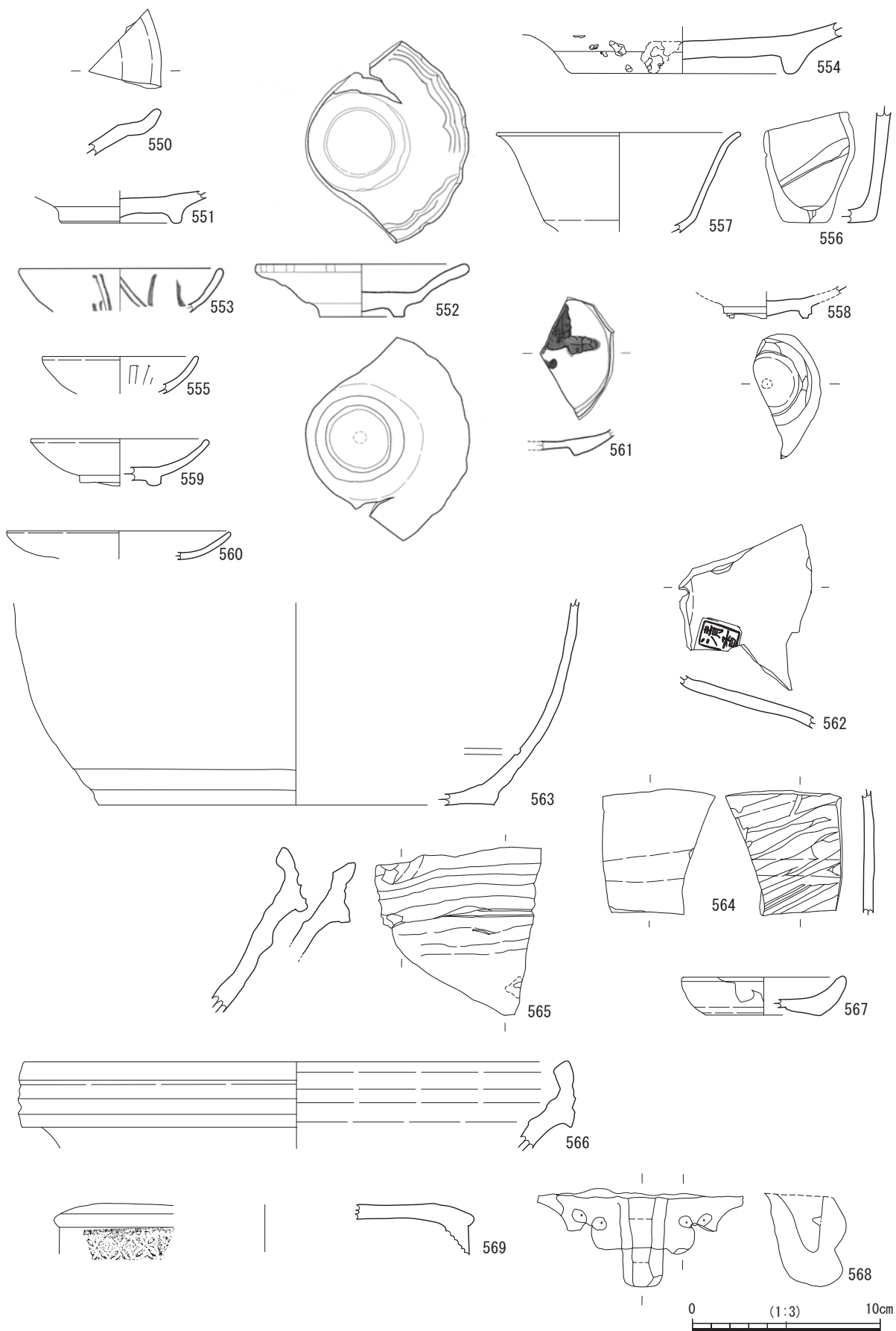
567土師器の皿。底面へラ切り離し後に調整を施す。内外面に赤色顔料がみられる。

568・569は瓦質土器。568は風炉の脚部とみられ、雲板状装飾を持つ猫脚。脚部の接地面から裏側にかけて黒色化。脚部は丁寧な面取りと調整を受ける。569は蓋とみられる。側面に文様帯を持ちスタンプ文が施される。側面及び上面端部は研磨調整されるが上面頂部は研磨されない。

#### (5) 方形土坑

平面プランが長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれた土坑3基が確認されている。方形土坑1はAE-39区で検出され、長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約1.0cm。中段部分を持ち、中段部と底面の比高差は0.5m。方形土坑2はAG-41区で検出され、長軸約1.3m、短軸約0.6m、深さ約1.1cm。方形土坑3はAG-41区で検出され、長軸約





第56図 曲輪15上段 遺構出土遺物

1.5m、短軸約0.8m、深さ約0.7cm。方形土坑2及び3は密集し、前述の溝状遺構に近接する。

#### (6) 竪穴状遺構

曲輪の中央部、AC-42区で検出された、ほぼ垂直に掘り込まれた用途不明の遺構を縦穴状遺構とした。

直径約0.9mの円形で、クォーターカットを行って調査し、深さ約2mで底面を確認した。埋土中からの遺物は確認されなかった。

検出面付近では丁寧に円形に掘り抜いており、下層では黄色シラス層を掘り込んでいる。底面を確認したことから、隧道とは考えにくく、シラス台地上に井戸を掘ることは不可能に近い。水抜きまたは貯蔵穴の可能性を想定するにとどまる。

#### (7) 焼土域

AF-39区で炭化物及び灰を含む土坑が2基検出されたが、トレンチによる調査の結果、明確な炉としての利用を確認できなかったため、焼土域とした。

焼土域1は長軸約1.6m、短軸約1m、深さ約0.8m。埋土は黒褐色土(10YR2/2)で、灰を多く含む。焦土域2は長軸約1.2m、短軸約0.8m、深さ約25cm。埋土は暗褐色土(10YR3/2)で、赤褐色の土塊、橙色土粒を含む。

焼土域1・2とも、遺構内より中世磁器の小片が確認され、中世の遺構と考えられるが、溝状遺構の上で検出されたことから、溝状遺構が廃止されてからのものと考えられる。

#### (8) 遺物

##### 青磁

570～573を盤とした。572は鏝状に開いた口縁が垂直方向に立ち上がる。内面には陰刻文が施される。571は青白色を呈す。572は胴部の器壁が薄い。573は口縁の鏝状部と立ち上がりが短く、屈曲部が肥厚する。

574～578は碗。574は外反する口縁。外面に鎬蓮弁文を施す。575は直口する口縁。外面に雷文を施す。上田分類C類。576は外反する口縁。外面には草花文が施されるとみえる。上田分類D類。577は口縁内面に雷文、その下に草花文が施される。外面は無文。578は外反する口縁。無文。

579～603は皿。579～582は外側に水平方向に折れる口縁を持つ。579は外面に鎬蓮弁文、580はへら書きの蓮弁文、581は無鎬の蓮弁文が施される。582は黄褐色を呈し鎬蓮弁文が施される。583・584は水平方向に折れた口縁が鏝状に延びる。屈曲部の内面には稜を持つ。口縁部は稜花形をなす。内面には櫛書文、草花文が施される。

585～593は腰部で屈曲し大きく開いて肥厚する口縁を持つ。585は高台内面まで施釉し外底無釉。586は稜花形で口縁内面に櫛書文が施される。見込を円形に粗く釉剥ぎし、貝目状の積み重ね痕跡がみられる。畳付を越え外底までを粗く施釉。587～591は稜花形で口縁内面に草花文が施される。592は稜花形で口縁内面に櫛書文が描かれる。592は青白色を呈し、口縁内面に櫛書文、内外面に草花文が施される。593は稜花形で内外面無文。施釉はムラがみられる。

594・595の腰部は湾曲して立ち上がり、胴部で稜を持って屈曲する。屈曲部で器壁は薄くなり、口縁端部に向かって肥厚する。口縁部内面には櫛書文が施される。594は胴部内面から見込部に向かう放射状とみられる櫛書文も施される。

596・597は直口する口縁。596は被熱。597・598は口折皿。598はへら書き文が施される。599は鎬蓮弁文が施され、二次被熱。600・601は内湾気味に立ち上がり内面に蓮弁とみられる文様が施される。601は焼成不良で青白色を呈す。口縁外面に稜を持ち、内面には凹線による圏線がめぐる。603は高台を持たない平底の底部。底部付近まで粗く施釉し外底は露胎。

604・605は稜花形の口縁を持ち、外面に陰刻文、内面に草花文が施される。口縁内部には櫛書文、腰部の屈曲以下にも蓮弁あるいは花卉状の文様を持つ。604と同一個体とみられる破片が2点出土。605は二次被熱。長い脚を有する高足杯とみられるが、脚部が残る資料はない。

606～616は壺。606は頸の短い頸部。被熱。607は青白色を呈し、外面に櫛書文が施される。608は頸が短く器壁が厚い。609・610は青白色を呈す蓋と身のセット。609は蓋で天辺の屈曲部に櫛書文ほかの文様が施される。610は無頸壺か鉢の身。胴部が球状にふくらむとみられ、蓋と同様の櫛書文が施される。611は胴部下半に文様が施された底部付近。612は碁笥底状の底部。底部周辺に花卉状の文様が施される。内面及び外底部まで施釉し畳付部を釉剥ぎ。613～616は蓋。613はにぶい発色で被熱。614は鏝状部が短く薄い。615は発色がにぶく613に似る。616は青白色を呈し、やや小ぶり器壁が厚い。内面の焼成が悪く茶褐色を呈す。

617～620は瓶。617は草花文が施された頸部。618は無文の細い頸部。619・620は頸部の終端で文様が施される。

621は水注の肩部。上部の口と注ぎ口の基部が残る。622は内面から押し出した装飾を持つ胴部破片。器形不明だが袋物とした。623は袋物とみられる底部。畳付を釉剥ぎし高台内面及び外底は無釉。底部の器壁は厚い。内面の釉は黄色がかかる。

624～629は香炉とした。624は口縁が肥大し口唇部を

広く平たく取る。二次被熱。625は円筒形の器形とみられ、内面は口縁部のみ施釉。釉剥ぎは施されない。626は青白色を呈し、口縁が内側に水平に折れる。外面の貫入は細かい。627は円筒形の器形とみられる胴部。外面に竹を模したような節がめぐり、節部分は盛り上がる。628は低い高台を持つ底部。腰部は屈曲し外反気味に立ち上がる。底部の器壁が厚く、高台外面の印象に比べて高台内は浅い。内外面施釉。畳付を釉剥ぎし高台内面及び外底は無釉。629は3脚の足を持つ底部。腰部及び脚部外面まで施釉。畳付及び外底部は釉剥ぎ。内面は露胎。外面に草花文が施される。

630は合子の蓋。外面の貫入は細かく、内面は露胎。

#### 白磁

631～636を碗とした。631は内湾気味の口縁部。焼成不良で黄褐色を呈す。632は尖り気味の口縁部。発色は悪い。633・634は器壁が薄く、口縁端部が外反し玉縁状となる。外面はにぶい青白色、灰色を呈す。635は口縁が玉縁状となり633・634に似る。外面は黄褐色、内面は部分的に灰色。内面に圏線状にめぐる溶着痕とみられる盛り上がりがある。636は口のあまり開かない器形とみられ、口唇部が茶褐色を呈す。

637～654は皿。637は端部が尖る口縁を持ち、外面胴部下半が露胎。森田分類D群。638～644は口縁部が外反する端反皿。森田分類の皿E-2-B。638～641は焼成の良い白色を呈す。外底まで施釉され、畳付を釉剥ぎ。642は外反部が薄い。643は大振りの器形で広い高台を持つ。644も同様の器形だが組成とみられ、黄白色を呈し表面がざらつく。645は碁笥底の底部。畳付を釉剥ぎするが溶着がみられる。森田分類の皿E-3。646は森田分類の皿E-2-Bとみられる小皿。647は菊皿。森田分類の皿E-4。648は皿または碗の底部。内底が下がり、器高の大きな器形とみられる。見込に輪状に釉葉がはがれる重ね積みの痕跡がみられる。畳付を釉剥ぎし、高台内部にモミガラ状の溶着がみられる。

650～652は端反皿で内面から見込部分を円形に釉剥ぎし、胴部下半が露胎となるグループ。高台は低く黄白色を呈す。森田分類E類、大友府内町跡の皿E-5に相当。福建省系白磁皿。649はこれに似るが見込は蛇ノ目釉剥ぎ、高台が比較的高く発色が良い。650・651は見込みに煤が付着、高台外面に段が設けられる。652は内面の釉剥ぎが大きく、内面下半は露胎。

653は口縁が水平方向に開いて罅状となり稜花形を呈す。内外面に装飾が施される。654は黄褐色を呈し貫入の著しい稜花皿。口縁の波状が著しい。見込を蛇ノ目釉剥ぎ、高台外面付近まで粗く施釉。

655～659は杯とした。655は口縁が外反気味に立ち上がる。口縁端部は尖り、その内面部分は褐色を呈す。見込を釉剥ぎ。656は外反して立ち上がり口縁部が肥厚する。657は黄褐色を呈し胴部下半が露胎。658は発色が悪く灰色の斑点が散る。腰部に稜を持ち直線的に開く。腰部下半は露胎とみられる。

659は壺とした。灰色を呈し、球状の胴部からくびれた頸部と垂直に立ち上がる口縁部につながる。口唇部及び口縁内面は釉剥ぎされ、蓋が付随する可能性がある。口縁部に比して胴部の器壁は薄い。胴部外面は一部が被熱している。660は高台を有する袋物の底部。内面は露胎。外底まで施釉され、畳付を釉剥ぎ。全体的に器壁は薄い。

#### 青花

661～682は碗。661～663は口縁部が外反する小野分類B群。661は直線的に立ち上がる。662は内外面ともに圏線のみ。

664～671は直口する口縁を持つ。664～667は小野分類C群。664は口径に対して狭い高台を持つ。665は焼成不良。666は施釉により口縁端部が肥厚。668は焼成が良く器壁が薄い。口縁外面に雷文帯があり小野分類E群の可能性もある。669は施釉が粗雑で、内面に露胎の部分が見られる。670は発色が悪く青灰色を呈し文様も灰色がかかる。671は焼成が良く堅緻で文様も鮮明。

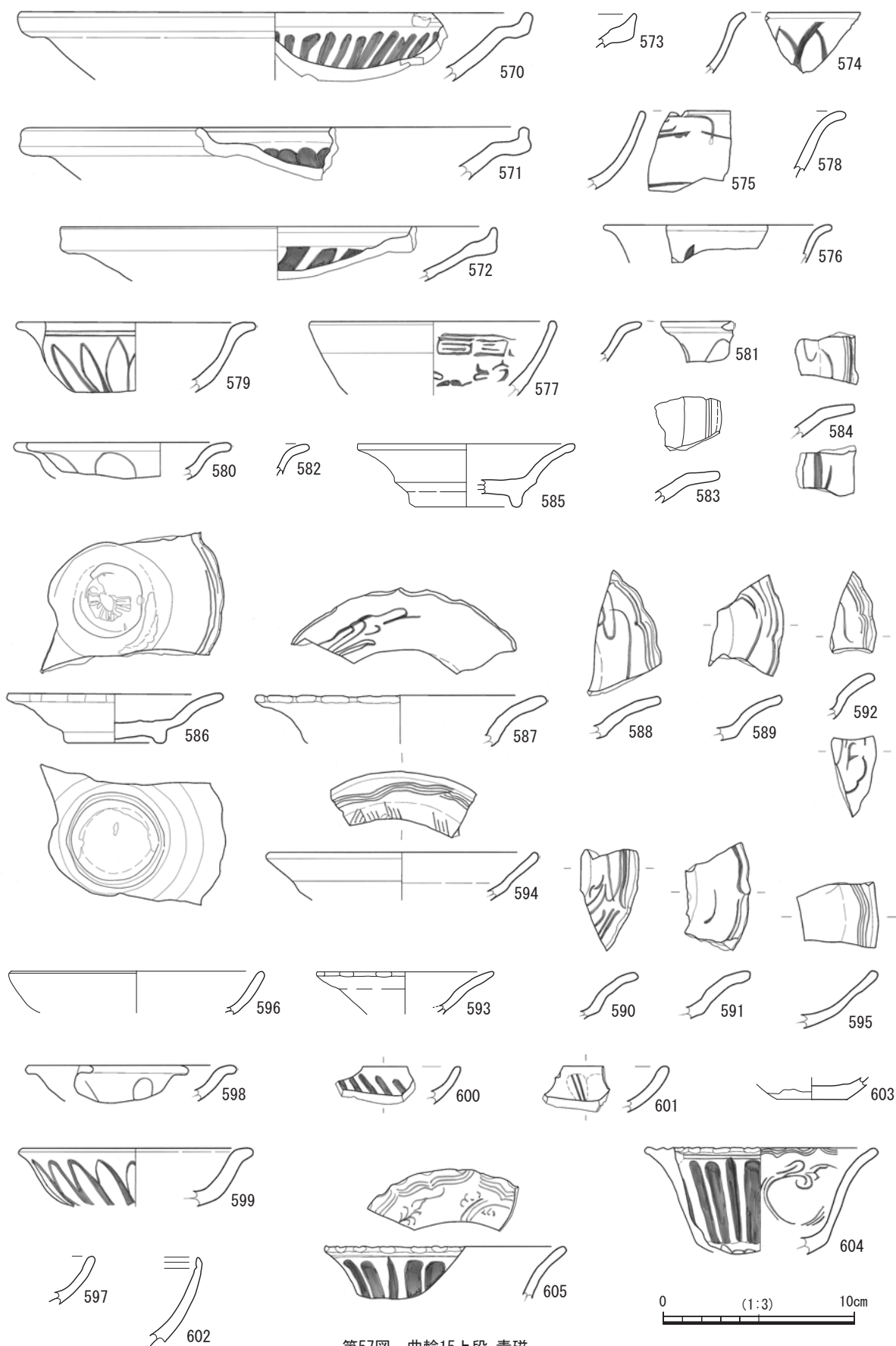
672は直線的に立ち上がり、わずかに外反する小碗あるいは小杯とすべき器形。碗に比して器壁は薄い。

673～680は碗の底部。673～675は内底部が下がるレンツ型。小野分類C群。外底まで施釉し畳付を釉剥ぎ。675は焼成が悪く文様や釉剥ぎも粗雑。676～680は見込が盛り上がるマントーシン型。小野分類E群。676は外底に「萬福攸同」銘、677は「長命富貴」とみられる銘あり。678は小さめの高台を持ち、見込の盛り上がりも小さい。679は焼成不良。高台内面及び外底の一部に施釉されず、施釉が粗雑。680は焼成不良で文様が灰色を呈す。見込を蛇ノ目釉剥ぎし、畳付に釉剥ぎを施す。高台内部の施釉は粗い。

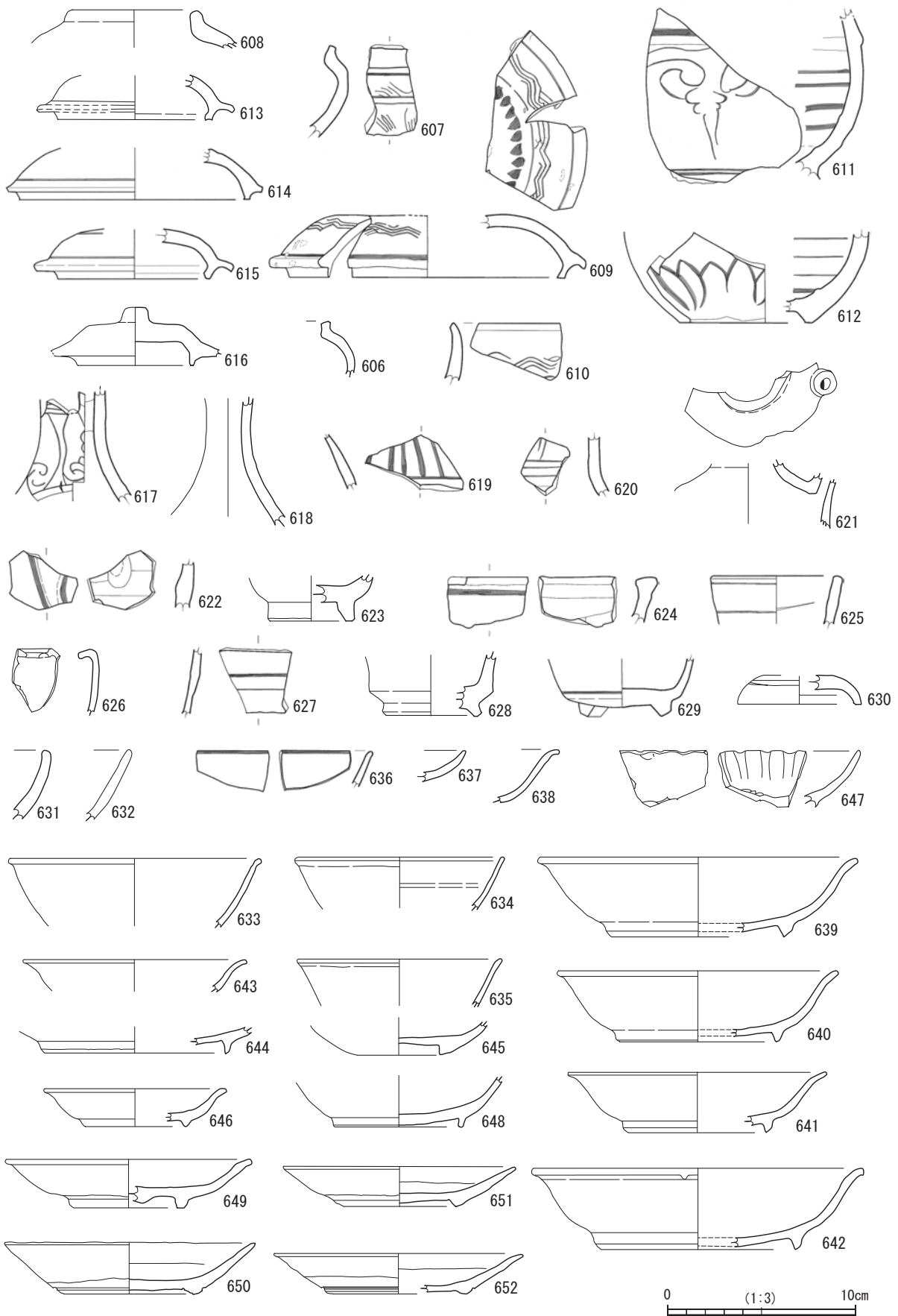
681・682は直線的に立ち上がり口縁部が外反する。内面の文様は口縁部の圏線のみ。

683～696は皿。683～684は口縁端部が外反する端反の皿。小野分類B群。683は畳付を釉剥ぎ、高台内部及び外底は無釉。

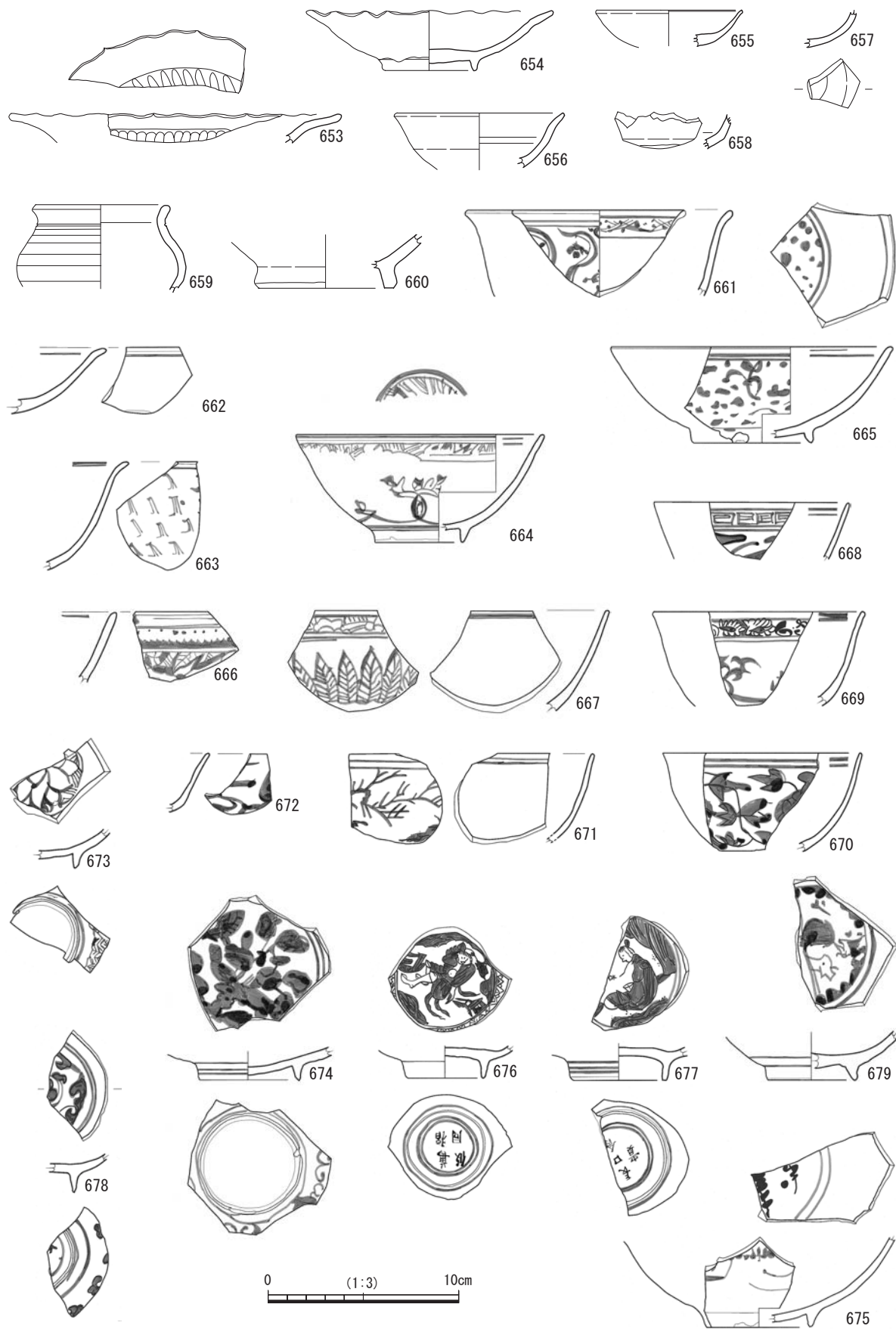
685～692は碁笥底とみられる一群。小野分類C群。685～689は波濤文と蕉葉文の組み合わせを有する口縁部。687は口縁部外面が波頭文ではない。688は胴部内面も文様が施される。689は灰色を呈し、文様ににぶい。690は



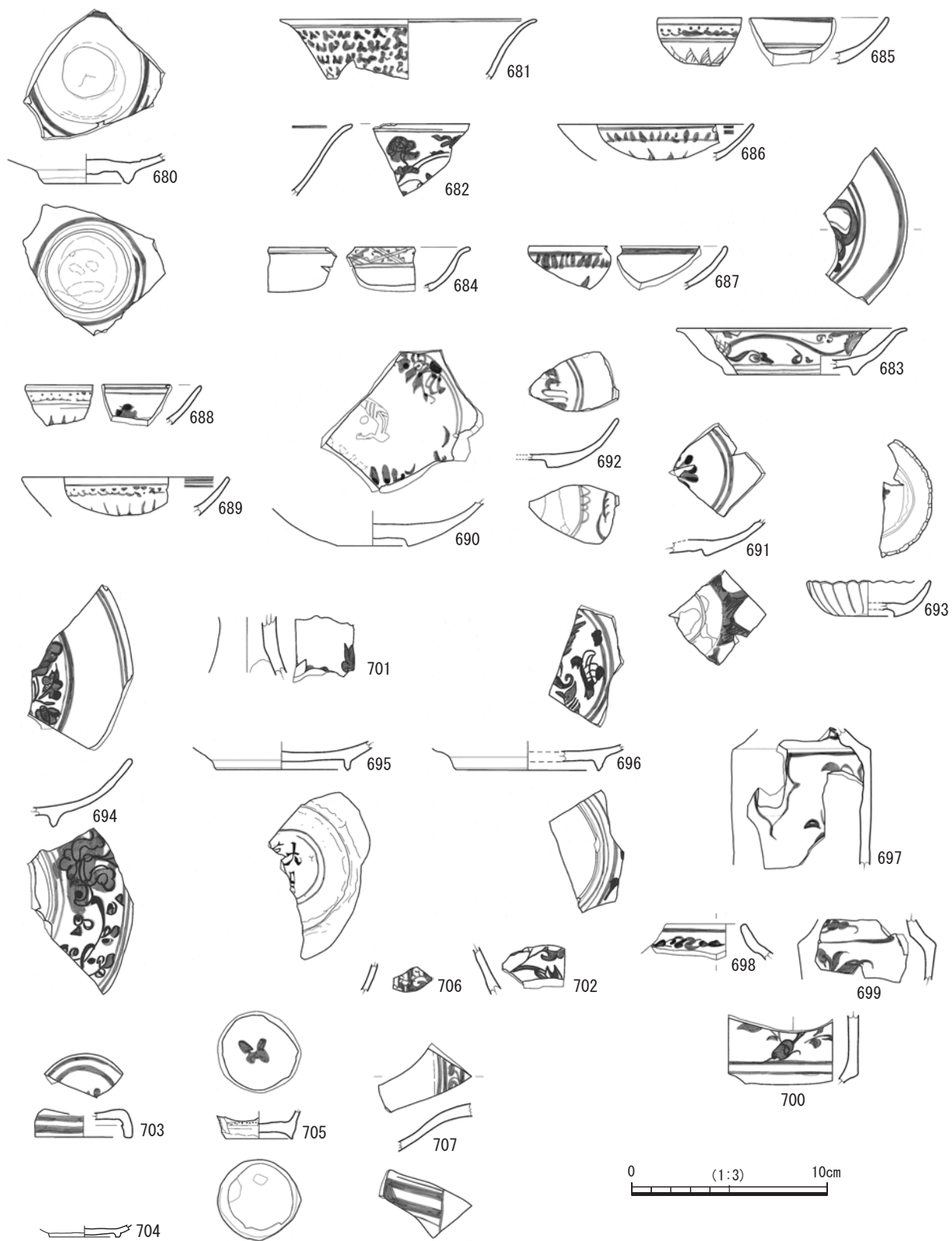
第57图 曲輪15上段 青磁



第58图 曲輪15上段 青磁・白磁



第59図 曲輪15上段 白磁・青花



第60图 曲輪15上段 青花・磁器

大振りの皿とみられ見込に貝目状の積み重ね痕跡がみられる。691・692は底部。691は畳付に釉剥ぎを施すが施釉は粗雑で外底の一部に施釉が及ぶ。692は底面の器壁が薄く畳付部分の径が小さい。畳付の釉剥ぎは粗い。693は口縁を波状の輪花形とする碁笥底の菊皿。畳付及び内底周囲を釉剥ぎするが、溶着がみられる。見込に文様を有する。

694～696は口径の大きな直口の口縁を持つ皿とみられる。小野分類E群。694は器高に比して口径が大きく焼成はよい。畳付を釉剥ぎ。695は焼成が悪く釉薬にヒビやはがれがみられる。外底に「大明年造」とみられる銘を持つ。

697～700は水注。円筒形の胴部に注ぎ口と取っ手を備え、壺のようにくびれた頂部が開口する器形とみられる。底部形態は不明。同様の器形を持つ一群で文様も似る。697は灰色を呈し文様の色にもぶい。注ぎ口が残る。内面は頸部付近まで施釉か。二次被熱。698は口縁部。口唇に釉剥ぎを施すとみられることから、蓋が付随する可能性がある。699は頸部付近。取っ手の基部とみられる残存がある。700は腰部ないし胴部下半。色調及び文様は698に似る。腰部は稜を持って屈曲し、高台状の底部となる可能性がある。内面は無釉。

701・702は瓶。文様は697～70の水注に似る。701は細い頸部で発色は悪く灰色を呈す。内面は一部が露胎。702は頸部の終端とみられる。内面の一部に釉薬がかかる。

703は合子の蓋。頂部の器壁が薄く、頂部がやや下がる。内面無釉。接合面だけでなく外周部まで釉剥ぎ。

#### その他の磁器・須恵器

704は青色系の釉薬が施された碗皿あるいは杯の底部。被熱により詳細は不明。畳付及び高台内部は無釉とみられる。705は青色系で彩色された杯の底部。外面は斑点状の文様の上から青色系で彩色。見込に彩色文様。外底まで粗く施釉し、釉薬がかからない部分がある。畳付を釉剥ぎ。706は赤絵磁器の碗皿の胴部。外面に赤色で文様を描き彩色を施す。一部を緑色で彩色。707は口縁部が鏝状に延びる皿。内面は白地に青色で文様が施され、外面は青磁釉がかかる。外面には陰刻文が施される。

708は須恵器の壺甕の頸部か。外面は格子状の調整痕を残す。外面は灰色、内面は灰白色。

#### 陶器

709～725は海外陶器。709・710は天目碗。709は黒褐釉。直線的に開く器形。外面は胴部下半から露胎。高台外面を削り込む。高台内部はわずかにへこむ程度。別個体とみられる類似する小片も出土。710は褐釉。口縁は

内側に屈曲し外へ開く。外面胴部下半は露胎。釉剥ぎが施される。711は碗の底部とみられ、糸切り離し後に高台が付けられている。底部付近まで釉薬が垂れる。内面は褐釉及び黒褐釉がみられ、見込には積み重ねの目跡が残る。全体的に粗雑な印象を受ける。712は鉢の口縁部。高縁端部を折り重ねて整形。内部は口縁に沿って帯状に釉薬がかからない部分がみられる。

713～719は壺甕。713は底部。接地面は不整で外面に煤が付着。内面底部は渦巻状の製作痕がみられる。714は胴部。大型の器形とみられるが器壁は薄い。外面は黒釉、内面は露胎。715は無頸壺の口縁部か。折り返してたたみ、口唇を平らにとる。内外面に褐釉。716は肩部。耳の基部が残る。外面は飴釉、内面には釉薬が流れたような痕跡がみられる。717は底部。外面は飴釉、内面は褐釉とみられる。底面露胎。718は肩部。大きく張り出す「く」の字状の断面形状を呈す。屈曲部の内面に段を有する。外面は黒釉、内面は黒褐釉。曲輪6上段の虎口で出土した478と同一か。719は底部。内外面露胎。

720は小型の袋物の底部付近とした。球形の壺の肩部の可能性もある。内面露胎。外面は施釉され滑らかな仕上がり。721は湾曲する極めて薄い小片。外面は赤色を呈し不整、内面はにぶい水色。素地は灰白色。中世の遺物ではなく陶器でもない可能性がある。

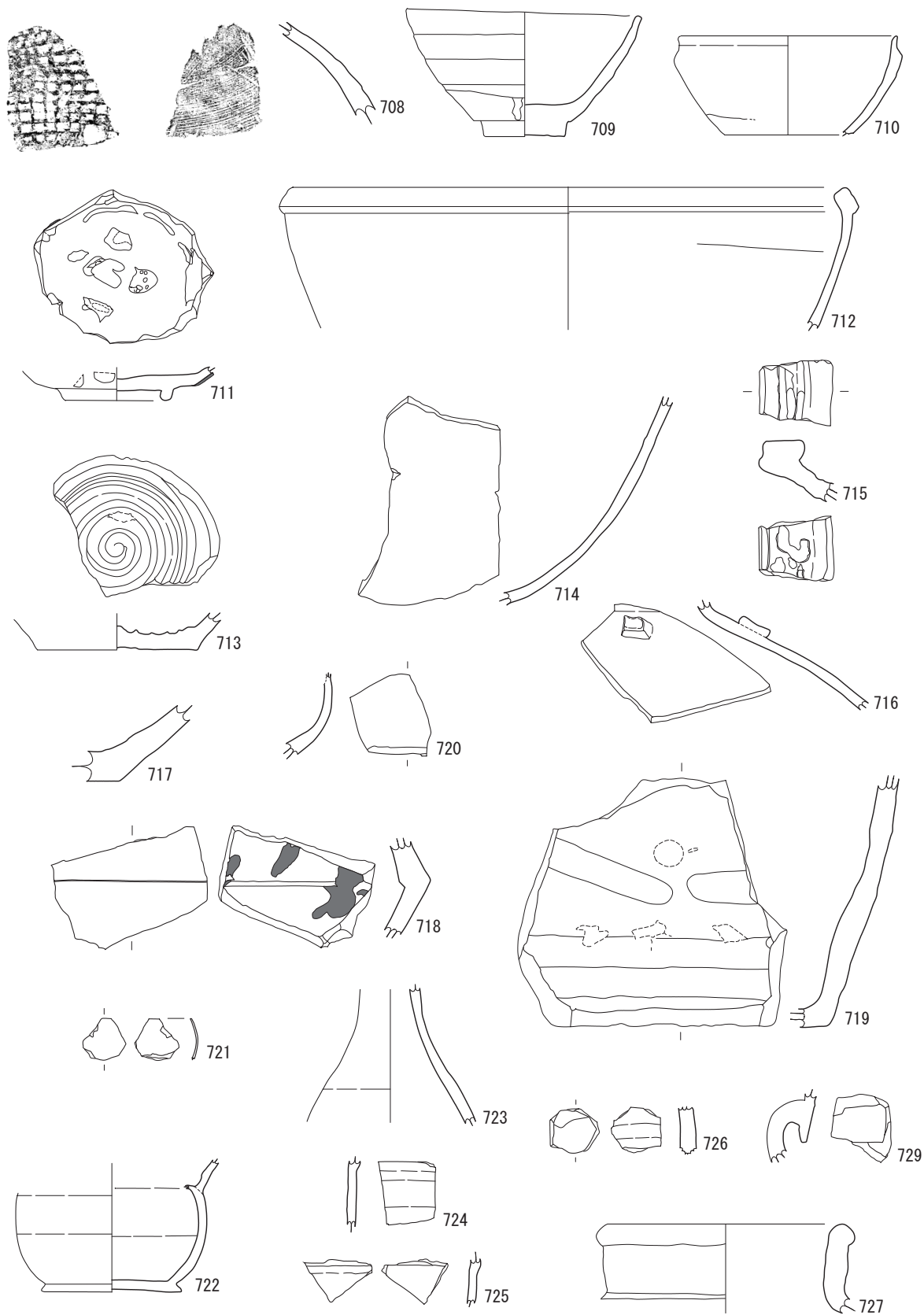
722～726は緑釉陶器。722は水注。球状の胴部と注ぎ口が残る。充実した高台を持ち、底面は渦巻状に削り込まれる。底面は露胎だが底面端部には釉薬がかかる。内面露胎。723は壺の頸部。器壁が厚い。内面露胎。724・725は器形不明の小片。屈曲部を持ち器壁は薄い。外面は整った緑釉、内面露胎。

726～733は国産陶器。726は瀬戸の碗または鉢。器壁は厚く、外面下半は露胎とみられる。内面は部分的に釉薬がかかる。727は備前の壺の口縁。728は大型の甕の口縁。口縁はやや内傾して立ち上がる。729は常滑の壺の口縁。口縁の傾きは不詳。

730～733は備前の播鉢または鉢。730は9条を単位とする目が9～10程度、放射状に刻まれる。731は口縁部破片でわずかに目が確認される。732は5条を単位とした目が刻まれる。733は口縁が肥厚し端部断面形が尖る。肥厚部では外面に稜を造り出す。小片のため内面に目がみられない。鉢の可能性もある。

734は器壁が薄く、半球状とみられる器形の口縁部。口縁部は内外面に灰緑色の釉薬がかかり胴部は露胎。口縁部内面は端部に突帯状に装飾がめぐる。鋭い工具で刻まれた目があることから播鉢とした。産地不明。





第61図 曲輪15上段 須恵器・陶器

## 土師器

735～745は土師器の皿。735～739は底面へラ切り離し。735は口縁がやや外反。737～739は底面切り離し後に調整を施す。737は底面端部まで調整し、胴部への立ち上がり滑らか。738も切り離し後に底面を調整するが底面はふくらんで張り出す。739は口縁部にタール状の付着物がみられる。740は底面糸切り離し。焼成が良く器壁も薄手。

741は外反気味に直線的に開く口縁部。器壁が薄く、胎土に不純物を多く含む。口縁内部が肥厚し口縁端部に向かって尖る。外面は赤褐色、内面は灰色。742も直線的に開く口縁部だが肥厚しない。口縁端部は断面三角形状だが、わずかに外反する。内外面褐色。

743は器壁が薄く、やや内湾する口縁。口縁端部にタール状の付着物がみられる。

744・745は手づくね成形で口縁部が肥厚する。内面を丁寧に調整されるが外面は不整。灰褐色を呈するが部分的に褐色。焼成が良いと灰色を帯びるとみられる。

746は燭台。円筒形の台座に皿が付いたような形状。皿部の底部中央から台座まで穿孔される。台座の底部は断面アーチ状に削り込まれる。

## 須恵器・土師質土器・瓦質土器・瓦器・土製品

747は須恵器の鉢。灰色を呈する半球状の器形とみられ、胴部は一度屈曲した後外反して口縁となる。口縁は肥厚し、口縁端部は断面三角形状に尖る。全体的に器壁は薄い胴部下半には煤が付着する。

748～750は土師質土器。748は碗とみられる高台を持つ底部。高台は低く、底面に輪状の粘土を張り付けて造られている。749は坏または鉢。外反して立ち上がる。胴部外面はわずかに肥厚し、調整によって帯状に装飾される。750は風炉とみられる胴部。口縁は内湾し肥厚する。胴部には窓があるとみられる。内面及び外面口縁は赤褐色、外面胴部は黄褐色を呈する。内外面とも丁寧な調整を受け、外面は研磨され滑らか。

751～754は瓦質土器。751は風炉とみられる口縁。頸部に文様帯が施される。肩部は研磨され滑らか。外面は赤褐色、内面は灰色を呈す。752は内湾する口縁部。内面は褐色、外面は灰色。外面は研磨され滑らか、スタンプによる植物の文様が施される。753は内湾する胴部破片。釜形土器とみられ、外面に鏝状部の痕跡がある。上部には垂直方向に延びる基部があり、釣り手を有するとみられる。外面は黒灰色で研磨を受け滑らか、内面は灰色。754は羽釜。内外面とも灰色を呈し、研磨を受け滑らか。鏝状の羽の下部には煤が付着。

755～757は瓦器。755は皿の口縁。口縁部内外面は黒

色化。756は碗とみられ、内外面が研磨され滑らか。757は低い高台を有する底部。

758・759は埴塼。口縁部が肥厚し、器壁の厚い半球状の碗ないし鉢。758は外面を丁寧に調整され灰色、内面には金属成分の溶着がみられる。759は外面が褐色を呈し、内面には薄い膜状に金属成分が溶着する。

## 石製品

760は石臼。石臼の上半分で石材は花崗岩とみられる。8条を単位とする目が刻まれるが、摩耗して不鮮明。外周には取っ手を差し込むホゾが残る。

761は内外面を研磨され湾曲する破片。手水鉢等、鉢状の器形となる可能性が考えられるが、詳細は不明。762は砥石。棒状の砥石から薄く剥がれたものとみられる。外面及び側面は滑らか。763・764は滑石製品。763は穿孔された湾曲する板状を呈す。穿孔部から放射状に擦過痕がみられる。穿孔部に紐等を通すものと思われる。湾曲する破片であることから、滑石製石鍋等からの転用が想定される。764は立方体状を呈し、一面から反対側へ穿孔される。穿孔部に紐等を通して利用するとみられる。

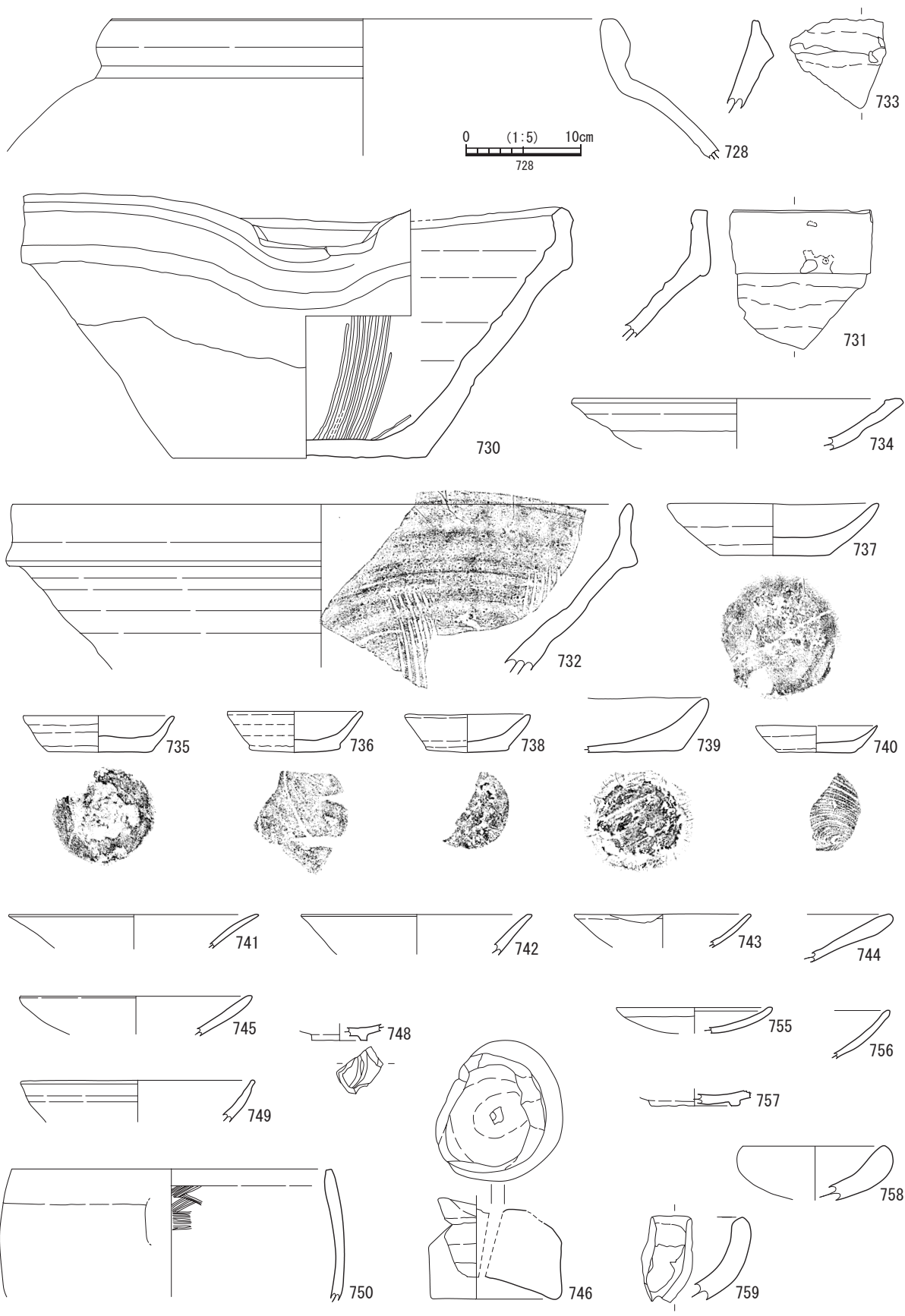
765・766は軽石製品。765は円盤を穿孔したドーナツ状を呈する製品。穿孔は大きく、全体は輪状となる。孔は不整で摩耗による変形がみられる。片面には放射状の刻みがみられる。反対側は平坦に削り取られ、放射状の刻みは施されない。766も円盤状の軽石を穿孔した製品だが穿孔は小さく、ドーナツ状ではない。

767は基石。黒色の石材で比較的厚さがあり、粒状の外観を有する。曲輪15上段では基石が13個出土し、最大径は2.6cm、最小径は1.1cmである。最大厚は1.9cm、最小厚は0.3cmである。平均径は1.63cm、平均厚は0.55cmである。

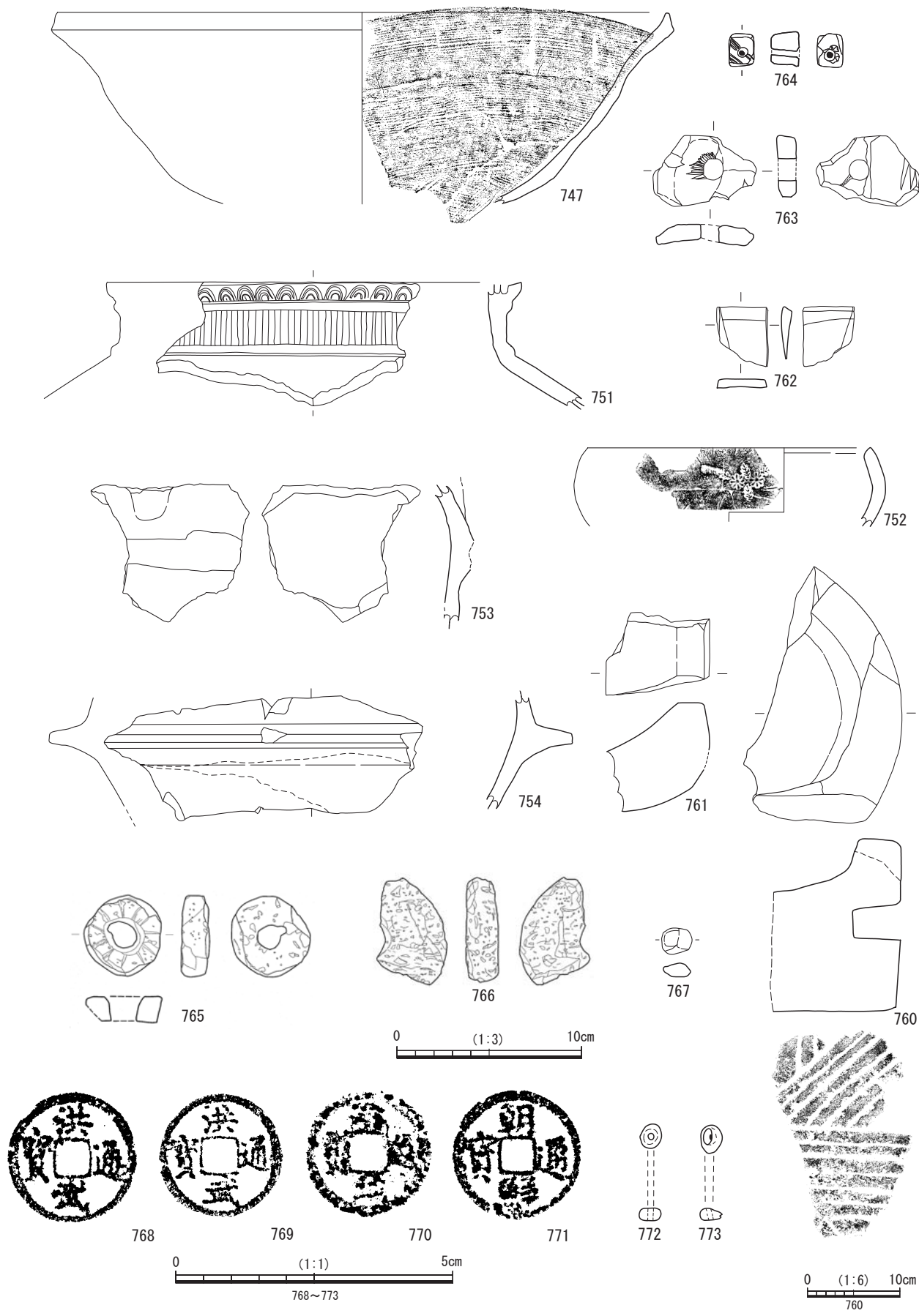
## 銭貨・ガラス製品

768～770は洪武通寶。768は銭文が明瞭で、769はさらに明瞭。銭文が太く、くっきりしている。770は、銭文がやや不明瞭。

771・772はガラス製品。不透明な青緑色を呈するビーズ状の小玉。同一の装飾品を構成するとみられるが、771は潰れて不整である。



第62図 曲輪15上段 陶器・土師器



第63図 曲輪15上段 瓦質土器・銭貨







## 第10節 曲輪15下段の調査

### (1) 調査の概要

7次調査において曲輪6の上段と下段の間に空堀が存在し、本来は独立した曲輪であることが判明した。これを受けて曲輪15の上段と下段の間の空堀の有無を確認する目的でトレンチを設定し、調査を実施した。(調査位置は第41図参照)

8次調査においてAF-37・38区に6×2mでトレンチを設定し、調査を実施した。調査の結果、曲輪15上下段の間に空堀状の遺構は見られなかった。

9次調査においてAH-39区に5×2mで曲輪15上段から15下段におよぶトレンチを設定し、調査を実施した。調査の結果、曲輪15下段は暗褐色火山灰土(Ⅲ層)を築城面とし、空堀状の遺構は確認されなかった。曲輪15下段から上段への斜面は造成され、15下段面で溝状にやや掘り下げた後、垂直に近いかたちで立ち上がる。立ち上がりは曲輪15上段面までは続かず、すぐに斜面となって上段につながる。自然地形の緩斜面を削り取り、上下段の境界となる段差を造成している。表土の下には桜島の火

正火山灰がみられ、大正期には現状みられる緩斜面となっていたことが確認された。

### (2) 遺物

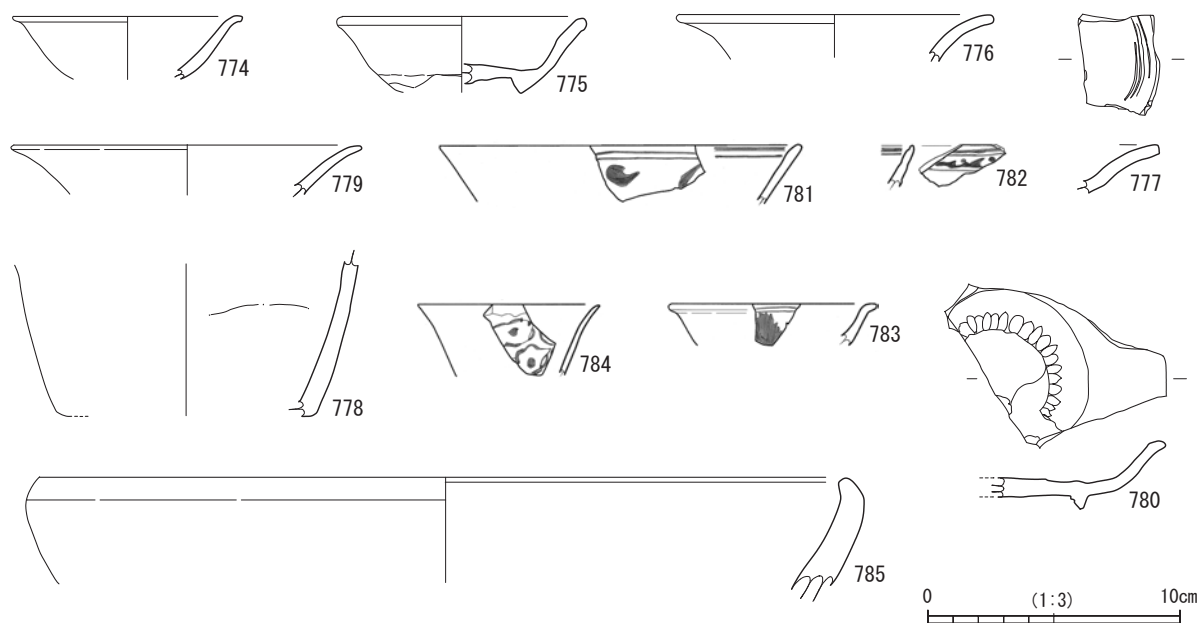
774～778は青磁。774は口縁が外反する碗。無文。上田分類のD類。775は基筒底の皿。畳付周辺を釉剥ぎし、高台内部まで無釉。776・777は腰折皿の口縁。776は口縁形態は普通で無文。777は稜花で櫛書文が施される。778は袋物の腰部とみられ内面下半は露胎。

779・780は白磁の皿。779は白色で精緻な印象。外反しラップ状に開く。780は内底に蛇ノ目釉剥ぎ。畳付から高台内部まで無釉。

781～783は青花。781・782は碗。782は外反する器形で鉢の可能性もある。

784は色絵磁器。口縁部が外反し杯または鉢とみられる。器壁は薄い。外面には青色を基本として赤色と緑色で模様が描かれる。曲輪15上段出土の705と同類か。

785は瓦質土器の鉢である。



第64図 曲輪15下段 出土遺物

曲輪15下段 出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	区・遺構	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
第64図	774	AF-37	青磁	碗	口縁部	9.2			龍泉窯系		外反 無文
	775	AF-37	青磁	皿	口縁～底部	10.0			龍泉窯系		基筒底
	776	AH-39	青磁	皿	口縁部	12.6			龍泉窯系	15c後半	腰折皿 無文
	777	AH-39	青磁	皿	口縁部				龍泉窯系	15c後半	腰折皿 稜花 櫛書文
	778	AF-37	青磁	袋物	腰部			10.0	龍泉窯系		内面下半露胎
	779	AH-39	白磁	皿	口縁部	14.0			景德鎮窯系		外反 ラップ状に開く
	780	AF-37	白磁	皿	口縁～底部				景德鎮窯系		蛇ノ目釉剥 畳付・内底無釉
	781	AF-37	青花	碗	口縁部	14.4			景德鎮窯系		
	782	AF-37	青花	碗	口縁部				景德鎮窯系		外反 鉢?
	783	AF-37	青花	皿	口縁部	8.2			景德鎮窯系		外反
	784	AH-39	磁器	杯?	口縁部	7.2			景德鎮窯系		色絵磁器
	785	AF-37	瓦質土器	鉢?	口縁部	33.2					



## 第11節 曲輪6上下段の間の空堀の調査

### (1) 調査の概要

現況では曲輪6上段と6下段の間には、上下段を分割するように北東から南西方向へ通路が走っている。通路の北西には6上段の斜面があり、南東には通路面上に6下段の土塁が存在する。通路は6上段を見上げつつ6下段の横を通して斜面を下り、空堀6へつながる。ただし、空堀6への接続は急斜面を下っていくかたちになる。

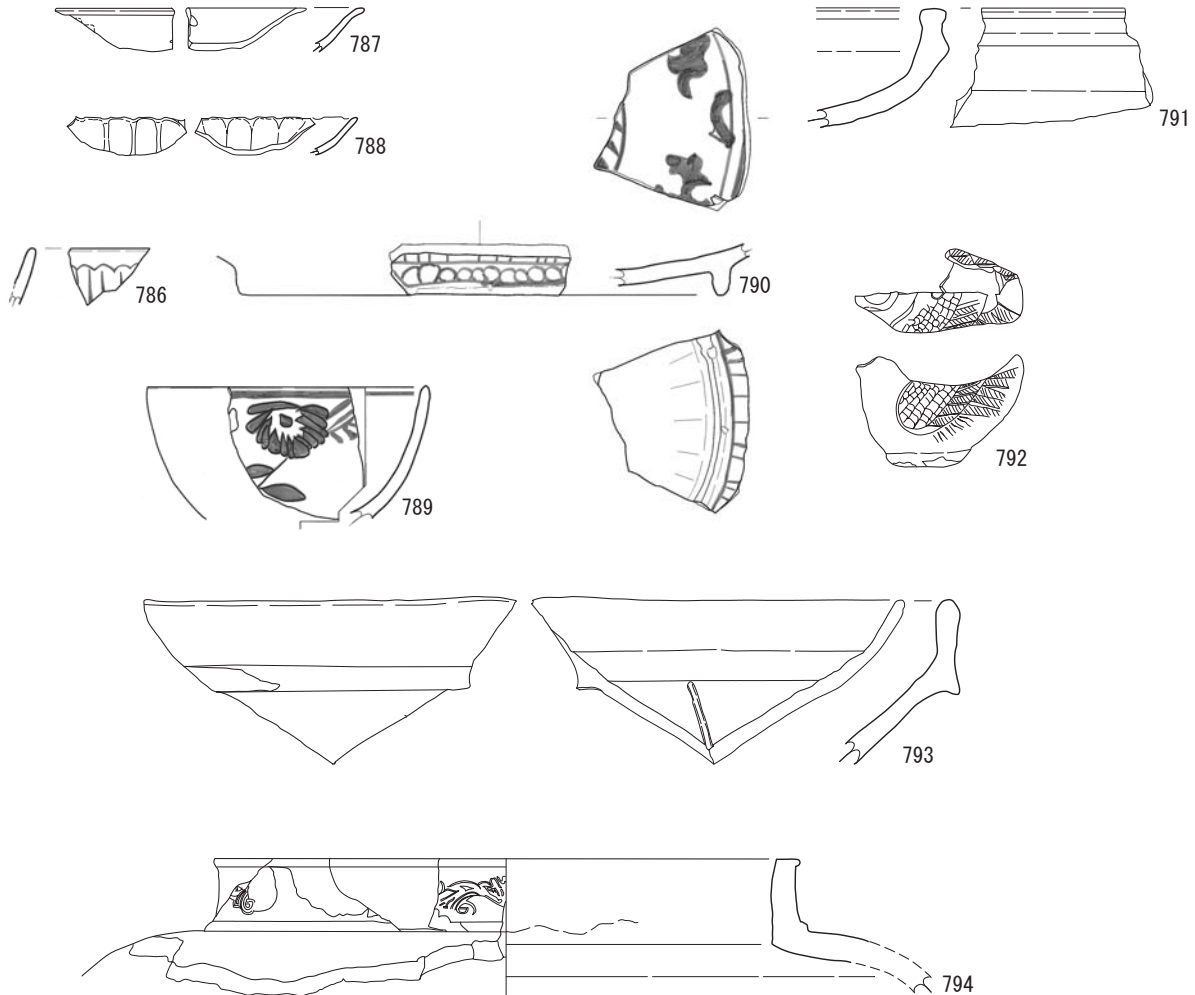
7次調査において、6上下段の間の空堀の有無を確認する目的でAC-36区に5×2mのトレンチを設定し調査を実施した。(調査位置は第41図参照)

調査の結果、空堀とみられる通路面を約2m掘り下げた地点で堀底を確認し、空堀の存在を確認した。空堀は暗褐色火山灰土(Ⅲ層)を掘り込んで造られ、曲輪6の構

成は上下段ではなく、独立した2つの曲輪であることが判明した。

### (2) 遺物

786は青磁の碗。細蓮弁文が施される上田分類のB-IV類。787・788は白磁の皿。787は口縁部が外反する端反皿。788は森田分類E-4類の菊皿。789は青花の碗。790は青花の皿でやや粗製。791は海外陶器の鉢。792は明三彩の鳥形水滴。頭部は欠損するも右半分が残存し、背中の穿孔が確認される。羽部分は黄色、全体は緑色で彩色される。793は備前の播鉢。口縁下部が突帯状に張り出す。794は瓦質土器で風炉とした。



第65図 曲輪6上下間空堀 出土遺物

曲輪6上下間空堀 出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	区・遺構	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
第65図	786	AC-39空堀	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系	16c前半	細蓮弁文
	787	AC-35空堀	白磁	皿?	口縁部				景德鎮窯系		外反
	788	AC-36空堀	白磁	皿	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	菊皿
	789	AC-36空堀	青花	碗	口縁~腰部	11.2			景德鎮窯系		
	790	AC-36空堀	青花	皿	底部		19.2		景德鎮窯系		
	791	AC-36空堀	陶器	鉢	口縁~腰部				中国		
	792	AC-36空堀	三彩	水滴					中国		鳥形水滴
	793	AC-36空堀	陶器	播鉢	口縁部				備前		
	794	AC-36空堀	瓦質土器	風炉?	口縁部	23.2					

0 (1:3) 10cm

## 第12節 空堀 8 の調査

### (1) 調査の概要

調査以前、大野久尾は巨大な1つの曲輪(曲輪6)であり、耕作による開削あるいは未完成の曲輪として、曲輪の東西を分けるように通路が存在すると考えられていた。大野久尾の構成を確認するため、通路部分を調査し2つの平坦面と通路の関係を明らかにしようと試みた。

6次調査において、東側の10Tと西側の21Tをつなぐかたちで通路を横断するトレンチを設定し、人力で掘り下げた。築城面とみられる堀底までは予想以上に深く、6次調査では、かろうじて堀底を確認するにとどまった。

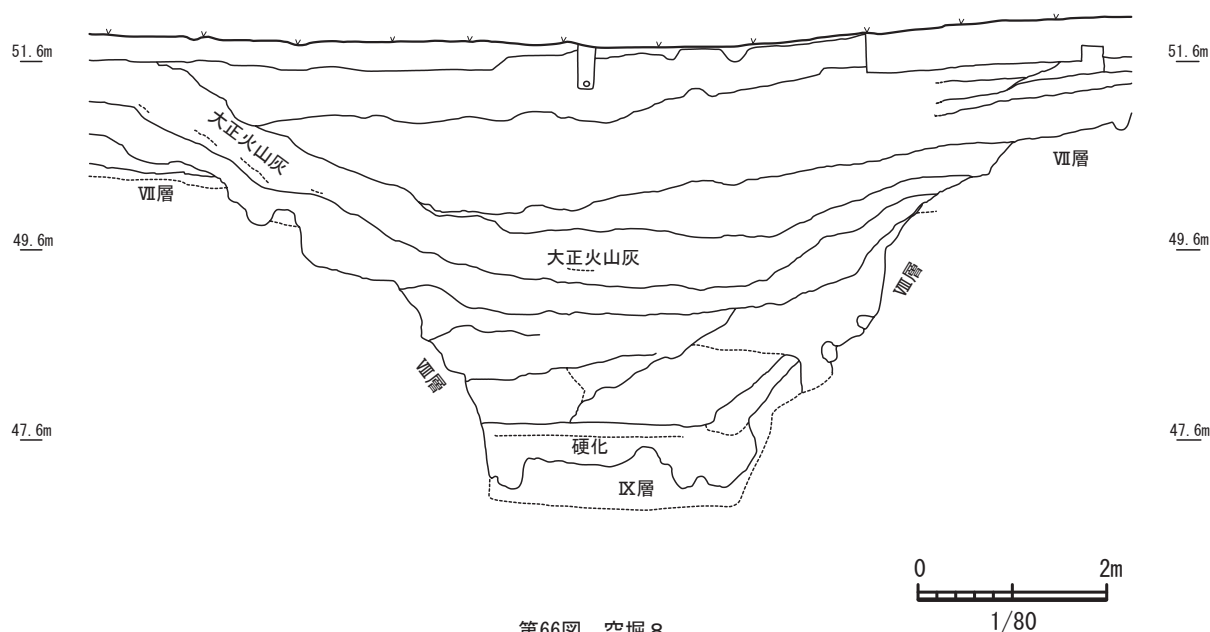
7次調査において、曲輪6上段及び15上段の茶畑とフラットな高さである通路を登り切った平坦面を調査した。6次調査の結果から、堀底までは2mを超える深さと予測されたため、重機を用いて調査区を広げながら掘り下げた。重機の使用に際しては、空堀を埋めた近現代の埋土のみを掘削し、空堀の斜面を破壊しないよう注意した。最終的には人力で断面の整形を行った。(調査地点については第60図を参照)

4.4mを測る。白色火山灰土層(IX層 シラス)まで掘り込まれている。断面観察により、大正3年の桜島の噴火による白色軽石が地表より2.4mの地点で確認される。大正期には、すでにこの高さまで空堀が埋まっていたとみられる。

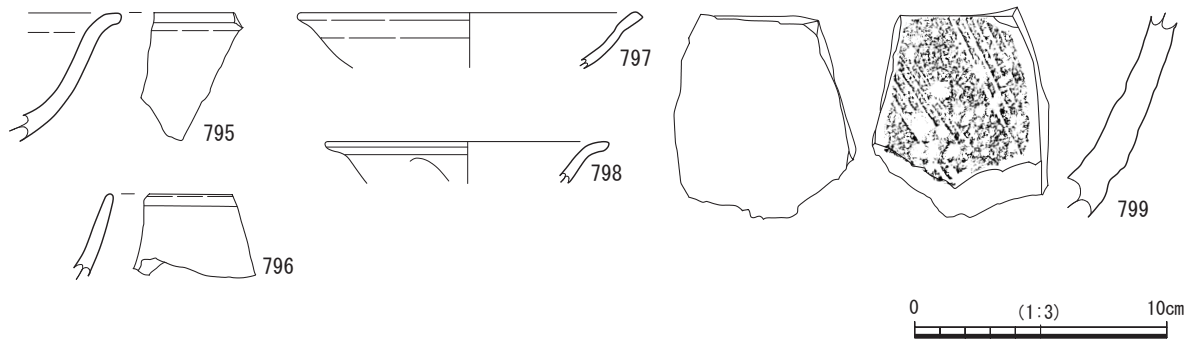
本来の大野久尾は、曲輪6と曲輪15が空堀8で隔てられた構造であったが、耕作に伴う造成によって空堀8が埋められた結果、2つの曲輪は平坦面でつながった地続きの状態となったことが推察される。

### (2) 遺物

795~798は青磁。795は外反する碗の口縁部。上田分類D類とみられる。796は直口する口縁部。口縁部外面に圈線がみられる。797・798は外反する皿の口縁部。798はへら書きの蓮弁文が施される。799は陶器の播鉢。灰白色を呈し素焼きの可能性はある。5条を単位とする目が刻まれるが不鮮明。



第66図 空堀 8



第67図 空堀8 出土遺物

空堀8 出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	区・遺構	種別	器種	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
第 67 図	795	AC-37空堀8	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系		外反
	796	AC-37空堀8	青磁	碗	口縁部				龍泉窯系		外面口縁部に圏線
	797	AC-37空堀8	青磁	皿	口縁部	13.8			龍泉窯系		外反
	798	AC-37空堀8	青磁	皿	口縁部	11.4			龍泉窯系		外反 ヘラ書蓮弁文?
	799	AC-37空堀8	陶器	播鉢	腰部						素焼?

### 第13節 添曲輪の調査

#### (1) 調査の概要

内城跡の調査と並行して策定された整備計画において、山城の外周斜面で崩壊の危険性が高い部分については最低限の斜面工事をを行い、安全を確保することとなった。曲輪15の北西部、大野久尾の土居(土居f)の外側についても、危険性が高いと判断され、斜面の工事を実施することとなった。安全性を確保する最低限の掘削のみ実施するとして設計を経た結果、大野久尾の北東部分で人家の直上に相当する部分は掘削を行うこととなった。

該当部分には、空堀7から続く平坦部分が存在する。土居fの脇を抜けて斜面を下ると右手に平坦面が存在し、斜面に並行する平坦面を抜けると、山麓へ降りる道へつながる。このルートは近現代において、内城の北東部分の山麓から山城へ登り、城内の空堀を通過して下り、内城の北西部分の山麓へと至る道として利用されていたようである。この道を利用することで山城を迂回せず内城の西側から東側へ移動することが可能であった。

当該平坦面については、土居の外側であること、土塁等が存在しないことなどから、内城跡の主要な曲輪とは考えられておらず、縄張図にも含まれず曲輪番号も設定されていなかった。

外周斜面工事を実施するにあたり、当該平坦面の一部が失われることから、確認調査を実施し状況を確認することとなった。

W-50区に2×2mでトレンチを設定して調査を実施

した。調査の結果、道跡とみられる硬化面が確認された。トレンチを南東方向に延長したところ、人為的にシラスの2次堆積とみられる灰白色火山灰土(IX層 10YR8/2)を造成して平坦面を得ていることが確認され、斜面を造成し垂直に立ち上がる曲輪の南端部を確認しようと試みたが、斜面の崩土が厚くトレンチ壁面高が2mを超えたため、安全性を考慮して調査を断念した。

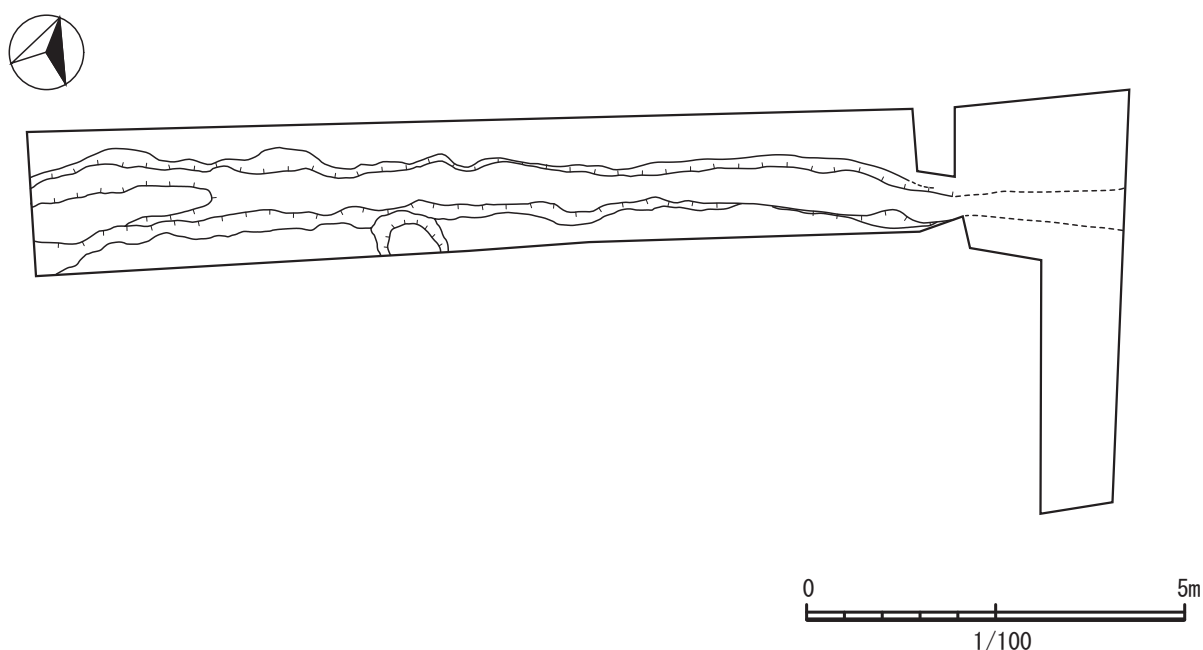
道跡を確認する目的でトレンチを東方向に約11m延長し、平坦面の調査を実施した。調査の結果、平坦面の全域に道跡が確認されたが、遺物等から中世時期の利用を裏付けることはできなかった。

調査の結果を受け、建物跡等は確認されなかったものの、内城跡を構成する曲輪のひとつである可能性が高いと認識し、斜面工事によって失われる部分を中心に周辺の詳細な測量を実施した。

#### (2) 道跡

硬化面は幅50cm程度で平坦面の中央部分を南東から北西方向に走る。検出面は大正期の桜島噴出物を含む砂質土。硬化面の下には白色火山灰土混じりの褐色土が広がり、その下は明茶色の火山灰土である。

硬化面は北側では狭くなり、当初のトレンチ断面では約30cm程度である。空堀7に接続し山城へと入る方向では道幅が広く、平坦面を抜けて斜面を下る部分では道幅が狭くなると推測される。



第68図 添曲輪 道跡

## 第4章 自然科学分析

各曲輪で検出された方形土坑は、トイレ遺構の可能性があると推測された。方形土坑がトイレ遺構であるかを確認する目的で寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定を実施した。分析を実施した方形土坑は、曲輪1の方形土坑1～3、2下段の方形土坑3・4・6、3下段の方形土坑1～3である。

各分析は株式会社古環境研究所に委託した。分析は2か年に分けて実施し、それぞれ分析調査報告書を受領した。以下に報告書の内容をまとめる。

志布志城跡におけるトイレ遺構分析(寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定)

株式会社 古環境研究所

### 第1節 目的

人の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成において特異性を示し、その特徴からトイレ遺構を識別することができる。また、その遺体群集や食物残渣から食物を直接的に探ることも可能である。

志布志城跡の発掘調査では、トイレ遺構とみられる複数の方形土坑が検出された。ここでは、これらの遺構におけるトイレ遺構の確認を主目的として寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定を行った。

### 第2節 寄生虫卵分析の概要

#### (1) 原理

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。また、寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構や人糞施肥の確認が可能であり、寄生虫特有の生活史や感染経路から、摂取された食物の種類やそこに生息していた動物種を推定することも可能である(金原, 1999)。

#### (2) 方法

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去
- 4) 25%フッ化水素酸を加えて30分静置(2～3度混和)
- 5) 遠心分離(1500rpm、2分間)による水洗の後にサンプルを2分割

6) 片方にアセトリシス処理を施す

7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

8) 検鏡・計数

### 第3節 花粉分析の概要

#### (1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

#### (2) 方法

寄生虫卵分析で2分してアセトリシス処理を施した沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成した。検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。

花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(—)で結んで示した。イネ属については、中村(1974, 1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

### 第4節 種実同定の概要

#### (1) 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。トイレ遺構では、食用時に嚥下した種実により食物の推定が可能となる。

#### (2) 方法

以下の方法で、種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料約200cm<sup>3</sup>に水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

## 第5節 曲輪1及び2下段の分析結果

### (1) 試料

分析試料は、曲輪1および曲輪2下段で検出された方形土坑から採取された試料No.1～No.6の計6点である。試料の詳細を分析結果図に示す。

### (2) 分析結果

#### 寄生虫分析

分析の結果、寄生虫卵はいずれの試料からも検出されなかった。また、明らかな消化残渣も認められなかった。

#### 花粉分析

##### 1)分類群

出現した分類群は、樹木花粉6、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉6、シダ植物孢子2形態の17である。分析結果を表1および図1に示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

分類群		曲輪1			曲輪2下段		
学名	和名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉						
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1				1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	3	1		2		3
<i>Castanea crenata</i>	クリ	2					
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイ属-マテバシイ属				4		14
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属				1		
<i>Melia</i>	センダン属						1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科						2
Leguminosae	マメ科						1
Araliaceae	ウコギ科					1	
Nonarboreal pollen	草本花粉						
Gramineae	イネ科		6	7		5	13
<i>Oryza type</i>	イネ属型		1				
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属						1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		2	1		2	
Cruciferae	アブラナ科		1	5	1		4
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1				1	1
Fern spore	シダ植物孢子						
Monolate type spore	単条溝孢子	2			1	5	4
Trilate type spore	三条溝孢子	1			1	1	
Arboreal pollen	樹木花粉	6	1		7	1	18
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					1	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	10	13	1	8	19
Total pollen	花粉総数	7	11	13	8	10	40
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	1.4	6.6	7.8	4.8	6.0	2.4
		×10	×10	×10	×10	×10	×10 <sup>2</sup>
Unknown pollen	未同定花粉	2					1
Fern spore	シダ植物孢子	3			2	6	4
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)				(+)	

表1-1 曲輪1及び2下段における花粉分析・寄生虫卵結果

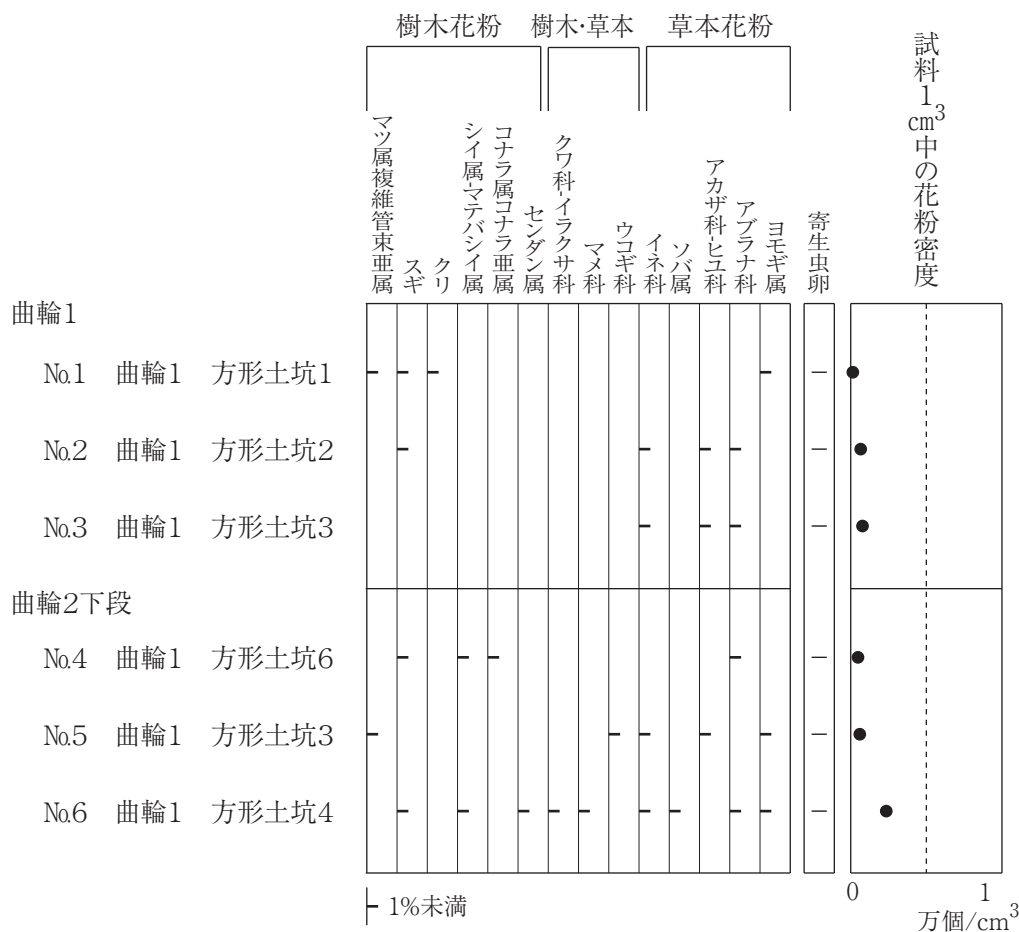


図1 曲輪1及び2下段における花粉分析・寄生虫卵結果

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、クリ、シイ属—マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、センダン属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

試料No. 1 では、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、スギ、クリ、草本花粉のヨモギ属、シダ植物単条溝孢子、シダ植物三条溝孢子が検出されたが、いずれも少量である。

試料No. 2 では、樹木花粉のスギ、草本花粉のイネ科、

イネ属型、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科が検出されたが、いずれも少量である。

試料No. 3 では、草本花粉のイネ科、アカザ科—ヒユ科、アブラナ科が検出されたが、いずれも少量である。

試料No. 4 では、樹木花粉のスギ、シイ属—マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のアブラナ科、シダ植物単条溝孢子、シダ植物三条溝孢子が検出されたが、いずれも少量である。

試料No. 5 では、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、樹木・草本花粉のウコギ科、草本花粉のイネ科、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属、シダ植物単条溝孢子、シダ植物三条溝孢子が検出されたが、いずれも少量である。

試料No. 6 では、樹木花粉のスギ、シイ属—マテバシイ属、センダン属、樹木・草本花粉のクワ科—イラクサ科、マメ科、草本花粉のイネ科、ソバ属、アブラナ科、ヨモギ属、シダ植物単条溝孢子が検出されたが、いずれも少

量である。

種実同定

1)分類群

分析の結果、樹木1分類群が同定された。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don 種子 スギ科  
長さ×幅：5.52mm×2.53mm、4.97mm×1.72mm

茶褐色で長楕円形を呈し、狭い側翼がある。

2)種実群集の特徴

試料No.1では、スギ2が検出された。試料No.2～No.6では、種実は検出されなかった。

分類群		部位	曲輪1			曲輪2下段		
学名	和名		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
Arbor	樹木							
<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ	種子	2					
Total	合計		2	0	0	0	0	0

(200cm<sup>3</sup>中0.25mm篩)

表1-2 曲輪1及び2下段における種実同定結果



1 アワ炭化果実



2 ホタルイ属果実(破片)

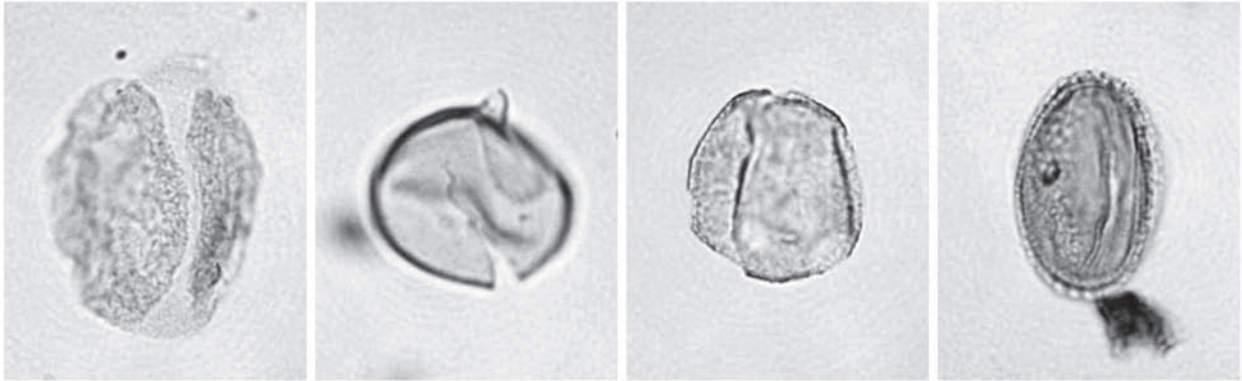
— 0.1mm

— 0.5mm

曲輪1及び2下段の種実



曲輪 1 及び 2 下段の花粉・孢子

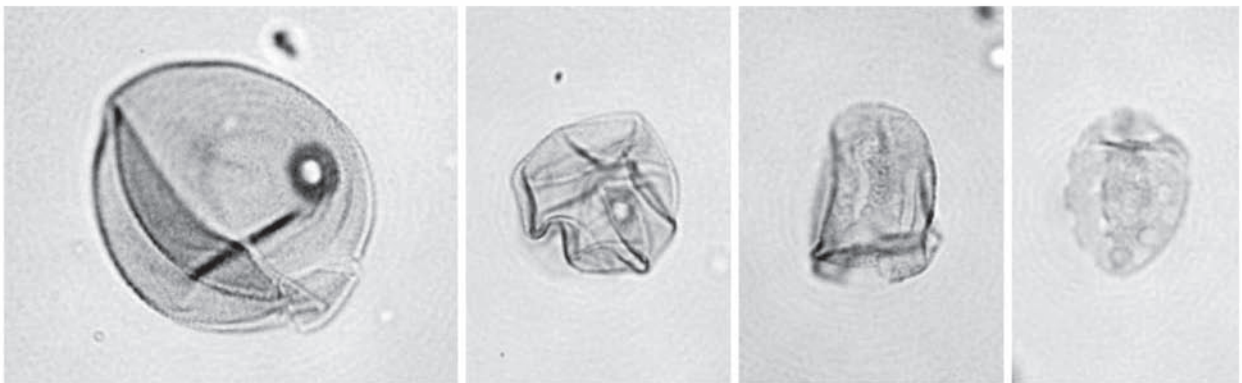


1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 コナラ属コナラ亜属

4 ウコギ科

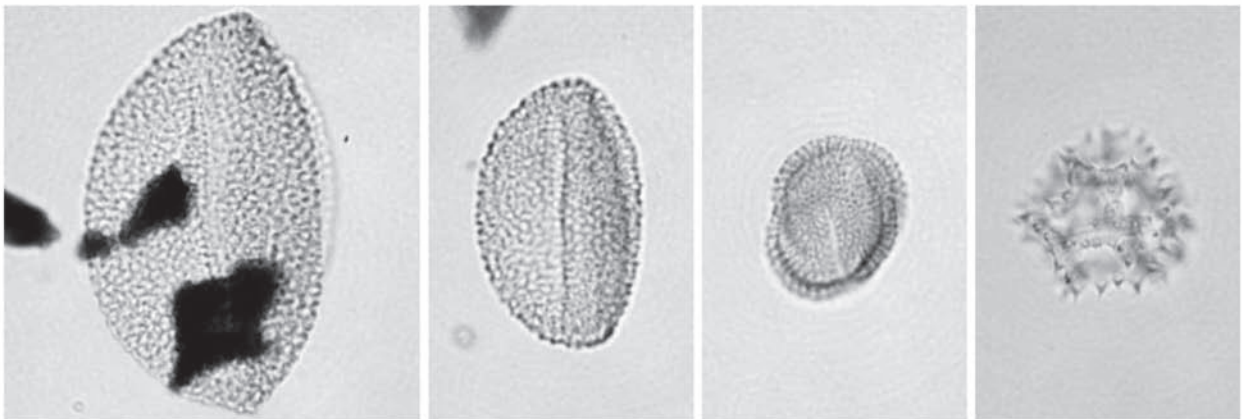


5 イネ科

6 イネ科

7 カヤツリグサ科

8 アカザ科-ヒユ科

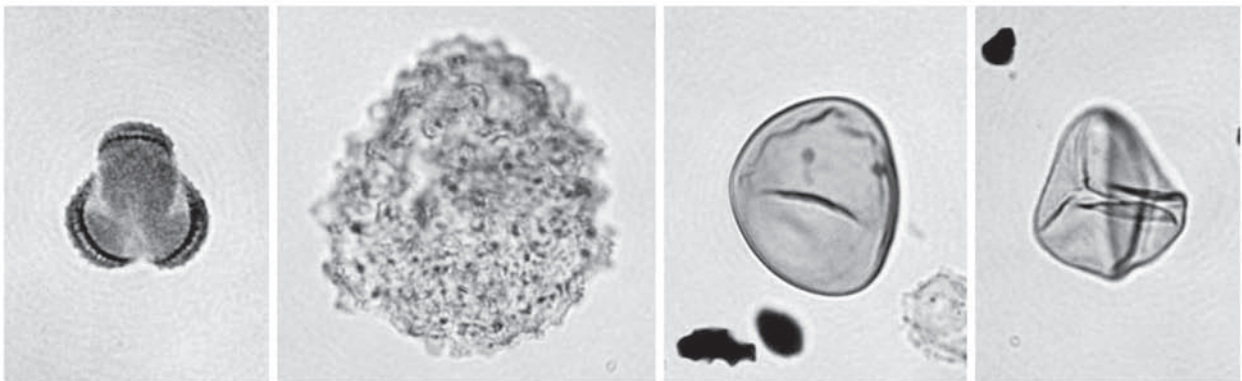


9 ソバ属

10 ソバ属

11 アブラナ科

12 タンポポ科



13 ヨモギ属

14 ベニバナ

15 シダ植物単条溝孢子

16 シダ植物三条溝孢子

— 10 $\mu$ m

## 第6節 曲輪3下段の分析結果

### (1) 試料

分析試料は、方形土坑1、方形土坑2、方形土坑3の堆積物について、遺構底部とその上位層から3点ずつ採取された計9点である。花粉分析と寄生虫卵分析はこれらの9点について、種実同定は下位より2点ずつの計6点について分析を行った。

### 寄生虫卵分析

分析の結果、寄生虫卵はいずれの試料からも検出されなかった。また、明らかな消化残渣も認められなかった。

### 花粉分析

#### 1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉9、シダ植物孢子2形態の計17である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

#### 〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、スギ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

#### 〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

#### ウコギ科

#### 〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、タンポポ科、ヨモギ属、ベニバナ

#### 〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

#### 2) 花粉群集の特徴

##### a) 方形土坑1 (図1)

底部の試料1-1では、花粉密度が低く、草本花粉が約95%を占める。草本花粉では、イネ科が優占し、ソバ属、ヨモギ属、アブラナ科、ベニバナなどが伴われる。樹木花粉では、マツ属複雑管束亜属、スギ、ブナ属がわずかに認められた。試料1-2と試料1-3では、草本花粉のイネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

##### b) 方形土坑2

底部の試料2-1では、草本花粉のイネ科、アカザ科-ヒユ科、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属が検出されたが、いずれも少量である。試料2-4と試料2-5でも、イネ科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

##### c) 方形土坑3

底部の試料3-1では、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、樹木花粉のスギが検出されたが、いずれも少量である。試料3-2では、草本花粉のイネ科、タンポポ科、ヨモギ属、試料3-4ではアカザ科-ヒユ科が検出されたが、いずれも少量である。

### 種実同定

#### 1) 分類群

分析の結果、草本2が同定された。主要な分類群を顕微鏡写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

#### 〔草本〕

アワ *Setaria italica* Beauv. 炭化果実 イネ科

黒色で類円形を呈し、胚の部分がくぼむ。

ホタルイ属 *Scirpus* 果実(破片) カヤツリグサ科

黒褐色で、やや光沢がある。広卵形を呈し、断面は両凸レンズ形である。表面には横方向の微細な隆起があり、基部に4~8本の針状の付属物を持つ。

#### 2) 種実群集の特徴

##### a) 方形土坑1

試料1-1では、アワ1、ホタルイ属1が検出された。試料1-2では、種実は検出されなかった。

##### b) 方形土坑2

試料2-1、2-2では、種実は検出されなかった。

##### c) 方形土坑3

試料3-1、3-2では、種実は検出されなかった。

## 第7節 考察

### (1) トイレ遺構の可能性について

トイレ遺構の可能性が考えられる方形土坑から採取された試料について、寄生虫卵分析、花粉分析、種実同定を行った。その結果、寄生虫卵および明らかな消化残渣は、いずれの試料からも検出されなかった。

花粉分析では、花粉があまり検出されなかったが、曲輪3下段の方形土坑1の底部(試料1-1)では雑穀を含むイネ科が優占し、その他の方形土坑では食用になるイネ属型、ソバ属、アブラナ科、薬用になりトイレ遺構からの検出例が多いアカザ科-ヒユ科が部分的に少量認められ、ベニバナも認められた。

種実同定では、曲輪1の方形土坑1からスギが検出された。曲輪3下段の方形土坑1の底部(試料1-1)から食

分類群	方形土坑1			方形土坑2			方形土坑3		
	1-1	1-2	1-3	2-1	2-4	2-5	3-1	3-2	3-4
学名	和名	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉								
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑維管束亜属	1							
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	1					1		
<i>Fagus</i>	ブナ属	1							
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属			1	1				
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1						
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Araliaceae	ウコギ科	1							
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	91	33	4	2	1	1	24	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1						1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	7							
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1			2				1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1							
Cruciferae	アブラナ科	6						8	
Lactuoidaeae	タンポポ重科								2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	7		1		3	2	4	1
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ	1							
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	3	2			1		3	1
Trilate type spore	三条溝胞子	1							
Arboreal pollen	樹木花粉	3	1	0	1	1	0	1	0
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	115	33	5	4	4	3	37	5
Total pollen	花粉総数	119	34	5	5	5	3	38	5
Pollen frequencies of 1cm <sup>3</sup>	試料1cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	7.3	2.4	3.0	3.0	3.0	1.8	2.4	3.5
		$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10$
Unknown pollen	未同定花粉	2	0	0	0	0	0	2	0
Fern spore	シダ植物胞子	4	2	0	0	1	0	3	1
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)

表2 曲輪3下段における寄生虫卵・花粉分析結果

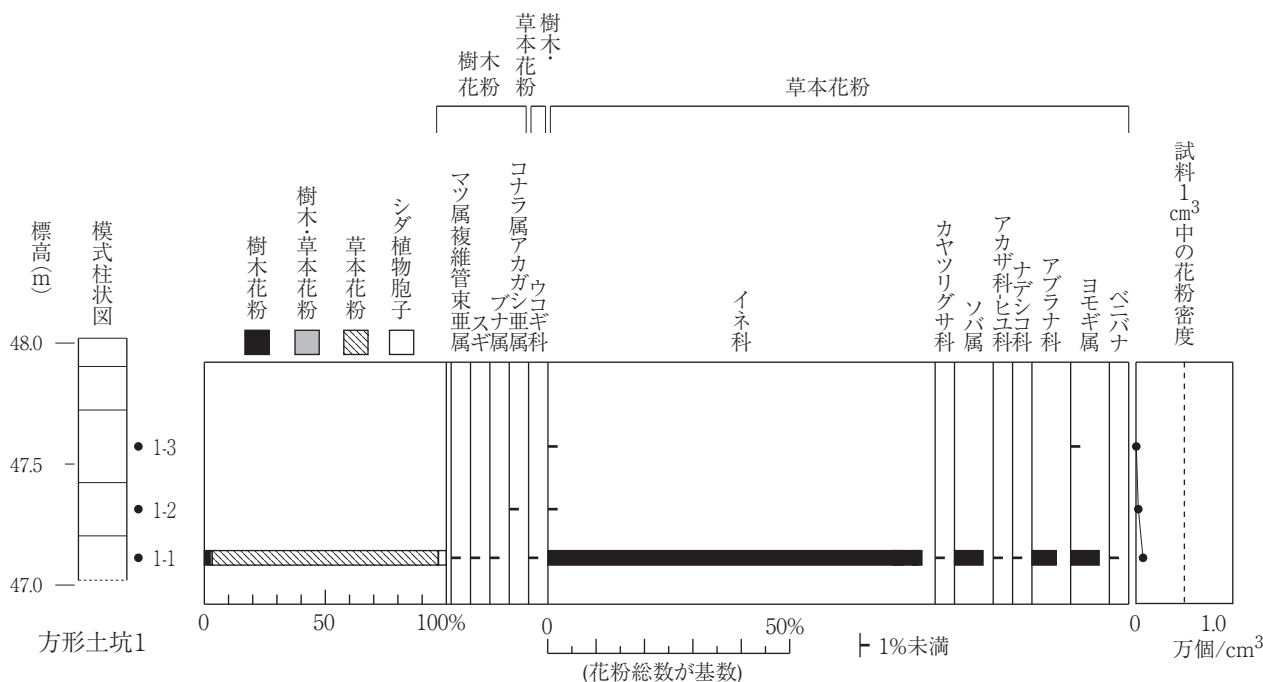


図2 曲輪3下段方形土坑1における花粉ダイアグラム

用のアワが検出された。

以上のことから、方形土坑底部の堆積物については、糞便堆積物に由来する可能性が考えられ何らかの人為的な痕跡は認められるものの、寄生虫卵や明らかな消化残渣が検出されないことから、トイレ遺構の可能性については確定できない。トイレ遺構の堆積物で寄生虫卵が検出されない原因としては、頻繁に糞便が汲み出されていたこと、寄生虫症が蔓延していなかったこと、および試料採取箇所が寄生虫卵が集積する遺構底面部からはずれていたことなどが想定されるが、ここでの原因は不明である。また、花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で、花粉などの有機物が分解されたことなどが考えられる

## (2) 周辺の植生と環境

花粉があまり検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、方形土坑1の底部の花粉組成が当時の植生を反映しているとする、遺構の周囲はイネ科、ヨモギ属、アカザ科-ヒユ科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられ、周辺ではイネ、ソバ、アブラナ科などの栽培が行われていた可能性が考えられる。また、周囲にはマツ属、スギ、カシ類(コナラ属アカガシ亜属)、シイ類(シイ属-マテバシイ属などの樹木が生育していたと考えられる。

## 曲輪3下段の種実



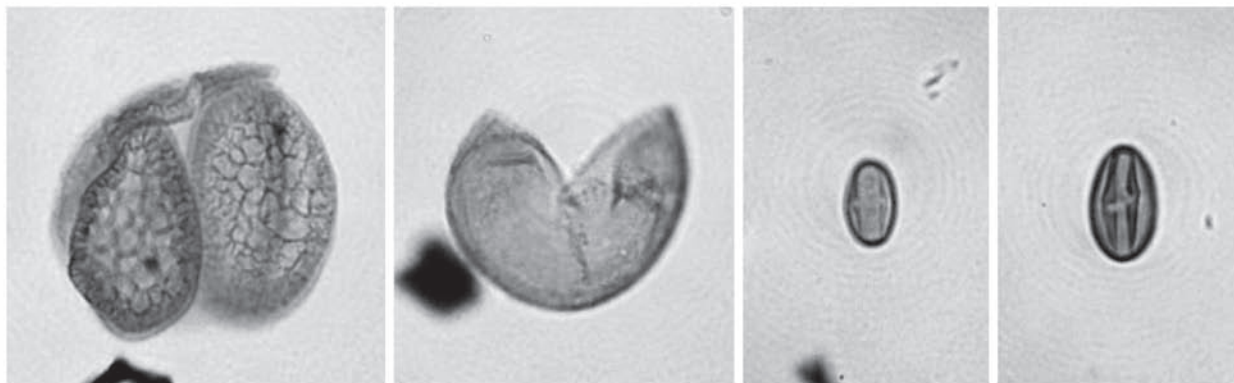
1 スギ種子



2 スギ種子

— 1.0mm

曲輪3下段の花粉・孢子

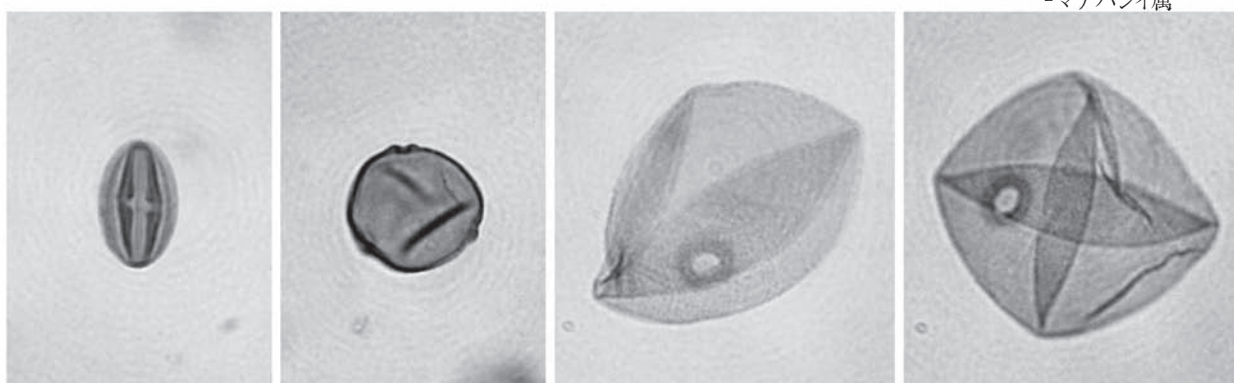


1 マツ属複雑管束型

2 スギ

3 クリ

4 シイ属  
-マテバシイ属

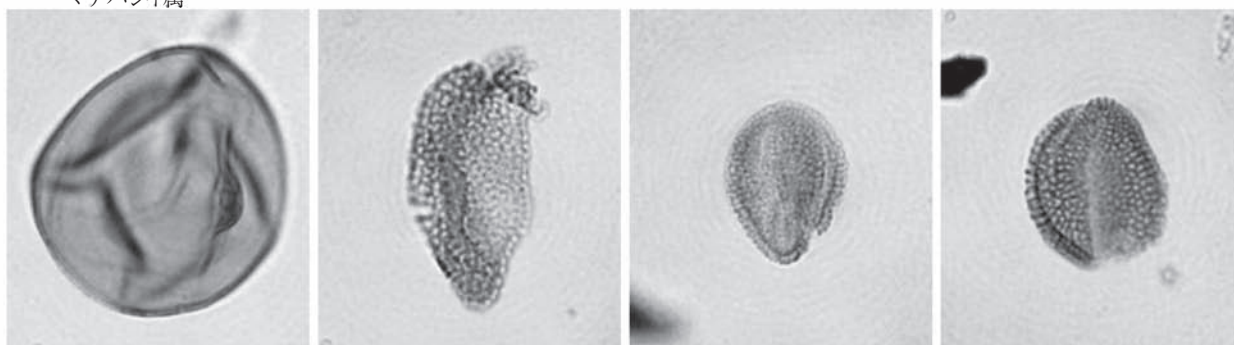


5 シイ属  
-マテバシイ属

6 クワ科-イラクサ科

7 イネ科

8 イネ科

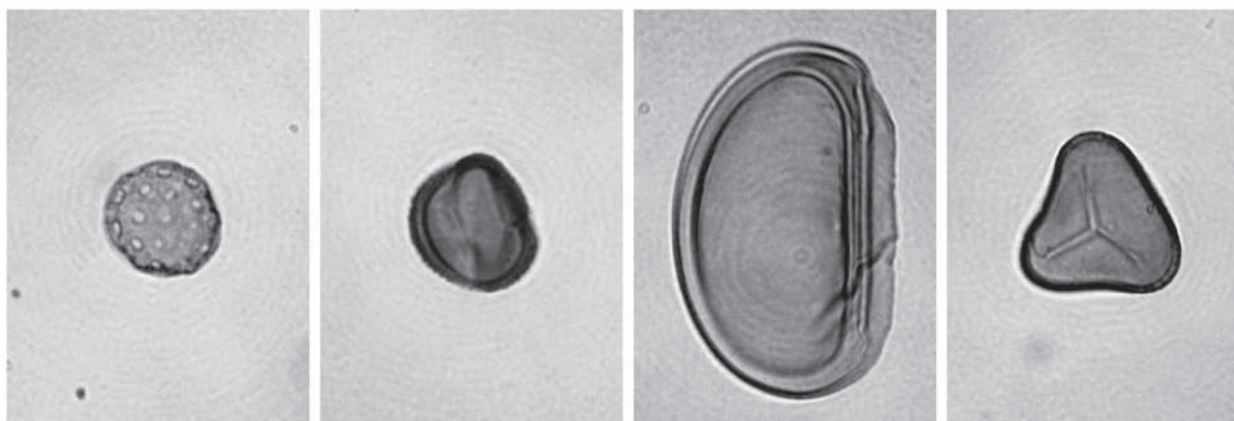


9 イネ属型

10 ソバ属

11 アブラナ科

12 アブラナ科



13 アカザ科-ヒユ科

14 ヨモギ属

15 シダ植物単条溝孢子

16 シダ植物三条溝孢子

— 10 $\mu$ m

## 文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard(1992)Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Journal of Archaeological Science, 19, p. 231-245.

金子清俊・谷口博一(1987)線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p. 9-55.

金原正明・金原正子(1992)花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-, 奈良国立文化財研究所, p. 14-15.

金原正明(1999)寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p. 151-158.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村純(1967)花粉分析. 古今書院, p. 82-110.

中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

笠原安夫(1985)日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

笠原安夫(1988)作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣 出版, p. 131-139.

南木睦彦(1991)栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通 I, 雄山閣出版株式会社, p. 165-174.

南木睦彦(1993)葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.

吉崎昌一(1992)古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナル No. 355, ニューサイエンス社, p. 2-14.

## 第5章 総括

調査の成果として、遺構、遺物、その他中世山城に關する事項について、判明した事項及び推測される事項を列記する。史跡の保存を目的とした部分的な調査であり、曲輪全域に調査が及ばないことから不明な部分も多いが、中世山城の調査事例としてまとめる。

### 第1節 各曲輪の概要

曲輪1は、『志布志記』の記載より「矢倉場」と称される。柱跡及び堀立建物跡、方形土坑が確認されている。曲輪の北西部は造成で得られた平坦面である。1次調査以前の確認調査により、本来は曲輪の南西部が約3.5m低い、上下2段の構成であったことが判明している。また、曲輪1の北側の空堀と平坦面を調査したことにより、この空堀が崩土で埋まっていること、本来は空堀と曲輪面の高低差が大きかったことも判明している。

曲輪2上段では柱跡及び堀立建物跡、方形土坑、焼土跡が確認されている。曲輪の南側は造成で得られた平坦面である。曲輪の北側に通路が存在するが、本来のものとは考えにくい。

曲輪2下段は、曲輪1を見下ろす位置に存在するL字形に屈折した細長い曲輪である。柱跡及び堀立建物跡等が確認されている。曲輪の南側は造成によって得られた平坦面である。L字の屈曲部にあたる部分は崩壊流出している可能性がある。また、曲輪面に「第二次世界大戦時の砲台跡」と称される円形の掘り込みが存在する。

曲輪3上段は内城の中心となる曲輪と考えられ、地域では「本丸」と称されている。曲輪3上段は「本丸上段」と呼ばれる。1次調査以前の確認調査によって調査され、建物跡が確認され、曲輪の南東は造成で得られた平坦面であることが判明している。

曲輪3下段は「本丸下段」と称される。柱跡及び堀立建物跡、方形土坑が確認されている。鉄滓や灰を含んだ大型の土坑が確認され、工房等の存在が推測されていたが、明確な工房跡等は確認できていない。現在の通路の北側に本来の虎口が確認され、曲輪面及び曲輪3上段へ向かう道跡も確認された。曲輪の北側には上段へと続く階段遺構が存在する。階段遺構が存在する面の麓では空堀が検出され、上段への移動を制限する構造がみられる。曲輪の南側では造成によって平坦面を得ている。また、曲輪面に「第二次世界大戦時の砲台跡」と称される円形の掘り込みが存在する。

曲輪4上段は『志布志記』の「中野久尾」に相当すると考えられる。柱穴は検出されたものの、建物跡を想定するには至らなかった。原地形は北から南へ大きく傾斜

し、曲輪の東側は造成によって得られた平坦面である。

曲輪6上段は『志布志記』の「大野久尾」に相当すると考えられる。柱穴は検出されたものの、建物跡を想定するには至らなかった。曲輪の南側で本来の虎口を検出し、溝状遺構及び道跡、配石遺構を確認した。曲輪の北西部では耕作による造成を受け、築城面が失われている。

曲輪15上段は『志布志記』の「大野久尾」に相当すると考えられる。曲輪の南側で本来の虎口を検出し、溝状遺構及び道跡、配石遺構を確認した。曲輪の北西部と南東部は、本来、上下段に分かれる構造であったと推察されるが、上段に当たる北西部の一部は耕作のための造成で築城面が失われている。南東部では溝状遺構によって2つに区画される。

### 第2節 虎口

曲輪3下段、6上段、15上段の3か所で虎口の調査を実施した。いずれも空堀からスロープ状に曲輪面に向かい、左右どちらからか90度に近い角度で折れ曲がる構造となっている。虎口の延長上には、道とみられる硬化面が伴う。

曲輪3下段では、曲輪の端に造られ、曲輪3上段の斜面を壁状に利用して狭い通路としている。曲輪6上段では、曲輪の中央に造られ、空堀から登って右に折れたところでステップ上の段差がみられる。曲輪15上段でも曲輪の中央に造られるが、空堀から分かれて斜面を登り、左に折れた後は直線的に曲輪面に至るとみられる。

なお、曲輪2上段及び4上段では、虎口部分及び虎口付近の調査を実施したものの虎口の構造を把握するに至らず、曲輪2下段では安全のために調査を断念した。1次調査以前の確認調査において、曲輪1では虎口の構造を把握するに至らず、5下段ではほぼ直角に折れる虎口の一部を確認している。

曲輪5上段の虎口は未調査だが、山城関係の書物等において枡形虎口として紹介される場合がある。現況は、空堀5から分かれて登り土塁の裏側に入ると左に折れて直進し、曲輪面に至る。これは、耕作に伴う近現代の開削によって新たな通路が造られた結果、枡形のようにみえるものであり、本来の虎口の形状ではない。本来の虎口は、現地に残る窪地などの状況から土塁の裏側に入った後、直線的に曲輪面に至るものと想定される。

### 第3節 土塁

土塁を断ち割り、土を盛って造成した「盛土塁」か、地山を削り残して造った「切土塁」か、土塁の築造方法

を確認する調査を実施した。曲輪3下段、4上段、6上段、15上段では築造方法を確認することができた。盛土塁と確認されたのは曲輪3下段の西側、切土塁と確認されたのは曲輪4上段の西側、6上段の北西、15上段の北東である。曲輪6上段の北西部では、土塁が傾斜地に張り出すように築かれている

また、1次調査以前の確認調査において、曲輪1、3上段、5上段、5下段、6下段、15上段、15下段の土塁について築造方法を確認している。盛土塁と確認されたのは曲輪1の東側、5下段の東側、15下段の北西であり、切土塁と確認されたのは、3上段の西側、5上段の西側、6下段の北部、15上段の北部である。

曲輪の北側及び西側では切土塁が確認され、東側では盛土塁が確認される傾向にある。これは築城前の地形が北西から南東に向けて傾斜しているためと推察される。

1次調査以前に確認された特徴的な例としては、曲輪1の東側では白色火山灰土(Ⅸ層 シラス)を削り、その上に盛土を行っている。調査地点は櫓台が想定される丘状の部分であり、丘状部分全体が盛土とは考えにくい。盛土を行いやすい形状、崩壊しにくい形状に削ってから盛土を行うことで、安定した高台を確保したものと想定される。これと同様に地山を造成してから盛土塁を築造する例が複数みられる。曲輪5上段の東側では、傾斜する原地形を削平したうえで盛土塁を造っており、盤築とみられる突き固めたような築造方法がみてとれる。

また、曲輪3上段西側の盛土塁中からは、階段状に配置された板石が検出され、土塁上に登るためにステップ状の足場を備えたものと考えられる。

#### 第4節 方形土坑

各曲輪出で検出された「平面プランが長方形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれた土坑」を方形土坑として報告している。曲輪1、2上段、2下段、3下段、15上段で検出されている。検出されなかった曲輪は、曲輪4上段、6上段であるが、4上段はトレンチ調査で調査面積が少ない点を考慮すべきと考える。

埋土は柱穴等と同じ茶色土であるが、白色火山灰土(Ⅸ層 シラス)を含む場合も多い。白色火山灰土が層状に認められ、人為的、段階的に埋められたことをうかがわせる例もある。埋土中からは陶磁器や瓦等が出土し、拳大から人頭大の礫が大量に確認された例もある。

土坑の大きさは、短辺60～100cm、長辺80cm～120cm程度で深さ50～180cm程度を測る。曲輪によっては方形土坑が密集または近接し、方形土坑同士が切り合う例もある。柱穴や建物に近接する例も多い。

トイレ遺構の可能性が考えられたため、底面付近の埋

土を採取し科学分析を行っている。すべての方形土坑に対して分析を行ってはいないが、3つの曲輪で計9基の方形土坑を分析した結果、トイレ遺構の決定的な論拠となる寄生虫卵及び消化残渣の存在は、確認されていない。科学分析の詳細は第4章にまとめている。

トイレ遺構から寄生虫卵が検出されない要因としては、糞便が頻繁に汲み出されていた、寄生虫症が蔓延していなかった、採取場所が遺構底面部から外れていたなどが考えられる。遺構の形状としては、近隣の中世山城でトイレ遺構とされるものとは類似しない。トイレ遺構以外に想定される機能は、墓、地下貯蔵庫等である。

#### 第5節 縦穴状遺構

曲輪面から縦方向に深く掘られた、用途及び性格不明の遺構を縦穴状遺構としている。

曲輪3下段では、曲輪の端部で検出され底面が確認できなかったことから、曲輪面から空堀に抜ける隧道、曲輪面の水を空堀に逃がす水抜き穴の機能が想定された。遺構上に盛土塁が存在することから、隧道の場合は土塁の築造以前に利用されたと考えざるを得ない。掘った穴を埋め戻しても水抜き穴としては機能すると考えられ、土塁の築造以前に水抜き穴を造り、その上に土塁を築くことはあり得ると思われる。

曲輪15上段では、曲輪の中央部で検出され深さ約2mで底面が確認された。調査当時は貯蔵穴等の用途が想定されていたが、水はけのよい火山灰土まで掘り込まれていることから、水抜き穴として機能する可能性が推測される。

#### 第6節 特徴的な遺物の出土状況

曲輪面の調査において、1次調査以前の確認調査も含めて、曲輪の性格を表すと思われる遺物、碗皿以外の青磁、彩色磁器、三彩、京都系土師器、ガラス製品等について表にまとめた。なお、銭貨については別に節を設ける。

国産を含む天目碗については、内城跡における中心的な曲輪を特定する要素と思われたが、調査面積の大きい複数の曲輪で確認されている。

手づくね成形の土師器は、ほぼ全域で出土している。一方で、手づくね成形の土師器のなかでも白色精緻で京都系土師器とした一群は、曲輪2下段及び3下段で確認されている。

瓦については、主要な曲輪の主要な建物のみならず瓦が葺かれたと推測されているが、出土状況では内城の中心とされる曲輪3(本丸)に限定されない。ただし、曲輪1及び2下段より出土した瓦は近世瓦とみられる。



曲輪別出土遺物表

曲輪	1	2上	2下	3上	3下	4上	6上	6下	15上	15下
調査面積(m <sup>2</sup> )	374	469	139	95	506	69	334	50	798	24
青磁 壺／袋物	○		○		○	○	○		○	○
青磁 瓶		○	○		○				○	○
青磁 香炉		○							○	
青磁 器台	○					○			○	
青磁 播鉢		○			○					
青磁 高足杯									○	
白磁 壺／瓶／袋物					○		○			○
白磁 角杯		○					○			
青花 水注									○	
磁器 赤絵／色絵			○	○			○		○	○
磁器 瑠璃釉／青釉		○	○				○			○
磁器 内面青花、外面青磁							○		○	
陶器 天目碗	○	○					○		○	
陶器 三彩／緑釉		○	○			○			○	
陶器 彩色陶器		○			○				○	
瓦器 皿／碗		○				○	○		○	
瓦質土器 風炉					○		○		○	
土師器 手づくね	○	○	○		○	○			○	
土師器 京都系					○	○				
瓦	○		○		○		○	○		
埴埴／羽口			○				○		○	
基石	○	○	○		○		○		○	
ガラス製品	○	○			○				○	

結論として、調査時には曲輪の性格を示唆するとみられた特徴的な遺物は、複数の曲輪で確認され偏りがみられない。特徴的な遺物の出土の有無は調査面積の大小によるとみられ、曲輪の性格を明らかにするには至らなかった。しかしながら、曲輪ごとの出土数を計量し、遺物の組成を明らかにすれば曲輪の性格、曲輪間の差が明らかになる可能性は残る。今後の課題としたい。

### 第7節 手づくね整形の土師器皿

複数の曲輪において、南九州で一般的に出土するロクロ成形の土師器とは異なる、手づくね成形の土師器皿が出土している。手づくね成形の土師器皿は、畿内を中心に広がったと考えられている。

特に、精製された白色の胎土を持ち比較的丁寧な印象を受ける一群(168、253、271・272)は、京都で使用された手づくね成形の土師器皿である京都系土師器の範疇に入る。これに類似し、胎土は褐色を呈するが丁寧な調整を受け堅緻な印象を受ける一群(415～419)は、京都系土師器類似とした。その他に、手づくね成形ではあるが口縁部が内湾し、京都系土師器とは形状が異なる一群、それらとは異なる直線的な立ち上がりを持つもの、外面調整によって手づくね成形の痕跡を判別しがたいものなどが確認されている。

九州における手づくね成形土師器皿の出土例としては、大分県大分市の国指定史跡大友氏遺跡(大友氏館跡)、

中世大友府内町跡や、臼杵市の臼杵城跡、臼杵城下町遺跡などがある。鹿児島県内では、霧島市の富隈城跡、南九州市の知覧城跡、鹿児島市の北麓遺跡での出土が報告されており、志布志市に隣接する宮崎県都城でも久玉遺跡で出土が確認されている。これらの手づくね成形土師器皿の出土例すべてが内城跡出土の「京都系土師器」と同一のものではないが、畿内を中心として広がった手づくね成形の土師器皿という範疇には含まれるものと考えられる。

手づくね成形の土師器皿が出土することは、中世の志布志が港町として交通の拠点であり、海路を通じて九州北東部や畿内の影響を強く受けた背景によるものであろう。

### 第8節 銭貨

各曲輪から出土した銭貨の数を、1次調査以前の確認調査の出土数も含めて下表にまとめた。

銭文の刻印が著しく不明瞭で薄い金属製円盤のようなものは鏹銭とし、破片や銭文が判別できず特定できないものは不明とした。

出土の内訳は、唐銭1種1点、前蜀銭1種1点、北宋銭14種21点、南宋銭1種1点、元銭1種1点、明銭3種46点、朝鮮銭1種1点、琉球銭1種1点となる。最も古いものは、唐代758年初鑄の軋元重寶である。洪武通寶には模鑄銭が含まれるとみられ、うち1点は「治」の背

出土銭貨集計表

名称	王朝	初鋳年	出土点数								計		
			曲輪1	2上	2下	3上	3下	4上	6上	15上		15下	
乾元重寶	唐	758					1						1
乾徳元寶	前蜀	920	1										1
至道元寶	北宋	995		1			2						3
景德元寶	北宋	1004		1						1			1
祥符通寶	北宋	1009		2			1						3
天聖元寶	北宋	1023		1									1
景祐通寶	北宋	1034		1			1						2
皇宋通寶	北宋	1039		1	1								2
至和元寶	北宋	1054			1								1
嘉祐通寶	北宋	1056					1						1
治平通寶	北宋	1064		1									1
熙寧通寶	北宋	1068		1	1		1			1			4
元豊通寶	北宋	1078		1									1
元祐通寶	北宋	1086		1									1
崇寧重寶	北宋	1102		1									1
大觀通寶	北宋	1107		1			1						2
淳祐元寶	南宋	1241					1						1
至大通寶	元	1310		1									1
洪武通寶	明	1368	6	12	3		12	1	3	3			40
永楽通寶	明	1408		3			2						5
朝鮮通寶	朝鮮	1423								1			1
宣徳通寶	明	1433			1								1
大世通寶	琉球	1454		1									1
小計			6	30	7	0	22	1	3	5	0		74
寛永通寶	日本	1636	7	1						1			9
鑿銭				1						1			2
不明			6	13	3		3		2	5			32
総計			19	45	10	0	25	1	5	12	0		117

字を持つ加治木銭である。

寛永通寶が9点確認されており、江戸期における曲輪の利用をうかがわせる。

## 第9節 基石

中世山城を含む中世遺跡で出土する、主に黒色で扁平な円形の石製品は「基石」と呼び習わされている。囲碁に使用したものかは確証がない場合が多く、黒石に対して白石の出土例は少ないようである。

内城跡から出土した扁平な円形の石製品については、各曲輪の報告において特徴的な1点を実測し、曲輪ごとに出土数と法量の平均を報告している。計測した個別の長径、短径、厚さについては表にまとめ、本章末に掲載した。

## 第10節 瓦の出土と近世期の利用

曲輪1、2下段、3下段より出土した瓦(1、38、255)は、近世瓦とみられる。曲輪6上段から出土したもの(464)及び、1次調査以前の確認調査で曲輪6下段から出土した1点は、素焼きの粘土板とも言える形状のものである。

内城跡からは、陶磁器を始め寛永通寶や鉄砲玉といった近世遺物が出土し、近世期においても志布志城が利用されていたことがわかる。16世紀末に島津氏が日向地方

を平定したため、志布志城は次第に最前線の軍事拠点としての性格が薄れ、山城としての利用はなされなくなったとされている。近世瓦が出土することから、近世期においても複数の曲輪に瓦葺きの建物が存在していたことが推察される。

## 第11節 大野久尾の曲輪構成

大野久尾は、曲輪6と曲輪15の2つの曲輪で構成される。第3章8節及び9節、12節で述べたとおり、本来は2つの独立した曲輪であったが、耕作に伴う近現代の造成によって曲輪間の空堀(空堀8)が埋められている。

現状では、2つの曲輪はAC-38・39区で地続きとなり、空堀8はスロープ状に接続する。空堀を挟んだ曲輪間の距離は、西側では約20mを測るが東側では約5mと狭い。AB-40区を中心に曲輪15側から空堀が埋められたものとみられる。

曲輪15上段の虎口はAC-39区(10T)にて確認され、この位置が曲輪の端部であると判明した。同様にAB・AC-35・36区において、土中に隠れていた曲輪6上段の虎口が確認されている。西から東へ進む空堀8の左手側に曲輪15上段の虎口があり、右に折れて曲輪6上下段の間へ進むと右手側に曲輪6上段の虎口がみえる。

本来の空堀8は2つの曲輪の間を通してAE-36区の谷に抜けるとみられ、大野久尾は、曲輪6上段、6下段、

15上下段の3つが島状に存在する構造だったと推察される。

曲輪面に関しては、曲輪15上段は現在の上下段とは別に、本来、上下段に分かれ、溝状遺構等により北西部と南西部が区画された構造となっていた。曲輪6上段の北西部は、耕作に伴う造成によって築城面等が失われているが、本来は曲輪15上段のような段差や区画を有していた可能性がある。

## 第12節 大野久尾の配石遺構

曲輪6上段及び15上段では、曲輪面から石積みによる配石遺構が確認されている。曲輪6上段では溝状遺構の付近に2基、15上段では1基が虎口から続く道跡の上で確認されている。なお、曲輪15上段の虎口でも1基の配石遺構が確認されているが、これについては次節で触れる。

これらの配石遺構は片側に石の面を揃えており、前後の性格を持つものと思われる。配石遺構の背後の土砂の流出や崩壊を防ぐ、土留めの石積みと考えた場合、溝状遺構や道跡等、他の遺構との関係上、後世のものとは判断される。

近現代において曲輪面を耕作等に利用する際、段差を持つ耕作地の法面を保護するために石積みを行ったと考えた場合、丘状の部分が曲輪6上段においては東部及び南部、曲輪15上段においては北部に存在したと推測される。

## 第13節 大野久尾の改変時期と石塁

曲輪15上段の虎口では、虎口を廃止した後に土留めとみられる石積み(配石遺構)が設置されている。虎口の床面に接していないことから、虎口の廃止時に設置し背後に土砂を充填したものと考える。虎口が埋められた後、空堀側から設置したもので、空堀への土砂流出を防ぐ目的で積まれたものとする。

『志布志町誌』上巻には、曲輪15上段についてF郭として「北西端には上面幅三～五米もある強力な土塁が築かれている。さらに北西部の土塁につづいて西端には長さ十数米にわたって、石塁が現存している。これは素朴なもので、使用されている石材も粗野で加工のあととは認められない」とあり、北西に土塁、西端に石塁が築かれていることが記されている。検出された配石遺構は長さ十数mには及ばないが、位置は該当する。石塁とされた石積みは、虎口の廃止後に空堀8の北側斜面に十数mに渡って造られ、近現代の造成によって空堀が埋められた際に土中に隠れ、調査によって一部が検出されたと推測される。なお、『志布志町誌』に掲載されている志布志

城跡鳥瞰図では虎口の位置に「石塁」と書かれているが、これは塁の誤字と思われる。

『日本城郭体系』第18巻にも石塁に関して、ほぼ同様の記述がみられる。志布志城の遺構として石塁が挙げられ、志布志城要図では曲輪15上段の南端部に石積み状に図化されている。一方で曲輪6上段と15上段が「一部分はつながっており完全に分離していない」とも書かれている。

『志布志町誌』上巻は昭和47年、『日本城郭体系』第18巻は昭和54年の刊行である。この当時はまだ茶園の造成が行われておらず、空堀8の埋設は現状よりも浅く、土留めの石積みが露出していたとみられる。一方で現状と同様に2つの曲輪が地続きになるような改変は、すでに行われていたようである。空堀8の調査によって大正期には現状ほどではないにしろ、ある程度の高さまでは空堀が埋まっていたことが判明している。

江戸時代末期、天明3年(1783年)に書かれたとされる『志布志記』では、大野久尾の存在には触れられているが石塁に類する記述はない。大野久尾の改変が行われ石積みがなされたのは天明3年以降とみられ、中世山城としての改変ではないと考えられる。

## 参考文献

- 上田秀夫「14～16世紀の青磁の分類について」  
小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」  
森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」  
『貿易陶磁研究』No. 2 1982  
橋口亘「志布志城跡出土の手づくね成形の土師器皿について」  
『南日本文化財研究』No. 6 2008  
木村幾多郎「首里城出土の鶴形水注(その2)」  
『南島考古』第36号 2017  
新人物往来社『日本城郭体系』第18巻福岡・熊本・鹿児島1979  
中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995  
吉岡康暢・門上秀勲『琉球出土陶磁社会史研究』真陽社 2011  
志布志町役場『志布志町誌』上巻 1972  
志布志町教育委員会『志布志記』2000  
鹿児島県教育委員会『中尾田遺跡』1981  
都城市教育委員会『久玉遺跡 第6次調査』1995  
知覧町教育委員会『国指定史跡 知覧城跡(三)』2006  
鹿児島県立埋蔵文化財センター『虎居城跡』2011  
鹿児島県立埋蔵文化財センター『芝原遺跡3』2012  
鹿児島市教育委員会『北麓遺跡』2017  
大分市教育委員会『豊後府内6』2007  
大分市教育委員会『豊後府内9』2008  
大分市教育委員会『豊後府内12』2009  
大分市教育委員会『豊後府内17』2013  
志布志町教育委員会『志布志城跡』2005  
志布志市教育委員会『志布志城跡II』2008  
志布志市教育委員会『志布志城跡3』2012



青磁

種類別遺物観察表

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青磁	碗	51	2上	14	27	2-1	K-13	口縁部	17.2			龍泉窯系	13c~14c中	錦蓮弁文
青磁	碗	378	4上	39	60	3-141	Q-25(2T)	口縁部				龍泉窯系	13c~14c中	錦蓮弁文 内面口縁にも施文
青磁	碗	574	15上	57	85		AD-40	口縁部				龍泉窯系	15c後半	外反 錦蓮弁文
青磁	碗	52	2上	14	27		K-13	口縁部					14c後半	無錦蓮弁文
青磁	碗	53	2上	14	27		K-12	口縁部	11.0				14c後半	無錦蓮弁文
青磁	碗	172	2下	23	38		J-9	口縁部				龍泉窯系	14c後半	無錦蓮弁文
青磁	碗	173	2下	23	38		J-9	口縁部				龍泉窯系	14c後半	無錦蓮弁文 焼成不良
青磁	碗	428	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁部				龍泉窯系	14c後半	無錦蓮弁文
青磁	碗	471	6上	48	70		AB-37 溝	口縁部				龍泉窯系	14c後半	無錦蓮弁文
青磁	碗	296	3下	34	52		H-16	胴部				龍泉窯系	14c後半	へろ書き連弁文
青磁	碗	54	2上	14	27		L-11	口縁部	15.0			龍泉窯系	15c	へろ書き連弁文か
青磁	碗	55	2上	14	27		K-13	口縁部	13.2			龍泉窯系	15c	細線連弁文
青磁	碗	3	1	7	18		H-4 柱穴	口縁部				龍泉窯系		剣先連弁文
青磁	碗	297	3下	34	52		K-11	口縁~底部	13.6			龍泉窯系	15c中~16c初	剣先連弁文
青磁	碗	56	2上	14	27		K-11 土抗	底部	12.5	4.4	6.8	龍泉窯系	15c中~16c前	細連弁文
青磁	碗	57	2上	14	27		K-14	口縁部	13.0			龍泉窯系	16c前半	細連弁文
青磁	碗	58	2上	14	27		L-13	口縁部	12.4			龍泉窯系	16c前半	細連弁文
青磁	碗	59	2上	14	27		K-12	口縁部				龍泉窯系	16c前半	細連弁文
青磁	碗	60	2上	14	27		K-12	口縁部	11.4			龍泉窯系	16c前半	細連弁文
青磁	碗	174	2上	23	38		J-9	口縁部				龍泉窯系		細連弁文
青磁	碗	175	2下	23	38		J-11 柱穴	口縁~体部	15.6			龍泉窯系		細連弁文
青磁	碗	176	2下	23	38		J-10 柱穴	口縁部				龍泉窯系		細連弁文
青磁	碗	177	2下	23	38		J-10 柱穴	口縁部				龍泉窯系		細連弁文
青磁	碗	786	6上下間	65	98		AC-39空堀	口縁部				龍泉窯系	16c前半	細連弁文
青磁	碗	477	6上	49	72		AB-37	口縁部				龍泉窯系		細連弁文
青磁	碗	478	6上	49	72		曲輪一括	口縁部				龍泉窯系	16c前半?	連刻細連弁文
青磁	碗	479	6上	49	72		曲輪一括	口縁部	16			龍泉窯系	16c前半?	連刻細連弁文
青磁	碗	161	2下	22	36		J-10方形土坑4	口縁~体部	15.2			龍泉窯系	16c前半?	連刻細連弁文 内面草花文
青磁	碗	2	1	7	18		G-5	口縁部	12.0			龍泉窯系	16c前半	連弁文
青磁	碗	379	4上	39	60		Q-27(5T)	口縁部				龍泉窯系		連弁文が判別できないうほど粗製
青磁	碗	61	2上	14	27		K-14	口縁部	16.8			龍泉窯系	15c後半	雷文
青磁	碗	380	4上	39	60		Q-26(3T)	口縁部				龍泉窯系	15c後半	雷文 被熱
青磁	碗	480	6上	49	72		Z-36(13T)	口縁部	15.4			龍泉窯系	15c後半	雷文
青磁	碗	575	15上	57	85		AE-39	口縁部				龍泉窯系	15c後半	雷文
青磁	碗	62	2上	14	27		L-12	腰部						外反 草花文、口縁部雷文?
青磁	碗	576	15上	57	85		AB-39	口縁部	12.0			龍泉窯系	15c前半	外反 草花文
青磁	碗	577	15上	57	85		AF-40	口縁部	12.8			龍泉窯系	15c後半	外反 内面雷文 草花文
青磁	碗	299	3下	34	52		K-11	口縁~胴部	18.0			龍泉窯系	14c後~15c前	外反 無文
青磁	碗	300	3下	34	52		L-12	口縁部	15.2			龍泉窯系	14c後~15c中	外反 無文
青磁	碗	4	1	7	18		H-3	口縁部	15.2			龍泉窯系	15c前~後半	外反 無文
青磁	碗	5	1	7	18		H-3	口縁部	17.6			龍泉窯系	15c前~後半	外反 無文
青磁	碗	65	2上	14	27		L-13	口縁部	13.6			龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗	66	2上	14	27		K-13	口縁部	13.8			龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗	178	2下	23	38		J-9	口縁部	15.8			龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗	179	2下	23	38		J-10	口縁部				龍泉窯系		外反 無文 腰部以下露胎
青磁	碗	259	3下	32	49		I-15空堀	口縁部				龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗	429	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁部	16.0			龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗	578	15上	57	85		AB-39	口縁部				龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗	774	15下	64	97		AF-37	口縁部	9.2			龍泉窯系		外反 無文

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青磁	碗	795	空堀8	67	100		AC-37空堀8	口縁部				龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗皿	386	4上	39	60	3-149	Q-26(3T)	口縁部				龍泉窯系		外反 無文
青磁	碗?	7	1	7	18		H-8	口縁部				龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	8	1	7	18		H-3	口縁部				龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	180	2下	23	38	3-72	J-10柱穴	口縁部				龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	181	2下	23	38	3-68	K-9	口縁部	14.8			龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	182	2下	23	38	3-69	J-9	口縁部	17.8			龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	289	3下	33	50	3-1	J-16階段	口縁部	14.2			龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	381	4上	39	60	3-144	Q-27(9T)	口縁~底部	14.4			龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	382	4上	39	60	3-145	Q-26(3T)	口縁~腰部	12.0			龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	303	3下	34	52		I-14	口縁部	12.2			龍泉窯系		直口 無文
青磁	碗	67	2上	14	27		K-12	口縁部	11.4			龍泉窯系		直口 青白色
青磁	碗	796	空堀8	67	100		AC-37空堀8	口縁部				龍泉窯系		直口 外面に圈線
青磁	碗	481	6上	49	72		AB-39(21T)	口縁部	12.6			龍泉窯系		直口 櫛書文
青磁	碗	249	3上	27	43		K-18表土	口縁部				景徳鎮窯系		直口 陰刻文様
青磁	碗	301	3下	34	52	2-56	K-12	口縁部	14.1			龍泉窯系	15c頃	直口 口縁草花文
青磁	碗	302	3下	34	52	2-58	G-14	口縁部	12.0			福建広車办	16c後	直口 外面圈線
青磁	碗	6	1	7	18		H-3	口縁部	18.0			龍泉窯系		玉縁口縁
青磁	碗	63	2上	14	27		K-12	口縁部	12.2			龍泉窯系		玉縁口縁 黄褐色
青磁	碗	64	2上	14	27		L-12	口縁部	16.8			龍泉窯系		玉縁口縁
青磁	碗	183	2下	23	38		J-9	口縁部	11.6			龍泉窯系		玉縁口縁 被熱
青磁	碗	298	3下	34	52		H-14	腰部				龍泉窯系		草花文、口縁部雷文
青磁	碗	69	2上	14	27		K-11	腰部				龍泉窯系		腰部以下露胎
青磁	碗	383	4上	39	60	3-146	P-26(1T)	腰部?				龍泉窯系		内面腰部に文様
青磁	碗	9	1	7	18		H-3	底部	5.2			龍泉窯系		見込文様
青磁	碗	68	2上	14	27	2-2	K-12	底部	5.0			龍泉窯系	14c後~15c中	見込文様
青磁	碗皿	187	2下	23	38	3-78	J-10	底部	5.0			龍泉窯系		見込草花文
青磁	碗	257	3下	32	49		H-14土坑3	底部				龍泉窯系		外底露胎
青磁	碗	486	6上	49	72		表土	底部	6.0			龍泉窯系		見込文様 腰部文様あり
青磁	碗	551	15上	57	85		AF-39溝	底部	6.4			龍泉窯系		外面陰刻文
青磁	碗	304	3下	34	52	3-2	H-14柱穴	腰部~底部	6.2			龍泉窯系		
青磁	碗	384	4上	39	60	3-147	Q-27(9T)	底部	6.0			龍泉窯系		
青磁	碗	430	6上	46	68		AB-36虎口	腰部~底部	5.0			龍泉窯系		高台内露胎
青磁	碗	482	6上	49	72		AA-37	底部	5.2			龍泉窯系		高台内露胎
青磁	碗	484	6上	49	72		AA-39(19T)	腰部~底部	4.8			龍泉窯系		高台露胎
青磁	碗	431	6上	46	68		AB-36虎口	底部	6.0			龍泉窯系		量付露胎
青磁	碗	483	6上	49	72		AB-37	底部	5.4			龍泉窯系		量付露胎
青磁	碗	485	6上	49	72		AB-37	底部	5.6			龍泉窯系		量付露胎
青磁	皿	10	1	7	18		I-3	口縁部	10.4			龍泉窯系		外反
青磁	皿	75	2上	14	27		K-12	口縁部	12.4			龍泉窯系		外反
青磁	皿	433	6上	46	68		AB-35虎口	口縁~腰部				龍泉窯系		外反
青磁	皿	487	6上	49	72		表土	口縁~底部	13.6			龍泉窯系		外反 無文
青磁	皿	488	6上	49	72		AB-37	口縁部	13.6			龍泉窯系		外反 錫連弁文
青磁	皿	489	6上	49	72		AB-37	胴部~底部				龍泉窯系		外反
青磁	皿	599	15上	57	85		AC-39(10T)	口縁~胴部	12.3			龍泉窯系		外反 被熱
青磁	皿	797	空堀8	67	100		AC-37空堀8	口縁部	13.8			龍泉窯系		外反
青磁	皿	798	空堀8	67	100		AC-37空堀8	口縁部	11.4			龍泉窯系		外反 ~?書連弁文?
青磁	皿	184	2下	23	38	3-80	J-9柱穴	口縁部	14.2			龍泉窯系		外反
青磁	皿?	186	2下	23	38	3-81	J-9	口縁部	11.2			龍泉窯系		外反
青磁	皿	432	6上	46	68		AB-36虎口	口縁~底部	12.5	6.2	2.4	龍泉窯系		外反



種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青磁	皿	12	1	7	18		H-3	口縁～底部				龍泉窯系		菊皿
青磁	皿	492	6上	49	72		AA-35	口縁部				龍泉窯系	16c	菊皿
青磁	皿	74	2上	14	27		L-12	底部	6.3			龍泉窯系		菊皿？
青磁	皿	309	3下	34	52		H-16	底部	6.4			龍泉窯系		外底露胎 見込釉剥
青磁	皿	310	3下	34	52		I-14	底部	7.2			龍泉窯系		外底露胎 見込釉剥
青磁	皿	554	15上	57	85		AF-40溝	底部	12.2			龍泉窯系		外底溶着
青磁	皿	13	1	7	18		H-3	底部				龍泉窯系		碁笥底
青磁	皿	775	15上	64	97		AF-37	口縁～底部	10.0			龍泉窯系		碁笥底
青磁	皿？	603	15上	57	85		AG-40	底部	3.6			龍泉窯系		高台なし 外底無釉
青磁？	皿？	188	2下	23	38	3-82	J-10	底部	9.6			龍泉窯系		墨付に付着物あり 見込文様
青磁	盤	171	2下	23	38		J-9	口縁部				龍泉窯系		口折
青磁	盤	294	3下	34	52		H-13	口縁部	23.6			龍泉窯系		口折
青磁	盤	295	3下	34	52	2-59	G-15	口縁部	23.4			龍泉窯系	14c後～15c前	縁折
青磁	盤	293	3下	34	52	3-3	曲輪一括	口縁部				龍泉窯系		縁折
青磁	盤	427	6上	46	68		AD-39 虎口	口縁部				龍泉窯系		縁折
青磁	盤	550	15上	57	85		AF-40溝	口縁部	24.8			龍泉窯系		縁折
青磁	盤	570	15上	57	85		AE-39	口縁部	27.0			龍泉窯系		縁折 内面蓮弁文
青磁	盤	571	15上	57	85		AG-40	口縁部	27.2			龍泉窯系		縁折 内面蓮弁文
青磁	盤	572	15上	57	85		AG-40	口縁部	22.8			龍泉窯系		縁折 内面蓮弁文
青磁	盤	573	15上	57	85		AF-42(4T)	口縁部				龍泉窯系		縁折
青磁	盤？	170	2下	23	38	3-84	J-10	口縁部				龍泉窯系		縁折
青磁	壺	14	1	7	18		H-3	口縁部				龍泉窯系		外面草花文
青磁	壺	495	6上	49	72		ACB-37	腰部				龍泉窯系		外面草花文
青磁	壺	606	15上	58	86		AA-42	口縁部				龍泉窯系		被熱
青磁	壺	607	15上	58	86		AG-39	口縁部				龍泉窯系		外面 簡書文 青白色
青磁	壺	608	15上	58	86		AE-39	口縁部	6.6			龍泉窯系		酒海壺
青磁	壺	311	3下	34	52	2-61	I-15	胴部				龍泉窯系	14c中～後	波濤文、酒海壺小
青磁	壺	609	15上	58	86		AG-40	蓋	14.6			龍泉窯系		簡書文
青磁	壺	610	15上	58	86		AF-38	口縁部				龍泉窯系		簡書文 蓋あり
青磁	壺	611	15上	58	86		AG-40	胴部				龍泉窯系	明代	草花文
青磁	壺	612	15上	58	86		AE-39	底部	7.0			龍泉窯系		碁笥底
青磁	壺	613	15上	58	86		AG-40	蓋	8.2			龍泉窯系		被熱
青磁	壺	614	15上	58	86		AF-39	蓋	12.2			龍泉窯系		被熱
青磁	壺	615	15上	58	86		AG-40	蓋	8.1			龍泉窯系		頂部圖縁
青磁	壺	616	15上	58	86		AF-38(5T)	蓋	6.2			龍泉窯系		頂部圖縁
青磁	壺？	190	2下	23	38		J-10 柱穴	胴部				龍泉窯系		
青磁	壺？	496	6上	49	72		曲輪一括	底部				龍泉窯系		焼成不良
青磁	瓶	76	2上	14	27	2-8	K-13	胴部～高台	6.2			龍泉窯系	14c後～15c中	如意雲文様、高台内釉剥落、被熱
青磁	瓶	77	2上	14	27	2-9	K-11	高台	7.2			龍泉窯系	15c～16c	モミガラ付着
青磁	瓶	250	3上	27	43		K-18	口縁部	7.1			龍泉窯系		花弁状口縁
青磁	瓶	312	3下	34	52	2-62	I-14	口縁部	4.4			龍泉窯系	14c後～15c中	
青磁	瓶	617	15上	58	86		AE-39	頸部	頸径3.4			龍泉窯系		草花文
青磁	瓶	618	15上	58	86		AF-39	頸部	頸径2.4			龍泉窯系		無文
青磁	瓶？	191	2下	23	38		J-9	口縁部				龍泉窯系		
青磁	瓶？	619	15上	58	86		AD-38-39	頸部？				龍泉窯系		外面蓮弁文
青磁	瓶？	620	15上	58	86		AF-40	頸部？				龍泉窯系		外面沈線文
青磁	鉢	189	2下	23	38	3-83	J-17	口縁部				龍泉窯系		壺の蓋小
青磁	鉢？	15	1	7	18		H-4	口縁部				龍泉窯系		筒状？
青磁	搦鉢	81	2上	14	27	2-11	K-13	口縁部	12.8			龍泉窯系	14c後～15c初	青磁搦鉢
青磁	搦鉢	313	3下	34	52		H-15	胴部				龍泉窯系		青磁搦鉢



種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青磁	高足杯	604	15上	57	85		AF-39	口縁～腰部	12.2			龍泉窯系		稜花 草花文 外面蓮弁文
青磁	高足杯	605	15上	57	85		AF-40	口縁部	12.6			龍泉窯系		稜花 草花文 外面蓮弁文 被熱
青磁	蓋	80	2上	14	27	2-10	L-12	縁部				龍泉窯系	14c頃	蓋の蓋か、
青磁	香炉	497	6上	49	72		AA-36(14T)	口縁	8.8			龍泉窯系	14c後～15c中	
青磁	香炉	78	2上	14	27	2-12	L-13 土坑4	口縁	7.8			龍泉窯系		
青磁	香炉	79	2上	14	27		L-13	底部				龍泉窯系		脚付き
青磁	香炉	625	15上	58	86		AF-40	口縁部	7.0			龍泉窯系		内面下半露胎 筒状
青磁	香炉	626	15上	58	86		AD-38	口縁部				龍泉窯系		口縁折り返し
青磁	香炉	628	15上	58	86		AD-38	腰～底部	4.8			龍泉窯系		小瓶の可能性あり
青磁	香炉	629	15上	58	86		AG-40	底部	4.4			龍泉窯系		内面無軸 三脚
青磁	香炉?	290	3下	33	50	3-4	F-16 階段	口縁				龍泉窯系		
青磁	香炉?	556	15上	57	85		AF-40溝	腰部				龍泉窯系		内面下半露胎
青磁	香炉?	624	15上	58	86		AC-40	口縁部				龍泉窯系		被熱 内面胴部無軸?
青磁	香炉?	627	15上	58	86		AC-42	胴部				龍泉窯系		
青磁	器台	436	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁部	13.6			龍泉窯系		
青磁	器台?	16	1	7	18		I-6(1-1T)	口縁部				龍泉窯系		
青磁	合子	630	15上	58	86		AC-41	蓋	6.6			龍泉窯系		
青磁	水注	621	15上	58	86		AD-41	肩部				龍泉窯系		
青磁	袋物	623	15上	58	86		AF-38(5T)	底部		4.4		龍泉窯系		
青磁	袋物	778	15下	64	97		AF-37	腰部		10.0		龍泉窯系		内面下半露胎
青磁	袋物?	622	15上	58	86		AD-39	胴部				龍泉窯系		型造り装飾

白磁

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
白磁	碗	557	15上	57	85		AF-40溝	口縁～腰部	13.2			景德鎮窯系	15c前半	端反 直線的に立ち上がる
白磁	碗	392	4上	39	60	3-155	Q-26(3T)	口縁～腰部	13.7			景德鎮窯系	16c	端反
白磁	碗	391	4上	39	60	3-154	Q-26(7T)	口縁～腰部				景德鎮窯系		端反
白磁	碗	498	6上	49	72		曲輪一括	口縁部	13.3			景德鎮窯系		直口
白磁	碗	632	15上	58	86		AC-42	口縁部				景德鎮窯系		直口
白磁	碗	193	2下	23	38	3-86	J-10	口縁～腰部				景德鎮窯系		直口
白磁	碗	635	15上	58	86		AF-39	口縁部	11.2			景德鎮窯系		直口 内面溶着痕跡?
白磁	碗	636	15上	58	86		AE-40	口縁部				景德鎮窯系		直口 口鏽 口唇部アルミナ
白磁	碗	631	15上	58	86		AG-40	口縁部				景德鎮窯系		内溝 焼成不良
白磁	碗	633	15上	58	86		AF-40	口縁部	13.6			景德鎮窯系		口縁玉縁状 内面灰色
白磁	碗	634	15上	58	86		AF-39	口縁部	11.0			景德鎮窯系		口縁玉縁状 内面灰色
白磁	碗	393	4上	39	60	3-156	Q-26(3T)	底部		3.2		景德鎮窯系		高台一部露胎 見込蛇ノ目軸剥ぎ
白磁	碗	656	15上	59	87		AG-39・40	口縁～腰部	9.0			景德鎮窯系		端反
白磁	杯	655	15上	59	87		AG-39・40	口縁～腰部	7.8			景德鎮窯系		直口
白磁	杯	442	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁～底部	6.1	2.2	2.8	景德鎮窯系		蛇ノ目軸剥 近世か、
白磁	杯	657	15上	59	87		AD・AE-39	口縁～腰部				景德鎮窯系		高台露胎?
白磁	杯	658	15上	59	87		AD-40	腰部				景德鎮窯系		高台露胎?
白磁	杯	507	6上	49	72		AA-36(14T)	底部		2.8		景德鎮窯系		
白磁	杯	508	6上	49	72		AB-37	底部		3.4		中国南部	15c	高台・外底無軸
白磁	杯	192	2下	23	38	3-85	J-9	口縁～底部	10.6	4.0	4.2	景德鎮窯系		端反 内底付蓋物
白磁	皿	17	1	7	18	3-49	I-5 柱穴	口縁～底部	12.8	7.2	2.8	景德鎮窯系		端反 内底部分的に露胎
白磁	皿	18	1	7	18	3-51	H-4 一括	口縁～底部	12.7	6.3	2.5	景德鎮窯系		端反 腰部以下露胎
白磁	皿	19	1	7	18	3-52	I-3 一括	口縁～底部	10.6	4.0	2.5	景德鎮窯系		端反
白磁	皿	82	2上	15	28		K-12	口縁～底部	11.6	6.4	2.8	景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	194	2下	23	38	3-88	一括	口縁～腰部	12.4			景德鎮窯系		端反

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
白磁	皿	195	2下	23	38	3-89	J-9	口縁～体部	12.4			景德鎮窯系		端反
白磁	皿	196	2下	23	38	3-87	J-9	口縁～体部	18.7	10.3	3.3	景德鎮窯系		端反
白磁	皿	197	2下	23	38	3-92	J-9	口縁～体部	11.4			景德鎮窯系		端反
白磁	皿	282	3下	33	50	3-5	J-15 虎口	口縁～底部	10.8	6.0	2.3	景德鎮窯系		端反
白磁	皿	315	3下	34	52		H-15	口縁部	14.6			景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	316	3下	34	52		H-14	口縁部	16.0			景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	317	3下	34	52	2-64	H-15	口縁部	12.4			景德鎮窯	16c	端反
白磁	皿	394	4上	39	60	3-157	Q-26(3T)	口縁部	15.6			景德鎮窯系	16c	端反
白磁	皿	438	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁部	11.0			景德鎮窯系		端反
白磁	皿	439	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁部	10.4			景德鎮窯系		端反
白磁	皿	500	6上	49	72		曲輪一括	口縁～底部	17.8	10	3.9	景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	501	6上	49	72		AB-37	口縁部	12.6			景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	319	3下	34	52	2-65	H-15	口縁～底部	9.0	4.6	2.2	瀬戸美濃	16c	端反
白磁	皿	83	2上	15	28	2-13	L-12	口縁部～高台	12.0	6.0	3.2	景德鎮窯系	16c	端反
白磁	皿	84	2上	15	28	2-14	L-12	口縁～胴部	10.8			福建広東	16c後	端反
白磁	皿	638	15上	58	86		AF-40	口縁部				景德鎮窯系		端反 玉縁状口縁?
白磁	皿	639	15上	58	86		AF-40	口縁～底部	17.1	9.2	4.2	景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	640	15上	58	86		AF-39	口縁～底部	15.0	8.4	3.8	景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	641	15上	58	86		AF-40	口縁～底部	13.8	7.4	3.2	景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿	642	15上	58	86		AG-40	口縁～底部	17.8	10.4	4.4	景德鎮窯系	16c前半	端反 粗製
白磁	皿	643	15上	58	86		AF-40	口縁部	12.0			景德鎮窯系	16c前半	端反
白磁	皿?	787	6上・下間	65	98		AC-35空埴	口縁部				景德鎮窯系		端反
白磁	皿	646	15上	58	86		AE-39	口縁～底部	9.8	5.4	2.0	景德鎮窯系		端反 小皿
白磁	皿	440	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁部				景德鎮窯系		盤様椀花皿
白磁	皿	653	15上	59	87		AG-40	口縁部	17.6			景德鎮窯系		口 切高台
白磁	皿	314	3下	34	52		H-15	口縁～底部	4.0			景德鎮窯系		直口 裝飾 発色悪し
白磁	皿	20	1	7	18	3-80	I-3 一括	口縁～底部	10.4	5.3	2.3	景德鎮窯系		直口 軀付まで施釉 焼成不良
白磁?	皿	162	2下	22	36	3-91	J-10方形土坑4	口縁～底部				景德鎮窯系		直口 下半露胎 切高台
白磁	皿	559	15上	57	85		AE-39溝	口縁～底部	9.6	4.4	2.5	景德鎮窯系	15c後半	直口 外下半露胎?
白磁	皿	558	15上	57	85		AF-40溝	底部	4.4			景德鎮窯系	15c後半	下半露胎 切高台
白磁	皿	560	15上	57	85		AF-40溝	口縁部	12.0			景德鎮窯系		直口 胴部下露胎?
白磁	皿	637	15上	58	86		AE-39	口縁部				景德鎮窯系	15c後半	直口 基部
白磁	皿	21	1	7	18		H-4	口縁～底部				景德鎮窯系	16c	基部底 外面下半露胎か 被熱
白磁	皿	395	4上	39	60	3-158	Q-26(3T)	口縁～底部	9.6			景德鎮窯系	16c	基部底 端面
白磁	皿	502	6上	49	72		AC-37	口縁～底部	12.2	6.2	2.3	景德鎮窯系	16c前半	基部底
白磁	皿	645	15上	58	86		AF-39	底部	4.4			景德鎮窯系	16c前半	基部底
白磁	皿	503	6上	49	72		曲輪一括	底部	3.0			景德鎮窯系	16c前半	菊皿
白磁	皿	198	2下	23	38		J-9	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	菊皿
白磁	皿	318	3下	34	52		H-16	口縁～底部	14.2	7.8	3.3	景德鎮窯系	16c後半	菊皿
白磁	皿	647	15上	58	86		AF-38(5T)	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	菊皿
白磁	皿	788	6上・下間	65	98		AC-36空埴	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	見込・高台内底露胎
白磁	皿	650	15上	58	86		AF-40	口縁～底部	13.4	7.0	2.7	福建省系		見込・高台内底露胎
白磁	皿	651	15上	58	86		AC-43	口縁～底部	12.4	6.0	2.1	福建省系		見込・高台内底露胎
白磁	皿	652	15上	58	86		AF-40	口縁～底部	13.4	7.4	2.1	福建省系		見込・高台内底露胎
白磁	皿	649	15上	58	86		AD-42	口縁～底部	13.2	6.0	2.6	中国		見込・高台内底露胎 胎土新しい
白磁	皿	779	15下	64	97		AH-39	口縁部	14.0			景德鎮窯系		外反 フラッシュ状に開く
白磁	皿	654	15上	59	87		AC-42	口縁～底部	13.0	4.6	3.2	景德鎮窯系		椀花皿 見込蛇の目釉刺
白磁	皿	780	15下	64	97		AF-37	口縁～底部				景德鎮窯系		蛇ノ目釉刺 軀付・内底無釉
白磁	皿	443	6上	46	68		AB-36 虎口	底部		6.6		景德鎮窯系		見込・外底盛り上がる 軀付釉刺
白磁	皿	504	6上	49	72		AB-36・37	底部	12.0			景德鎮窯系		

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
白磁	皿	505	6上	49	72		AD-37	底部		11.6		中国南部		内底無釉 置付釉剥
白磁	皿	644	15上	58	86		AF-39	底部		9.8		景德鎮窯系	16c前半	
白磁	皿	648	15上	58	86		AE-40	底部		7.0		景德鎮窯系		
白磁	皿碗	437	6上	46	68		AB-36 虎口	底部		7.0		中国		
白磁	角杯	472	6上	48	70		AB-37 溝	口縁部				景德鎮窯系	16c	
白磁	角杯	499	6上	49	72		曲輪一括	口縁部				景德鎮窯系	16c	
白磁	鉢	199	2下	23	38	3-90	J-9	体～底部				中国		高台なし
白磁	鉢?	85	2上	15	28	2-15	L-14	口縁部	9.0			景德鎮窯系	16c	外面突帯、口唇蓋受
白磁	鉢?	251	3上	27	43		K-18	口縁部	7.6			景德鎮窯系		外面突帯
白磁	鉢?	320	3下	34	52		I-14	口縁部	10.0			景德鎮窯系	16c中～後	外面突帯
白磁	瓶	321	3下	34	52	2-66	I-15	頸部				景德鎮窯系		ヒビ焼、被熱
白磁	壺	659	15上	59	87		AF-40	口縁～胴部	7.2			景德鎮窯系		高台露胎?
白磁	袋物	441	6上	46	68		AB-36 虎口	底部		7.6		景德鎮窯系		内面無釉
白磁	袋物	660	15上	59	87		AG-40	底部		7.2		景德鎮窯系		内面無釉
白磁	蓋	506	6上	49	72		AD-37	一		6.4		景德鎮窯系		
白磁	合子	86	2上	15	28	2-16	K-13	蓋	6.4	1.8	1.7	景德鎮窯系	16c	

青花

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青花	碗	509	6上	50	73		AB-36	口縁部				景德鎮窯系	15c後半	外反
青花	碗	510	6上	50	73		曲輪一括	口縁部	14.8			福建瓜車	15c後半	外反
青花	碗	661	15上	59	87		AE-38	口縁部	14.0			景德鎮窯系	15c後半	外反 内面四方罽
青花	碗	163	2下	22	36	3-96	J-10方形土坑4	口縁～体部				景德鎮窯系		外反
青花	碗	201	2下	23	38	3-93	J-10	口縁～体部	10.6			景德鎮窯系		外反
青花	碗	283	3下	33	50	3-7	J-15 虎口	口縁～底部	13.0			景德鎮窯系		外反
青花	碗	662	15上	59	87		AC-42	口縁～腰部				景德鎮窯系		外反 圈線のみ
青花	碗	663	15上	59	87		AF-39	口縁～腰部				景德鎮窯系		外反 梵字文
青花	碗	91	2上	15	28		L-14	口縁～腰部	14			景德鎮窯系		外反
青花	碗	200	2下	23	38	3-97	J-9/10	口縁～体部				景德鎮窯系		外反
青花	碗	681	15上	60	88		AE-40	口縁部	13.2			景德鎮窯系		外反 梵字文?
青花	碗	682	15上	60	88		AD-37	口縁部				景德鎮窯系		外反 草花文
青花	碗	782	15下	64	97		AF-37	口縁部				景德鎮窯系		外反 鉢?
青花	碗	664	15上	59	87		AF-38(5T)	口縁～底部	13.0	4.6		景德鎮窯系	16c前半	レンゾー
青花	碗	665	15上	59	87		AG-40	口縁～底部	14.8	6.2	5.0	景德鎮窯系	16c前半	レンゾー
青花	碗	666	15上	59	87		AF-40	口縁部				景德鎮窯系	16c前半	波瀾文
青花	碗	667	15上	59	87		AF-40	口縁～腰部				景德鎮窯系	16c前半	蕉葉文
青花	碗	446	6上	46	68		AB-36 虎口	底部		5.2		景德鎮窯系	16c	レンゾー
青花	碗	673	15上	59	87		AG-40	底部				景德鎮窯系		レンゾー 見込花
青花	碗	674	15上	59	87		AG-40	底部		5.2		景德鎮窯系		レンゾー
青花	碗	675	15上	59	87		AF-40	胴部～底部		5.6		景德鎮窯系		レンゾー
青花	碗	447	6上	46	68		AB-36 虎口	口縁～底部	13.2	5.0	6.3	景德鎮窯系	16c	レンゾー
青花	碗	473	6上	48	70		AB-37 溝	口縁部	13.0			景德鎮窯系		波瀾文
青花	碗	511	6上	50	73		AE-32	口縁部	12.8			景德鎮窯系		雷文
青花	碗	668	15上	59	87		AE-38	口縁部	10.2			景德鎮窯系	16c後半	四方罽文
青花	碗	445	6上	46	68		AB-36 虎口	底部	4.4			景德鎮窯系	16c後半	マントーション 置付釉薬不良
青花	碗	512	6上	50	73		AB-37	底部	4.2			景德鎮窯系	16c後半	マントーション 大明年造
青花	碗	676	15上	59	87		AD-38	底部	4.0			景德鎮窯系	16c後半	マントーション 万福紋同
青花	碗	677	15上	59	87		AF-39	底部	5.0			景德鎮窯系	16c後半	マントーション 長命富貴
青花	碗	678	15上	59	87		AE-40	底部				景德鎮窯系		マントーション?

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青花	碗	679	15上	59	87	AC-40	底部	底部	4.8			景德鎮窯系		マントーション 焼成不良
青花	碗	284	3下	33	50	J-15 虎口	口縁	口縁	11.6		5.4	福建広東		マントーション 曼付・外底露胎 饅頭心
青花	碗	323	3下	34	52	H-14	底部～高台	底部				景德鎮窯系	16c後	マントーション 富貴佳器
青花	碗	680	15上	60	88	AF-39	底部	底部	4.3			景德鎮窯系		蛇/目軸刺 焼成不良
青花	碗	87	2上	15	28	K-13	口縁部～高台	口縁部	11.6		5.6	福建広東	16c後	見込み榫下人物文、曼付モミカラ子着
青花	碗	88	2上	15	28	K-11	口縁部	口縁部				景德鎮窯系	16c後	
青花	碗	90	2上	15	28	K-13 柱穴	口縁～胴部	口縁部	12.3			福建広東	16c後	草花文
青花	碗	169	2下	22	36	K-9 方形土坑5	口縁～胴部	口縁部	14.8			景德鎮窯系		
青花	碗	202	2下	23	38	J-9	口縁～胴部	口縁部	10.6			景德鎮窯系		
青花	碗	203	2下	23	38	J-9	口縁～胴部	口縁部				景德鎮窯系		
青花	碗	322	3下	34	52	H-15	口縁～高台	口縁部				景德鎮窯系	16c後	焼成不良
青花	碗	324	3下	34	52	H-15	口縁～高台	口縁部	13.4	5.0	6.0	景德鎮窯系	16c	花器文
青花	碗	325	3下	34	52	I-14	口縁部	口縁部	16.0			福建広東	16c後	見込み巻貝文、外面蕉葉文
青花	碗	396	4上	39	60	Q-27(5T)	口縁～胴部	口縁部				景德鎮窯系		焼成不良
青花	碗	397	4上	39	60	Q-26(3T)	口縁部	口縁部				景德鎮窯系		
青花	碗	398	4上	39	60	Q-26(3T)	口縁部	口縁部				景德鎮窯系		
青花	碗	399	4上	39	60	Q-26(6T)	口縁～胴部	口縁部				景德鎮窯系		外面に装飾
青花	碗	400	4上	39	60	Q-26(3T)	口縁～胴部	口縁部	9.6			景德鎮窯系		外面に装飾
青花	碗	444	6上	46	68	AB-35 虎口	口縁部	口縁部	12.0			景德鎮窯系		鷲文
青花	碗	669	15上	59	87	AE-38	口縁～胴部	口縁部	11.1			景德鎮窯系		アラバスク
青花	碗	670	15上	59	87	AF-40	口縁～胴部	口縁部	10.4			中国南部		草花文
青花	碗	671	15上	59	87	AC-42	口縁～胴部	口縁部				景德鎮窯系		
青花	碗	781	15下	64	97	AF-37	口縁部	口縁部	14.4			景德鎮窯系		
青花	碗	789	6上下間	65	98	AC-36 空堀	口縁～胴部	口縁部	11.2			景德鎮窯系		
青花	碗	252	3上	27	43	K-18	口縁部	口縁部	5.4			景德鎮窯系		
青花	碗	672	15上	59	87	AE-40	口縁～胴部	口縁部				景德鎮窯系		ラッパ状口縁
青花	碗	22	1	7	18	H-5	底部	底部	5.0			景德鎮窯系		小杯?
青花	碗	326	3下	35	54	2-71	底部～高台	底部	4.4			景德鎮窯系	16c後	蕉葉文 粗製
青花	碗	448	6上	46	68	AB-36 虎口	底部	底部	4.4			福建広東		見込み蛇/目軸刺ぎ、粗製
青花	碗	449	6上	46	68	AB-35 虎口	底部	底部	4.4			景德鎮窯系		内底無軸
青花	皿	93	2上	15	28	L-13	口縁～高台	口縁部	12.6	4.2	4.4	景德鎮窯系		蛇/目軸刺 鬚線のみ
青花	皿	204	2下	24	39	I-10	口縁～胴部	口縁部	12.3	6.2	2.4	景德鎮窯系		端反
青花	皿	401	4上	39	60	Q-25(2T)	口縁～胴部	口縁部	9.8			景德鎮窯系	16c前半	端反
青花	皿	450	6上	46	68	AB-36 虎口	口縁～胴部	口縁部	9.8	5.0	2.3	景德鎮窯系	16c前半?	端反 牡丹唐草 十字花文
青花	皿	683	15上	60	88	AG-41	口縁～胴部	口縁部	11.8	6.6	2.4	景德鎮窯系	16c後半	端反
青花	皿	684	15上	60	88	AC-42	口縁部	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	端反 内面四方樽
青花	皿	26	1	7	18	H-3	口縁～胴部	口縁部	9.4	4.2	2.2	景德鎮窯系		端反
青花	皿	291	3下	33	50	I-16 階段	口縁	口縁部	11.0			中国		端反
青花	皿	783	15下	64	97	AF-37	口縁～胴部	口縁部	8.2			景德鎮窯系		端反
青花	皿	208	2下	24	39	J-10	口縁～胴部	口縁部	11.4	6.0	2.0	景德鎮窯系		基筋底
青花	皿	96	2上	15	28	L-13	口縁部	口縁部	16.0			景德鎮窯系		唐文 基筋底
青花	皿	206	2下	24	39	一括	口縁～胴部	口縁部	9.2			景德鎮窯系		焼成不良 基筋底
青花	皿	685	15上	60	88	AC-42	口縁～胴部	口縁部	10.0			景德鎮窯系	16c前半	蕉葉文 波頭文 基筋底
青花	皿	686	15上	60	88	AC-42	口縁部	口縁部				景德鎮窯系	16c前半	蕉葉文 波頭文 基筋底
青花	皿	687	15上	60	88	AF-41	口縁部	口縁部				景德鎮窯系	16c前半	蕉葉文 基筋底
青花	皿	688	15上	60	88	AF-39	口縁部	口縁部				景德鎮窯系	16c前半	蕉葉文 波頭文 基筋底
青花	皿	689	15上	60	88	AF-40	口縁部	口縁部	10.6			中国南部	16c前半	蕉葉文 波頭文 基筋底
青花	皿	516	6上	50	73	Z-36(13T)	底部	底部				景德鎮窯系	16c前半	基筋底 芭蕉葉文
青花	皿	561	15上	57	85	AF-40 溝	底部	底部				景德鎮窯系	16c前半	基筋底 焼成不良

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
青花	皿	690	15上	60	88		AF-40	底部		3.6		景德鎮窯系	16c前半	摹寫底 見込文様?
青花	皿	691	15上	60	88		AE-40	底部				景德鎮窯系	16c前半	摹寫底 蕉葉文
青花	皿	692	15上	60	88		曲輪一括	底部				景德鎮窯系	16c前半	摹寫底
青花	皿	404	4上	39	60	3-167	Q-25(2T)	口縁~底部	12.6	6.1	3.6	福建広東	16c後半	波頭文 蕉葉文 摹寫底か 焼成不良
青花	皿	403	4上	39	60	3-166	L-13 土坑5 Q-27(9T)	口縁部	10.4			景德鎮窯系	16c後半	摹寫底
青花	皿	207	2下	24	39		J-9	底部		2.5		景德鎮窯系	16c後半	摹寫底
青花	皿	95	2上	15	28	2-20	L-12	口縁~胴部	11.6	3.2		景德鎮窯系	16c後半	碗の可能性
青花	皿	260	3下	32	49	2-72	F-16 空堀	口縁~高台	12.0	5.8	2.2	福建広東	16c後半	見込み蛇ノ目 軸剥ぎ、置付無釉
青花	皿	693	15上	60	88		AD-39	口縁~底部	6.4	2.6	1.8	景德鎮窯系	16c後半	摹寫底 菊皿
青花	皿	23	1	7	18	3-53	I-3 柱穴	口縁~底部	11.2	6.1	2.6	景德鎮窯系		四方轆文 粗製 直
青花	皿	97	2上	15	28		L-12	口縁部	10.0					発色悪し
青花	皿	205	2下	24	39		J-9 表探	口縁~高台		10				直
青花	皿	402	4上	39	60	3-165	Q-26(3T)	口縁~底部		8.4		景德鎮窯系		置付砂吹き
青花	皿	285	3下	33	50	3-8	J-15 虎口	口縁	12.4			景德鎮窯系		直
青花	皿	405	4上	39	60	3-168	Q-27(5T)	口縁~底部		6.2		景德鎮窯系		レンゾウ?
青花	皿	694	15上	60	88		AD-38・39	口縁~底部	22.2			景德鎮窯系		大皿
青花	皿	514	6上	50	73		AA-36(14T)	口縁部				景德鎮窯系	16c後半	盤様稜縁皿 芙蓉手
青花	皿	25	1	7	18	3-54	H-4 柱穴	口縁~胴部				景德鎮窯系	16c末~17	盤様稜縁皿
青花	皿	695	15上	60	88		AG-40	底部		6.8		景德鎮窯系	15c後半	大明年造か
青花	皿	451	6上	46	68		AB-35 虎口	底部		3.8		景德鎮窯系	16c後半	碗の可能性
青花	皿	513	6上	50	73		AB-37	口縁部	14.0			景德鎮窯系	16c後半	内湾 四方轆文
青花	皿	515	6上	50	73		AB-36	底部		7.6		景德鎮窯系	16c後半	広い高台
青花	皿	24	1	7	18		H-3	底部				景德鎮窯系		見込文様
青花	皿	98	2上	15	28		K-12	底部		7.2		景德鎮窯系		宣徳年製
青花	皿	99	2上	15	28		K-12	底部		5.4		景德鎮窯系		
青花	皿	292	3下	33	50	3-10	I-16 階段	底部		5.2		景德鎮窯系		見込文様 置付軸剥ぎ
青花	皿	327	3下	35	54	3-11	曲輪一括	底部				景德鎮窯系		
青花	皿	696	15上	60	88		AC-40	底部		7.4		景德鎮窯系		直口 見込獅子?
青花	皿	790	6上下間	65	98		AC-36空堀	底部		19.2		景德鎮窯系		大皿
青花	杯	517	6上	50	73		曲輪一括	胴部				景德鎮窯系		
青花	杯	518	6上	50	73		AC-37	底部		2.3		中国		高台内を断面アーチ状に削る
青花	杯	519	6上	50	73		AB-37	底部		3.1		景德鎮窯系		見込無文
青花	杯	209	2下	24	39		J-9	口縁部						薄手
青花	杯	452	6上	46	68		AB-36 虎口	腰部		5.8		景德鎮窯系		
青花	鉢	92	2上	15	28		K-14	口縁部	17.6					外反 轆形
青花	鉢	453	6上	46	68		AB-35 虎口	口縁~腰部	27.4			中国南部?		
青花	蓋物	100	2上	15	28	2-21	K-12	口縁部~高台	6.2	4.0	4.6	景德鎮窯系	16c	蓋無し
青花	合子	703	15上	60	88		AE-40	蓋	5.0			景德鎮窯系		
青花	瓶	701	15上	60	88		AG-40	頸部	2.6			景德鎮窯系		
青花	瓶	702	15上	60	88		AG・AH-40	頸部				景德鎮窯系		内面一部施釉
青花	水注	697	15上	60	88		AF-40	口縁~胴部				景德鎮窯系		被熱
青花	水注	698	15上	60	88		AF-40	口縁部				景德鎮窯系		口縁部のみ
青花	水注	699	15上	60	88		AF-39	頸部?				景德鎮窯系		把基部
青花	水注	700	15上	60	88		AF-40	腰部	腰部径6.6			景德鎮窯系		

その他の磁器

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
赤絵磁器	碗皿	706	15上	60	88		AD-42	胴部				景德鎮窯系?		赤絵
赤絵磁器	杯?	520	6上	50	73		AA-36(14T)	口縁部				中国		赤絵 緑色彩色
赤絵磁器	碗	212	2下	24	39	3-102	J-9	口縁~体部				中国		赤絵 緑色彩色
赤絵磁器	碗?	213	2下	24	39	3-103	J-10	口縁部				中国		赤絵 緑色・青色彩色
瑠璃釉磁器	碗?	210	2下	24	39		J-9	口縁				中国		瑠璃釉 口縁白色
瑠璃釉磁器	碗?	211	2下	24	39		J-9	胴部				中国		瑠璃釉
青釉磁器	碗皿	102	2上	15	28	2-23	K-12	口縁部	16.0			景德鎮窯系	16c	青釉 被熱
青釉磁器	蓋?	522	6上	50	73		AF-40	底部		3.6		中国		外面紺色 被熱
磁器	皿	328	3下	35	54	2-73	H-13	底部~高台		4.6		景德鎮窯	16c第2~3四半期	彩色磁器 赤色・緑色
磁器	杯	784	15下	64	97		AH-39	口縁部				景德鎮窯系		彩色磁器 青色・赤色・緑色
磁器	杯?	705	15上	60	88		AB-38	底部	7.2			景德鎮窯系?		彩色磁器 青色・赤色・緑色
磁器	碗	101	2上	15	28	2-22	L-13	胴部		3.4		景德鎮窯系	16c	外面青磁釉、内面青花、被熱
磁器	盤皿	707	15上	60	88		AD-38	口縁部付近				景德鎮窯系?		外面青磁釉、内面青花
磁器	皿	521	6上	50	73		AA-35	口縁部付近				景德鎮窯系		内面青花 外面青磁釉

海外産陶器

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
陶器	碗	103	2上	16	29	2-31	L-12	胴部ほか				中国	14c~15c	天目碗
陶器	碗	454	6上	47	69		AB-36 虎口	口縁部	13.2			中国		天目碗
陶器	碗	523	6上	50	73		表土	口縁部	13.6			中国		天目碗
陶器	碗	524	6上	50	73		AC-37	口縁部	12.8			中国		天目碗
陶器	碗	525	6上	50	73		AB-37	口縁部	10.9			中国		天目碗
陶器	碗	526	6上	50	73		AD-37	腰部				中国		天目碗? 下半露胎
陶器	碗	709	15上	61	90		AF-40	口縁~底部	11.9	4.2	6.3	中国		天目碗 類似小片あり
陶器	碗	710	15上	61	90		AC-42	口縁部	11.2			中国		天目碗
陶器	碗	711	15上	61	90		AG-40	底部		5.3		中国		采切離し後に高台を付ける
陶器	皿	527	6上	50	73		曲輪一括	口縁~底部		4.3		中国		輪花? 下半露胎
陶器	壺	106	2上	16	29	2-30	L-12	口縁部ほか	21.6			中国南部か	明代	外面灰釉、内面鉄漿、近世遺物の可能性
陶器	壺	458	6上	47	69		AB-36 虎口	頸部		4.0		中国		黒褐釉
陶器	壺	714	15上	61	90		AF-39	底部付近				中国		黒褐釉
陶器	壺	715	15上	61	90		AG-40	口縁部				中国		無銘壺
陶器	壺	406	4上	39	60	3-169	曲輪一括	肩部				中国		
陶器	壺	332	3下	35	54	2-74	H-15	胴部				福建広東	明代	胎土が粗い
陶器	壺?	713	15上	61	90		AG-40	底部		8.0		中国		内底渦巻状調整
陶器	壺	562	15上	57	85		AD-40溝	肩部				中国		胎土あり「清香」印判
陶器	壺	716	15上	61	90		AF-40	肩部				中国		褐釉 耳あり
陶器	壺	717	15上	61	90		AG-40	底部				中国		褐釉
陶器	壺	261	3下	32	49	2-75	I-16 空堀	胴部下半				東南アジア	16cか	ベトナムか
陶器	壺	27	1	7	18	3-55	H-5 柱穴	頸部				中国		耳付
陶器	壺	457	6上	47	69		AB-36 虎口	肩部				中国		黒褐釉
陶器	壺	563	15上	57	85		AF-40溝	胴部~底部	21.2			中国		褐釉 器壁薄い
陶器	壺	564	15上	57	85		AF-40溝	胴部				中国		黒釉 内面釉剥ぎ?
陶器	壺	718	15上	61	90		AG-40	肩部分				中国		黒褐釉
陶器	壺	719	15上	61	90		AF-39	底部				中国		内外面露胎
陶器	瓶	530	6上	50	73		AB-36	口縁部	6.0			中国		胎土
陶器	袋物	720	15上	61	90		AF-40	底部付近				中国		外面施釉
陶器	鉢	286	3下	33	50	3-12	J-15 虎口	口縁部	28.0			東南アジア	16c頃	素焼 水指の蓋として転用か
陶器	鉢	333	3下	35	54	2-79	I-14	縁部	22.2			東南アジア	16c頃	素焼 水指の蓋として転用か

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
陶器	鉢	330	3下	35	54	2-76	H-13	口縁部	23.6			福建広東	明代	外面鉄釉
陶器	鉢	331	3下	35	54	2-77	I-15	口縁部ほか	28.0			福建広東	明代	内面鉄釉
陶器	鉢	214	2下	24	39	3-104	J-10	口縁～体部	23.0			福建広東		
陶器	鉢	455	6上	47	69		AB-37 虎口	底部	17.6			中国		貼付け装飾
陶器	鉢	456	6上	47	69		AB-36 虎口	口縁部	21.0			中国		貼付け装飾 480と同一個体
陶器	鉢	528	6上	50	74		曲輪一括	口縁部	10.4			中国		明茶色
陶器	鉢	712	15上	61	90		AF-39	口縁部	28.2			中国		
陶器	鉢	791	6上,下間	65	98		AC-36 空堀	口縁～腰部				中国		
陶器	鉢	104	2上	16	29	2-27	K-11	口縁部ほか				福建広東	明代	内面鉄釉, 内黒
陶器	鉢	105	2上	16	29	2-28	L-12	口縁部				福建広東	明代	内面無釉
陶器	挿鉢	107	2上	16	29	2-29	L-12	口縁部	14.0			中国		口縁部のみ褐釉, 近世遺物の可能性
陶器	挿鉢	799	空堀8	67	100		AC-37 空堀8	腰部				中国		素焼?
陶器	挿鉢	407	4上	39	60	3-170	Q-26(3T)	底部				中国		
陶器	不明	721	15上	61	90		曲輪一括	小片				不明		内面にふい水色 近現代遺物の可能性

### 三彩・緑釉陶器・彩色陶器

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
三彩	水注	215	2下	24	39	3-108	J-10	体部				中国南部		鳥形水注 羽根部分
三彩	水注	216	2下	24	39	3-109	J-10					中国南部		鳥形水注 脚部分
三彩	水注	217	2下	24	39	3-110	J-9					中国南部		鳥形水注 脚部分
三彩	水滴	792	6上,下間	65	98		AC-36 空堀					中国		鳥形水滴
三彩	水滴	108	2上	16	29	2-p40	K-12	くちばし				中国	15c~16c	鳥のくちばし
三彩	水滴	109	2上	16	29	2-32	L-13	底部?				中国	15c~16c	鳥形水滴か
三彩	水滴	110	2上	16	29	2-p40	L-13	尾?				中国	15c~16c	鳥形水滴の尾か
三彩	水滴	408	4上	39	60	3-171	Q-26(6T)	魚形尾				中国南部	16c	魚形水滴か
緑釉陶器	水注	722	15上	61	90		AF-40	胴部	7.0			中国		
緑釉陶器	水注	409	4上	39	60	3-173	Q-26(6T)	肩部				中国南部		脚付き底部の可能性あり
緑釉陶器	瓶	723	15上	61	90		AG-40	頸部				中国		
緑釉陶器	不明	218	2下	24	39		K-7(2-2T)	胴部				中国		
緑釉陶器	不明	724	15上	61	90		AE-39	小片				中国		
緑釉陶器	不明	725	15上	61	90		AE-39	小片				中国		
緑釉陶器	不明	410	4上	39	60	3-174	P-26(1T)	小片				中国南部		
彩色陶器	皿	111	2上	16	29	2-33	K-12	口縁部				景德鎮窯系	16c	青釉・黄釉
彩色陶器	杯	334	3下	35	54	2-p42	H-15	口縁部	5.4			中国		青釉

### 国産陶器

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
陶器	碗	115	2上	16	29	2-36	K-12	口縁部ほか				瀬戸美濃	14c~15c	灰釉
陶器	碗	116	2上	16	29	2-37	K-12	口縁～胴部				瀬戸美濃	16c頃	灰目碗
陶器	碗	28	1	7	18	3-56	H-4 造成	口縁～底部	11.2			瀬戸美濃		灰目碗
陶器	碗	534	6上	50	73		AC-37	腰～底部	4.6			瀬戸美濃		灰目碗
陶器	碗?	118	2上	16	29	2-40	K-12	口縁部				肥前か	1590~1610年か	唐津焼の可能性 口錆
陶器	碗?	726	15上	61	90		AF-38(5T)	胴部				瀬戸		
陶器	皿	329	3下	35	54	2-78	曲輪一括	口縁～底部か	11.0	4.6	2.4	中国	14c~15c	内面黒釉, 被熱, 近世遺物の可能性
陶器	皿?	262	3下	32	49	2-88	空堀	底部?				日本		陶器皿に彩色 近世遺物の可能性
陶器	壺	113	2上	16	29	2-38	J-11	口縁～頸部	12.4			備前	14c~15c	

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
陶器	壺	337	3下	35	54	2-84	G-15	口縁部	8.6			備前か	16cか	小壺 東南アジア産の可能性
陶器	壺?	727	15上	61	90		AC-40	口縁部	12.2			備前		
陶器	壺甕	459	6上	47	69		AB-36 虎口	底部		9.6		備前		
陶器	甕	112	2上	16	29	2-34	L-13	口縁部				常滑か	13c~14c	
陶器	甕	29	1	7	18		H-3	口縁部				常滑	14c後半	
陶器	甕	264	3下	32	49	2-83	I-16 空堀	底部				備前	14c~15c	
陶器	甕	221	2下	24	39	3-107	K-9	口縁部				備前		
陶器	甕	728	15上	62	92		AG-40	口縁部	42.0			備前		6b・7形式?
陶器	甕	729	15上	61	90		AG-40	口縁部				常滑		握ね鉢か
陶器	鉢	114	2上	16	29	2-35	K-11	胴部下半				瀬戸	14c~15c	握ね鉢か
陶器	鉢	338	3下	35	54	2-86	H-14	胴部下半				備前か	14c~15c	握ね鉢か
陶器	鉢	117	2上	16	29	2-39	K-13	口縁部か	9.6			備前か	16cか	口縁下部に外面から穿孔
陶器	鉢	733	15上	62	92		AE-40	口縁部				備前		
陶器	挿鉢	263	3下	32	49	2-80	空堀	口縁~胴部				備前	14c~15c前	
陶器	挿鉢	533	6上	49	73		AD-37	口縁部	26.0			備前		
陶器	挿鉢	335	3下	35	54	2-p42	H-14	口縁~腰部	29.2			備前	15c前半	
陶器	挿鉢	336	3下	35	54	2-81	I-15・16	口縁部				備前	15c~16c前	
陶器	挿鉢	531	6上	49	73		曲輪一括	底部				備前		
陶器	挿鉢	532	6上	49	73		AB-37	口縁部				備前		
陶器	挿鉢	258	3下	32	49	2-82	H-14 土坑3	口縁部				備前	16c頃	
陶器	挿鉢	565	15上	57	85		AF-40溝	口縁部				備前	16c	
陶器	挿鉢	566	15上	57	85		AF-40溝	口縁部	29.0			備前	16c	
陶器	挿鉢	219	2下	24	39	3-105	J-10	口縁~体部	31.4			備前		
陶器	挿鉢	220	2下	24	39	3-106	J-10	体部				備前		
陶器	挿鉢	793	6上下間	65	73		AC-36空堀	口縁部				備前		
陶器	挿鉢	730	15上	62	92		AE-39	口縁~底部				備前		
陶器	挿鉢	731	15上	62	92		AC-42	口縁部				備前		
陶器	挿鉢	732	15上	62	92		AE-39	口縁部	32.4			備前		
陶器	挿鉢	734	15上	62	92		AF-39	口縁部	17.4			不明		半球形 胴部露出?
陶器	不明	339	3下	35	54	2-87	H-14	口縁部				肥前か	16c頃か	葉型の装飾 器形不明

### 須恵器

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
須恵器	壺甕?	747	15上	61	90		AC-43	頸部						
須恵器	鉢	748	15上	63	93		AF-40	口縁~底部	23.2					亀山様の可能性
須恵器	鉢?	474	6上	48	70		AB-37溝	口縁部						東播系

### 瓦質土器

種別	器種	掲載番号	出土曲輪	挿図番号	頁	既報告番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
瓦質土器	浅鉢	752	15上	63	93		AF-40	口縁~胴部	15.4					浅鉢IIIまたはIV スタンプ文
瓦質土器	鉢	131	2上	17	30	2-p41	K-13	胴部						スタンプ濁文
瓦質土器	鉢	132	2上	17	30	2-p41	K-11	胴部						鉢
瓦質土器	鉢	133	2上	17	30	2-p41	K-14	胴部~胴部						胴付き
瓦質土器	鉢	462	6上	46	69		AB-36 虎口	口縁部						スタンプ文
瓦質土器	鉢	543	6上	50	74		AB-37	口縁~底部	17.0	15.6	3.0			スタンプ文
瓦質土器	鉢?	785	15下	64	97		AF-37	口縁部	33.2					
瓦質土器	火鉢	542	6上	50	74		曲輪一括	口縁部					15c	浅鉢VI スタンプ文



種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
瓦質土器	火入?	463	6上	47	69		AB-36 虎口	底部		26.0				
瓦質土器	袋物	544	6上	51	74		AA-36	底部		9.2				九曜文
瓦質土器	風炉	461	6上	47	69		AB-36 虎口	口縁部	13.4					雲板状装飾 猫足
瓦質土器	風炉?	568	15上	57	85		AG-40溝	脚部						
瓦質土器	風炉?	794	6上・下間	65	98		AC-36空堀	口縁部	23.2					
瓦質土器	風炉	751	15上	63	93		AF-40	口縁部						風炉II
瓦質土器	羽釜	276	3下	33	50	3-39	H-16 空堀	体部				大和系?		雷文
瓦質土器	754	754	15上	63	93		AB-36	胴部						
瓦質土器	釜型土器	753	15上	63	93		AB-36	胴部						釣り手付釜型土器
瓦質土器	蓋	569	15上	57	85		AF-39溝	天辺部	22.4					スタンプ文

### 瓦器

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
瓦器	碗	755	15上	62	92		AG-40	口縁部	8.1					口縁煤付着
瓦器	碗	756	15上	62	92		AG-AH-40	口縁部						内外面研磨調整
瓦器	碗	757	15上	62	92		AG-40	底部	4.6					高台付
瓦器	碗?	540	6上	51	74		表土	口縁部						てづくね 薄手
瓦器	碗?	541	6上	51	74		AC-37	口縁部						高台 外面横ナデ
瓦器	皿	127	2上	16	29	2-52	L-12	口縁~胴部	10.0	2.6	1.9		16c後半か	手づくね 京都系に似る
瓦器	皿	128	2上	16	29	2-51	一括	口縁~胴部	11.0	1.6	2.7			手づくね 内面へケ目
瓦器	皿	129	2上	16	29		L-12	口縁部	8.8					口縁黒色
瓦器	皿	130	2上	16	29		K-12	口縁部						口縁黒色
瓦器	皿	422	4上	40	61	3-185	Q-26(6T)	口縁~底部						
瓦器	皿	423	4上	40	61	3-186	Q-26(3T)	口縁~底部	10.2	6.0	0.9			

### 土師質土器

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
土師質土器	碗?	748	15上	62	92		AF-40	底部		2.9				高台付碗
土師質土器	杯?	749	15上	62	92		AG-40	口縁部	12.5					胴部肥厚、調整による文様?
土師質土器	風炉?	750	15上	62	92		AF-39	胴部?	16.8					胴部に窓
土師質土器	壺	424	4上	40	61	3-189	Q-26(3T)	底部		17.8				在地系
土師質土器	播鉢	425	4上	40	61	3-190	Q-27(9T)	底部		7.6				在地系
土師質土器	播鉢	366	3下	36	55	3-38	H-16	底部付近						在地系

### 土師器

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
土師器	杯	119	2上	16	29	2-43	K-13	口縁~底部	10.0	5.8	3.3			へラ切り後、調整
土師器	杯	223	2下	25	40	3-113	J-9	口縁~底部	10.8	7.2	3.2			へラ切底
土師器	杯	411	4上	40	61	3-176	P-26(T)	口縁~底部	7.0	5.4	3.9			へラ切り後、調整
土師器	杯	412	4上	40	61	3-177	P-26(T)	口縁~底部	11.0	4.5	4.0			へラ切底 粗製
土師器	杯	280	3下	33	50	2-89	G-14 土壘	口縁~底部	11.6	6.3	3.1			へラ切り後、調整 余り粘土付着
土師器	杯	341	3下	35	54	3-14	I-15	口縁~胴部	12.4					糸切底
土師器	杯	342	3下	35	54	3-16	H-13	口縁~底部	11.6	7.0	4.0			糸切底
土師器	杯	343	3下	35	54	3-18	曲輪一括	口縁~底部	11.6	8.6	3.3			糸切底? 磨減
土師器	杯	120	2上	16	29	2-44	K-11	口縁~底部	12.0	8.9	4.3			糸切底
土師器	杯	121	2上	16	29	2-45	K-13	口縁~底部	14.6	10.0	3.3			糸切底





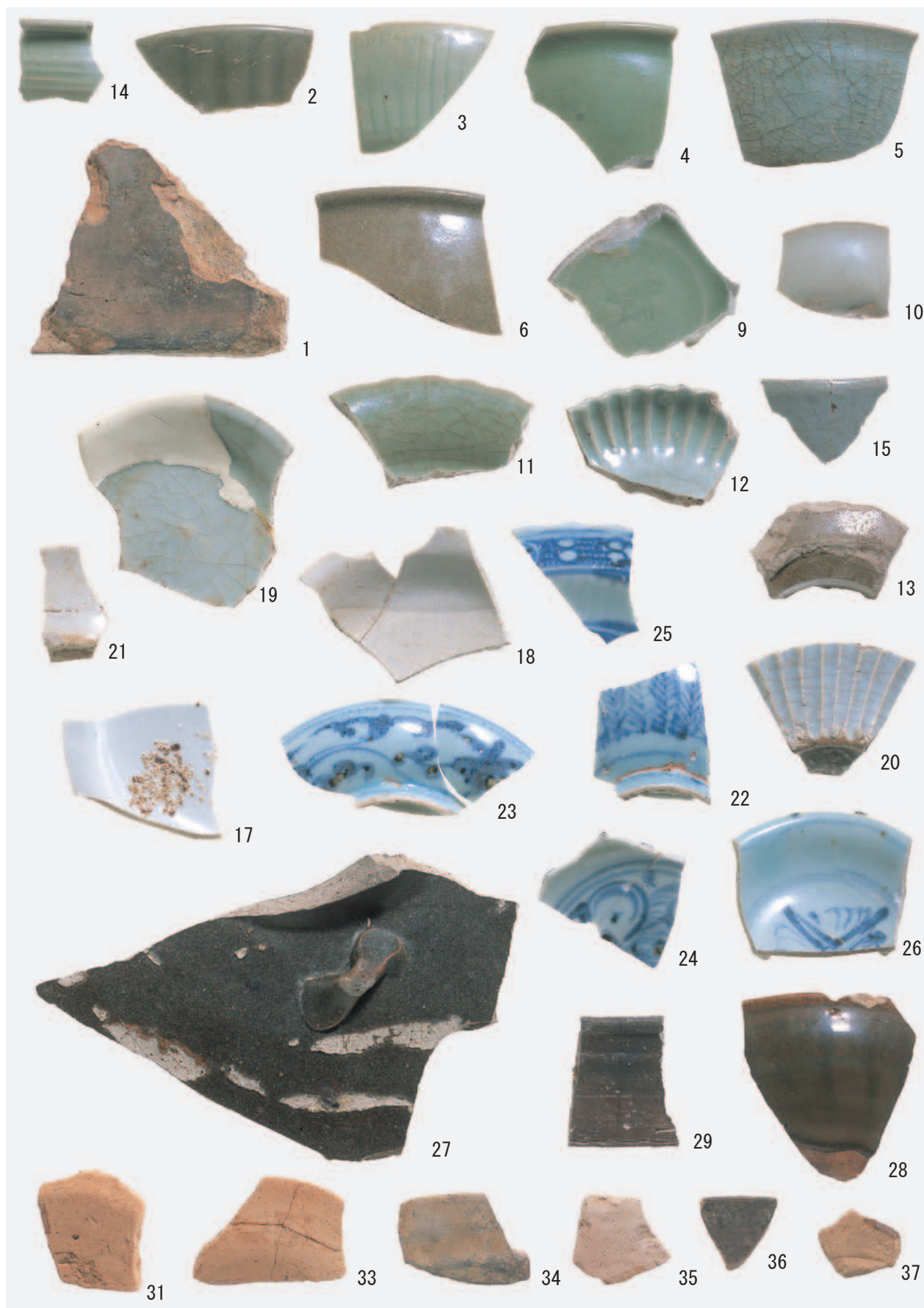




ガラス製品

種別	器種	掲載 番号	出土 曲輪	挿図 番号	頁	既報告 番号	出土区	部位	口径	底径	器高	生産地	時期	備考
ガラス製品	小玉	50	1	8	19	3-67	一括	接合	直径0.4	孔径0.5				3片を接合
ガラス製品	小玉	156	2上	18	31	2-p41	K-12	完品	直径1.2	孔径0.6				琥珀色
ガラス製品	小玉	157	2上	18	31	2-p41	L-12	完品	直径0.9	孔径0.4				緑色 線刻
ガラス製品	小玉	158	2上	18	31	2-p41	L-12	完品	直径0.6	孔径0.4				紺色 トンボ玉
ガラス製品	小玉	159	2上	18	31	2-p41	K-12	完品	直径0.4	孔径0.18				緑色
ガラス製品	小玉	160	2上	18	31	2-p41	L-13	完品	直径0.5	孔径0.18				水色 計4点出土
ガラス製品	小玉	772	15上	63	93		AF-39	完品	直径0.4	孔径0.1				青緑色 773と同一
ガラス製品	小玉	773	15上	63	93		AF-39	完品	直径0.9	孔径0.1				青緑色 覆れる
ガラス製品	破片	377	3下	36	55	2-p44	H-14 土坑I							器の破片か
ガラス製品	不明	278	3下	33	50		H-16 空堀							半透明緑色

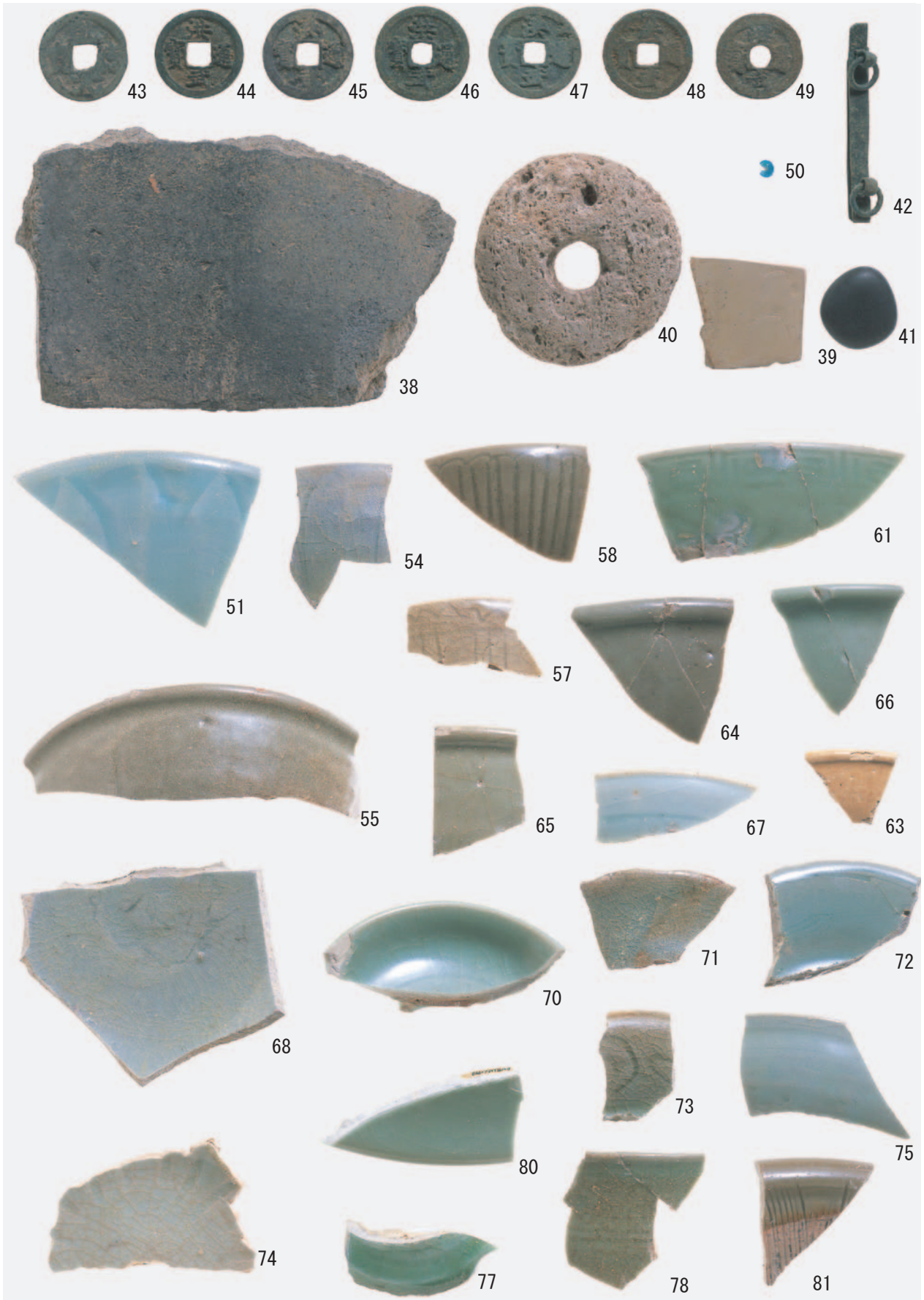




出土遺物 曲輪 1 (1)



图版2



出土遺物 曲輪 1 (2)・2上段(1)

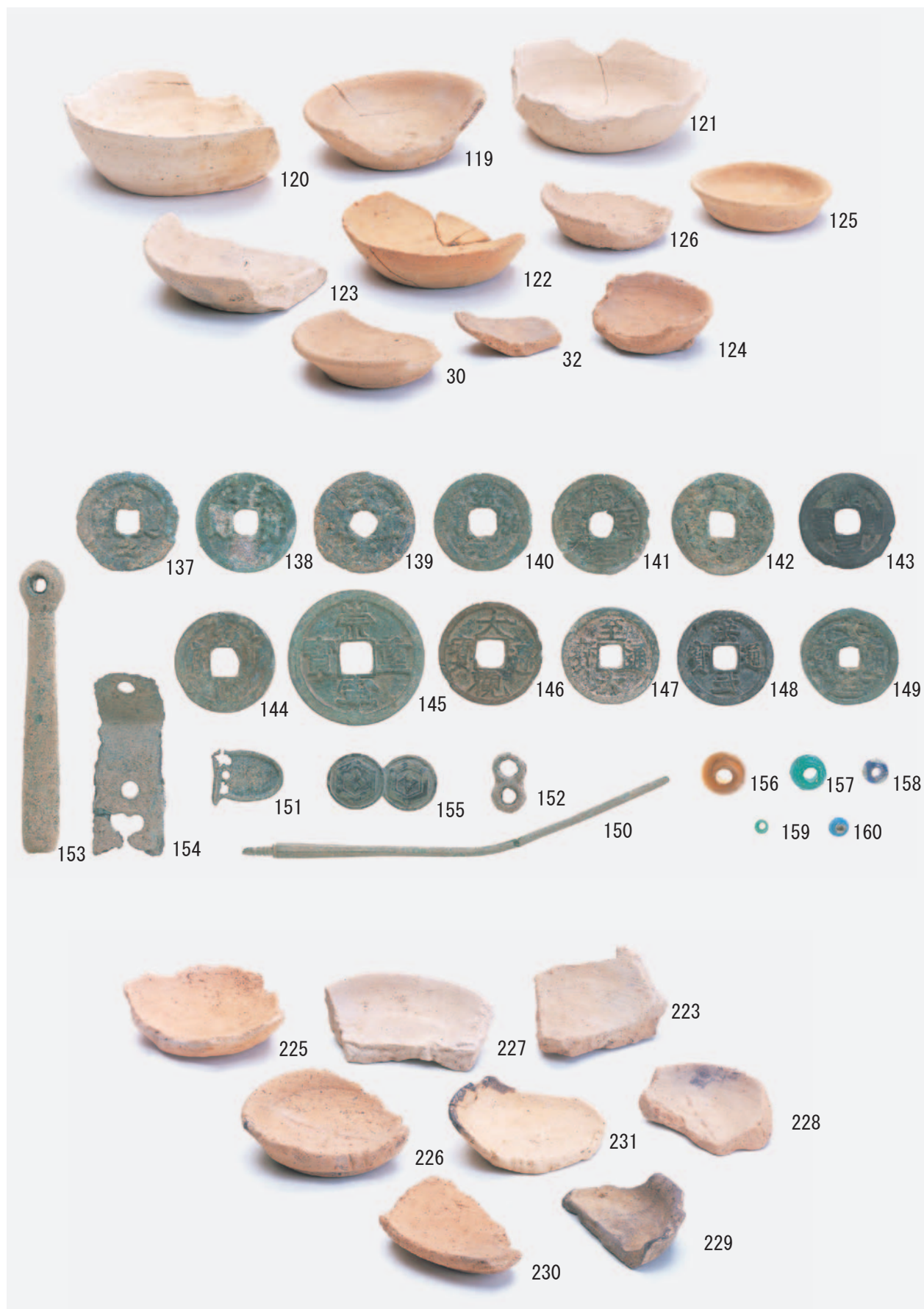


出土遺物 曲輪2上段(2)

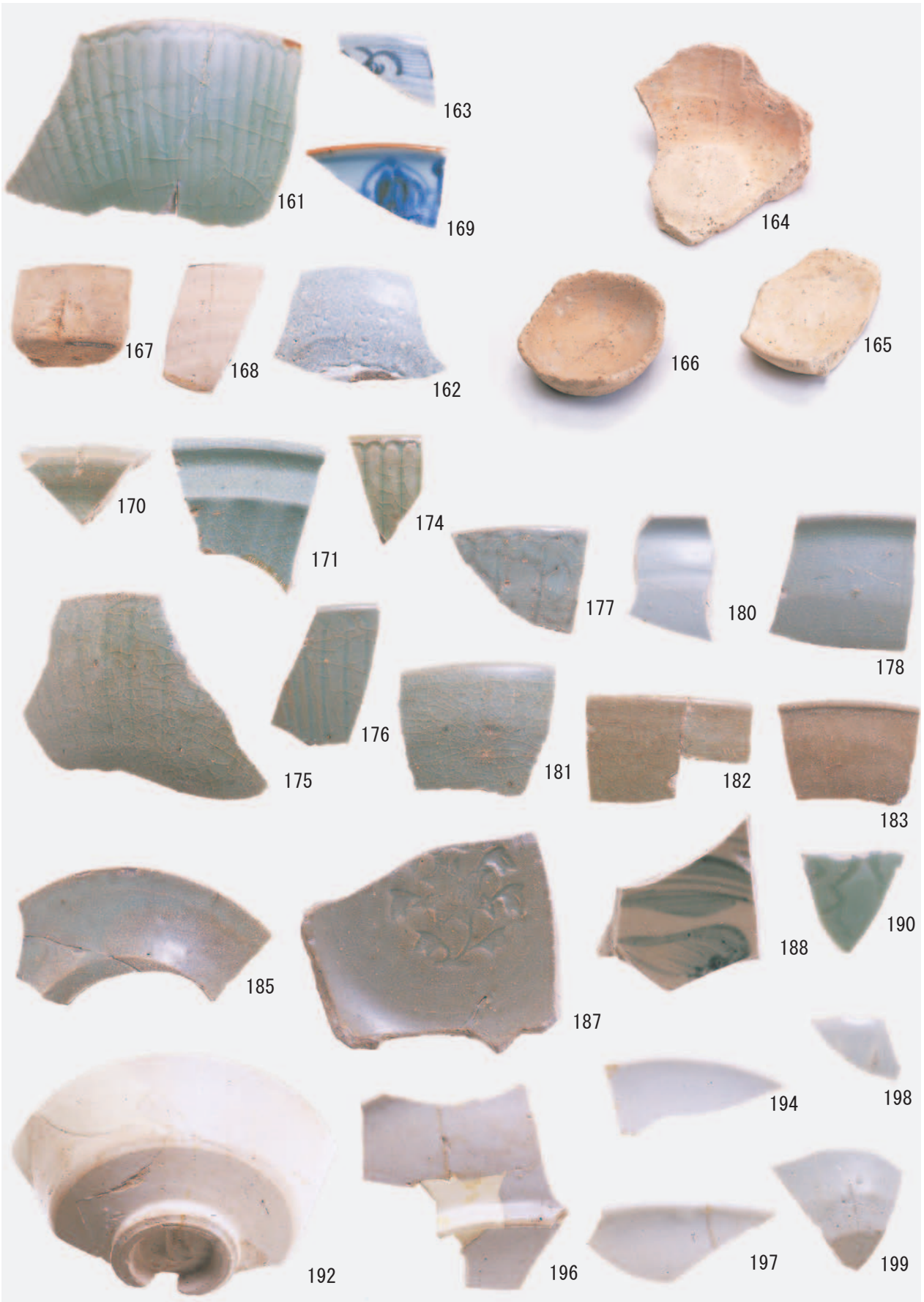
图版4



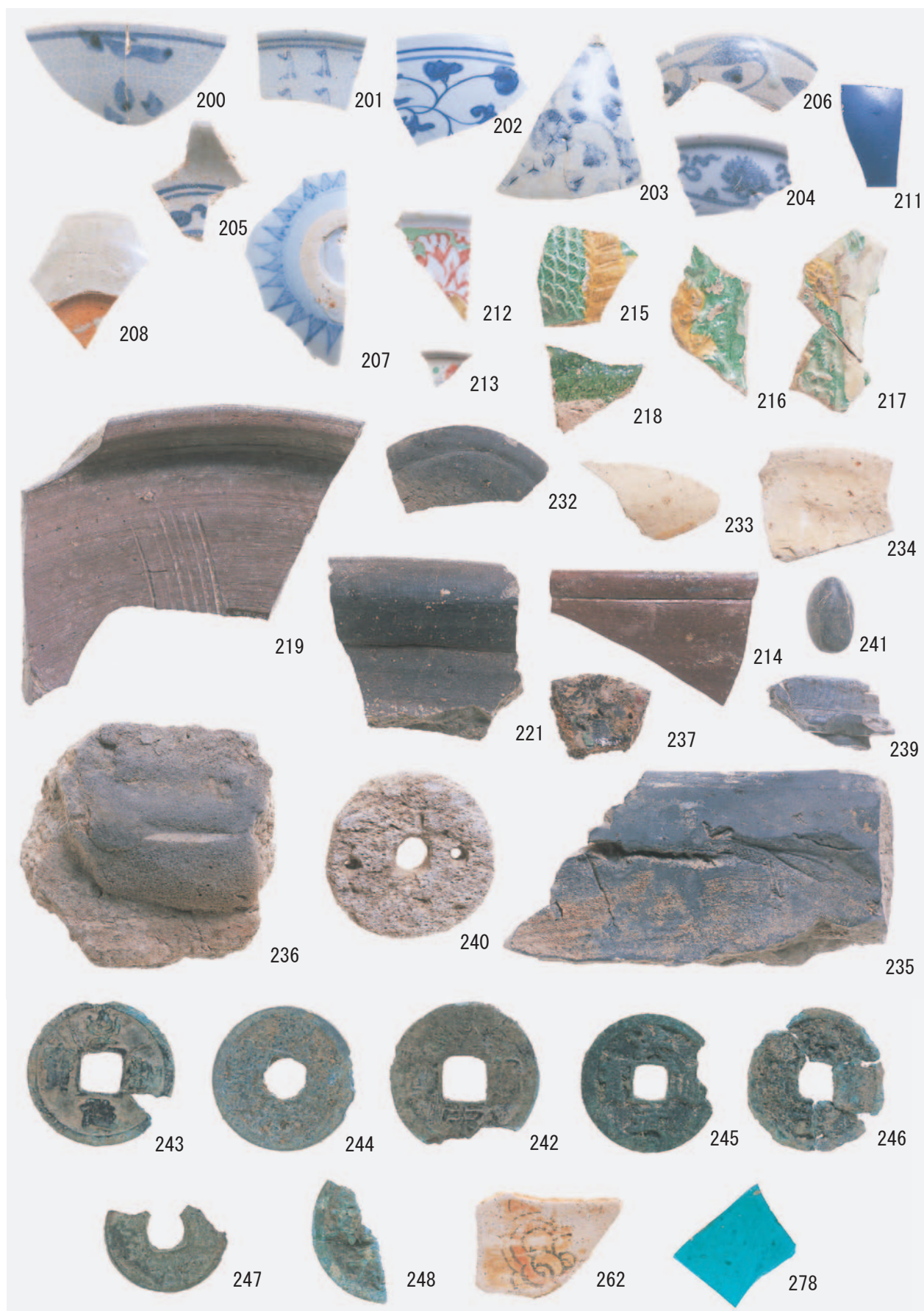
出土遺物 曲輪2上段(3)



出土遺物 曲輪2上段(4)・2下段(1)



出土遺物 曲輪2下段(2)

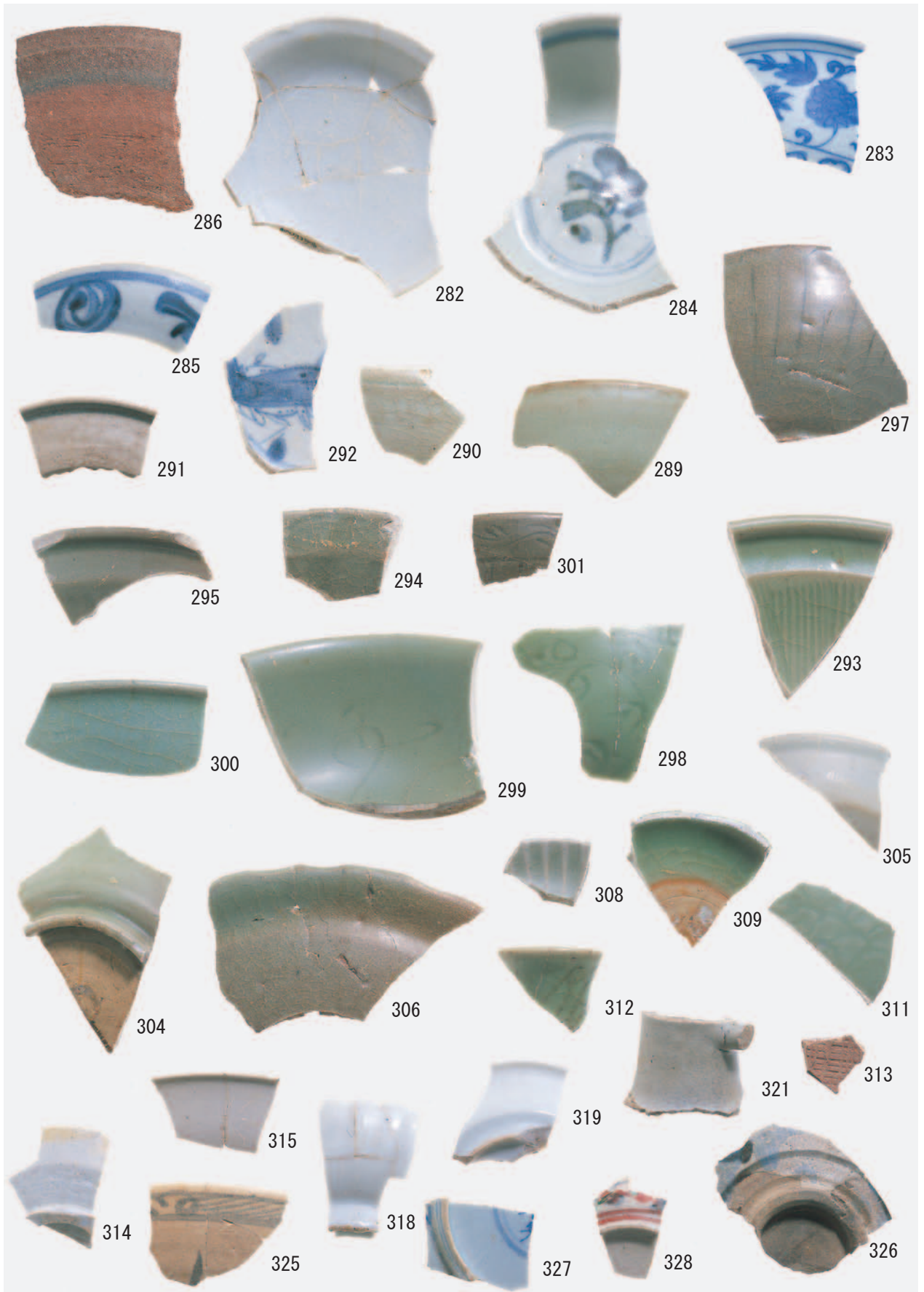


出土遺物 曲輪 2下段(3)・3下段(1)

图版8



出土遺物 曲輪3上段・3下段(2)

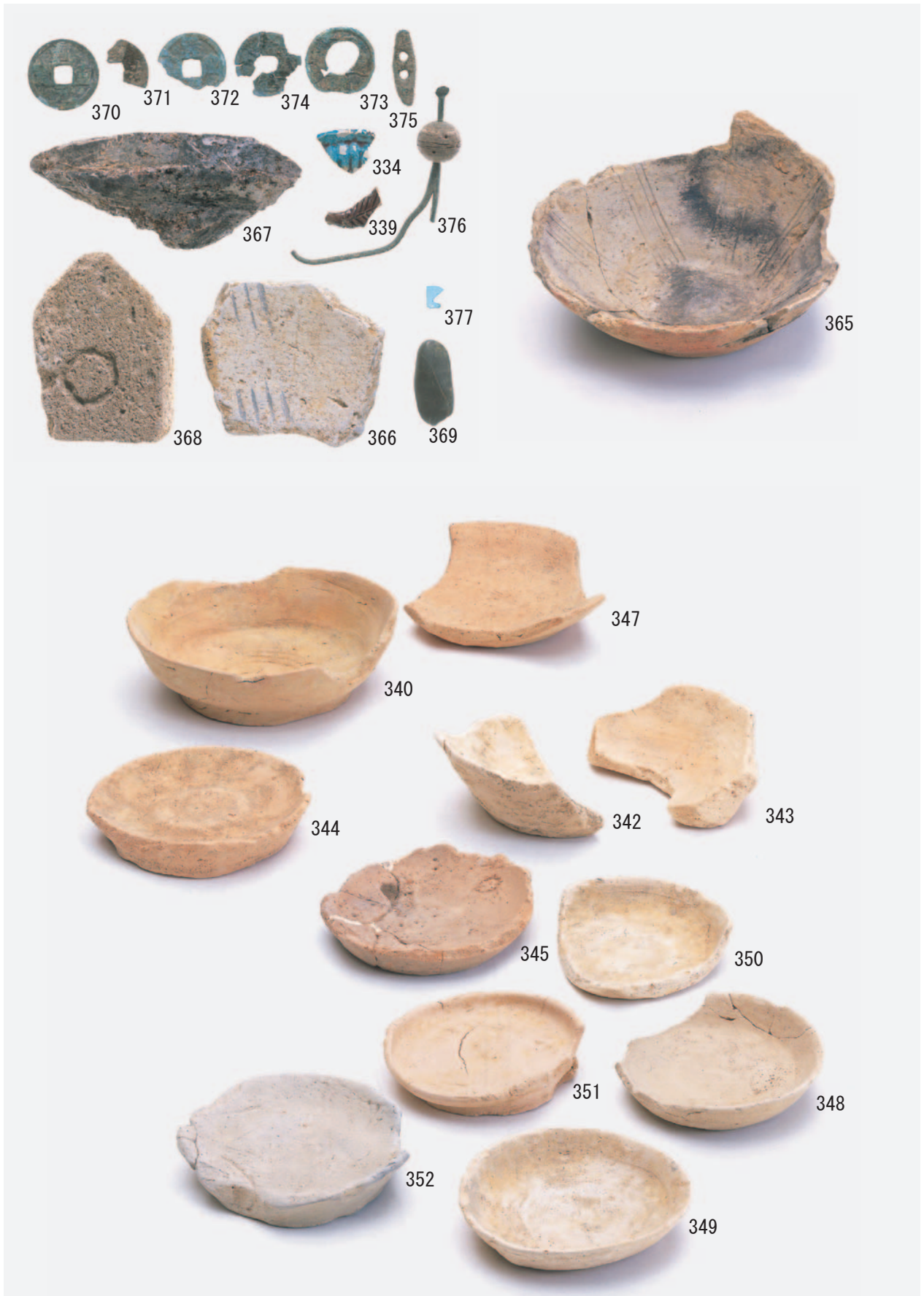


出土遺物 曲輪3下段(3)

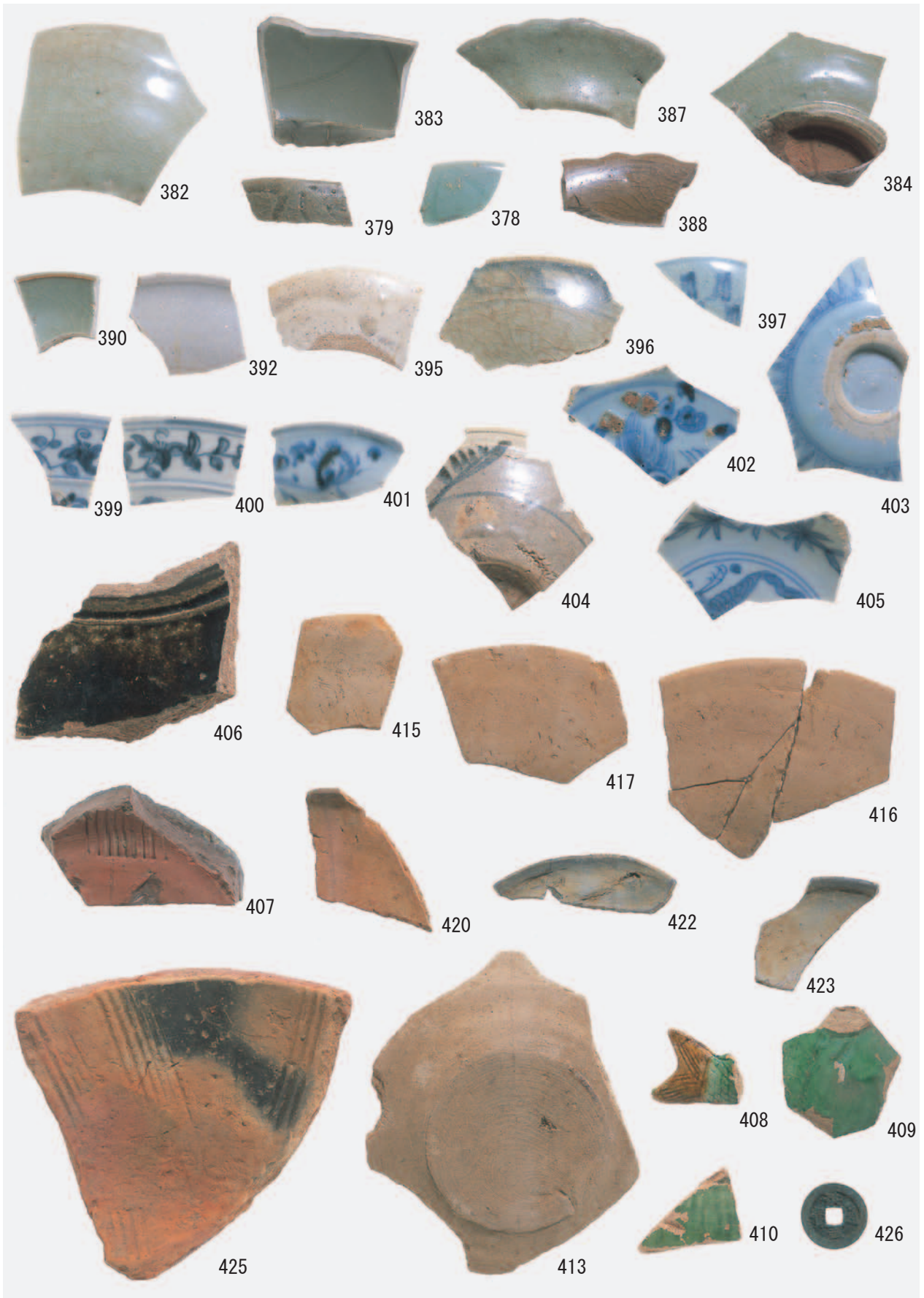




出土遺物 曲輪3下段(4)



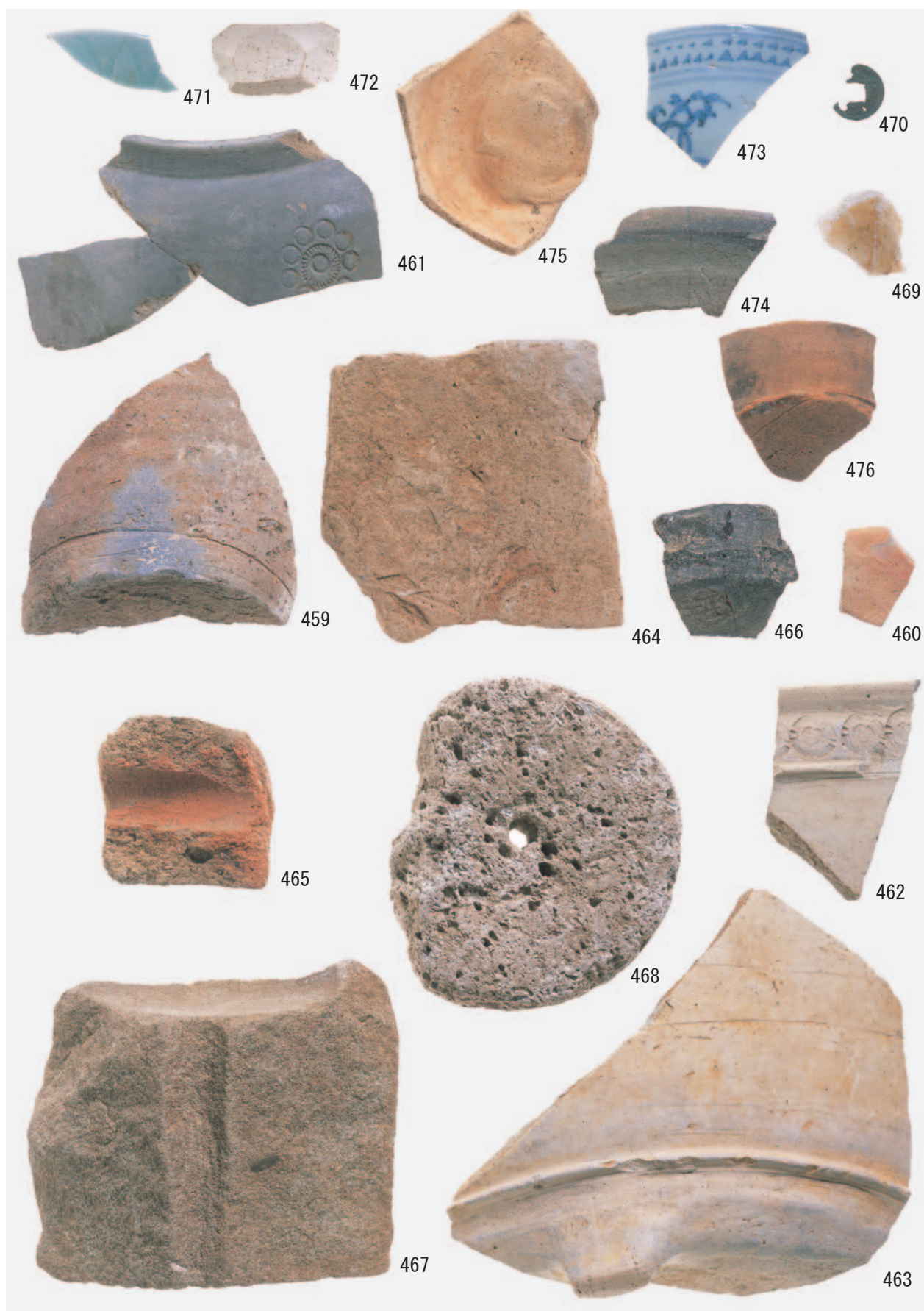
出土遺物 曲輪3下段(5)



出土遺物 曲輪4上段



出土遺物 曲輪6上段(1)



出土遺物 曲輪6上段(2)



出土遺物 曲輪6上段(3)



出土遺物 曲輪6上段(4)

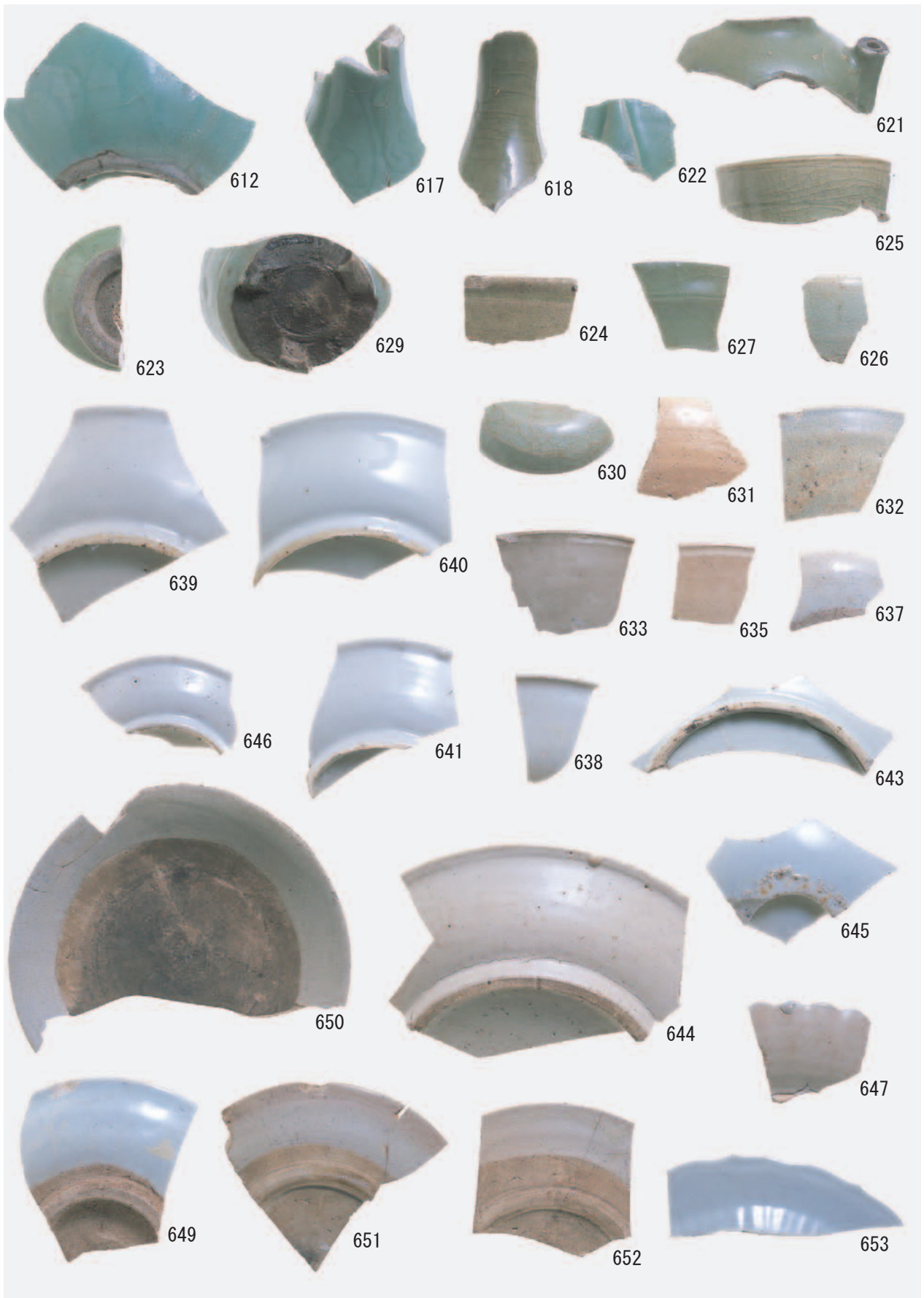


出土遺物 曲輪15上段(1)





出土遺物 曲輪15上段(2)



出土遺物 曲輪15上段(3)



出土遺物 曲輪15上段(4)



出土遺物 曲輪15上段(5)

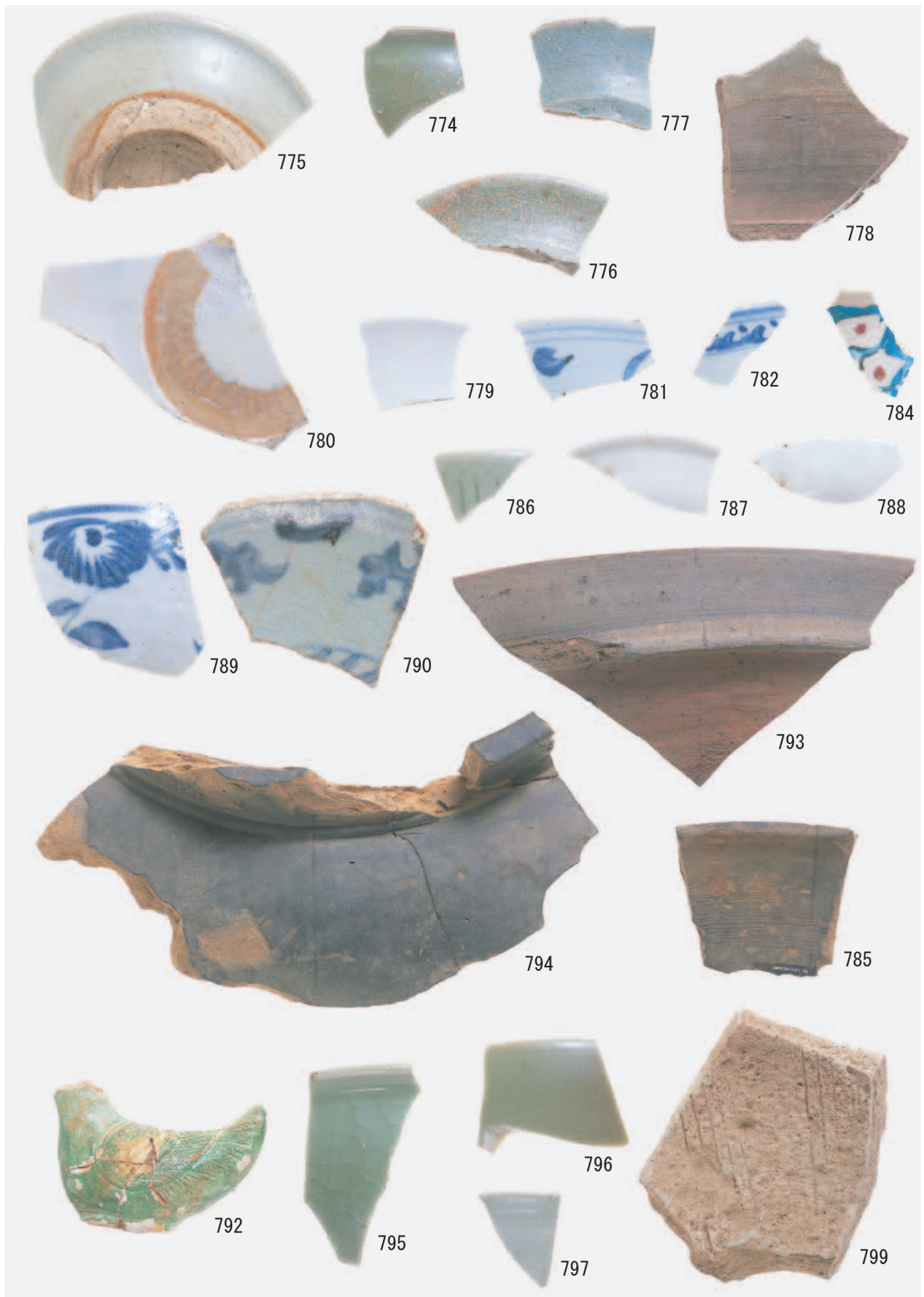


出土遺物 曲輪15上段(6)



出土遺物 曲輪15上段(7)

図版24

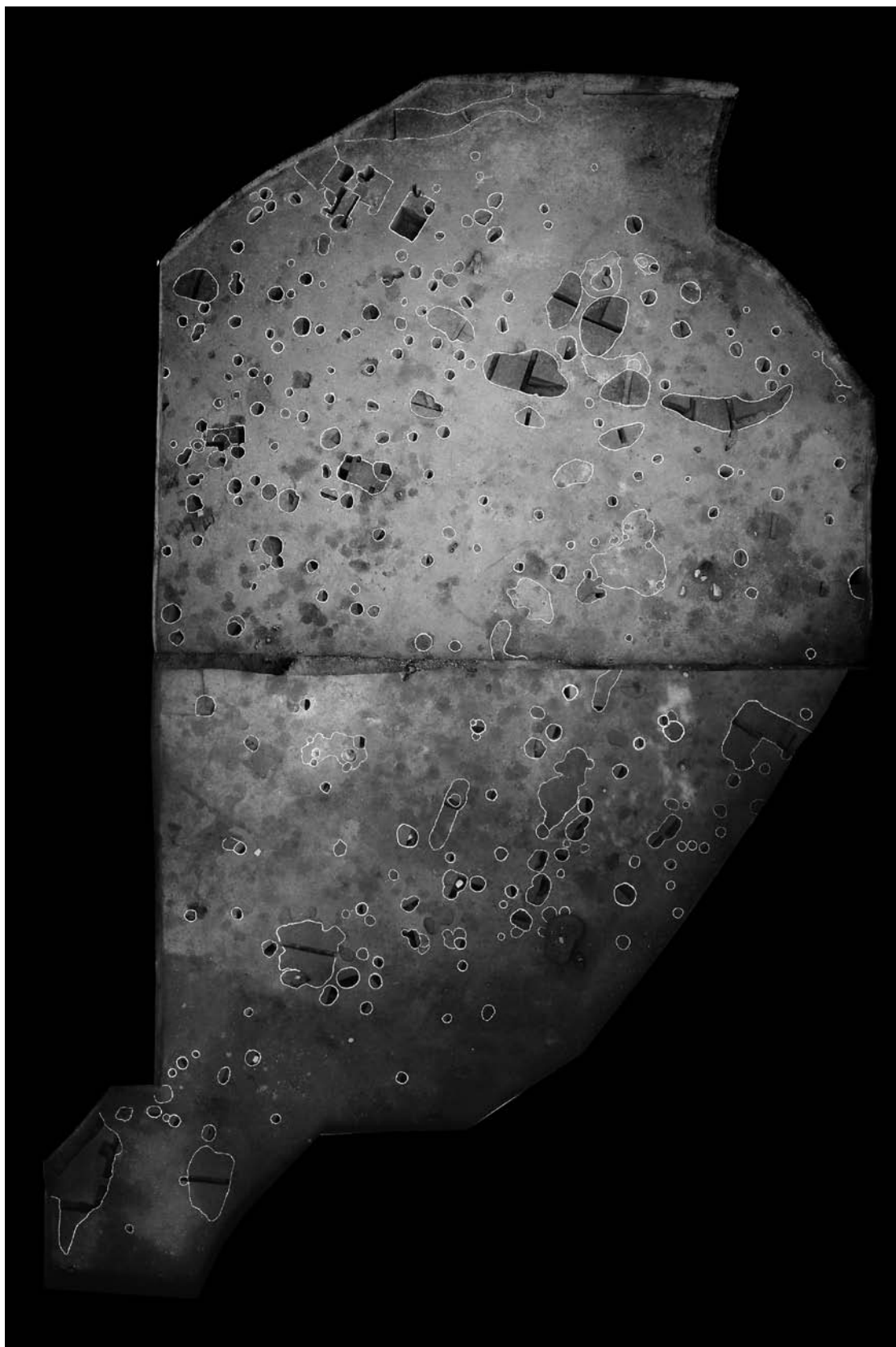


出土遺物 曲輪15下段・6上下間空堀・空堀8



曲輪 1

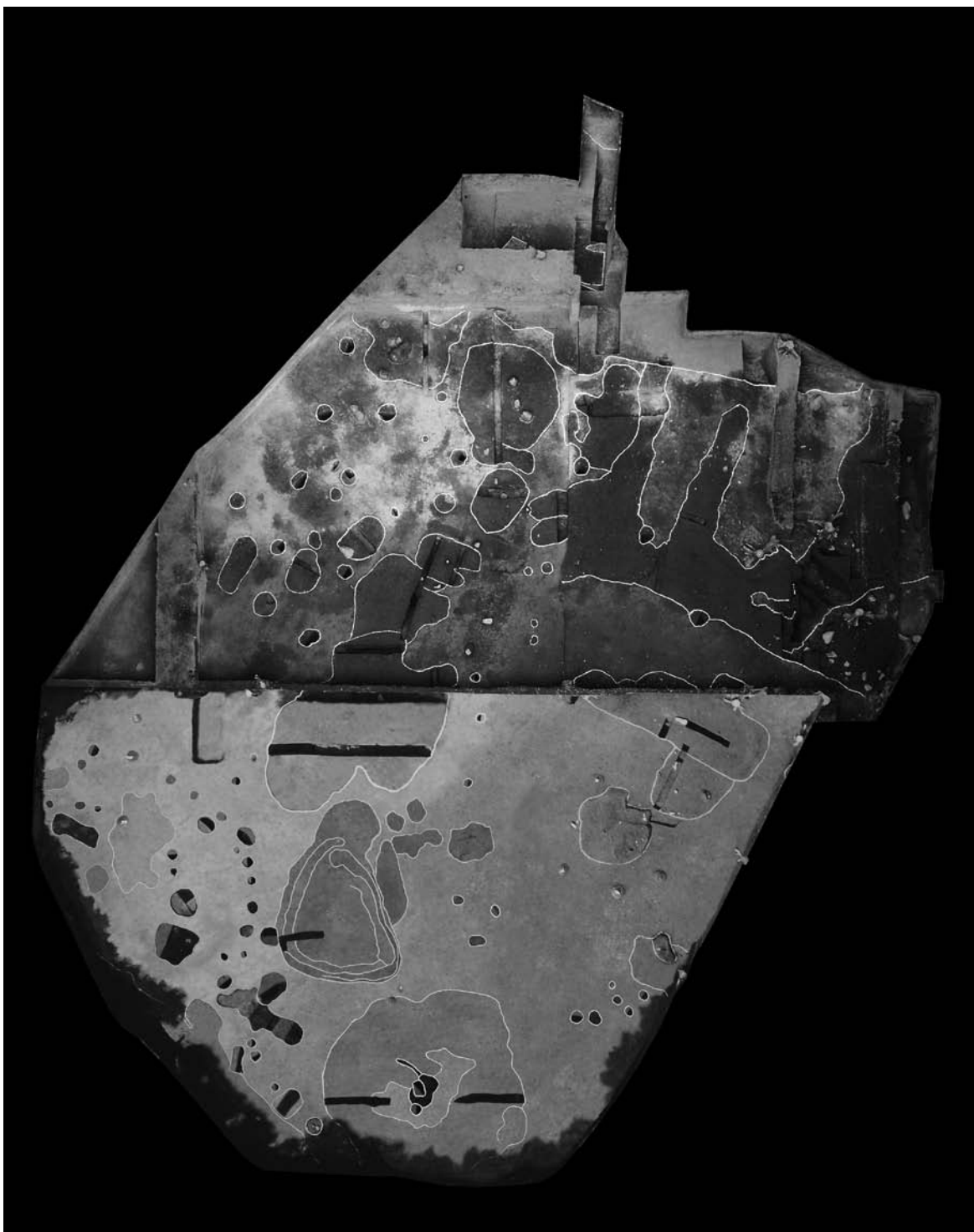




曲輪 2 上段



曲輪2下段



曲輪3下段



溝跡 南東から



遺構検出状況 I-4区



遺構検出状況 H-3区



方形土坑1 南東から



方形土坑2 南西から



2時期の礎石を持つ柱穴 西から



溝と流水痕跡 H-5区 東から

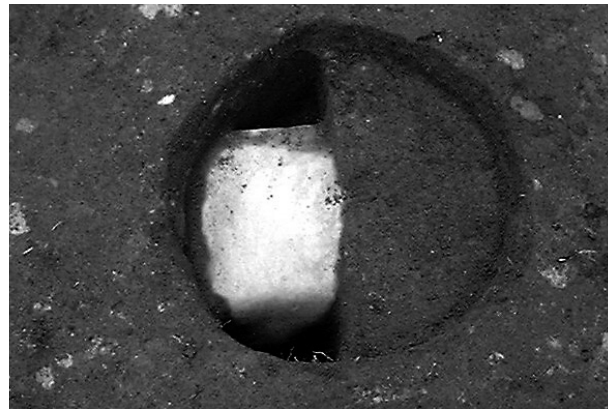


流水痕跡 断面

曲輪1



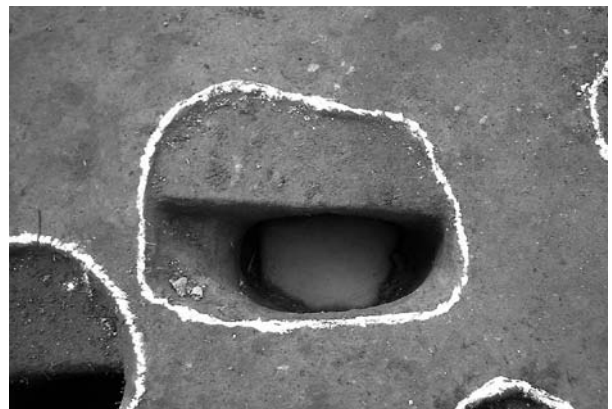
遺構検出状況 K・L-13区 南から



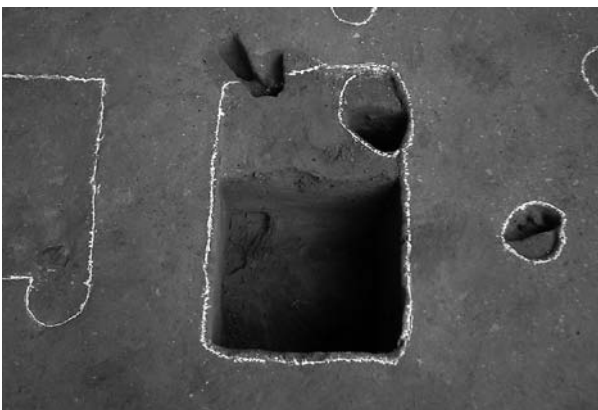
礎石柱穴1 北から



礎石柱穴3 東から



礎石柱穴4 東から



方形土坑1 東から



方形土坑2~4 南から



方形土坑6 東から



土坑・焦土域 L-13区 西から

曲輪2上段



焼土域 K-12区 北から



築城造成 K・L-12区 北から



青磁瓶(76) 出土状況



土師器皿(120) 出土状況



遺構検出状況 J-9区 西から



方形土坑 1~3 西から



5次調査埋め戻し遺構保全



2-2T埋め戻し完了

曲輪2下段



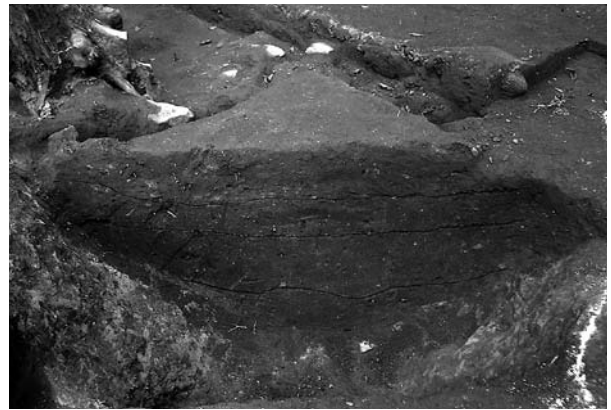
遺構検出状況 H-13・14区 北から



建物跡 H-15区 南西から



虎口 南から



虎口通路断面 I-15区 南から



道跡 I-15区 南から



空堀・道跡 H・I-15区 西から



空堀断面 西から



空堀 西から

曲輪3下段



空堀断面 I-16区



方形土坑集中 西から



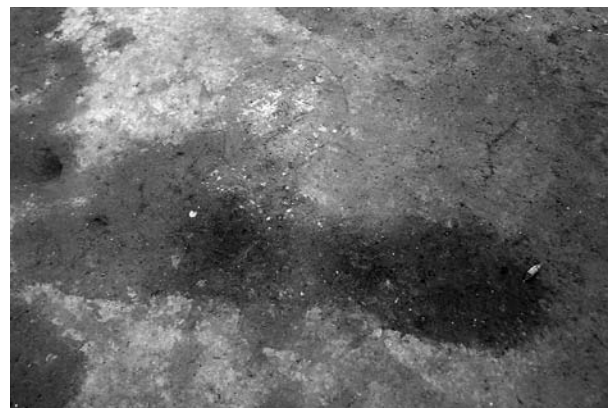
階段遺構 西から



竪穴状遺構 G-14区 北から



土坑4 I-14区 北から



焼土 鉄滓集中 H-14区



京都系土師器 出土状況



土師器播鉢(365) 出土状況

曲輪3下段



図版34



2 T 北壁



5 T 遺構検出状況 東から



6 T 遺構検出状況 西から

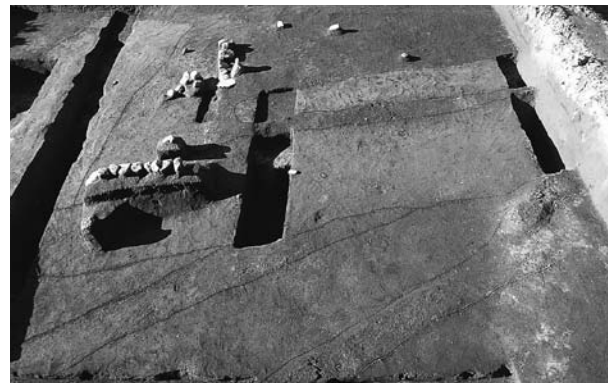


9 T 北壁(土塁断面)

曲輪4上段



遺構検出状況 東から



溝状遺構 配石遺構

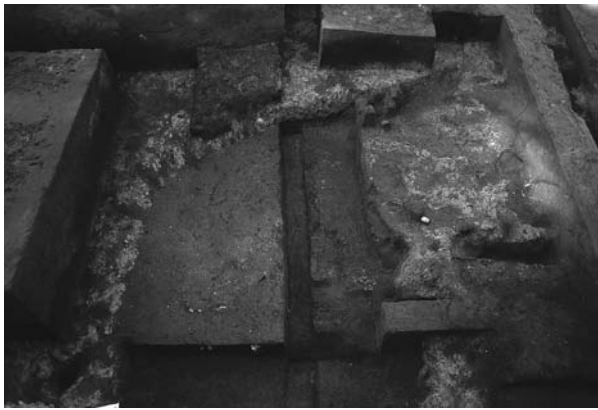


溝状遺構断面



溝状遺構と道跡 東から

曲輪6上段



虎口(北側)



虎口(北側) 曲輪面から



虎口(北側)断面



虎口(南側)調査状況



虎口(南側)



虎口(南側) 埋土



虎口(南側) 空堀側断面



虎口(南側) 埋め戻し完了

曲輪6上段



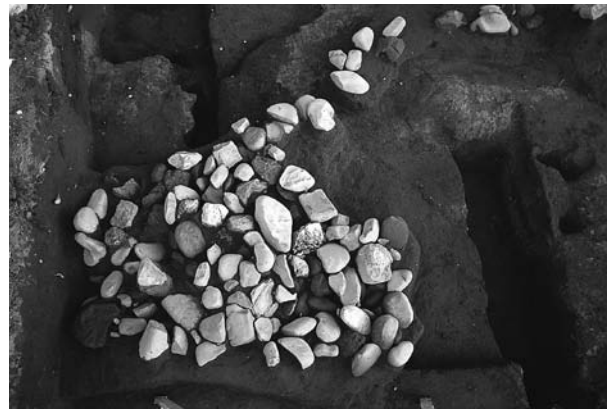
配石遺構 1



配石遺構 1 検出



礫集中



礫集中 北側部分



礫集中 北側 石臼



礫集中 南側 石臼

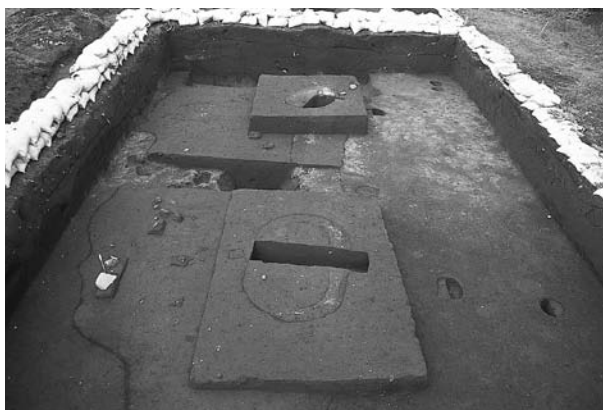


埋め戻しに伴う遺構保護

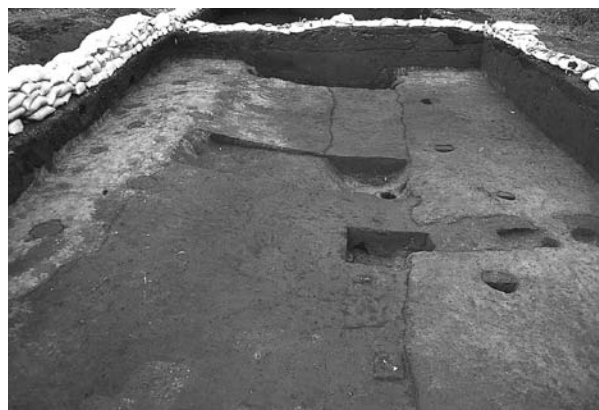


埋め戻し完了

曲輪6上段



溝状遺構・焼土域 AE-39区 西から



溝状遺構 AG-40区 西から



焼土域 1



焼土域 2



溝状遺構 断面 AE-39区



溝状遺構 断面 AF-39区



溝状遺構 断面 AG-40区



調査区東端 断面 AH-41区

曲輪15上段



虎口 西から



虎口 曲輪面から



虎口 配石遺構 空堀から



虎口断面 AD-40区 東から



虎口 配石遺構 北から



縦穴状遺構 AC-42区



須恵器 (747) 出土状況



須恵器 (747)

曲輪15上段



道跡 配石遺構 西から



道跡 配石遺構 検出



曲輪西端 断面 AB-41区 北から

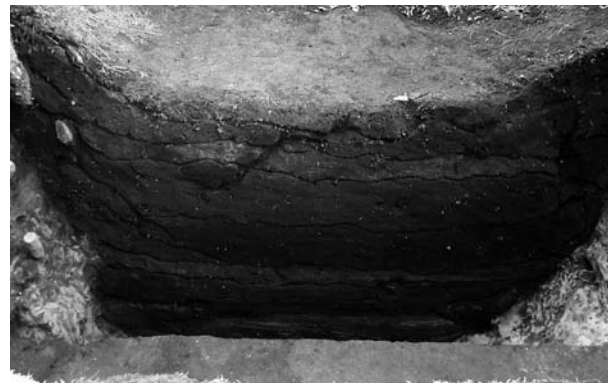


曲輪西端 断面 AA-42区 北から

曲輪15上段



トレンチ周辺現況



空堀断面



空堀断面(底面)



埋め戻し完了

曲輪6上下段間 空堀

図版40



トレンチ北壁 AF-37区



トレンチ南壁 AH-39区

曲輪15下段



空堀8 断面



空堀8 (15上側) 大正火山灰



AC-39区 確認調査



AA-41区 確認調査

空堀8



トレンチ東壁



道跡

添曲輪

## 報告書抄録

ふりがな	しぶしじょうあと							
書名	志布志城跡							
副書名	志布志城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	3							
シリーズ名	志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	大窪祥晃							
編集機関	志布志市教育委員会							
所在地	〒899-7192 鹿児島県志布志市志布志町志布志2丁目1番1号 TEL099-472-1111							
発行年月日	西暦2018年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間(実働日数)	発掘面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しぶしじょう(うちじょう)あと 志布志城(内城)跡	かごしまけん しぶしし 鹿児島県 志布志市 しぶしじょう ちょう 志布志町 帖	462217	68-173	131° 06' 38"	31° 28' 50"	2006.11.09～ 2007.03.28 (84日)	413	保存目的調査
						2007.08.30～ 2008.02.08 (68日)	409	保存目的調査
						2008.07.14～ 2008.10.21 (48日)	100	保存目的調査
						2009.09.30～ 2010.03.09 (60日)	221	保存目的調査
						2010.08.03～ 2010.12.26 (58日)	255	保存目的調査
						2011.09.06～ 2011.12.26 (33日)	153	保存目的調査
						2012.09.10～ 2013.01.07 (39日)	362	保存目的調査
						2013.09.03～ 2014.02.28 (73日)	472	保存目的調査
						2014.06.23～ 2015.02.28 (77日)	444	保存目的調査
						所収遺跡名	種別	主な時代
志布志城(内城)跡	城館 (中世山城)	中世 近世	土塁、空堀、虎口、柱 穴、掘立柱建物跡、方 形土坑、溝跡	青磁、白磁、青花、陶 器、華南三彩、土師 器、京都系土師器、瓦 器、瓦、埴塼、羽口、 炬壁、金属製品、銭 貨、軽石製品				
要約	<p>1次調査及び2次調査では、曲輪3下段、曲輪2上段と3下段のふたつの曲輪を調査した。曲輪2上段では柱穴から1棟の掘立柱建物跡を想定し、方形土坑5基などを確認した。柱穴には礎石を有するものも存在した。曲輪3下段では掘立柱建物跡1棟を想定し、大型の土坑4基を確認した。また本来の虎口、空堀の存在を確認した。</p> <p>3次調査では、曲輪3下段の補足調査を行い、空堀、虎口、階段遺構、方形土坑3基を確認した。</p> <p>4次調査及び5次調査では、曲輪1、曲輪2下段のふたつの曲輪を調査した。曲輪1では柱穴から2棟の掘立柱建物跡を想定したほか、方形土坑4基、溝跡2条を確認した。曲輪2下段では柱穴から1棟の掘立柱建物跡を想定したほか、方形土坑6基を確認した。</p> <p>5次調査では、曲輪面の調査とともにトレンチによる確認調査を実施し、曲輪1と2下段間の空堀と平坦面、曲輪2下段の南部、曲輪4上段を調査した。特に、曲輪4上段では、2か所で土塁の調査も行い、土塁の築造方法を確認した。</p> <p>6次調査では、大野久尾と呼ばれる曲輪6及び曲輪15の試掘調査を行った。</p> <p>7次調査では、曲輪6上段南側を調査し本来の虎口の存在を確認した。</p> <p>8次調査では、曲輪15上段及び下段の調査を実施したほか空堀(空堀8)を調査し、曲輪6と15の独立性を確認した。</p> <p>9次調査では、曲輪15上段及び下段の調査を継続し、併せて曲輪6上段の虎口の調査を実施した。曲輪15上段の虎口を検出し、空堀8の調査と併せて本来の曲輪15上段の範囲を確認した。</p>							



2018年3月16日 印刷  
2018年3月23日 発行

## 志 布 志 城 跡

志布志城(内城)跡 1～9次調査  
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)  
志布志城跡保存整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

著作権所有	志布志市志布志町志布志2丁目1番1号
発行者	志布志市教育委員会
印刷者	志布志市志布志町志布志2丁目16番21号 西文社印刷株式会社 志布志支店